(財)八尾市文化財調査研究会報告3

八尾市埋蔵文化財発掘調査概要

昭和56・57年度

1983年

八尾市教育委員会

正　誤　表

ページ	行	誤	正
4	16	概　感	概　観
30	5	概　感	概　観
32	1	3．近世末期の遺物	3．近世末期の出土遺物
50	15	が	か
52	題目	（第23図・図版13）	（第22図・図版13）
53	題目	（第24図・図版15）	（第23図・図版15）
55	題目	（第25図・図版16～18）	（第24図・図版16～18）
56	題目	（第26図・図版19）	（第25図・図版19）
57	題目	（第27図・図版20）	（第26図・図版20）
58	題目	（第28図～第34図・図版21～24）	（第27図～第33図・図版21～24）
58	58番	一　目	一旦
59	72番	72	71
60	86番	84	85
61	93番	1体部	体部
63	117番	短から	短い
72	32	14	註16
85	23番	外　友	外　反
86	29番	外　友	外　反
86	33番	外　友	外　反
87	41番	屈　出	突　出
109	57番	持頭圧痕	指頭圧痕
第4章	本文目次	Ⅳ　胎土分析表	Ⅳ　胎土観察表
122	見出し	斑糖岩	斑糀岩
123	見出し	斑糖岩	斑糀岩

(財)八尾市文化財調査研究会報告3

八尾市埋蔵文化財発掘調査概要

昭和56・57年度

1983年

八尾市教育委員会

はしがき

八尾市域には、現在周知の遺跡および旧跡等が69箇所の多くを数えます。この数字が物語る様に、八尾市域は古来より大和川のもたらす肥沃な土壌を基盤に、一早く先人の活動の地として発展し続けてきた土地です。しかし、当市も近年の急激な人工増加に伴う開発の波に追われ、これら多くの遺跡・旧跡は破壊の危機に直面しています。

当市では、こうした現状に対処すべく、昭和55年10月1日付で要綱を定め、遺跡指定区域内および大規模な開発事業に際しては、開発申請者の御理解・御協力のうえで調査を実施し、埋蔵文化財の実態把握と保存に務めています。さらに、これらの業務を円滑に推進する目的で、昭和57年7月1日付で、財団法人八尾市文化財調査研究会を発足させています。

本書は昭和56・57年度に実施した発掘調査の一部を収録したもので、わずかでも市民の皆様への啓蒙に寄与できれば幸甚に存じます。

最後に、現地調査および本書作成にあたって御協力・御教示をいただきました関係者各位に対しまして、感謝の意を表します。

昭和58年3月

八尾市教育委員会

教育長　西崎　宏

序

1．本書は、昭和56・57年度に八尾市教育委員会文化財室が実施した埋蔵文化財発掘調査の概要報告を集録したものである。なお、昭和57年７月１日に(財)八尾市文化財調査研究会が発足したことにより、内業整理および本書作成に係る業務は(財)八尾市文化財調査研究会が委託を受け、引き継いで実施した。

1．本書に集録した概要報告は、下記の目次に記したとおりである。

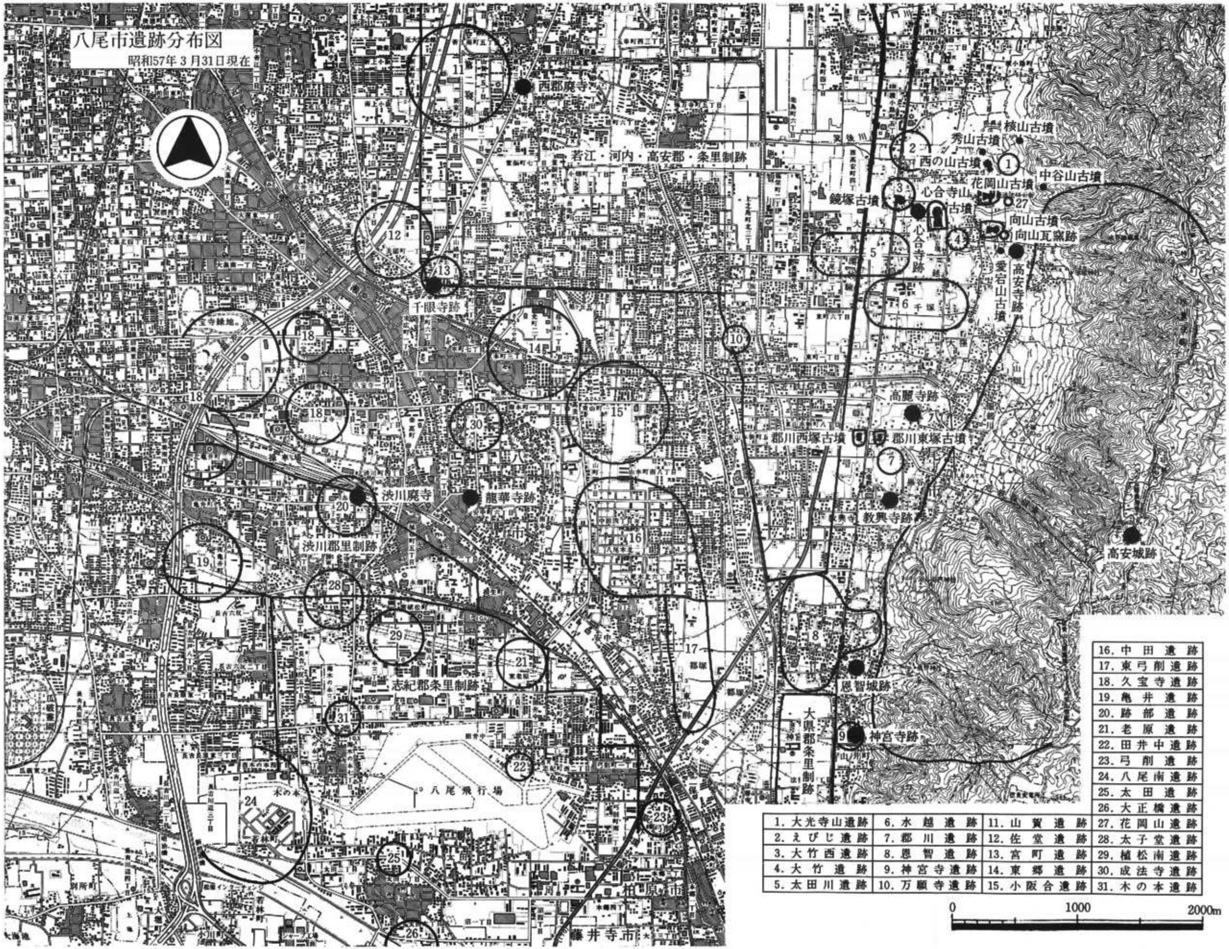
1．本書作成については、原田昌則・西村公助・成海佳子が中心となって行い、文責は各例言で明らかにした。また、全体の編集・構成は原田・成海が協力して行った。

1．本書掲載の地図は、国土地理院発行の25000分の1・2500分の１の地図を使用した。

1．本書で用いた高さの基準は東京湾の平均海面であり、ＴＰと略して記載している。

目　　次

第１章　宮町遺跡発掘調査概要報告……1
第２章　水越遺跡発掘調査概要報告……73
第３章　太田川遺跡発掘調査概要報告……89
第４章　土器の胎土観察……111


八尾市遺跡分布図
昭和57年3月31日現在
西郡廃寺
若江・河内・高安郡・条里制跡
核山古墳
秀山古墳
西の山古墳
中谷山古墳
花岡山古墳
鏡塚古墳
心合寺山古墳
向山古墳
向山瓦窯跡
心合寺跡
高安寺跡
愛宕山古墳
千眼寺跡
高麗寺跡
郡川西塚古墳
郡川東塚古墳
渋川廃寺
龍華寺跡
教興寺跡
高安城跡
渋川郡里制跡
志紀郡条里制跡
恩智城跡
大県郡条里制跡
神宮寺跡
八尾飛行場
藤井寺市
1. 大光寺山遺跡
2. えびじ遺跡
3. 大竹西遺跡
4. 大竹遺跡
5. 太田川遺跡
6. 水越遺跡
7. 郡川遺跡
8. 恩智遺跡
9. 神宮寺遺跡
10. 万願寺遺跡
11. 山賀遺跡
12. 佐堂遺跡
13. 宮町遺跡
14. 東郷遺跡
15. 小阪合遺跡
16. 中田遺跡
17. 東弓削遺跡
18. 久宝寺遺跡
19. 亀井遺跡
20. 跡部遺跡
21. 老原遺跡
22. 田井中遺跡
23. 弓削遺跡
24. 八尾南遺跡
25. 太田遺跡
26. 大正橋遺跡
27. 花岡山遺跡
28. 太子堂遺跡
29. 植松南遺跡
30. 成法寺遺跡
31. 木の本遺跡
0
1000
2000m

第 1 章

宮町遺跡発掘調査概要報告

例　　言

1．本章は、八尾市宮町1丁目20・21番地に所在する穴太神社境内において実施した倉庫建設に伴う発掘調査の概要報告である。

1．現地調査は昭和57年3月1日から4月10日にかけて、八尾市教育委員会文化財室が原田昌則を担当者として実施した。なお、調査においては浅井賢一・北尾耕三・駒澤敦・中野慶太・中野健太郎・野田雅彦・林秀美・山西嘉彦が参加し、穴太神社管理組合の協力があった。

1．内業整理は昭和57年7月1日から、(財)八尾市文化財調査研究会が引き継いで実施し、宇埜晃・黒川富久雄・木曽直美が参加した。また、本書作成にあたっては原田昌則・成海佳子が担当した。

1．報文は主に原田昌則が執筆し、(Ⅴ－3－2)国産陶磁器・Ⅵ出土遺物観察表は成海佳子が分担し、Ⅷまとめは原田・成海が共同で行った。なお、Ⅶ石材の鑑定は八尾市立刑部小学校教諭奥田尚氏に依頼し、一部の遺物については大阪経済法科大学教授村川行弘氏の御教示を得た。

本 文 目 次

Ⅰ　調査に至る経過……1

Ⅱ　調査の方法……2

Ⅲ　層序……3

Ⅳ　検出遺構……3

Ⅴ　出土遺物……6

　1．屋瓦類……6

　2．中世の出土遺物……30

　3．近世末期の出土遺物……32

　4．その他の出土遺物……50

Ⅵ　出土遺物観察表……52

　1．中世の出土遺物……52

　2．近世の出土遺物……53

Ⅶ　石材の鑑定……64

　1．石材について……64

　2．石材の産地について……65

Ⅷ　まとめ……66

　1．出土遺物からみた寺院の盛衰……66

　2．寺域の推定……68

　3．文献にみる千眼寺について……70

挿 図 目 次

第1図　調査地周辺図……1
第2図　調査区設定図……2
第3図　礎石(東から)……4
第4図　平面図……(折込) 4 — 5
第5図　断面図……(折込) 4 — 5
第6図　軒丸瓦実測図1……7
第7図　軒丸瓦実測図2……9
第8図　軒丸瓦実測図3……11
第9図　既往調査出土軒丸瓦実測図……13
第10図　軒平瓦実測図1……15
第11図　軒平瓦実測図2……17
第12図　丸瓦実測図1……20
第13図　丸瓦実測図2……21
第14図　平瓦実測図1……23
第15図　平瓦実測図2……24
第16図　平瓦実測図3……25
第17図　その他の瓦実測図……27
第18図　伏間瓦実測図……27
第19図　鬼瓦実測図……28
第20図　塼実測図……29
第21図　中国産磁器実測図……30
第22図　中世の出土遺物実測図……31
第23図　近世末期の出土遺物実測図……33
第24図　国産陶磁器実測図1……35
第25図　国産陶磁器実測図2……36
第26図　国産陶磁器実測図3……37
第27図　国産陶磁器実測図4……39
第28図　国産陶磁器実測図5……41
第29図　国産陶磁器実測図6……43
第30図　国産陶磁器実測図7……45
第31図　国産陶磁器実測図8……46
第32図　国産陶磁器実測図9……47
第33図　国産陶磁器実測図10……49
第34図　石製品実測図……50
第35図　鉄製品実測図……50
第36図　銭貨拓影……50
第37図　礎石・石材位置図……(折込) 64—65
第38図　久宝寺遺跡出土伊万里焼系碗……68
第39図　穴太神社周辺の条里復元図……69

挿 表 目 次

第1表　軒丸瓦計測表……18
第2表　軒平瓦計測表……18
第3表　丸瓦計測表……26
第4表　平瓦計測表……26
第5表　国産陶磁器産地別・器種別内訳…34
第6表　唐津焼器種別内訳表……34
第7表　京焼器種別内訳表……36
第8表　伊万里焼系器種別内訳表……38
第9表　伊万里焼系碗タイプ別内訳表……38
第10表　千眼寺関係年表……70

図　版　目　次

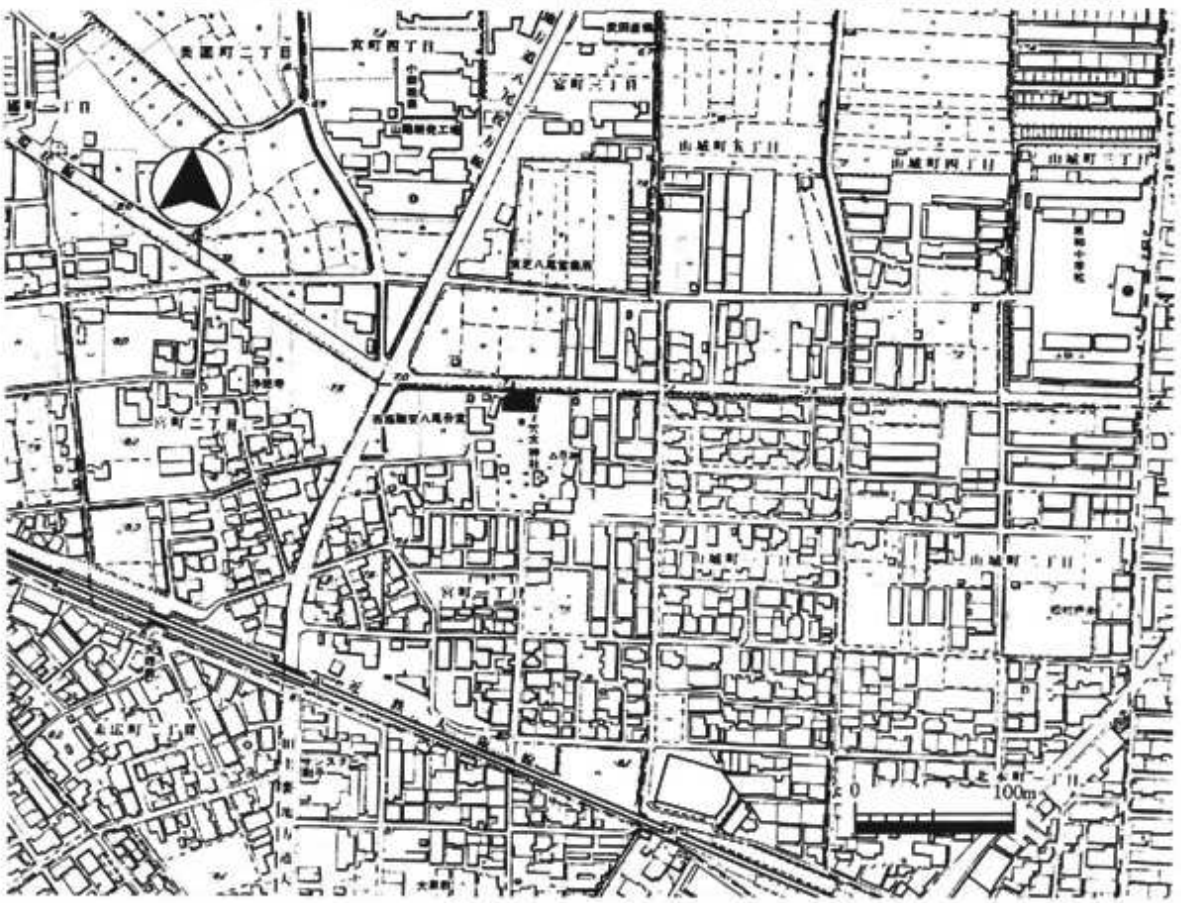
図版1　調査前全景(東から)
　　上部土壇検出状況(西から)
図版2　瓦集積検出状況(東から)
　　瓦集積内遺物出土状況
図版3　調査区完掘状況(東から)
　　土壇および礎石検出状況(東から)
図版4　軒丸瓦Ⅰ
図版5　軒丸瓦Ⅱ
図版6　軒平瓦Ⅰ
図版7　軒平瓦Ⅱ
図版8　丸瓦(A～D類)
図版9　平瓦(A・B・E類)
図版10　平瓦(A・C類)
図版11　平瓦(D類)・その他の瓦・伏間瓦
図版12　塼・鬼瓦
図版13　中世の出土遺物
図版14　中国産磁器
　　同　裏面
図版15　近世末期の出土遺物
図版16　国産陶磁器(唐津焼碗・皿)
図版17　国産陶磁器(唐津焼碗)
　　同　裏面
図版18　国産陶磁器(唐津焼皿)
　　同　裏面
図版19　国産陶磁器(京焼碗・蓋)
図版20　国産陶磁器(瀬戸焼小皿・碗、
　　志野焼碗、朝鮮産碗)
図版21　国産陶磁器(伊万里焼系碗A類)
図版22　国産陶磁器(伊万里焼系碗B・C類)
図版23　国産陶磁器(伊万里焼系碗E類)
図版24　国産陶磁器(伊万里焼系碗F類)
　　国産陶磁器(伊万里焼系碗高台裏銘)
図版25　国産陶磁器(伊万里焼系猪口)
図版26　国産陶磁器(伊万里焼系蓋・小皿)
図版27　国産陶磁器(伊万里焼系中皿)
図版28　国産陶磁器(伊万里焼系大皿)
図版29　国産陶磁器(伊万里焼系磁器その他
　　の器種)
図版30　石鍋・鉄製品・一石五輪塔

Ⅰ　調査に至る経過

八尾市の北西部に位置する宮町遺跡は、旧大和川の本流である長瀬川右岸の沖積地に位置する。遺跡の中心地と考えられる穴太神社は、従来より平安時代後期から室町時代に至る屋瓦が出土することが知られており『河内鑑名所記』[註1]・『和漢三才図絵』[註2]等の文献に記述されてきた大日山千眼寺[註3]との関係が推定される地点である。

穴太神社境内では、昭和56年７・11～12月に境内整備事業に先立って、八尾市教育委員会文化財室が国庫補助事業の一環として発掘調査を実施している。この調査では、平安時代後期から江戸時代に至る多量の屋瓦片の出土に加えて礎石を検出し[註4]、「幻の千眼寺」と言われ続けてきたこの地に、考古学の立場から一石を投じたことで一応の成果を得た。

その後、新たに穴太神社管理組合から、境内の北隅（八尾市宮町１丁目20・21番地）に鉄骨平家建倉庫を建設する旨の届出書が文化庁長官宛に提出された。八尾市教育委員会文化財室では、申請地が既往調査の際多量の屋瓦片や礎石を検出した第４トレンチと重複する関係にあることや、調査地と近接して小字「寺の内」が存在することから、全面発掘調査が必要であると



第１図　調査地周辺図

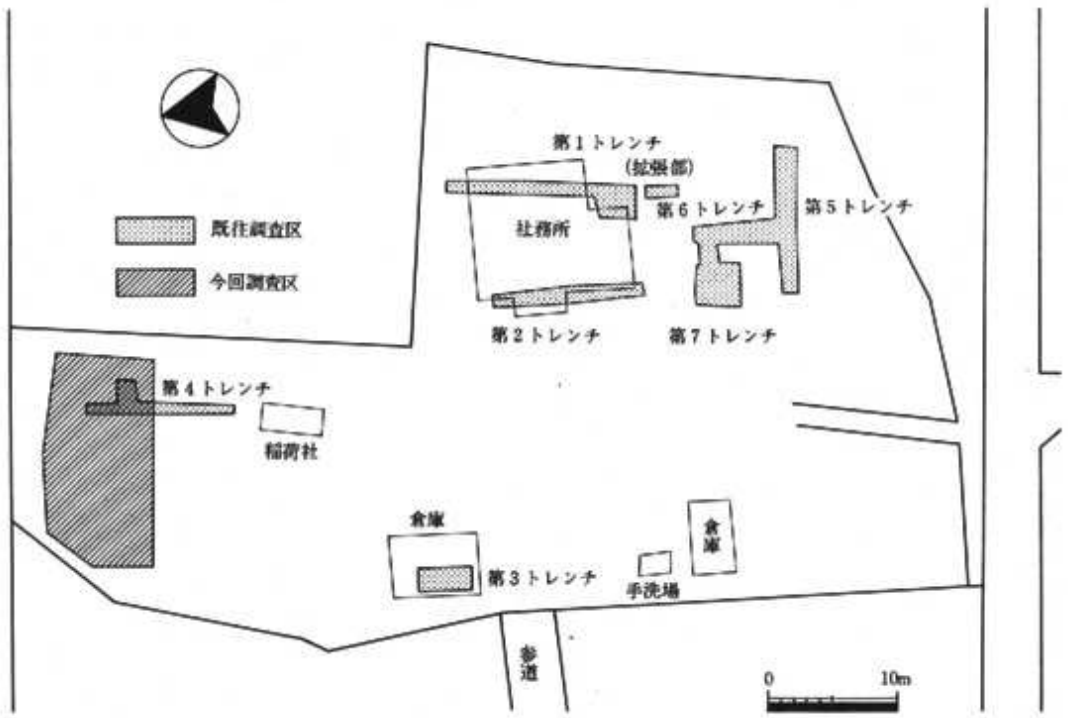
同神社管理組合に通達し、承諾を求めた。

現地調査は昭和57年３月１日から４月10日まで実施し、発掘面積は 140㎡ を測った。

なお、調査終了後、建築予定建物の基礎部分が礎石の位置と一致することが判明したため、基礎構造部の変更を指導し、遺構の保護に務めた。

Ⅱ 調査の方法

調査前の現状は笹や照葉樹の繁る穴太神社の杜で、全域に下草や樹木の根が錯綜する状況であった。調査は樹木を伐採した後、調査地中央に磁北ラインに沿った基準杭を設定し、東西・南北方向に50cm幅の畦を残し、全体を４区に分割して行った。掘削は各層ごとに精査を繰り返しながら実施し、瓦集積の上面まで精査を完了した段階で東西・南北のセクション図を作成し、以後は畦を切り外すとともに下部の遺構確認に務めた。最終的には、遺構面の平面・平板実測ならびに写真等の記録作業の終了後、礎石部分の掘り下げを実施し、根石等の存在の確認を行った。また、掘削にあたっては樹木の根等の掘りおこしに小型重機を使用した以外は、すべて人力によって実施した。なお、調査基準レベルは既往調査と同様、穴太神社境内の北東に位置する三角点 TP＋8.38m を使用した。



第２図　調査区設定図

Ⅲ 層　　序

基本的な層序は10層から構成されている。第１層表土（黒茶褐色砂質土層）は厚さ20～40cmを測る土層で腐植土を主体としている。第２層黄茶褐色砂質土層は調査区南部一帯に広がる土層で北側へゆるやかに下っている。遺物は上部で近世陶磁器片を検出している。第３層暗黄灰色砂質土層は土壇上面を覆う土層である。第２層同様北側へゆるやかに下るが、北端は第７層により切り込まれている。遺物の出土は皆無であった。第４層淡黄灰色砂質土層(地山)は土壇を構成する土層である。第５層茶褐色砂質土層は調査区の中央から北部一帯に広がるもので、第７層を挟んで第２層と対応するレベルにある土層である。この土層は客土、あるいは整地層の性格を持つもので、近世陶磁器と屋瓦類が多量に出土した。第６層暗黄茶褐色砂質土層も南から北へわずかに下るもので、土壇から北側一帯を覆い、瓦集積を構成している土層である。土層中からは多量の屋瓦類とともに中国産陶磁器を始めとする中世末期の日常雑器が少量出土している。第７層暗茶褐色砂質土層は調査区中央に存在する土層で、第２・第３・第５・第６層を上部から切り込む関係にあり、層位的に判断して、近世時期の撹乱と推定される。第８層黄褐色砂質土層は土壇付近で部分的に認められる土層で、土壇整形時の化粧土的な性格を持つものと推定される。なお第９・第10層は近世末期の掘削に関連した土層である。

Ⅳ 検 出 遺 構

調査で検出した主要な遺構は、寺院関係では土壇・礎石（以下東側から**Ｓ１・Ｓ２・Ｓ３**と付称する）・礎石痕・土坑・瓦集積で、他に調査区の北半分を弧状に廻る近世時期の削平痕が認められた。

１）土壇

土壇は第４層淡黄灰色砂質土層の上面を削平して構築したもので、上部土壇と下部土壇から構成されている。

上部土壇は調査区南端より北へ２～ 2.4m の地点から東西方向に伸びるもので、礎石**Ｓ１**の南側付近では南へ 1.1m 余り屈曲して土壇北東隅を成し、以下東側へは検出幅 1.2m に減じて続いている。土壇面は全体に南側から北側へ下がる緩斜面を作り、南端と北端では高低差10cm前後を測る。土壇斜面は地山を斜方向に削平して構築しているが、一部には土壇斜面の整形時に第８層黄褐色砂質土を化粧土として用いたと推定される箇所を認めた。また、上部土壇上面からは皆無と言っていいほど屋瓦類の出土が少なく、調査地全域の遺物出土状況とは著しく異にすることから、寺の廃絶後に上部土壇の上面が削平された可能性も考えられる。

下部土壇では東西に並ぶ3個の礎石を検出した。土壇の幅は 0.9m 前後で、上部土壇とは15cm前後の比高差を測る。上部土壇と同様、礎石S1の東側で南へ 0.8m 屈曲して下部土壇北東隅を造っている。調査中、この部分の北斜面に貼り付く形で多量の屋瓦類と人頭大の石S11～S16を検出している。

一方、下部土壇の北側に平行して東西に延びる不整形の溝状遺構を検出した。この溝状遺構は地山をわずかに切り込む程度のもので、幅 0.6～1m ・深さ4cm前後を測る。調査中この部分を雨落溝と想定したが、雨水等で洗われた砂粒が認められず、用途・性格は明らかでない。

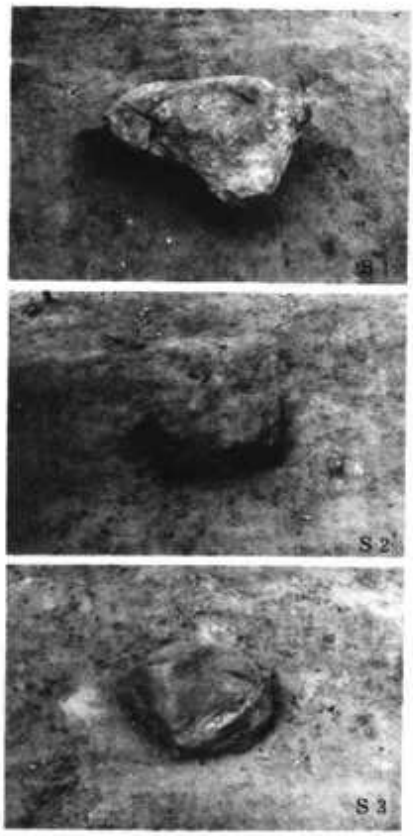
2）礎石および礎石抜き取り痕

下部土壇面で東西に並ぶ3個の礎石を検出した。すべて花崗岩質の石材の平坦面を利用したもので、礎石上面はそれぞれTP+8.00m 前後を測る。

礎石抜き取り痕は上部土壇の2ケ所で、礎石S1・S3の南側に対応する位置で検出した。ともに第4層淡黄灰色砂質土層（地山）を円形に削り込むもので、内部は軟質の微砂のみで充填されている。しかし底部はほぼ平坦で、根石等の存在を示す痕跡は認められなかった。

柱間の法量は東西礎石列（桁行）がともに 3.4m （11尺）前後、南北（梁行） 2.1m （7尺）を測る。

以下礎石ごとに概感し、礎石および他の石材S4～S16については八尾市立刑部小学校教諭奥田尚氏の観察結果を別に掲載する。



第3図　礎石（東から）

礎石S1　既往調査（第4トレンチ）の際検出した礎石である。上面は三角形を呈し、東西幅60cm・南北幅40cm・高さ20cm前後を測る。この礎石は他の2個とは異なり、下部土壇上面に直接据えられたもので、底部には安定と水平を保つため、拳大の石を2個根石として使用する。

礎石S2　上面は長方形を呈し、東西幅52cm・南北幅30cm・高さ20cm前後を測る。表面は風化あるいは火熱を受けたためか、もろく損傷が著しい。検出時点では土壇上面から上部へ10cm前後が露出し、以下地中部分は約10cmを測るが、最下には根石の存在は認められなかった。

礎石S3　上面は隅丸方形を呈し、東西幅48cm・南北幅44cm・高さ約28cmを測り、土壇上面から上部へ10cm前後が露出している。礎石S2と同様、明瞭な掘形や根石は認められなかった。

3）土坑

調査区北部中央で検出した。東西方向に伸びる溝状の土坑で、東西 5.8m ・南北 1.0m ・深さ0.45m 前後を測る。上部は近世末期の整地に伴い、15～20cm程度削平されている。内部からは、上層を除いた各層で炭灰および焼土塊とともに多量の屋瓦片が出土している。また、壁面には焼土化した部分が認められ、単に屋瓦を廃棄するだけでなく他の用途も考えられる。

4）瓦集積

上部土壇上面を除いて調査区全域に広がるもので、密粗はあるものの厚さ15cm前後の堆積を認めた。瓦集積内からは多量の屋瓦類および焼土塊のほか、少量ではあるが中世遺物と中国産磁器が出土した。また屋瓦の他炭・灰・焼土塊を多量に検出したことから、建物の焼失に伴う落下状態をそのまま呈しているものと考えられた。しかし、出土した屋瓦類はほとんどが細片で、単に落下状態をとどめたものとは言い難く、整地等の要因が加えられたものと考えるのが妥当であろう。

一方、瓦類に混在して中世末期に限定される日常雑器が出土している事実は、単に寺院の廃絶時期を示唆するだけでなく、周辺に存在する遺跡との関係を知るうえでも注目される。

5）近世末期の削平痕

調査区の北半分を弧状に廻るもので、土壇面および土坑の上面を切り込む。この遺構の底部はほぼ平坦面を呈し、遺構面とは約50cmの高低差を測る。遺物は屋瓦類と近世末期の国産陶磁器が出土したが、屋瓦に関しては新古双方に比定されるものが混在していた。また、当調査地の東側の現状は駐車場として利用されているが、旧状は水田で調査地と約1m の比高差を有し、近年まで調査地との境を区割する小径が存在していたことが付近の古老たちによって指摘されている。これらを考慮すれば、この小径に関連した削平痕である可能性が考えられる。

註1　吉岡哲　「大阪府八尾市出土瓦」『古代研究16』（財）元興寺文化財研究所　1978年

註2　三山浄久著　1679年

註3　寺島良安著　1715年

註4　八尾市教育委員会　「宮町遺跡発掘調査概要Ⅰ」－六太神社境内廃千眼寺の調査－
『八尾市文化財調査報告8』　1982年

V 出 土 遺 物

出土遺物は第5層茶褐色砂質土層と第6層暗黄茶褐色砂質土層(瓦集積)を中心にコンテナ箱に約 200箱が出土した。そのうち第5層は、近世末期を中心とする遺物が出土する土層で、多量の国産陶磁器が出土したほか、土師質小皿・砂鍋・火舎・火入・擂鉢(備前焼)等が出土している。第6層からは古代末期から中世末期に比定される多量の屋瓦片とともに、火舎・羽釜・ねり鉢・擂鉢(備前焼)・甕(常滑焼) 等の中世末期の日常雑器が出土したほか、少量の中国産磁器が出土している。以下器種ごとに概観し、遺物の法量・製作技法・調整についての詳細は文中および文末の一覧表で明示する。

1．屋瓦類

屋瓦類は調査区全体の出土量のうち、約9割以上を占める。そのうち大部分が丸瓦・平瓦の細片で、軒瓦 (軒丸・軒平)・道具瓦 (伏間瓦・鬼瓦)・塼等は少量出土した程度である。また、面戸瓦と熨斗瓦は当調査では確認できなかった。

なお、丸瓦・平瓦に関しては第6層(瓦集積)出土のものに限定したが、軒瓦(軒丸・軒平)・道具瓦(伏間瓦・鬼瓦)・塼等は出土土層に関係なく記載した。

1) 軒丸瓦

蓮華文軒丸瓦　1

複弁八葉の蓮華文瓦である。中房には、隆起が小さく中粒でやや不揃いの蓮子を1＋6に配置している。中房の周縁には、径 6.7cmを測り、やや楕円形に廻る圏線を持つ。花弁は短く、子葉を区画する輪郭は認められない。外区内縁の圏線は隆起が小さく、所々で笵割れが認められる。外縁は直立縁で高いが、幅は不揃いで一定でない。

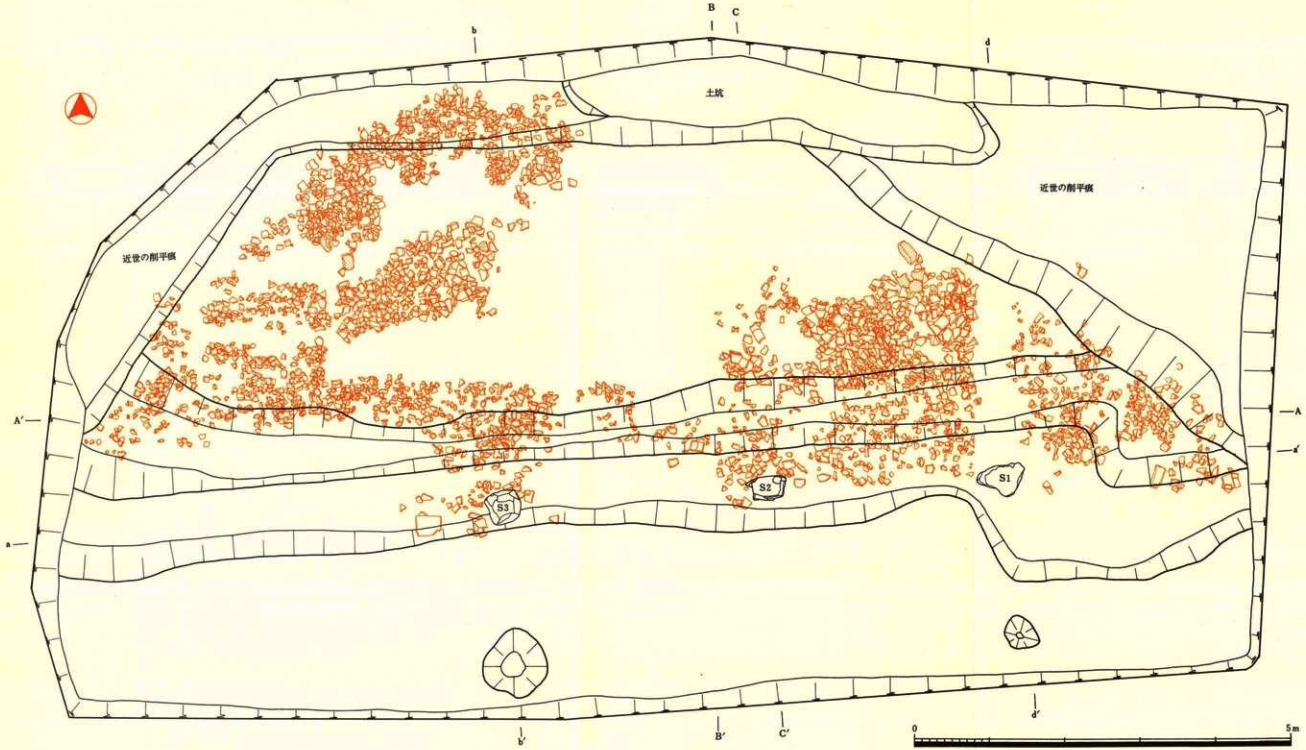
瓦当と丸瓦との接合は、瓦当裏面上部に丸瓦端面をあてて接合したものと推定される。瓦当裏面から丸瓦凹面の接合線上にかけては、補足粘土を厚く用いて接合を強固にした後、全体を指頭によるナデで仕上げている。瓦当下側面には瓦当面に沿って、粗いケズリが行なわれている。また、瓦当面には笵の板目あるいは板状工具等の痕跡が認められる。

胎土は小粒の石英を多量に含み、やや粗い。焼成は良好堅緻で、色調は瓦当面淡黒灰色・他は暗橙色を呈している。

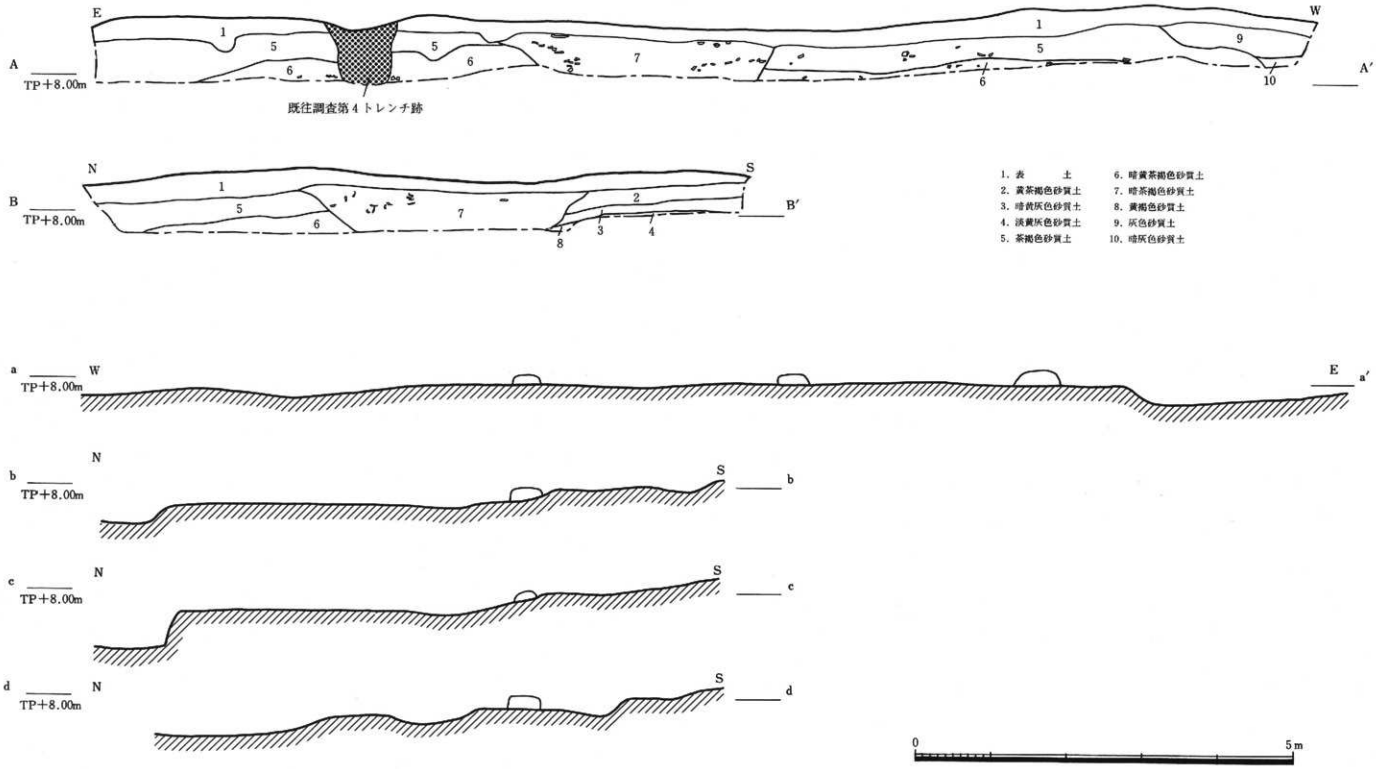
五輪塔文軒丸瓦　2

瓦当の中央に五輪塔文を配し、その周囲には凹線を境として圏線が廻っている。外区内縁には大粒の珠文21個 (推定) を配している。外縁は直立縁で高いが、幅は不揃いで一定でない。

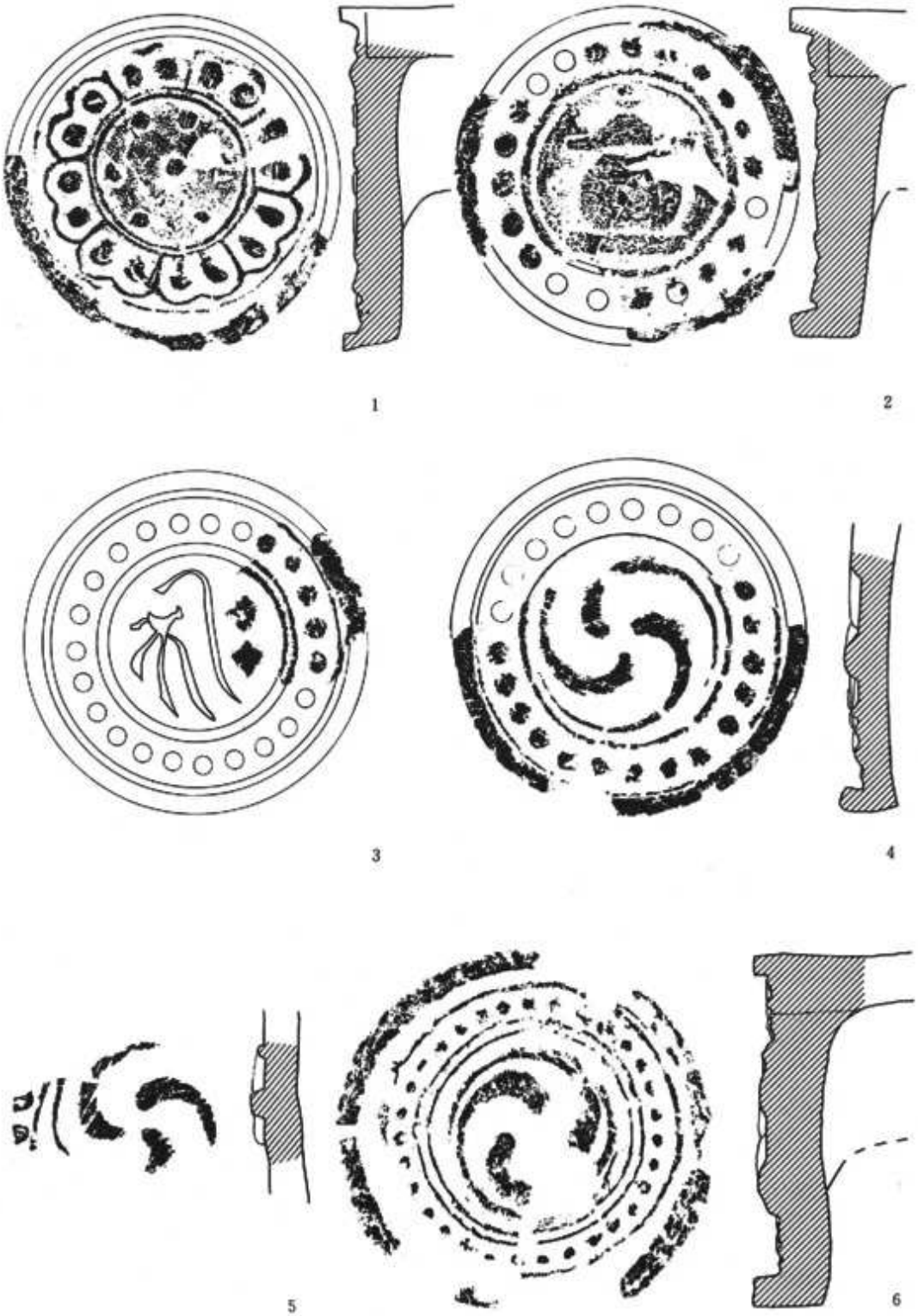
また、瓦当面には多量の小砂粒が付着している一方、珠文や外縁には、笵の板目あるいは板



第4図　平面図


E
W
A
A′
TP+8.00m
既往調査第4トレンチ跡
N
S
B
B′
TP+8.00m
a
W
E
a′
TP+8.00m
b
N
S
b
TP+8.00m
c
N
S
c
TP+8.00m
d
N
S
d
TP+8.00m
1. 表　　土
2. 黄茶褐色砂質土
3. 暗黄灰色砂質土
4. 淡黄灰色砂質土
5. 茶褐色砂質土
6. 暗黄茶褐色砂質土
7. 暗茶褐色砂質土
8. 黄褐色砂質土
9. 灰色砂質土
10. 暗灰色砂質土
0
5m

第5図　断面図



第6図　軒丸瓦実測図1（1：3）

状工具の痕跡が顕著である。

焼成は良好堅緻で、胎土には石英・長石粒が散見されるが密である。色調は肉部・表面ともに淡灰色を呈している。この瓦は、既報告例でも指摘された様に、京都市法勝寺出土瓦と同様水輪に大日如来の種子である「 」の梵字がわずかに遺存することが認められた。[註1]

梵字文軒丸瓦　3

出土した2例は、ともに細片で全容は知り難いが、他の報告例では瓦当中央に「 」と2本の圏線、外区に23個の珠文と1本の圏線を配する瓦と報ぜられている。本例は、そのうち涅槃点（右側に位置する2個の点）のみが遺存している。[註2]胎土には小砂礫を多量に含み、焼成は良好で色調は瓦当面淡灰色・他は灰橙色を呈する。

巴文軒丸瓦　4

左巻きの三巴文を配している。巴は、頭部がわずかに尖り気味で、胴部以下はゆるやかに幅を狭めて尾部に達している。外区内縁には、太めで丸味を持つ2本の圏線間に、大粒で隆起の大きい珠文を密に廻らせている。外縁は直立縁で高く、内側が瓦当面に向かってわずかに傾斜をもつ。丸瓦との接合位置は低く、差込み溝は浅い。瓦当下側面には、指頭圧成形の後、瓦当裏面と同様にナデが行われている。

胎土には小砂礫が散見され、焼成は良好で、色調は肉部・表面ともに黄灰色を呈している。

巴文軒丸瓦　5

内区および外区の一部が遺存する資料で、中央に隆起の大きい左巻きの三巴文を配する。巴は頭部がやや尖り気味で、胴部以下は漸減して尾部に達する。巴の上面は平坦で、表面には笵の板目あるいは板状工具等の痕跡が認められる。内・外区を区割する圏線は太めで、外区の珠文は大粒で、破面で見る限りでは隆起も大きい。

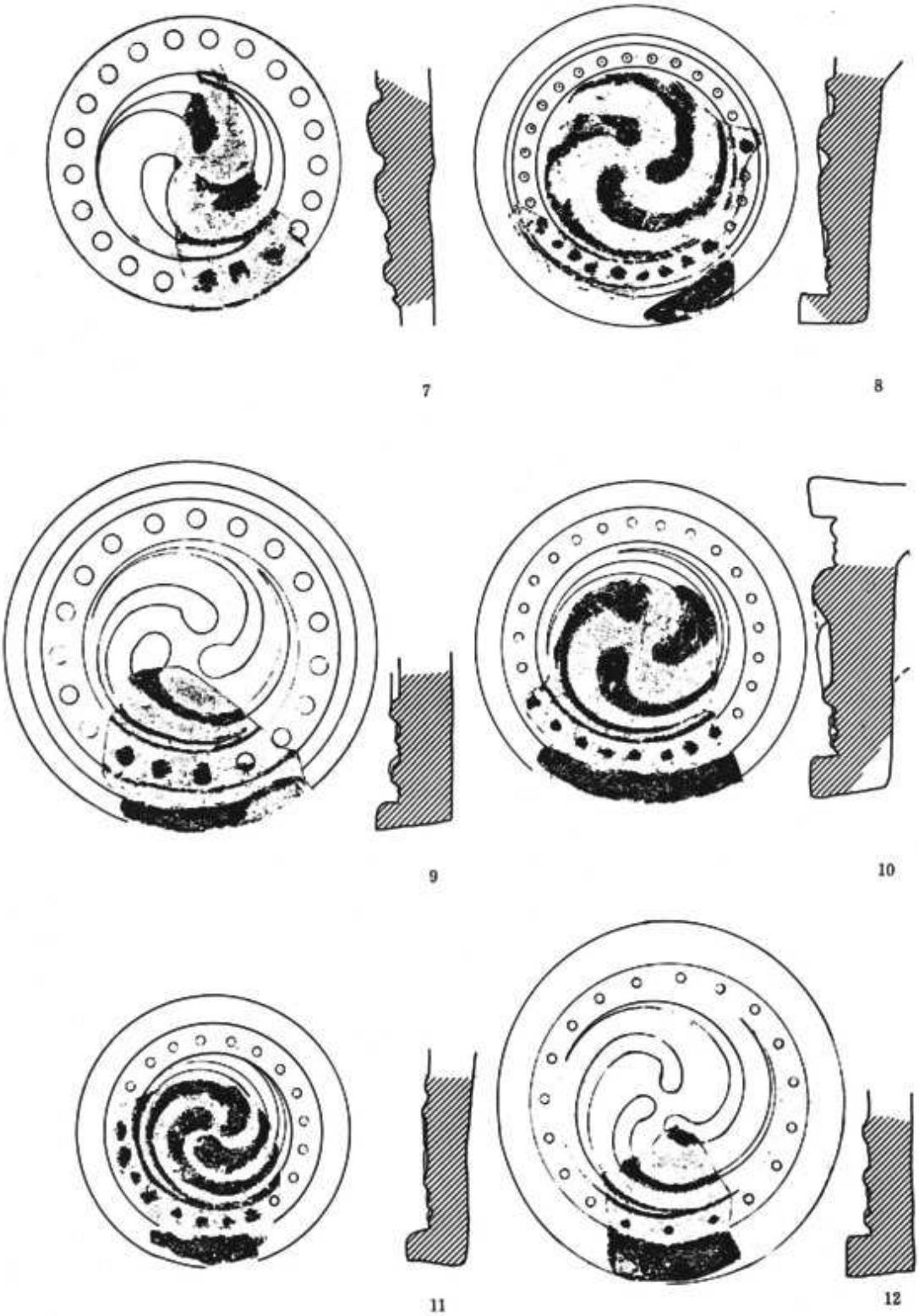
胎土には小砂粒を多く含むが密である。焼成は良好堅緻で、色調は肉部淡灰色・他は灰色を呈している。

巴文軒丸瓦　6

突出する内区に右巻きの三巴文を配している。巴は頭部が尖り気味で、胴部から漸減して尾部に達する。外区内縁の珠文帯には小粒の珠文31個を配し、その内外にやや細めの圏線が廻る。珠文は密に配され、隆起も大きい。珠文の中には、笵割れのため、内側の圏線に接するものも認められる。外縁は幅狭で高位置にあり、一部に補足粘土の痕跡が顕著に認められる。

丸瓦との接合位置は低く、丸瓦凹面には円弧状接合線に沿って、やや粗い指頭ナデが行われている。瓦当下側面は水平で、瓦当面に沿って粗いナデが行われている。

胎土には石英・長石粒を多く含み、粗い。焼成は良好堅緻で色調は肉部・表面ともに淡灰色を呈している。



第7図　軒丸瓦実測図2（1：3）

巴文軒丸瓦　7

外縁を欠損する資料で1点のみ検出した。巴は頭部が尖り気味で、尾部は末端が瓦に巴の背に接して圏線状を呈している。珠文は大粒で隆起も大きい。

胎土には石英粒が散見され、焼成は良好、色調は瓦当面淡灰色・他は淡黄灰色を呈している。

巴文軒丸瓦　8

右巻きの三巴文を配している。巴の頭部は丸く、胴部でやや幅を狭め尾部に達する。尾部は約半周して終るが、末端は不明瞭である。外区内縁には、細い2本の圏線間に、小粒で隆起の小さい珠文27個（推定）を密に廻らせている。外縁はやや狭く、高位置に付く。

接合に際しては、先ず笵型に薄い粘土円形板をのせ、形を整えた後瓦当裏面と丸瓦を接合している。したがって、瓦当裏面の円弧状接合線の補足粘土は他技法の瓦に比してやや少なめである。また、接合部の破面には櫛状工具の痕跡が明瞭に残る。

胎土には小砂粒を多量に含み、焼成は良好で、色調は肉部・表面ともに淡灰色を呈している。

巴文軒丸瓦　9

瓦当面の約⅙が遺存するものであるが、右巻きの三巴文を配したものと推定される。巴の頭部は丸く上面は平坦で、胴部でやや幅を狭め、尾部に近づくにつれて断面三角形を呈する。外区内縁には内外の細い圏線間に、大粒でしかも隆起が大きい珠文を廻らせる。外縁は直立縁で高いが、内側が瓦当面に対してやや丸味を持つ。瓦当側面および瓦当裏面には丁寧なナデが行われている。また、瓦当面には笵の板目、あるいは板状工具等の痕跡がわずかに認められる。

胎土には小砂粒を含み、焼成は良好堅緻で、色調は肉部淡乳灰色・表面淡灰色を呈している。

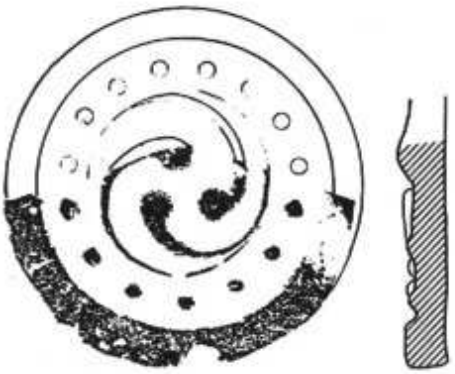
巴文軒丸瓦　10

右巻きの三巴文を配するもので、5点を検出したがすべて接合部を境に瓦当上部を欠損している。巴は頭部が大きく丸味を持つもので、胴部以下は急激に幅を狭め尾部に至る。圏線を経て外区内縁には、小粒で隆起の大きな珠文が密に25個（推定）廻っている。珠文の中には、一部笵割れのため粘土塊が外縁に接するものも認められる。外縁は高く幅広で、上面は丁寧なナデを行う。丸瓦との接合位置は低く、接合方法は8と同様である。また、瓦当面の一部に笵の板目あるいは板状工具の痕跡が認められる。

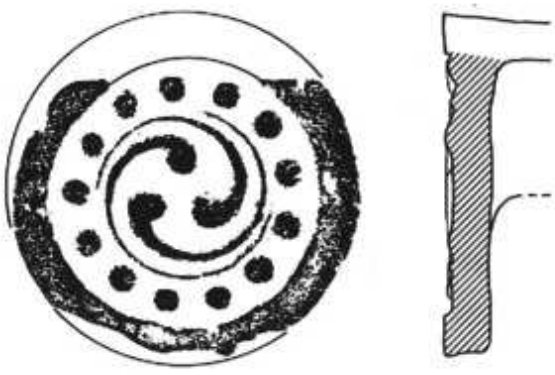
胎土には小砂粒を多量に含み、焼成は良好堅緻で、色調は淡灰色を呈している。

巴文軒丸瓦　11

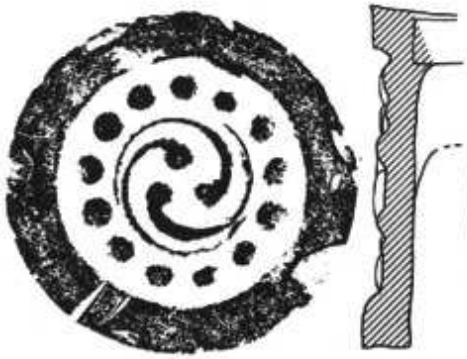
瓦当面の下半のみが遺存するもので、内区に右巻きの三巴文を配する。珠文は大粒で密に配しているが、隆起は小さい。瓦当上面から丸瓦凸面にかけては縦位のナデ、瓦当裏面および接合部には丁寧なナデを行う。胎土には石英・長石粒を多く含み、焼成は良好堅緻で、色調は肉部淡灰色・他は暗灰色を呈している。



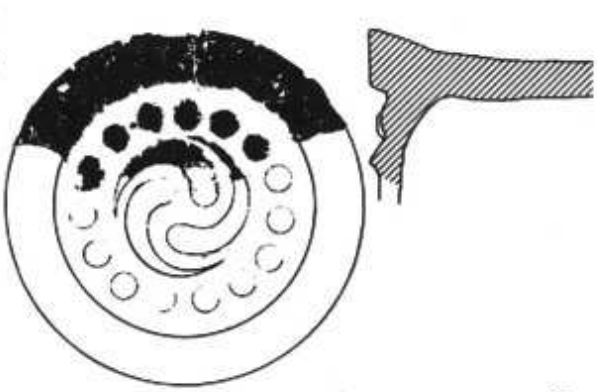
13



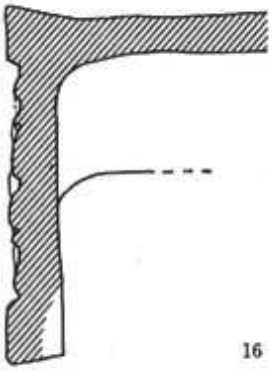
14



15



17



16

第8図　軒丸瓦実測図3（1：3）

巴文軒丸瓦　12

瓦当面の下部が遺存するもので、前回の調査で出土した鳥衾瓦と同笵、あるいは同意匠の瓦と推定される。巴の尾部は長く、末端が圏線と接する。珠文は小粒で、珠文間はかなり広めである。外縁は直立縁で高く、表面・側面ともに丁寧なナデが行われている。

胎土には小砂粒を多量に含み、焼成は良好堅緻で、色調は肉部・表面ともに淡灰色を呈する。

巴文軒丸瓦　13

瓦当面の下半分が遺存するもので、内区に右巻きの三巴文を配している。巴は丸味を持つ頭部から半周し、末端部は他の巴の尾部に接して圏線状を呈している。珠文は中粒で、隆起も大きい。外縁は低位置にあり、一部笵づれと思われる明瞭な段が内側に認められる。

胎土には小砂粒を含み、焼成は良好で色調は肉部乳灰色・表面は淡黒灰色を呈している。

巴文軒丸瓦　14

右巻きの三巴文を配している。巴の頭部は大きく、胴部以下は末端まで繊細で約¾周して終る。外区内縁には、大粒で粒の揃った珠文13個を廻らせる。外縁はやや幅広で低位置に付く。瓦当裏面は全体にナデを行うが、特に側面に沿った部分は指頭圧ナデが明瞭である。また、瓦当面には笵の板目あるいは板状工具等の痕跡が認められる。

胎土は精良で、焼成は良好である。色調は肉部乳灰色・他は淡灰色を呈している。

巴文軒丸瓦　15

全体に笵の彫りが深いもので、内区に均整のとれた右巻きの三巴文を配している。巴の頭部は丸く、胴部で急に幅を狭めて尾部に達する。外区内縁には大粒で粒の揃った珠文13個を巡らせる。外縁は幅広で、表面・側面ともに丁寧なナデが行われている。瓦当裏面は、ナデにより平滑にされ、丸瓦との接合部は円弧状接合線に沿って、指頭圧ナデが行われている。

胎土には小砂礫を多く含み、焼成は良好堅緻で、色調は肉部灰色・他は黒灰色を呈している。

巴文軒丸瓦　16

右巻きの三巴文を配する。巴は頭部が丸く胴部で急激に幅を狭め、尾部は¾周して末端に達する。外区内縁には大粒で隆起の小さい珠文12個を廻らせる。外縁は幅広で、やや低い位置にあり、瓦当面に向かってわずかに内傾する。瓦当側面・裏面はナデにより平滑にされている。丸瓦との接合部はやや少なめの補足粘土を用いて接合した後、丁寧なナデが行われている。

胎土には小砂礫が散見され、焼成は良好堅緻で、色調は肉部淡灰色・瓦当裏面は灰色で瓦当面は銀化している。

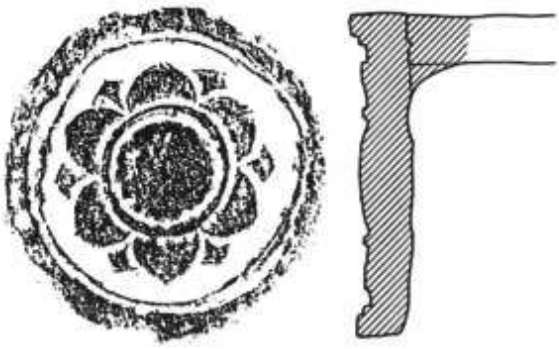
巴文軒丸瓦　17

瓦当面の上部のみが遺存するもので、内区に右巻きの三巴文を配する。珠文は大粒で密に配されているが、隆起は小さい。瓦当上面から丸瓦凸面にかけては縦位のナデ、瓦当裏面および

接合部には丁寧なナデを行う。胎土には石英・長石粒を多く含み、焼成は良好堅緻で、色調は肉部淡灰色・他は暗灰色を呈する。

その他の軒丸瓦　(第9図)

既調査の際出土した瓦で、当調査では認められなかったが、位置的には当調査地と重複することから第6層（瓦集積）の出土遺物として記載しておく。[註3]



第9図　既往調査出土軒丸瓦実測図(1：3)

素弁六葉の蓮華文軒丸瓦で、瓦当径12.2cmを測る。中房は中央部がふくらみを持つもので、外側には中房と蓮弁を区割する太めの圏線が廻る。蓮弁は幅広で先は尖り、蓮弁間に剣頭状の間弁を配置している。外縁は素文で低位置に付く。また、外縁の内側には笵ずれの痕跡と思われる明瞭な段を残す。なお、香川県ますえ畑瓦窯産の瓦に類似することが指摘されている。[註4]

2）軒平瓦

唐草文軒平瓦　18

本例は中央部のみの残存であるが、既出土例では中央に半截の花菱文を配し、左右それぞれに唐草文を4反転させる均正唐草文軒平瓦である。外縁は上下ともに幅狭で低位置に付く。

顎部はゆるやかな直線顎で、平瓦凸面端部に粘土を貼り付けて顎部を形成している。平瓦部凸面と顎部下側面は側面に平行なナデ、凹面には細かい布目が認められる。

胎土は石英・長石粒を含み粗雑である。焼成は良好で、色調は肉部・表面ともに淡灰色を呈している。

連珠文軒平瓦　19

瓦当面に対して左半分を欠損するが、現状では大粒で隆起の小さい珠文6個と全周する圏線が認められる。外縁は幅狭で高位置に付く。上外縁の上縁はヘラケズリにより面取りされている。瓦当部と平瓦の接合は、平瓦凸面端部に粘土塊を貼り付けて、瓦当部と顎部を作りだす。顎は蹄顎で、接合部は補足粘土を多く用い、接合を強固にした後、瓦当裏面から平瓦凸面にかけて板状工具で粗いナデを行う。平瓦凹面は、瓦当広端縁から約3cmはナデ、以下は細かい布目を一面に残す。

胎土には小砂礫を含むが、精良である。焼成は良好堅緻で、色調は淡黄灰色を呈している。

連珠文軒平瓦　20

瓦当面に対して右半分を欠損するが、現状では大粒で隆起の大きい珠文7個と全周する圏線が遺存している。本例は左端の珠文が上圏線と接して一体化しており、他の同笵資料にも同様のものがあり、笵割れのため生じたものと考えられる。外縁は幅狭で高く、上外縁の上縁はヘ

ラにより面取りを受けている。顎は踏顎で、瓦当裏面から平瓦凸面にかけて補足粘土を多く用いて接合した後、板状工具で粗いナデ調整を行う。平瓦凹面は細かい布目痕と糸切痕が顕著で、凸面には細かいタタキ目が認められる。

胎土には小砂粒を含み、焼成は良好堅緻で、色調は肉部・表面ともに淡灰色を呈している。

連珠文軒平瓦　21

瓦当面に対して左側が遺存する小振りの瓦で、現状では小粒で密な珠文9個と全周する圏線を認める。外縁は幅狭で低位置に付く。顎は段顎で、瓦当下側面と裏面には丁寧なナデが行われている。瓦当部と平瓦との接合は、平瓦凸面の広端縁を斜方向に切り取った面に、瓦当部の背面を接合している。また、破面で見る限りでは接合部の補足粘土は少なく、板状工具で接合部を丁寧に面取りした後、平瓦凸面にかけてナデを行っている。

胎土には小砂粒を多く含み、焼成は良好堅緻で、色調は肉部淡灰色・表面灰色を呈している。

唐草文軒平瓦　22

中央に半截花菱文を配し、左右に細い主葉のみの唐草文を4反転と、反転せず両端の上外方へ流れる唐草一葉を配する均整唐草文軒平瓦である。全周する圏線を経て外区となるが、外縁は幅狭で高位置に付けられている。顎は深い段顎で、下側面と裏面には丁寧な指頭ナデが行われている。瓦当部と平瓦との接合部は、平瓦凸面の広端縁を斜方向に切り取った面と、瓦当部の背面とを接着している。接合部には補足粘土を多く用い、指頭圧で接合を強固にした後、他の粘土を貼り付けて顎部を作りだすため、この部分を境として破面となるものが多い。

胎土には小砂粒を含み、焼成は良好堅緻で、色調は肉部淡灰色・表面はやや青味をおびた灰色を呈している。

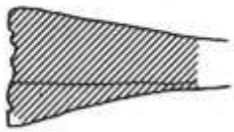
唐草文軒平瓦　23

瓦当面の中央部のみが残存するもので、全体でもわずかに2点が出土したのみである。瓦当面の構図は、中心飾りを桃の実と解せば、斜上方へ伸びる3枚は木葉、その下に細長く表現されている2枚は萼と理解される。その左右にはC字形に反転する短い唐草文が1葉のみ確認できる。顎部は踏顎に近く、下側面には瓦当面に平行なナデを行う。顎部裏面から平瓦凸面にかけては、補足粘土を厚く用いて接合した後、瓦当裏面から平瓦凸面にかけて縦位のケズリが行われている。瓦当部と平瓦との接合は、平瓦凸面端部に粘土塊を貼り付けて瓦当部と顎部を作っている。

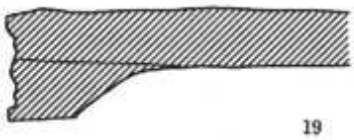
胎土には小砂粒を多く含み、粗い。焼成は良好堅緻で、色調は肉部・表面ともに乳灰色を呈している。

唐草文軒平瓦　24

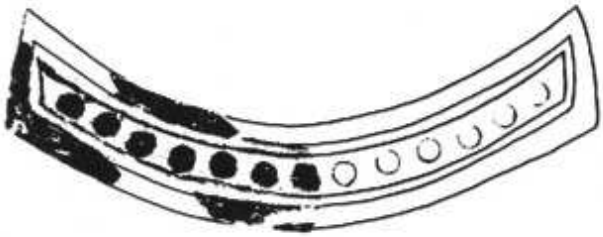
瓦当面に対して左端部のみ遺存する。現状では主葉のみの唐草文が3反転と上外方へ伸びる

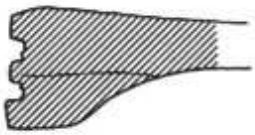


18

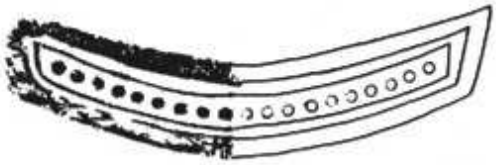


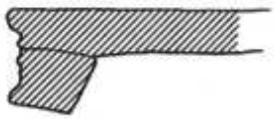
19





20





21

22

第10図　軒平瓦実測図１（１：３）

1葉が確認できる。外縁は直立縁で上下とも高位置に付くが、幅は上外縁がやや広い。顎部は段顎で深い。瓦当と平瓦との接合は、平瓦凸面端部に粘土塊を貼り付けて、瓦当部および顎部を作りだしている。瓦当裏面から平瓦凸面にかけては、ナデにより平滑にされ、接合部は丸味を持たず瓦当裏面に対して斜傾面を作る。また、瓦当面には離れ砂の痕跡を認める。

胎土には小砂粒を多く含み、焼成は良好堅緻で色調は肉部・表面ともに淡灰色を呈している。

唐草文軒平瓦　25

瓦当面に対して右端部が遺存する。現状では、長い単位の唐草文の主葉2葉と支葉3葉を認める。また、脇区を画する圏線はなく、主葉の一部は脇区外縁と接する。

瓦当と平瓦との接合および調整は**21**と同様である。

胎土には小砂粒を多量に含み、焼成は良好堅緻、色調は肉部淡灰色・表面灰色を呈している。

唐草文軒平瓦　26

瓦当面の中央が遺存するもので、中心に蕾文を配し、左右に肉厚で短い単位の唐草文が2反転している。幅広で隆起の大きい界線を廻らせて外区となるが、下外縁が上外縁より高位置に付く。顎部は段顎で深く、顎部下側面から瓦当裏面にかけてはナデによる面取りを受けている。平瓦との接合は、平瓦凸面の広端縁を斜方向に切り取った後、粘土塊を貼り付け瓦当と顎部を作りだしている。

胎土には小粒の石英・長石を含み、焼成は良好堅緻で、色調は肉部・表面とも明るい灰色を呈している。

唐草文軒平瓦　27

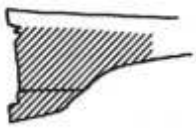
瓦当面の中央部のみが残存する資料である。現状では中央の宝珠と4反転する唐草文が確認できる。外縁は幅広で高く、上外縁の上端から平瓦凹面にかけては、ヘラによる明瞭な面取りが行われている。瓦当部と平瓦部との接合は**26**と同様の技法を用いる。

胎土には小砂礫を散見するが、概ね精良である。焼成は良好堅緻で、色調は肉部淡灰色・表面黒灰色を呈している。

唐草文軒平瓦　28

瓦当面の中央部のみが残存するもので、現状では中央に花頭形の中心飾を配し、左右には1反転する唐草文が認められる。外縁は幅狭で低位置に付く。顎部は段顎で平瓦との接合部には補足粘土を多く用いて接合した後、瓦当面に平行なナデを行う。平瓦との接合法は**24**と同様である。

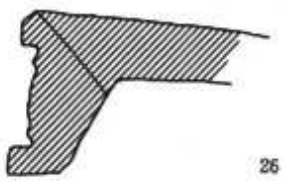
胎土は小砂粒を多量に含み、粗い。焼成はあまく軟質で、色調は肉部淡灰色・表面乳灰色を呈している。



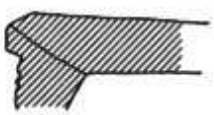
23

24

25



26



27

28

第11図　軒平瓦実測図２（１：３）

第1表 軒丸瓦計測表（単位mm）

番号	直径	厚さ	内区 径	内区 文様	外区幅	外区 内縁 幅	外区 内縁 文様	外区 外縁 幅	外区 外縁 高さ	外区 外縁 文様	個体数
1	154	31	137	八葉蓮華文				7	7	素文	6
2	152	30	94	五輪塔文	30	20	S21 K1	10	10	素文	6
3	(160)	—	(90)	梵字文	32	24	S(23) K3	8	—	素文	2
4	(151)	25	(90)	LT 3	32	20	S23 K2	10	9	素文	1
5	—	—	—	LT 3	—	—	S— K—	—	—	——	1
6	157	30	77	RT 3	40	30	S31 K3	10	8	素文	2
7	—	—	83	RT(3)	—	25	S— K1	—	—	——	1
8	—	30	84	RT 3	28	14	S27 K2	13	13	素文	4
9	—	34	—	RT(3)	32	22	S— K2	11	9	素文	1
10	(144)	34	81	RT 3	31	14	S— K1	17	12	素文	6
11	—	27	—	RT 3	26	12	S —	13	10	素文	1
12	—	31	—	RT(3)	27	12	S —	15	18	素文	1
13	—	16	—	RT 3	35	17	S(15)	15	4	素文	1
14	(130)	15	74	RT 3	34	19	S 13	14	4	素文	3
15	130	18	51	RT 3	38	19	S 13	18	6	素文	5
16	136	(21)	52	RT 3	40	17	S 12	22	5	素文	1
17	—	—	—	RT(3)	38	17	S --	20	7	素文	1
											計43

※（ ）内は推定値
※厚さは瓦当下部の計測値
※T（巴文）・L（左巻き）・R（右巻き）、数値は巴の数
※S（珠文）・K（圏線）、数値は珠文・圏線の数

第2表 軒平瓦計測表（単位mm）

番号	上弦幅	下弦幅	弧深	幅	内区 幅	内区 文様	外区 内縁 上幅	外区 内縁 下幅	外区 内縁 文様	外区 外(周)縁 上幅	外区 外(周)縁 下幅	外区 外(周)縁 高さ	脇区 内縁 幅	脇区 内縁 文様	脇区 外(周)縁 幅	脇区 外(周)縁 高さ	個体数
18	—	—	—	45	29	花菱文KK				9	(7)	4	—	—	—	—	2
19	—	—	—	41	19	連珠文	4	3	界線	4	5	3	5	界線	8	4	3
20	—	—	—	40	11	連珠文	5	5	界線	10	7	4	5	界線	6	5	2
21	—	—	—	34	9	連珠文	4	4	界線	7	6	3	6	界線	7	—	2
22	250	(250)	30	60	26	花菱文KK	5	5	界線	10	(7)	6	5	界線	10	9	46
23	—	—	—	38	28	KK	3	3	界線	5	(5)	—	—	—	—	—	2
24	—	—	—	(52)	29	KK	—	—	—	14	10	7	—	—	10	7	2
25	—	—	—	43	19	KK	3	4	界線	7	9	5	—	—	11	6	2
26	—	—	—	61	25	KK	5	5	界線	12	10	8	—	—	—	—	3
27	—	—	—	—		KK	—	—	—	10	—	5	—	—	—	—	1
28	—	—	—	42	25	KK	—	—	—	8	7	3	—	—	—	—	1
																	計66

※（ ）内は推定値
※幅は瓦当面中央の計測値
※KK（均整唐草文）を表わす

3）丸瓦・平瓦

丸瓦・平瓦類はコンテナ箱に約 180箱程度が出土した。出土した瓦類は先述した様に第6層(瓦集積)から出土したもので、大半が破片でしかも各時期のものが混在していた。

故に、一時期で捉えられる良好な資料とは言い難く、総合的な意味での分類も決定し難い。また、分類に当たっては遺物の持つ性格上、製作技法の一定した固定集団による規格化を目的とした産物であると言う前提観念がある。しかし、個々の製作にあたっては細部の成形や調整といった人為的要因や、焼成時の焼縮みといった物理的な要因も、その判別・分類作業をよりし難い起因としている。したがって、ここでは丸瓦・平瓦ともに瓦製作過程の段階毎の製作技法の共通点を、比較的良好な資料から抽出することにより、分類可能なものを呈示するとともに若干の考察を加える。

ただし、丸瓦・平瓦ともに分類順が必ずしも先後を示すものではないことを、あらかじめ付け加えておく。

丸瓦

丸瓦はコンテナ箱に約50箱が出土し、全体の約3割を占める。しかし、そのほとんどが細片で実測の可能なものは、少量にすぎない。平瓦と同様に時期を明確にすることは困難であるが、タイプ別には4種類に区別することが可能である。

ここでは、比較的遺存状態の良い資料から丸瓦製作の段階毎の成形技法を復元し、タイプ別の比較資料の基礎としたい。

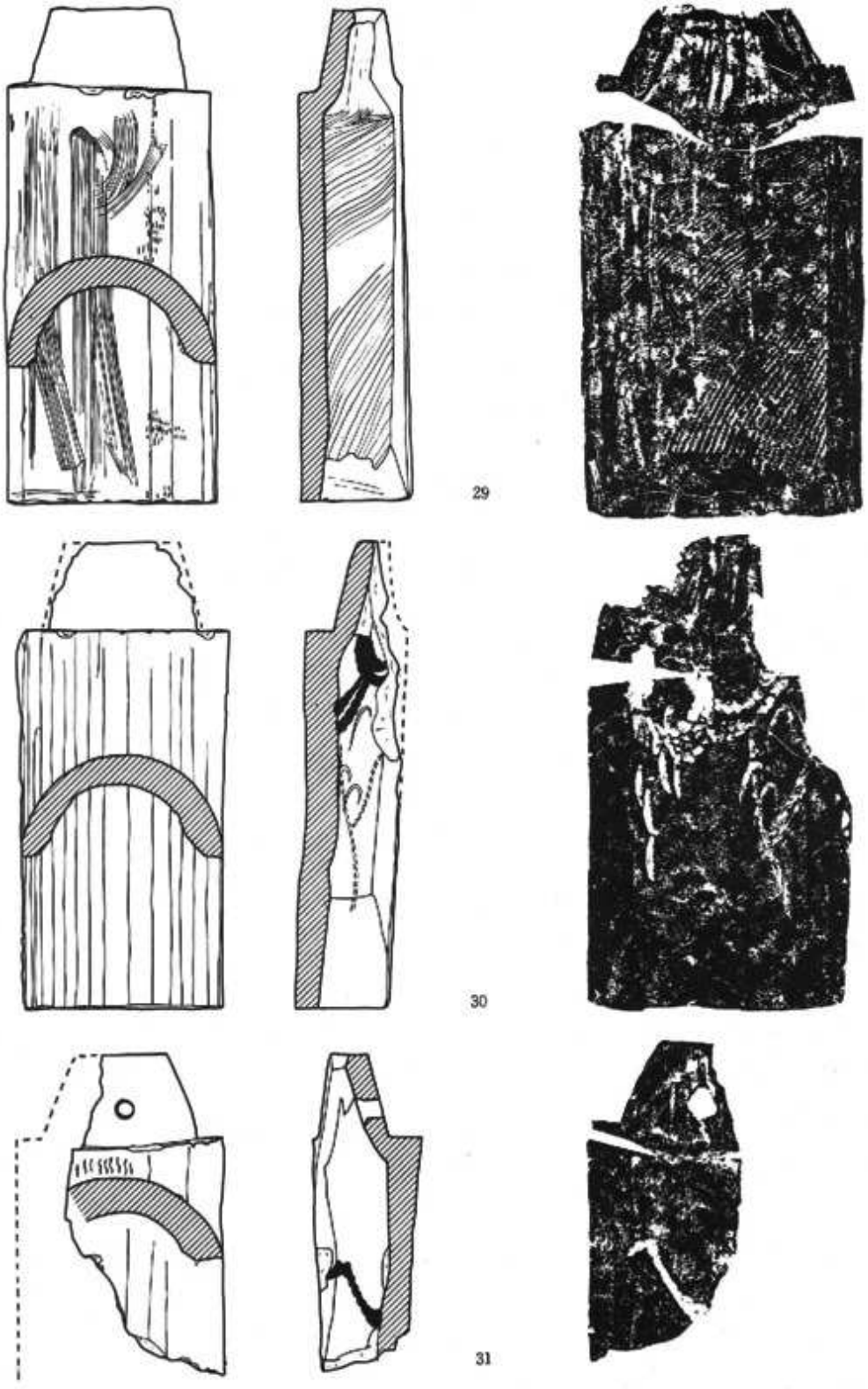
第1次成形：丸瓦の素地となる粘土板には、表面を平滑にした粘土板を使用するものと、糸あるいは針金等を使用して一定の厚さに粘土板を切り取る方法をとるものに区別される。そのため、後者には明瞭な糸切痕が遺存している。

第2次成形：回転台上の木型に布袋をかぶせて粘土板を巻き付けた後、外面を縄巻叩き板で敲打して叩き締める。このとき、凹面には布目痕・抜き取縄痕が、凸面には側縁に平行な縄目痕が付く。玉縁部の成形も、この際に成形台の回転を利用して削り出される。また、同時に筒部凸面の縄目叩きの痕跡をナデで消去する等の調整が加えられる。最後に布袋を型からはずしてこの工程を終了するが、本出土資料には抜き取縄痕の遺存するものとしないものの2種が認められる。

第3次成形：一定の時間乾燥させた円筒を2分割した後、凹面には側縁と平行に丁寧なヘラ削りを行うと同時に、玉縁部の内外面にも同様の調整が加えられる。また、筒部前端凹面は玉縁部を受けるため、ヘラで面取りが行われる。

A類　29

筒部凹面に第1次成形時の粗い糸切り痕が斜方向に遺存している。また、第2次成形時の布



第12図　丸瓦実測図1（1：5）

袋の痕跡は一部に認められるが、抜き取縄の痕跡は記載資料には認められない。筒部凸面は第2次成形時の細かい縄目叩きの痕跡を縦位のヘラナデで丁寧に消しているが、一部消去を逃れて遺存する箇所も認められる。

B類　30

記載資料はやや粗い作りで、筒部凹面に抜き取縄痕2ヶ所と布目痕およびヘラ先による弓形の圧痕が8ヶ所で認められる。中でも布目痕は、布袋の綴じ合わせの痕跡を境として、左右の布目が粗と密に二分されていて興味深い。筒部凸面は一様に縦位のナデ調整が行われている。

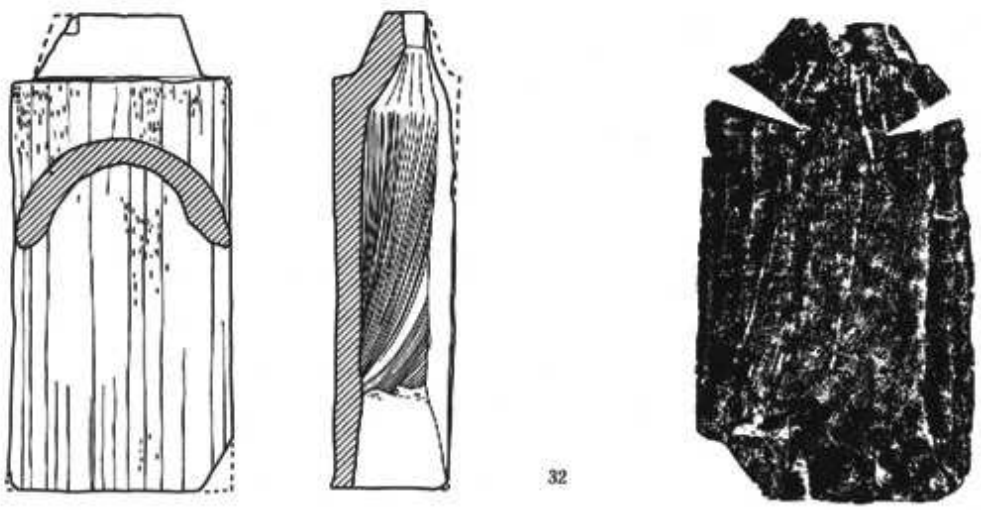
C類　31

完形の資料がなく全容は知り難いが、各部分の計測値から4種類のうちで最も大型の一群と考えられる。凹面は抜き取縄痕と密な布目痕、凸面は縄目叩きの痕跡を縦位のナデで消去している。

また、記載資料には玉縁部に直径約1.5cmを測る釘穴が認められる。

D類　32

瓦の全長が最も短い一群で、出土数も希少である。筒部凹面には、第1次成形時の糸切り痕と第2次成形時の布目痕が遺存しているが、布目痕は引きずれのため全体に波状を呈している。A類同様、抜き取縄の痕跡は認められない。凹面の筒部端部から約6cmまではヘラケズリの後丁寧なナデ、筒部凸面は細かい叩きの後縦位のナデで縄目叩きの痕跡を消去している。



第13図　丸瓦実測図2（1：5）

平瓦

平瓦の出土量はコンテナ箱に 130箱と多大であるが、丸瓦と同じくほとんどが細片で、時期的にもばらつきがあり、良好な資料群とは言い難い。ここでは、平瓦の製作段階毎の成形技法を復元し、その技法の相異点から５タイプを抽出して比較資料とする。

第１次成形：平瓦１枚分を平面とする粘土角材を作り、糸あるいは針金を使用して一定の厚さの粘土板を作る。この際糸切り痕である平行条痕が遺存するが、そのほとんどが隅を中心としてカーブを描くことから、糸切りに際しては、粘土角材の隅を起点として切り取られたものと推定される。

第２次成形：凸型の製作台に布を一面に敷いて粘土板を置き、凸面側から叩き板（縄目・斜格子）で叩き締める。この時、凸面に叩き原体の縄目・斜格子目、凹面には布目痕が付く。

第３次成形：一定時間乾燥した生瓦の段階で、両側面および狭広端部にナデまたはヘラケズリを行うと同時に、狭端面の面取り等の細部の調整を実施する。また、C類37のように凹面に陰刻状の斜格子の痕跡を残すものも、第３次成形前の乾燥の際に同種の瓦を重ねたために生じたものと推定される。なお、新しい時期に比定されるD類に関しては、この段階で凹型の製作台を使用していた可能性も考えられる。

A類　33・35

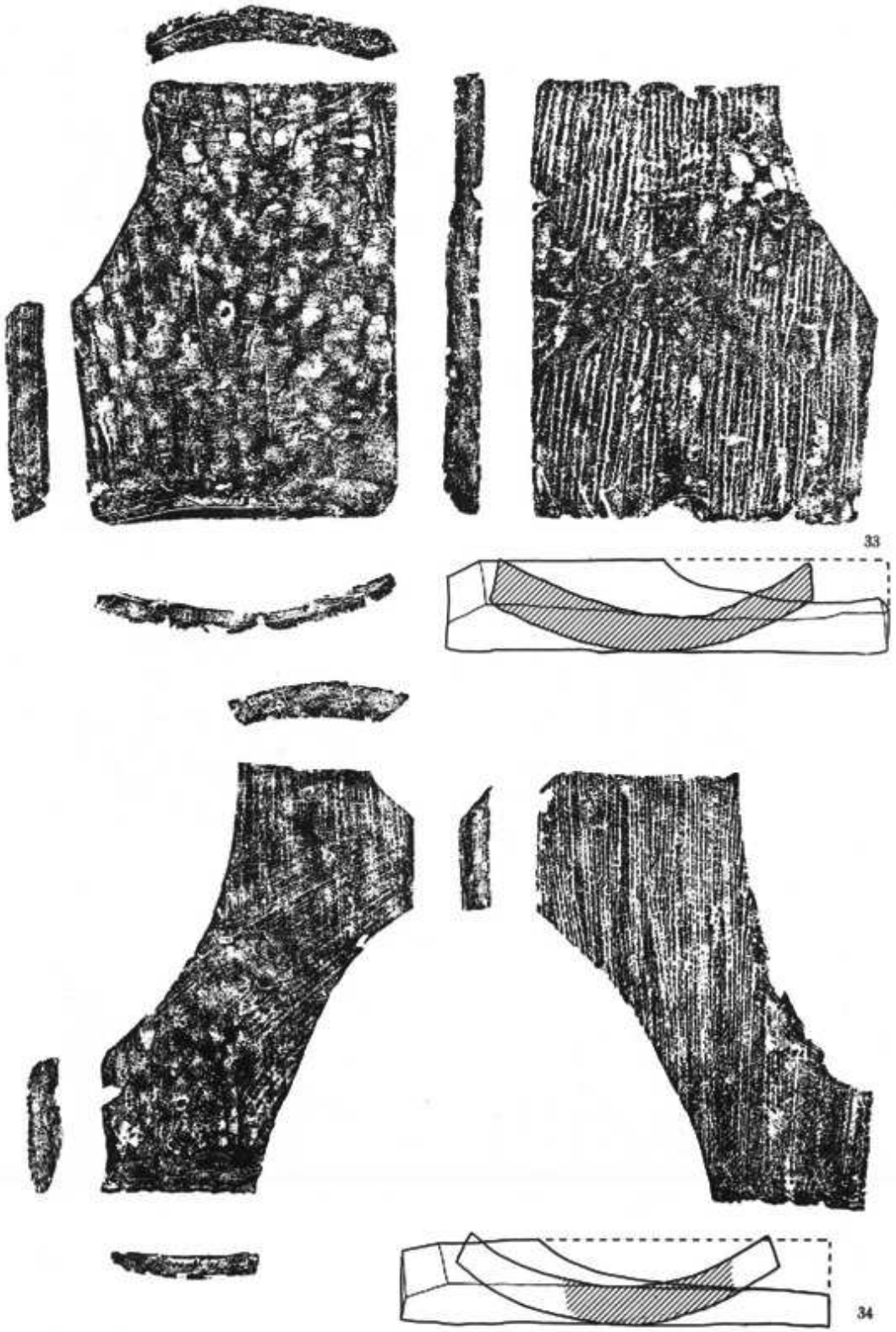
凸面には太く粗い原体の縄目叩きが縦位に通る。厚さから 1.8cm前後の薄手のA$_1$類35と、3cm前後を測るやや厚めのA$_2$類33に区別される。凹面の調整では、前者は一部に布目痕と指頭圧痕、後者には粗い布目痕が遺存している。両者ともに出土量は少ない。

B類　34

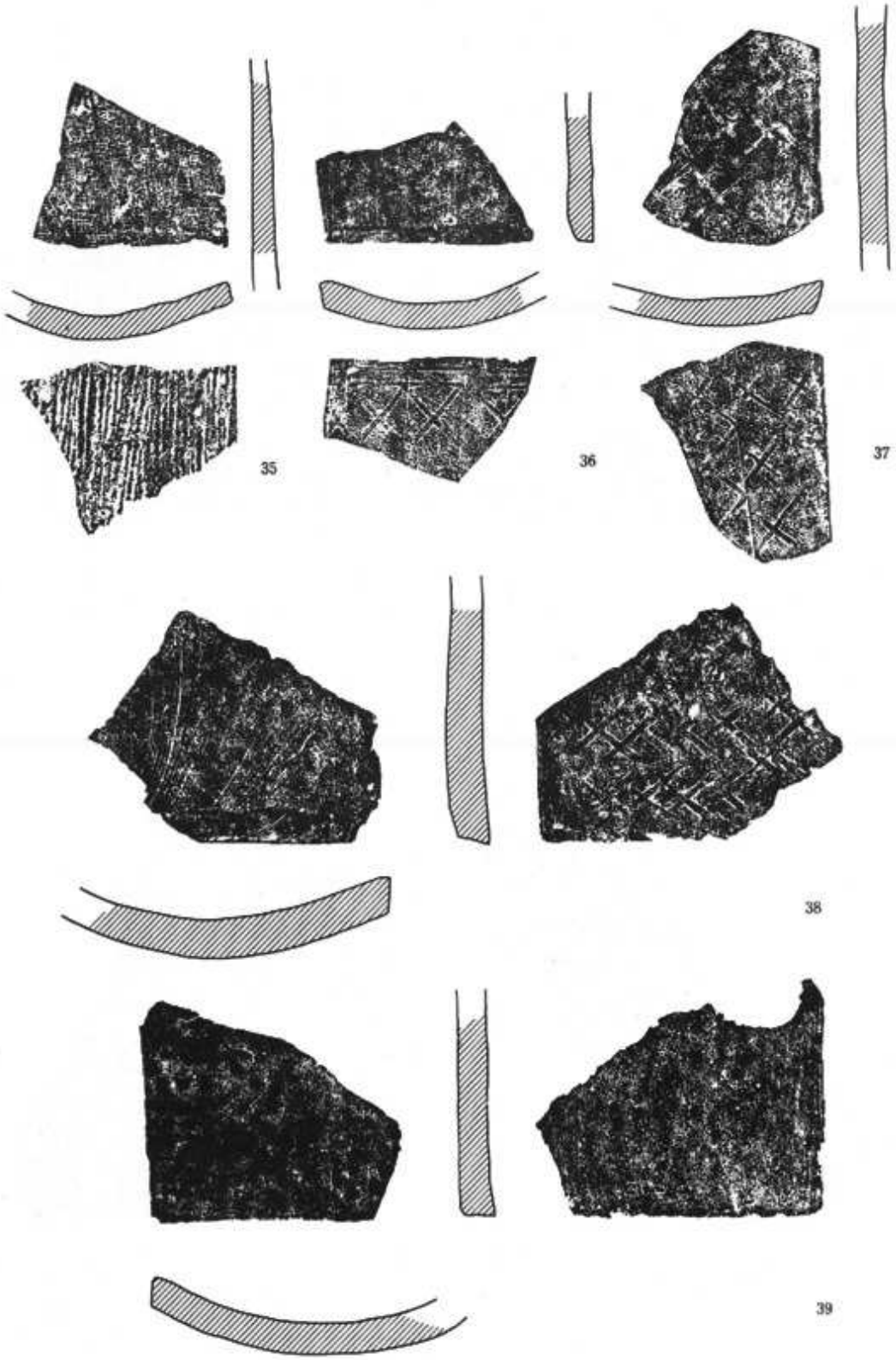
平瓦中で最も多く出土した一群である。全長32.5cm・狭端部22.0cm・広端部25.0cmを測り、厚さは2.5cm前後のものが多い。凸面は細かい縄目叩きで一様に縦位に条が通るが、一部には斜方向のものや単位間に未調整の空間を残すものがある。凹面には細かい布目と糸切痕が遺存している。広端縁・狭端縁は垂直にヘラケズリ、凹面狭端縁から３cmまでは斜方向のヘラケズリを行う。凸面全体には小砂粒が多量に付着しているが、これは縄叩きを施す前に表面に撒いたものと考えられる。また、一部の凹面に模骨痕状の痕跡を残すものも認められるが、全体に糸切り痕を残すことや、桶巻き作りに見られる円周回転方向の叩き目を凸面に認めないことから、板目は第２次成形時の製作台のものではないかと推定される。一部火中したものを除けば、焼成は良好堅緻で、胎土には石英・長石粒を多く含む。

C類　36～38

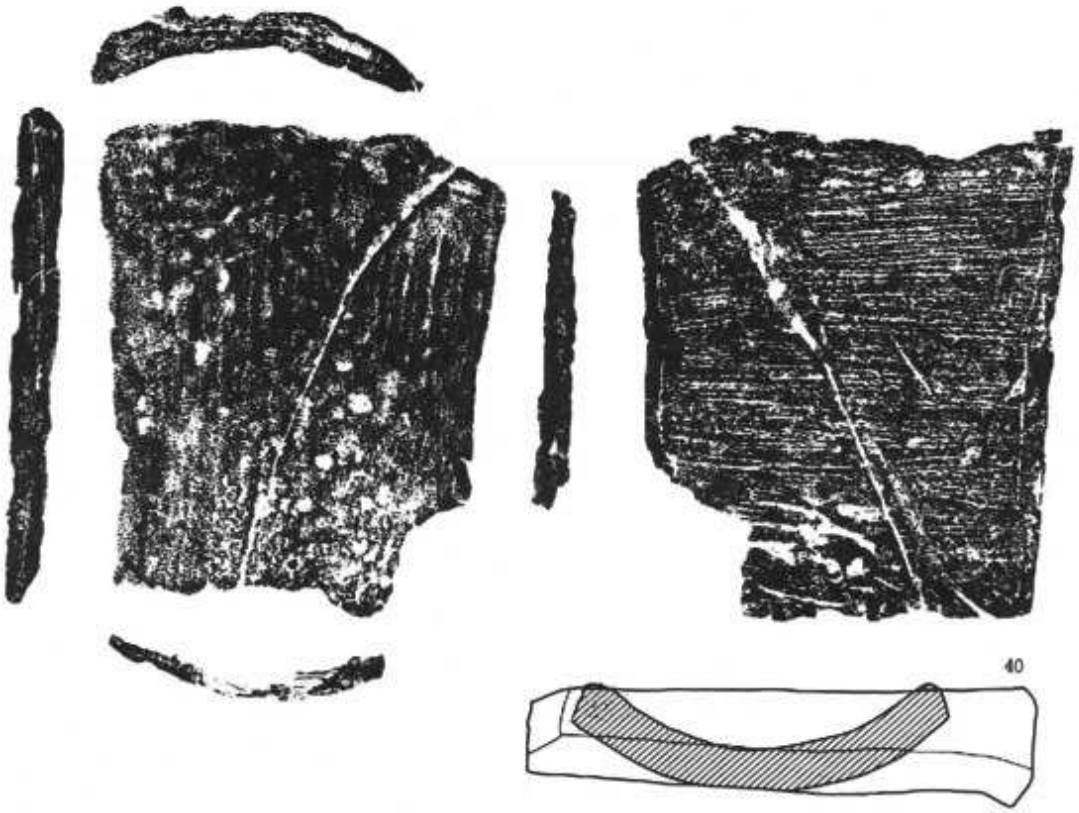
凸面には一様に隆線の斜格子で構成される叩きを縦位に施している。凹面は細かい布目痕が遺存している。C$_1$類36・37と糸切り痕を残すC$_2$類38に区別できる。



第14図　平瓦実測図１（１：５）



第15図　平瓦実測図２（１：５）



第16図　平瓦実測図３（１：５）

完形の資料が無いため斜格子叩き原体板の縦位の単位は不明であるが、斜格子１個の単位幅は 4.2cm四方で末端には幅 1.5cmを計る長方形の文様が付属している。また、先述のように37の凹面には乾燥時の重ねのため生じたと推定される陰刻状の斜格子文が遺存している。

D類　39

凸面は板叩きとナデ、凹面は丁寧なナデ調整または細かい布目痕が遺存している。広狭端面および両側面はヘラケズリの後ナデ、凹面は狭端縁から１cm前後が斜方向に削り取られている。凹凸面ともに表面には小砂粒が付着しており、焼成は全体にあまいものが多い。

E類　40

凸面に横位の縄目叩きを施す特異な瓦で、１点のみが出土した。ただし、この瓦は広端部に瓦当部との接合痕が認められることから、本来は軒平瓦であったと推定される。全長32.0cm・狭端部21.0cm・広端部25.0cm・厚さ 2.5cmを測る。凸面は細めの縄目叩きを横～斜方向に施し、凹面には模骨痕状を呈する縦位のナデと布目痕を残すが、布目痕は風化のため判然としない。

胎土には石英・長石粒を多量に含み、焼成はやや不良で、色調は灰橙色を呈する。

また、このように平瓦の凸面に横位の縄目叩きを施す例は、時期を異にする恭仁宮出土[註5]の平瓦中に認められるが、本例は軒平瓦に使用された可能性もあり、興味深い。

第3表　丸瓦計測表

番号	形式	全長	筒部長	玉縁長	幅				高さ				厚さ	
					筒部		玉縁部		筒部		玉縁部		筒部	玉縁部
					前端	後端	段部	尻部	前端	後端	段部	尻部		
29	A類	360	302	58	150	146	113	90	76	81	64	52	21	16
30	B類	340	277	63	148	152	(112)	(75)	76	72	54	39	22	16
31	C類	—	—	62	—	—	—	—	—	76	56	44	24	22
32	D類	303	258	45	(138)	139	(106)	(79)	69	75	59	49	22	20

※( )内は推定値　※形式は本文掲載に準ずる　※厚さは各部の平均値

第4表　平瓦計測表

番号	形式	全長	幅		高さ		厚さ		
			前(狭)端	後(広)端	前(狭)端	後(広)端	前(狭)物	中央部	後(広)端
33	A_1類	327	220	(240)	54	(67)	15	25	25
34	B 類	320	(220)	(230)	56	50	15	20	23
35	A_2類	—	—	—	—	—	—	15	—
36	C_1類	—	—	—	—	—	13	16	—
37	C_1類	—	—	—	—	—	—	20	—
38	C_2類	—	—	—	—	—	24	27	—
39	D 類	—	—	—	—	—	20	23	—
40	E 類	305	(220)	(250)	45	64	10	25	20

※( )内は推定値　※形式は本文掲載に準ずる　※厚さは各部の平均値

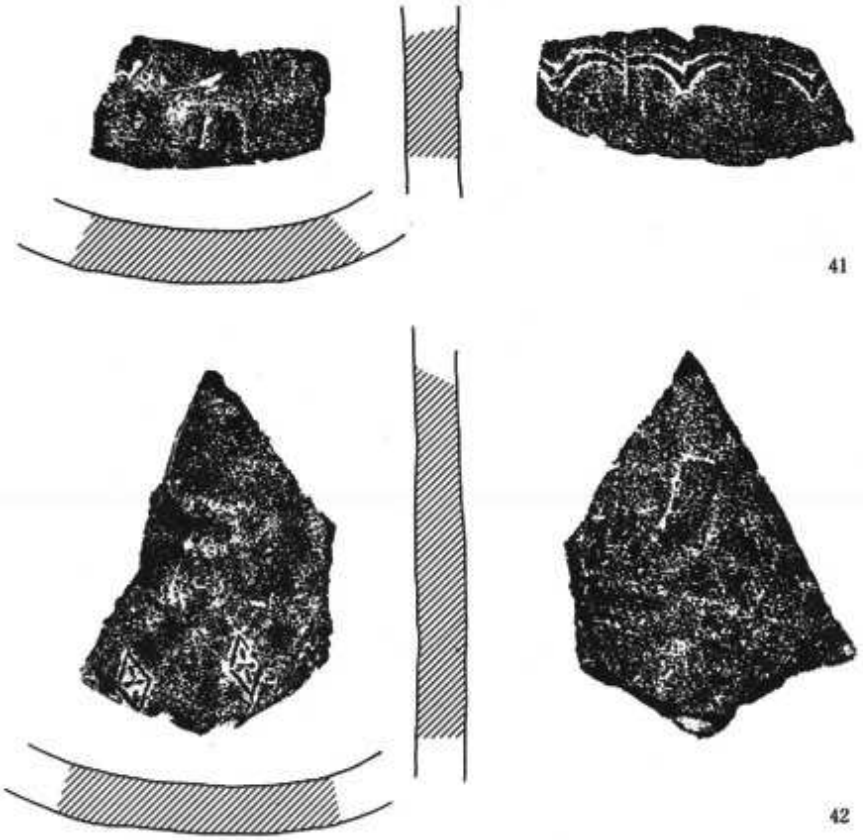
その他の瓦　41・42

41は平瓦の凸面に、鳥が飛ぶ様を陰線で示すものである。細片のため全容は不明であるが、幅5.0cm前後の叩き板を横方向に移動して施文したものと推定される。

42は平瓦の凹面に菱形と十字形からなる文様を陰線で示す。全体に施文した後に丁寧なナデ調整を行うため、原体の痕跡が一掃されている。

4）道具瓦

出土した道具瓦には、伏間瓦・鬼瓦・塼があるが、出土量は概して少ない。また、面戸瓦・熨斗瓦に関しては、種々の製作法を想定して選別を実施したが、それらに該当するものは見出せなかった。



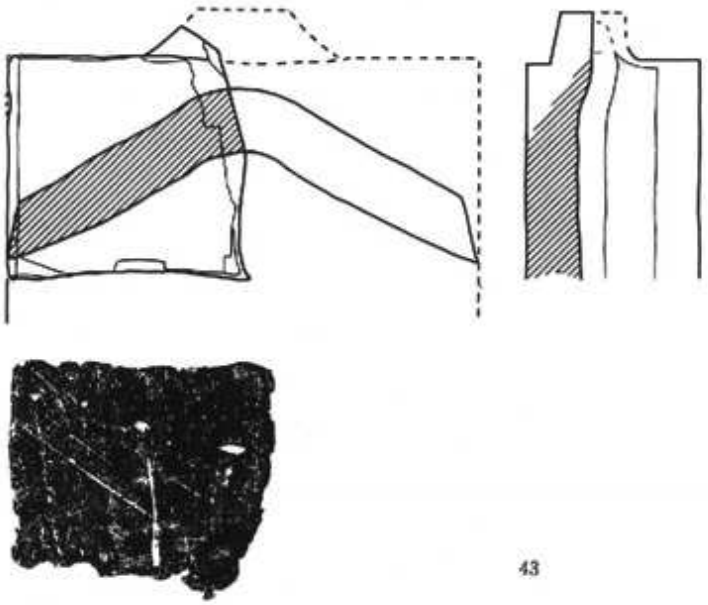
第17図　その他の瓦実測図(1：3)

伏間瓦　43

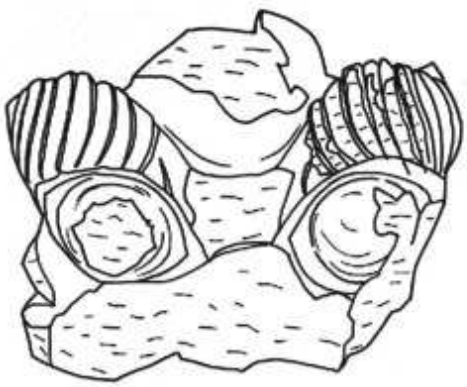
既往調査の際、第5・第6トレンチを中心に数多く出土したもので、当調査でも10点程度が出土している。

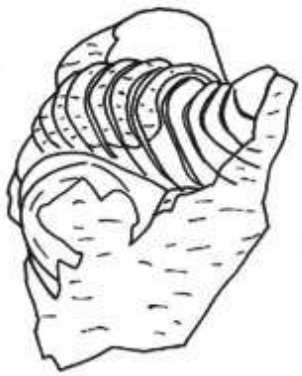
出土した瓦はすべて破片で全容は不明であるが、既往調査の出土例[註6]では中央部が極端に隆起しており、片側には玉縁が付いている。

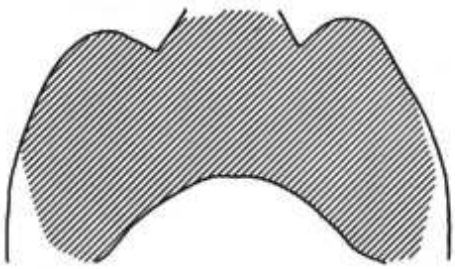
凹面には糸切り痕と布目痕が残り、側面はナデによる面取りを受ける。凸面は全体に丁寧なナデが行われている。



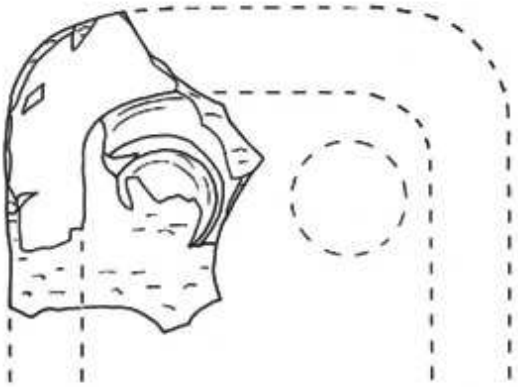
第18図　伏間瓦実測図(1：5)

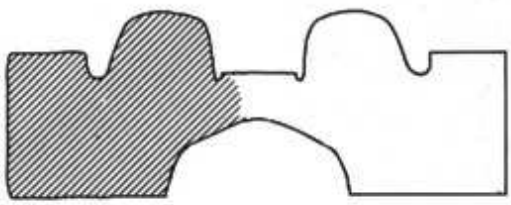






44





45

第19図　鬼瓦実測図(1：3)

鬼瓦　44・45

44の顔面は上部と下部を欠損するが、縦12.5cm・横16.5cm・厚さ10.2cm程度が遺存している。眼球は大きく卵形に突出し、目尻は斜上方へ長く伸びて終る。眉の表面には、眉毛を表現した円弧状の陰刻線を描き、眉間は連結して左右とも漸増して伸びる。裏面はU字形に削り取られている。

胎土には小砂粒を多量に含み、焼成は良好で色調は淡灰色を呈する。

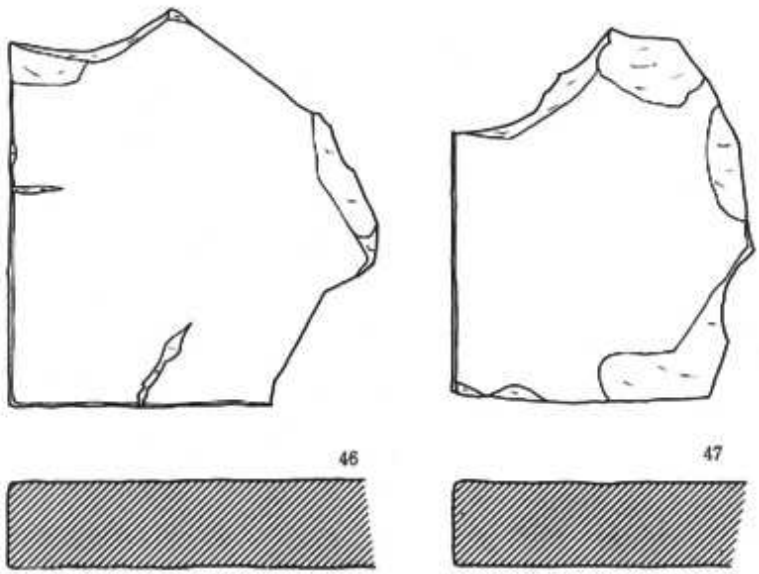
45も欠損が著しく、左上半部が遺存している。顔面の周囲には、3～3.5cm幅の平滑な縁を持つ。眼球は突出する粘土塊を用い、その周囲を円形に削り込み、突出を強調している。また、眉は三日月形にわずかに突出させて表現されている。裏面は中央部が大きく削り取られ、窪んでいる。

胎土には小砂粒を多量に含み、焼成は良好で色調は淡灰色を呈する。

塼　46・47

平面正方形を呈する敷塼で、数点が破片で出土した。すべて厚さ3cm前後の方形板状で、上面は長期間の使用のためか一様に表面の磨滅が顕著である。また、下面には糸切り痕と離れ砂の付着が認められ、側面はヘラケズリの後ナデ調整を施す。

胎土には石英・長石粒を多く含み、焼成は良好堅緻で色調は灰色を呈する。



第20図　塼実測図(1：3)

2．中世の出土遺物

中世の遺物は第5層茶褐色砂質土層および瓦集積を中心に出土したが、すべて細片で出土量もわずかであった。器種には擂鉢・ねり鉢・火舎・土釜・甕・中国産磁器が認められる。出土状態は層位ごとでは捉えられなかったが、概ね中世末期を中心とした時期に比定できる。以下遺物ごとに概観し、法量・調整・製作技法等の詳細はⅥ出土遺物観察表に委ねる。

1）土師質土器・陶器　1～11

擂鉢・ねり鉢　1～5

1・2は備前焼の擂鉢で、同形態のものは他に5点出土した。その特徴から、5時期に編年される間壁編年のうち、Ⅳ期に比定されるものである。[註7]

ねり鉢は7点が出土し、うち須恵質のものは**3・4**の他に4点あり、瓦質のものは**5**のみであった。いずれも口縁部が上下に肥厚するタイプで、**4**のように流し口の遺存するものもある。須恵質のもののうち、形態的な特徴から**3**は東播系、**4**は在地産のものと推定される。[註8]

火舎　6・7

須恵質の**6**と瓦質の**7**が出土した。両者ともに口縁端部に水平な面を持つもので、口縁部付近には2条の凸帯間に陰刻文を施文する。

土釜　8

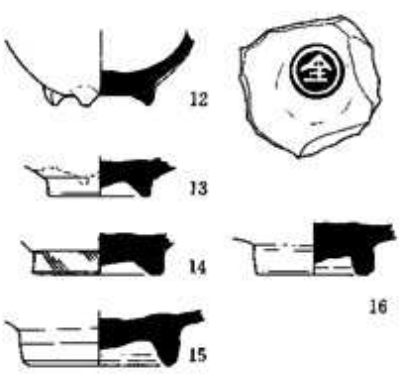
土師質の**8**を図示したが、他に瓦質に近い焼成のものも1点出土している。いずれも鍔を有する羽釜で、口縁部が上方に立ち上がる。

甕　9～11

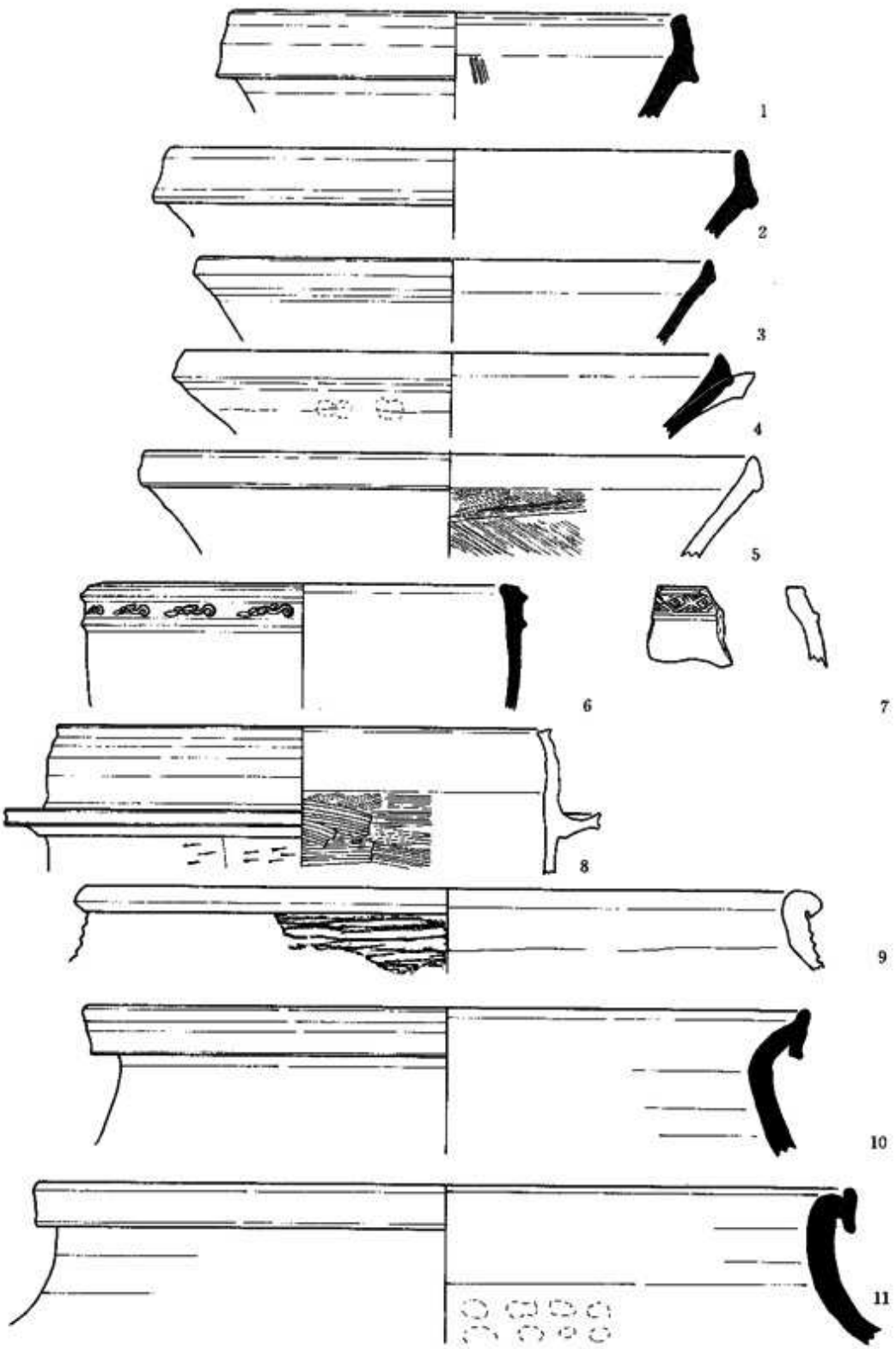
甕は4点出土し、うち3点を図示した。**9**は瓦質の甕で、口縁部は玉縁状を呈し、外面には粗いタタキ目が遺存している。**10・11**は常滑焼で、口縁部はともに上下に肥厚する。他に図示し得なかったが、信楽焼と推定される細片も認められた。

2）中国産磁器　12～16

瓦集積内を中心に15点が出土したが、ほとんどが細片で、図示し得たものは5点にすぎない。大半が碗で、他に香炉1点と大型鉢2点が出土した。**12**は三足が付く香炉で、釉は外面青緑色・内面淡白緑色で、外面の釉層は極めて厚い。**13・14**はやや粗雑な作りで、ともに淡黄緑色の釉を薄く施している。中国福建省同安窯産のものに類似する。[註9] **15**は見込みに沈線状の窪みが認められる。**16**の見込みには「㊎」あるいは「㊎」と読みとれる文字が陽刻で示されている。



第21図　中国産磁器実測図（1：3）



第22図　中世の出土遺物実測図（1 ： 4）

3．近世末期の遺物

遺物は表土および第5層茶褐色砂質土層を中心に出土した。器種別には多量の国産陶磁器を始めとして、土師質の皿・砂鍋・火入および土製品等が認められた。これらの遺物は既述でも触れたように遺構に伴うものではないが、寺院関係の遺物とともに多量の日常雑器が認められることから、近世末期以降の千眼寺（千福禅寺）の推移を示唆する上でも重要な資料となり得るものと考えられる。

1）土師質土器　17～30

砂鍋　17～20

12個体が出土し、うち4点を図示している。形態には、体部と口縁部との境に鍔状の凸帯を持つ17～19と、内弯ぎみに直立する口縁部を作る20がある。前者は削り出しによって凸帯を作る17・18と、粘土紐を貼り付ける19とに区別される。4点とも内面には丁寧なナデが施され、底部から体部にかけては長期間の使用を物語る煤が付着する。

火入　21・22

三足脚の付くもので、大型・小型の2種が出土している。大型の21は水平な底部から斜上方へ立ち上がり、口縁部は内側へ曲折するが、端部は欠損していて不明である。調整は体部外面下部と脚部は丁寧なナデ、その他には弱いナデを行なう。焼成は良好、色調は赤茶褐色を呈する。小型の22は体部が内弯ぎみに立ち上がり、口縁端部は水平面を作る。体部および底部内外面にはナデが行なわれている。焼成は瓦質に近く、色調は黒色を呈する。

皿　23～30

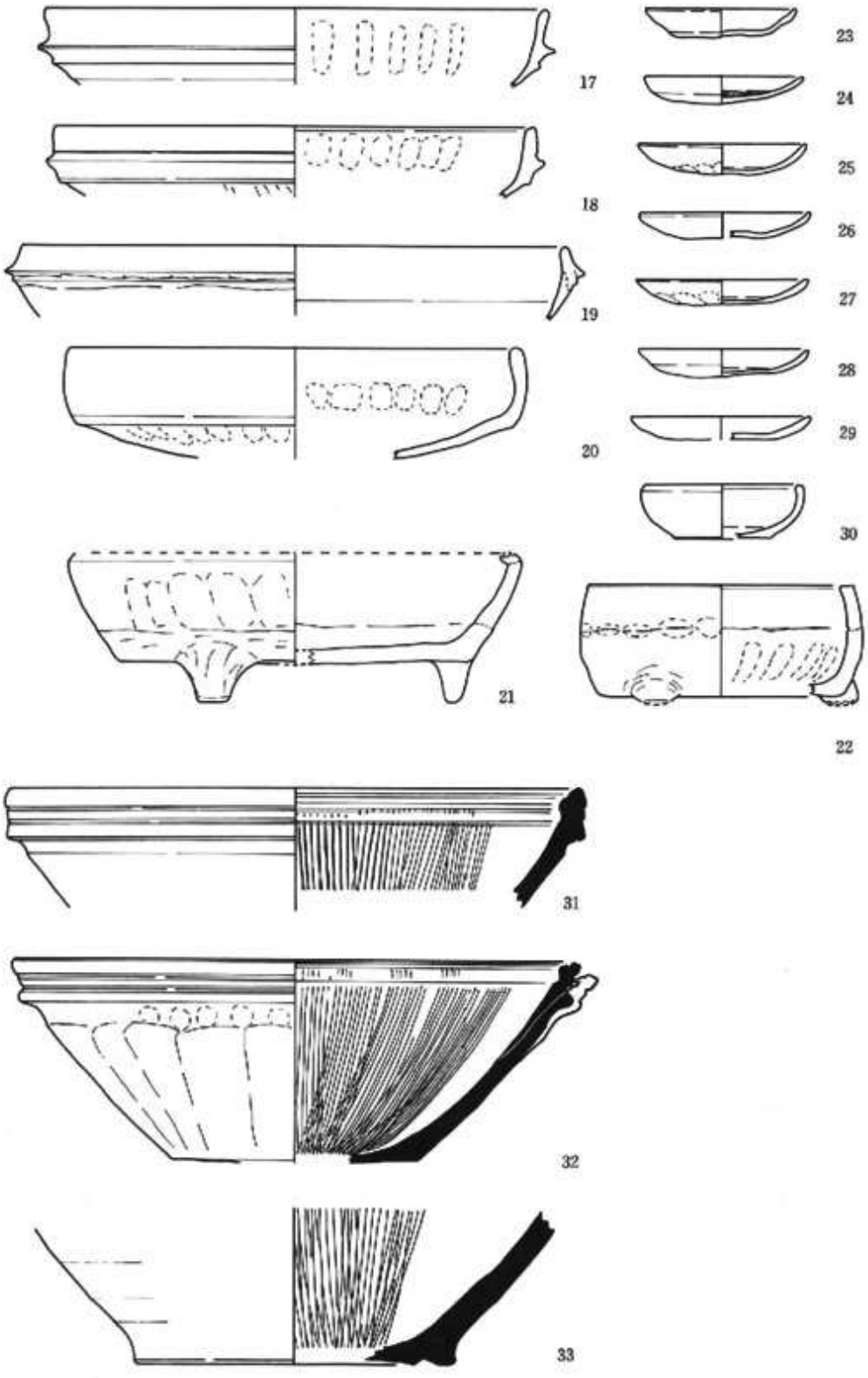
土師質小皿は21点出土し、7点を図示している。30を除いては概ね同技法で製作されており、数値も近似している。また、一部には灯芯油痕を残すものも認められる。30は平坦な底部から内弯して丸く終る口縁部に至るもので、小鉢形を呈するが用途は不明である。

2）国産陶磁器　31～120

国産陶磁器の出土総数は 244点を数え、産地別および器種別の内訳は第5表のとおりである。出土総数として数えた破片は、原則として口縁部あるいは底部（高台）を残すものに限ったが、体部のみの破片であっても器形を把握できるものも含めている。

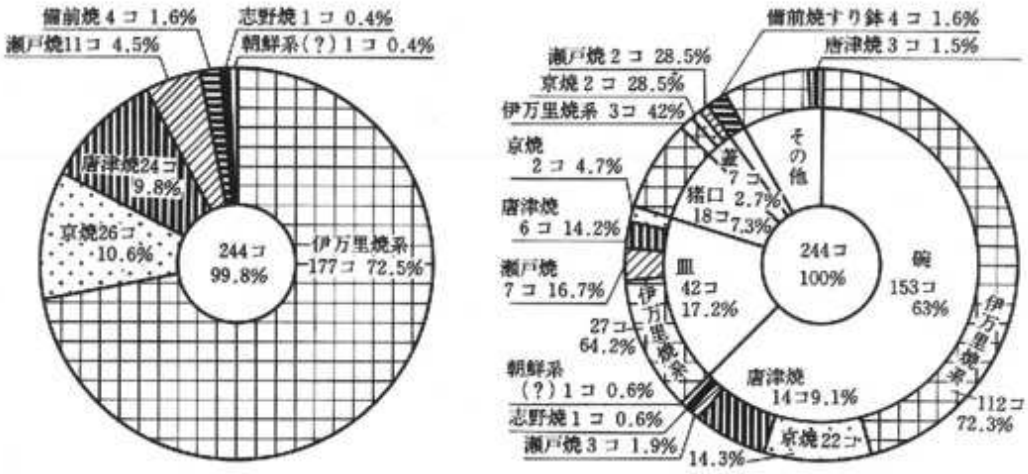
産地別にみると伊万里焼系のものが約7割と多数を占め、他には備前焼（擂鉢）・唐津焼・京焼・瀬戸焼等があり、その形態や文様の特徴から朝鮮系かと思われる白磁碗も1点認められる。ただし、ここでいう「伊万里焼系」とは、その産地をいわゆる伊万里（有田）に限定したのではなく、伊万里焼の系譜を引くと考えられる磁器の総称として用いたものである。

器種別にみると碗が圧倒的に多く、他の器種に比して使用頻度の高いことを示している。他の器種もほとんどが日常雑器であったと考えられるが、中には高級品といえるものもみられる。



第23図　近世末期の出土遺物実測図（1 ： 4）

第5表　国産陶磁器産地別・器種別内訳



以下産地別に概観し、法量等については観察表に委ねる。なお、伊万里焼系のものに関しては、その形態もさることながら、染付文様が重要であると考えられ、今回は完形品に近いものは展開図を用いて文様をより明確にした。小破片および幾何学文様等は従来どおりの表現である。

備前焼擂鉢　31～33

31～33の他1点が出土した。31・32はともに口縁部が上下に肥厚するもので、口縁内側に凹線が一周するタイプである。擂目は底部から上方へ櫛で放射状に施されており、図示していない1点も同様の擂鉢である。33は底面の外縁付近に凹線状の窪みが一周している。

唐津焼　34～43

総数24点出土した。唐津焼には刷毛目唐津・無地唐津等の種類があるが、ここでは器種別に概観する。器種・種類の内訳は第6表にまとめた。

碗　刷毛目唐津　34～36・絵唐津　37・無地唐津　38・39

34～36は茶系統の素地に白泥を刷くもので、同種のものは他に4点出土している。34は腰の張りが弱く白泥の量も少ないため、他の碗とは若干の違いがある。他の6点はすべて腰が強く張り、高台脇にカンナ削りの段を顕著に残す。35の見込みには蛇の目形の釉のかきとりが認められる。これは器を一つずつ匣に収めずに、「高台積」と呼ばれる方法で器を直接積み重ねて焼くことから、釉の溶着を防ぐために、見込みにあらかじめロウなどを塗って釉を取れやすくしたものである。図示していない4点も同様の重ね焼痕を残すことから、重ね焼が一般的であったことを示している。

第6表　唐津焼器種別内訳表

器種＼種類	刷毛目唐津	絵唐津	無地唐津	不明	合計
碗	7	2	5		14
皿	1	1	3	1	6
壺				3	3
大皿			1		1
合計	8	3	9	4	24

絵唐津の碗37は発色の悪い彩料で庵かと思われる絵付を施すものである。重厚な作りで釉は厚く白濁し、内外に細かい貫入が認められる。図示していない1点は網目文を施すが、形態・釉調等は同様である。

無地唐津の碗は5点出土した。38は体部下位にカンナ削りの段が認められるが高台の削り出しが浅く、高台内外には縮緬皺があり、貫入を持つ淡緑色の釉などに唐津焼の特徴がよく出ている。図示しなかった3点が同種のものである。すべての見込みには重ね焼の痕跡が認められるが、これは先の「高台積」とは違い、器の間に「目・針・トチ」等と呼ばれるものをはさんで焼くもので、見込み・高台側面に4～5箇所の釉を欠く部分がみられる。これら4点は完形品がないため一応碗としたが、唐津焼に多い「向付」と呼ばれる器種とも考えられる。

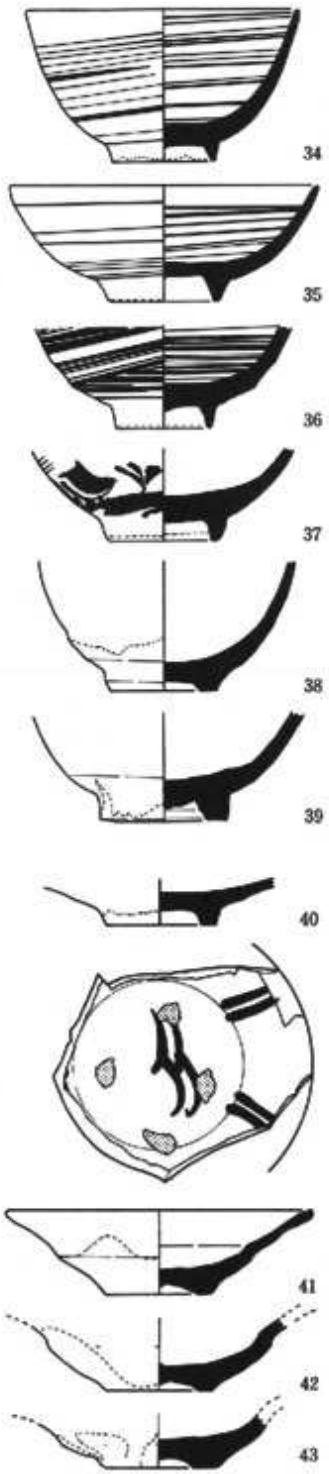
一方39は突出するどっしりした高台を持つもので、同種のものは出土していない。高台内には38同様縮緬皺があり、兜巾が認められる。また高台内の削り出しは中心をはずれ、三日月高台（片薄高台）となる。釉は乳白色で薄く、内外に細かい貫入が認められる。

皿　刷毛目唐津　40・絵唐津　41・無地唐津　42・43

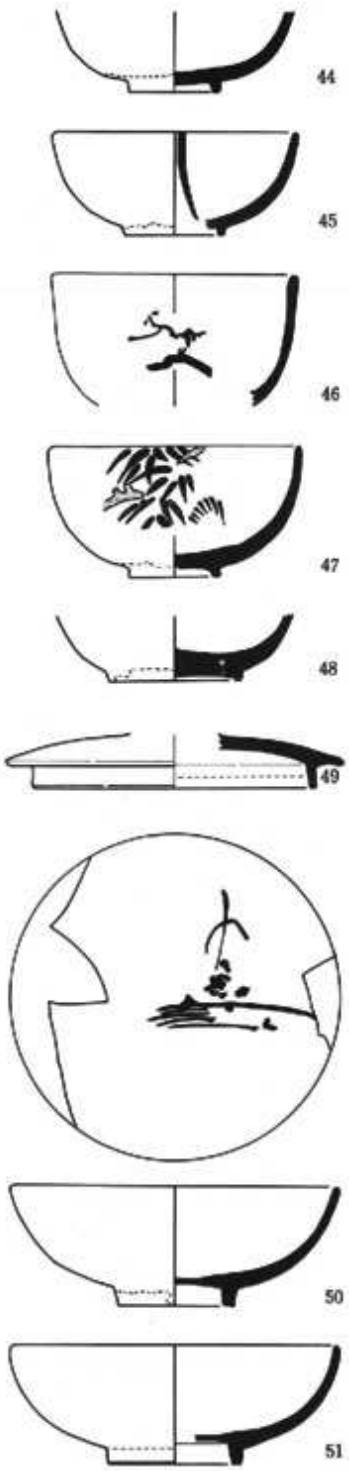
40は刷毛目唐津の皿であるが、前述の刷毛目唐津碗34～36とは逆に、全体に白泥を化粧掛けした後に、櫛状工具で波状にかきとるものである。断面台形で垂直に下る高台を持ち、見込みには目跡が4箇所に認められる。

41は典型的な絵唐津の皿で、碗38と同様高台の削り出しが浅いことや縮緬皺・腰の稜等に唐津焼の特徴を持つ。釉も碗38と同様の淡緑色で厚く貫入があり、腰には釉なだれが認められる。見込み・体部内面に鉄彩料で文様を描き、見込み・高台側面に4ヶ所の目跡が見られる。

42・43は無地唐津の皿で、形能は41に似る。釉は39のように乳白色で薄く、細かい貫入を持つ。2点とも見込み・高台側面に目跡を残しており、42は糸切り高台、43は三日月高台を持つ。図示していないものも同様の形態・釉調である。



第24図　国産陶磁器実測図1
唐津焼碗・皿（1：3）



第25図　国産陶磁器実測図２
京焼碗・蓋（１：３）

京焼　44～51

京焼と確認できたものは26点で、器種には大小の碗が多い。全般に器肉が薄く、小さく低い高台を持つ。素地はクリーム色で黄色系の透明感のある釉を施し、内外に貫入が認められる。また、見込みの文様や高台裏の「清水」の印刻も特徴的である。

第７表　京焼器種別内訳表

器種ごと総数 ＼ 特徴		類似の形態	見込みに山水画	高台裏銘
小型碗	7		1	2
大型碗	15	12	6	3
蓋	2	2		
皿	2	2		
合　計	26	16	7	5

小型碗　44～48

７点出土した。**46**のみがやや深めであるが、他は半球形の体部を呈する。これらは高台および高台裏が露胎である。

44は見込みに茶系統の淡い彩料で山水画風の文様を施す。**45**の内面には直線文、**46**の外面には山水画風の文様がそれぞれ暗緑色の彩料で描かれている。また**47**の外面には赤・青・緑の彩料で松・笹等の上絵付がなされているが、剝落して痕跡をとどめるだけの部分が多い。

48の高台は大型で内部の削り出しが浅く、厚い底部が急に立ち上がる形態は、他の碗と異っている。高台内には「清水」と読みとれる印刻を持つ。

蓋　49

土瓶・蓋もの等の蓋であろう。類似する形態・法量のものが２点出土した。外面中央につまみの痕跡が認められる。かえりの下面から口縁内面下半が露胎である。

大型碗　50・51

大型碗は15点出土したが、比較的遺存状態の良好な２点のみ図示した。すべて浅い半球形で、断面方形の高台を持つ。これらの中には法量・形態が近似していることから「型打ち」によって製作されたと思われるものが12点ある。うち６点の見込みには**44・50**にみられるような文様が描かれており、３点の高台裏には「清水」の銘が印刻されている。施釉範囲は小型碗と同様である。

瀬戸焼　52～55

瀬戸焼かと考えられるものは９点出土した。器種には碗・小皿(灯明皿)・大皿・蓋等があり、京焼に似るが素地がより緻密で、緑灰色系の釉を施す。

蓋　52

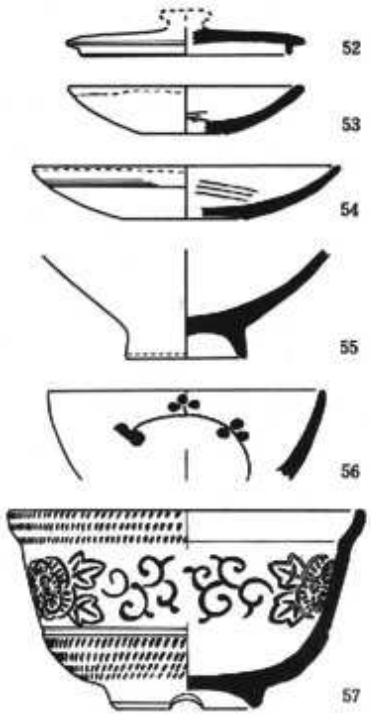
２点が出土した。52は外面中央につまみの痕跡を残し、灰白色で透明感のある釉を外面のみに施し、細かい貫入が認められる。

小皿　53・54

４点出土した。いずれも外面が露胎で口縁部に煤が付着することから、灯明皿として使用されたものであろう。４点とも底部外面を平坦にしており、安定をよくしている。**54**はやや大型であるが、他は**53**のように口径９cm前後を測る。**53・54**の内面には施釉前の櫛状工具の圧痕があり、同志社キャンパス内から類例資料が出土している。[註10]

碗　55

同タイプのものが３点出土した。高台は高く「ハ」の字形に開き、高台際から直線的にのびる。釉は厚く内外に粗い貫入を持ち、畳付のみが露胎である。



第26図　国産陶磁器実測図３
その他の陶器(１：３)

志野焼　56

体部外面に草花文を配する碗が、１点のみ出土した。白色で軟質の素地に白色不透明の釉を厚く施し、円外に粗い貫入が認められる。

朝鮮産陶器　57

深い体部と内弯する口縁部を持つ碗である。体部上位に陰刻線による牡丹唐草文を３文様配し、口縁部および体部下位を点状の陰刻文で埋めている。また高台は切り高台で、陰刻で表現された文様とともに朝鮮産陶器の特徴を持つが、産地は不明である。

伊万里焼系　58～120

先述したように、国産陶磁器の約７割が伊万里焼系の磁器であった。国産磁器が最初に焼かれたのは17世紀初頭肥前国有田であるが、その製品が日本全国に流通するのは17世紀中頃以降と考えられている。[註11]その後は製品の流通だけではなく、工人の移動や技術の伝播などによって各地でも磁器の生産が始まったことから、それまでの日常雑器であった木製椀や漆器椀に代わって磁器碗が主流となったのはいうまでもない。

西日本では18世紀後期以降、砥部焼（1775年）・富田焼（1781年）・古曽部焼（1790年）等伊万里焼の流れを受け継ぐ磁器が焼かれ始めた。また19世紀にはいると各藩では経済的な行き詰まりを打開するために国産品(旧国単位)奨励の動きが高まり、陶磁器についても例外ではなく、「貢皿山」の経営が各地で盛んに行なわれるようになった。その時期に起こった伊万里焼系の磁器としては、洞山焼（1817年）・岩谷焼（1827年）・江波焼（1827年）・能茶山焼（1863年）等が挙げられる。これらの磁器は伊万里焼の系譜を引くものの、美術工芸品として発展し数々の美術様式を生みだした「伊万里焼」とは違い、日常雑器として需要に応じて大量に生産され、消費されていったものと考えられる。

今回出土した伊万里焼系磁器のうち個体として数え得た資料は 175点で、器種別の内訳は第8表のとおりである。そのうち碗が圧倒的に多く、次いで中皿・猪口等の占める割合が高い。

碗　58～86

前記のように多数の出土があったが、形態的にはバラエティに富むため、染付文様を主に簡単な分類を行った(第9表参照)。総数 112点のうち高台付近を残す資料は70点あったが、そのうちの25点に唐津焼にみられた蛇の目形の釉のかきとりが認められた。以下文様ごとに概略を記す。

A類　草花文　58～69

草花文を主体とする碗は口縁部のみの小破片を含めて63点と最も多く出土し、草花が文様のパターンとしては一般的であったことが窺える。これらはその文様構成からA・Bの2種に分けることができる。

A₁ 58～62：ワンポイントの草花文を配するもので、9点を確認した。遺存状態の良好な資料から推測すると、全体的に絵付をするのではなく、ある程度の空間を残していることが理解される。文様には梅を主体とするものが4点と多く、楓・芒等を描くものもあり、**62**を除くすべてが高台脇に1条・高台に2条の圏線を持ち、**58・60**は高台裏にも1条の圏線が巡る。

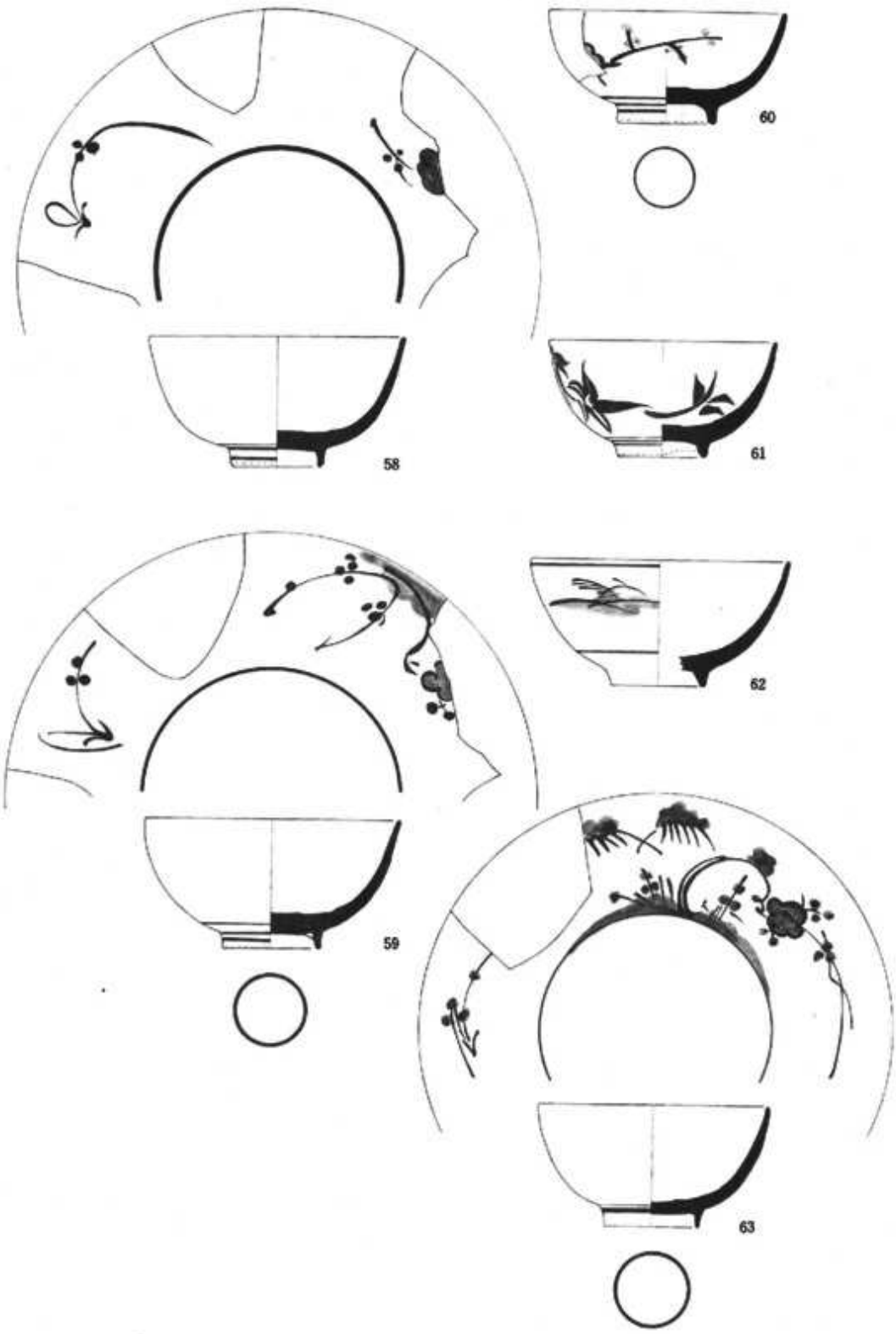
形態的には**58・59**が大振りで深く、他は小振りで浅めであるが、一様に底部の器肉が厚くどっしりした重厚な高台を持ち、畳付には多量の目砂が付着する。また、**62**のみに重ね焼痕がな

第8表　伊万里焼系器種別内訳表

器種		点数	器種	点数
碗		112	大皿	4
猪口	碗形	11	鉢	2
	桶形	3	菓子鉢	1
	筒形	4	壺	6
蓋		3	仏供碗	1
小皿		6	その他	7
中皿		17	合計	

第9表　伊万里焼系碗タイプ別内訳表

タイプ別出土総数			重ね焼痕有	重ね焼痕無	口縁部のみ
A 草花文	A_2	9	8	1	22
	A_3	54	6	26	
B 見込みに五弁花		11	—	5	6
C 唐草文		3	—	3	0
D 網目文		9	—	4	5
E 印判手		4		1	3
F その他・不明		22	11	11	0
合計		112	25	51	36



第27図　国産陶磁器実測図４　伊万里焼系碗A_1・A_2(１：３)

く、圏線も口縁部外面・高台脇に1条ずつ認められるのみで、他の8点とは形態も若干異なる。

これらはすべて呉須の発色が悪く、釉もぼってりとして厚く半透明で光沢が少ないことから、「生がけ」技法を用いたものかと考えられる。

A_2 63～69：A_2類としたものはA_1類とは異なり、体部全体に文様を展開させるものである。

高台を残すものは32点を数え、すべてが高台脇に圏線を持ち、それと重なった位置から文様が始まるものである。

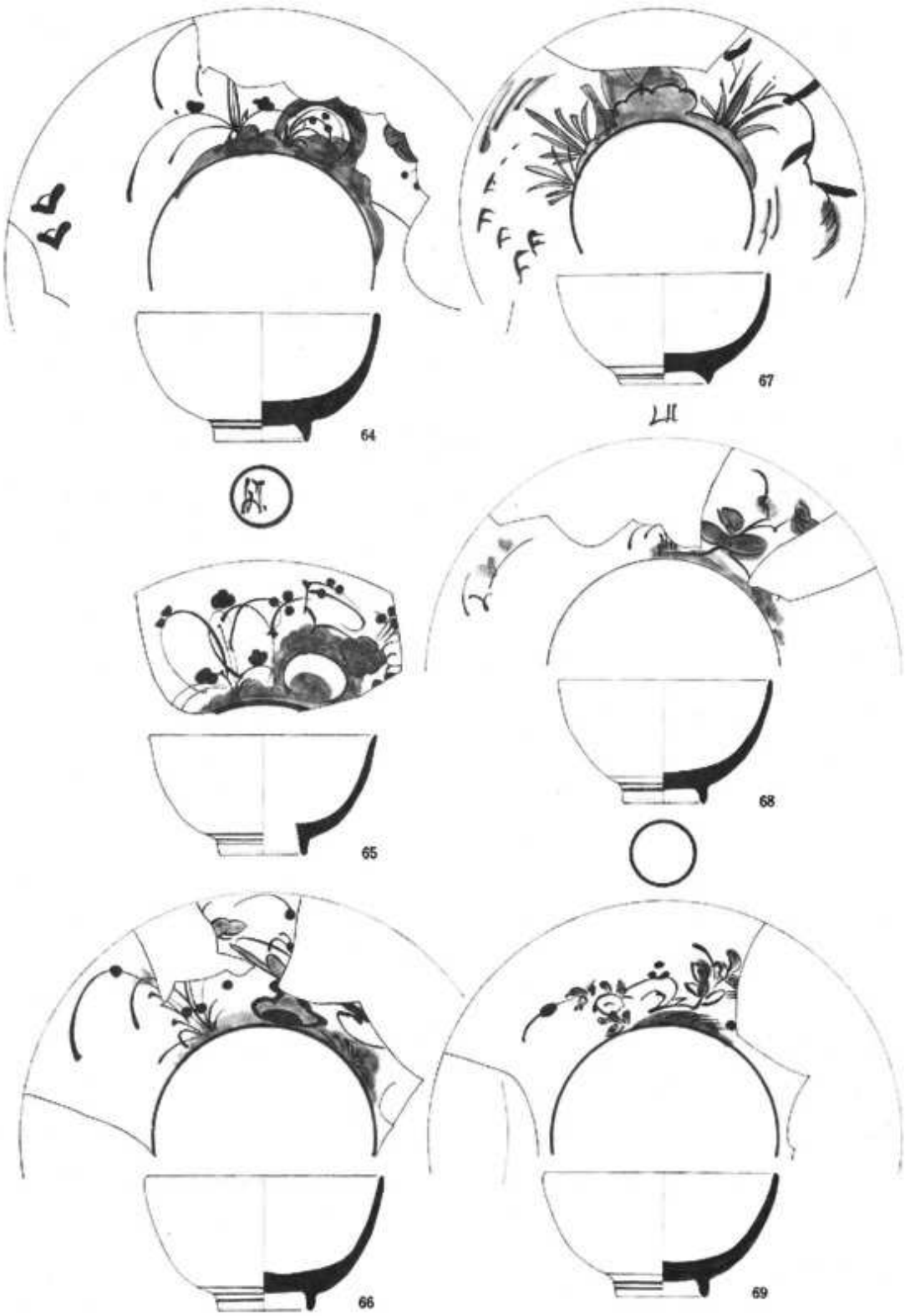
この中で蛇の目形の重ね焼痕が認められたものは、63の他に5点出土した。63は梅・雪持ち笹・松葉等をのびのびと描くもので、呉須は淡いものの明るい青色を呈し釉にも光沢があり、他の5点に比して華麗な作りである。図示しなかった5点はA_1類で普遍的に認められた形態・呉須の発色・釉調で、うち1点には畳付だけでなく見込みにも砂が厚く付着する。

重ね焼の痕跡のないものは27点を数えた。そのうち64は高台裏の圏線内に銘を持つもので、まったく同じ銘を持つものが他に2点あり、銘は確認できなかったものの体部外面に同様の草花・雁等を絵付しているものが1点出土している。これら4点は底部の器肉が厚く平坦で、腰が強く張った後垂直近くに立ち上がって口縁部へ至る大振りのもので、法量もほぼ同一であることから「型打ち」によって同時に製作されたものと考えられる。呉須の発色は悪く、釉も厚く半透明である。65は小振りの碗で腰の張りが弱く深めで、類似する文様・形態を持つ碗は他に2点出土している。3点とも高台裏にも圏線を持ち、外面にロクロ目を残すという共通点がある。65は磁胎がやや茶色味をおび、表面にも赤色のムラが出ている。3点とも呉須の発色・釉調は64と同様である。66の形態は65に似るが大型で、松を主体とする文様が施される。磁胎には黒色粒を含み、それが表面でも散見される。67は浅い小振りの碗で芒・雁等の文様を外面全体に展開して描くものである。高台は断面三角形を呈して低く、高台裏に「山」と読みとれる銘を持つ。呉須の発色・釉調等は良好である。68・69の2点は粗雑な草花文を配するもので、前述の文様を簡略化したものであろうか。ともに深めの形態で、呉須の発色が悪い。68の釉は薄く透明感・光沢がなく、ガラス化が不完全であることを示している。その他8点が類似する文様構成で、高台裏に銘を持つものや、見込みに草花文を描くものもある。

B類　見込みに五弁花を持つもの　70～73

見込みの重圏内に五弁花を持つものを5点検出した。口縁部内面には70・72・73にみられるように重圏を持つものと71のように斜格子文帯を施すものがある。また73のように見込みを欠損しているものであっても、その形態や口縁部内面の文様が70～72に近似していることから、同じタイプに含めたものが6点ある。

体部の文様は71のように丸文を配するものが3点あったが、他は太い筆さばきでさまざまな文様を表現している。形態は70のみがやや直線的に広がるが、他は71・72のように厚く平坦な



第28図　国産陶磁器実測図５　伊万里焼系碗A_2（１：３）

底部から丸みをもって立ち上がる。高台は径が大きくどっしりとしており、71・72はA_2類と同様に高台脇に1条・高台に2条の圏線を持つ。

72のように高台裏の圏線内に銘（角福銘か？）を持つものは他にも1点出土しており、71にも銘の一部が認められる。呉須の発色・釉調はA類の碗で多くみられたものに似ており、これらも「生掛け」による製作かと考えられる。

C類　唐草文　74～76

74は外面に葡萄唐草文を発色の良好な呉須で描くもので、圏線は高台脇に1条・高台に2条あり、高台裏には圏線内に「大明成化年製」の銘が記されている。75は体部外面に菊唐草文を3文様施すもので、圏線は74と同様で、高台裏には角福銘を持つ。呉須の発色は良いものの、ガラス化の不完全な部分が認められる。76は見込みの重圏内に牡丹唐草文を描くもので、口縁部内面には斜格子文帯、端部に口紅を施す。外面には翠緑色で光沢のある釉が厚くかかり、「伊万里青磁」と一般的に呼ばれるもので、高台裏には圏線内に「大明成化年製」と読める銘がある。

3点とも器肉は薄く、呉須の発色・釉調も良好であることから、前述のA類・B類の碗に比して、高級品としてのイメージが強く感じられる。

D類　網目文　77～80

9点出土したが、小破片が多い。網目には77のように交点がずれる粗雑なもの、78のように精密なもの、79のように細かいもの、80のように交点に「＋」を加えるものなどバラエティに富む。

これらはA類・B類の碗と同様の呉須の発色・釉調を示し、77の釉はガラス化不完全で同様のものは他に2点認められる。

E類　印判手　81

81の他に菊花文を施すものが3点、櫛文を施すものが1点出土した。81には大小の菊花文が用いられ、高台裏にも菊花文が施されている。器肉は極めて薄く、釉にも透明感がある。

印判は絵付に熟練を要さないため、生掛け・型打ち・高台積みなどとともに、量産体制（コストダウン）に対応するための技術であったと推測される。

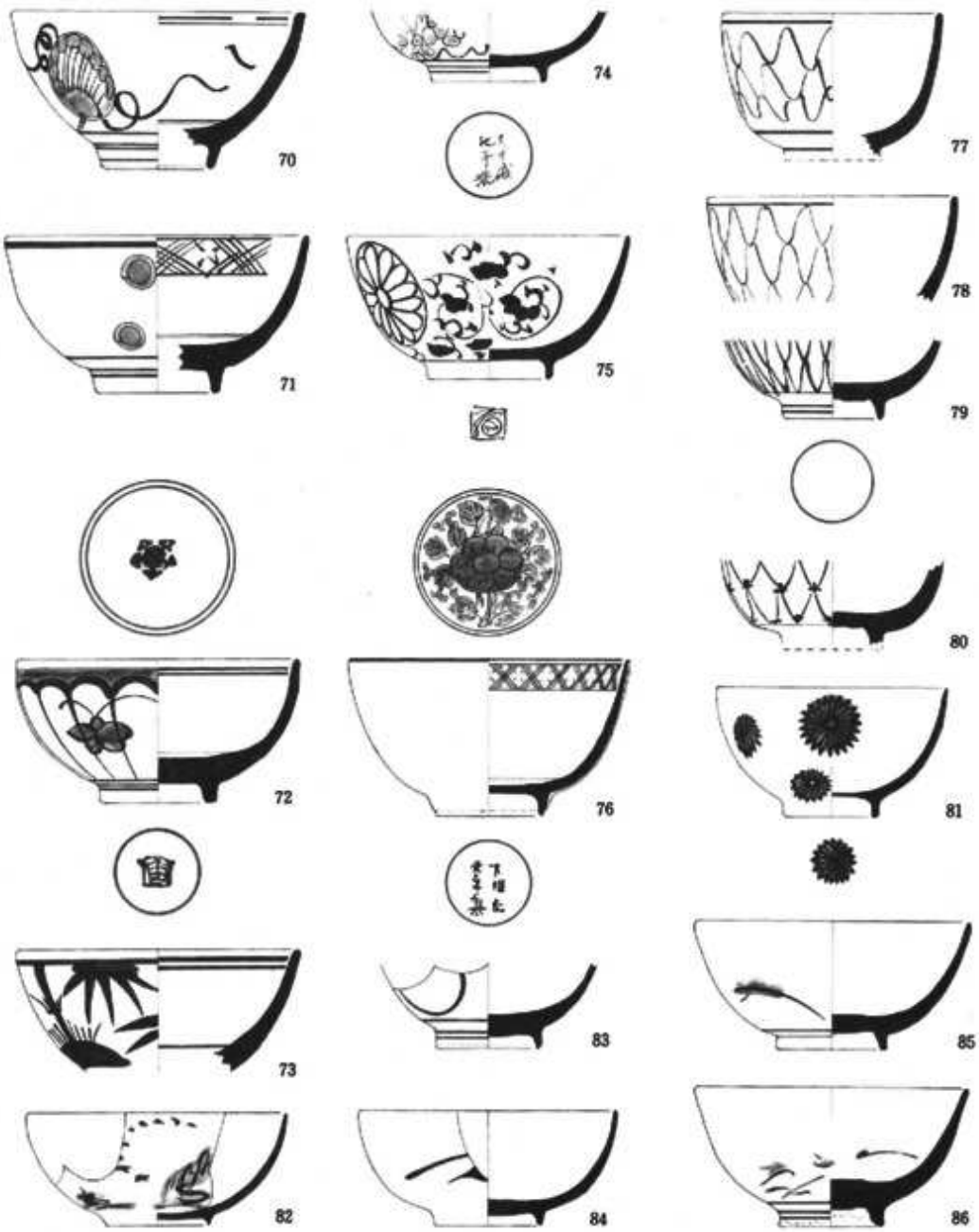
F類　その他の文様　82～86

82は柳・舟・雁を描く浅い小振りの碗である。器肉は極めて薄く、断面三角形の低い高台を持ち、華奢な作りである。呉須の発色は良く、釉は薄く光沢を持つ。83は三方に丸文を配するもので、高台脇に1条・高台に2条の圏線を持つ。磁胎には黒色粒を含み、呉須の発色は悪く、釉の光沢は少ない。

文様の判別しないものは20点を数え、すべてが高台を残す資料であった。そのうちの11点に蛇の目形の重ね焼痕が認められた。84のように圏線を持たないものは他に2点あり、やや小振

りで器肉も薄く、呉須の発色は悪いが釉には光沢がある。**85・86**と同様の圏線を持つものは他に6点あり、いずれも高台径 4.5cm前後の大型の碗である。**85・86**を含む5点は発色の悪い呉須で釉も厚く不透明、他の3点は呉須の発色は良く釉にも光沢があるが粗い貫入が認められる。

その他には、高台裏に「・・年製」の銘を記すものが1点出土している。



第29図　国産陶磁器実測図6　伊万里焼系碗B・C・D・E・F(1：3)

猪口　87～97

猪口には碗形・桶形・筒形等の形態があり、今回出土したものには碗形が11点、桶形が3点、筒形が4点あり、現在でもそば猪口・湯呑・ぐい呑として用いられている器種である。「猪口」といえば「そば猪口」を連想しがちであるが、そばが現在のような形で食されるようになる江戸時代中期（享保・元文年間）以前からこの器形は作られており、それがそばのつゆ入れに適していたことから、そばの普及とともに「そば猪口」としての器種が定着したのであろう。

また、筒形の猪口には祝膳の向付に用いられているものがあることから、日常雑器とは性格を異にするものも含まれていると考えられる。

碗形　87～93

碗形の猪口のうち、7点が口縁部外面に雨降柳文を持つものであった。そのうち87と同じ法量および色調を持つものが他に2点あり、すべてにロクロ目が顕著に残っている。また88と同様のものは他に3点出土した。これらは同時に製作されたものと考えられ、一括購入されて日常雑器として飲酒・喫茶等に用いられたものと思われる。いずれも磁胎に黒色粒を含み、焼成中に歪みを生じたものもあり、粗雑な作りである。

89は体部外面の相対する位置に、笹と鳥かと思われる文様を染付けるものである。呉須は暗く発色は悪く、半透明の釉が厚く施されている。90は蝶等の文様を描くもので、呉須の発色・釉調ともに良好であるが、焼成中に若干の歪みを生じている。

91・92は口縁部が外反することから、「端反り」と呼ばれるものである。91は体部外面の相対する位置に蘭かと思われる絵付がなされ、釉は厚く不透明なため呉須の発色は悪い。高台脇にはカンナ削りの段が残り、兜巾高台を持つ。口径 6.5cmと小型なため、酒盃として用いられたものかと考えられる。また92は外面に直線文・丸文を配し、その間に「寿・福」と読みとれる文字を記すが、欠損しているために不明瞭である。これは前述の碗形猪口よりも浅い形態を呈するため、他の用途が考えられる。

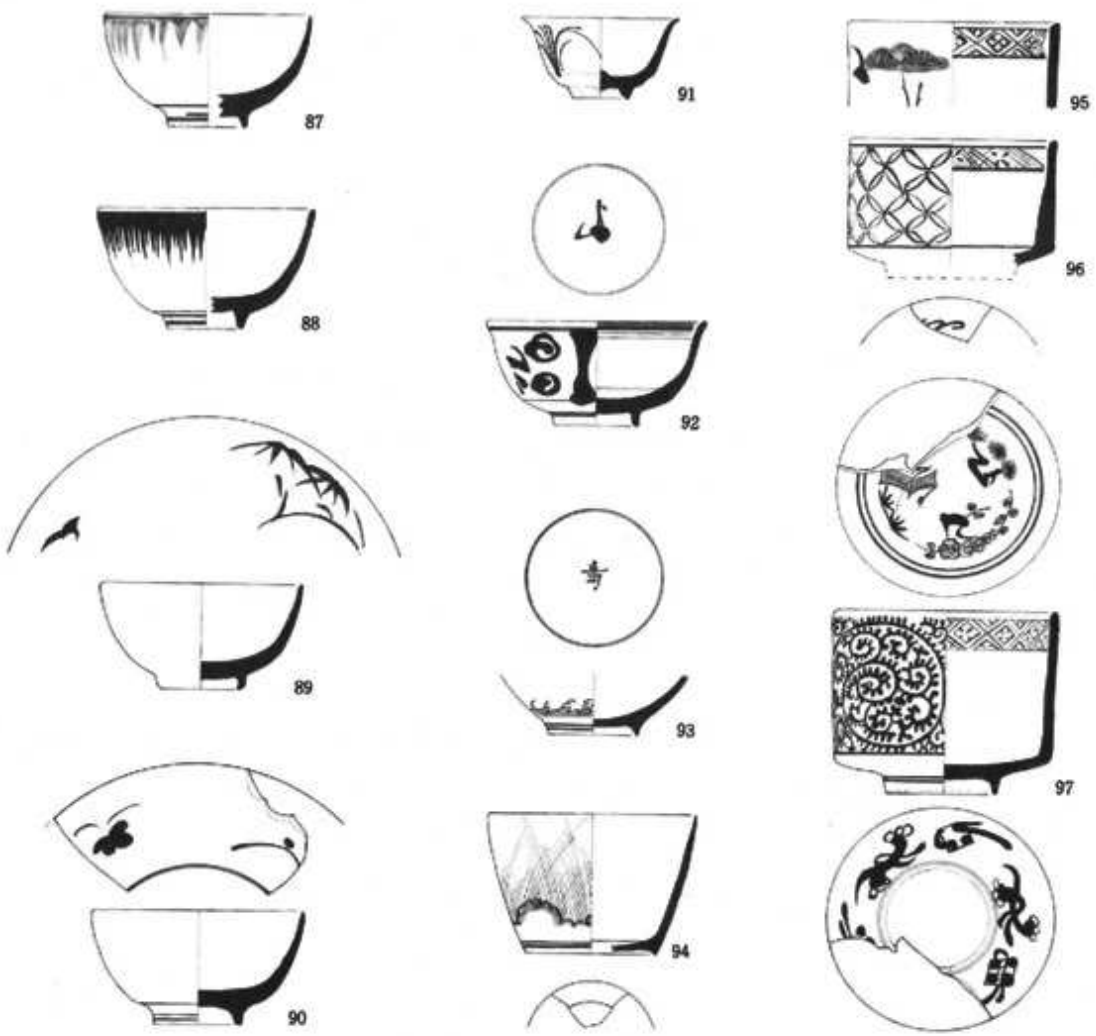
93は高台脇から直線的に開く形態を呈する。外面には波文を施し、見込みの圏線内には「寿」の文字を記す。

桶形　94

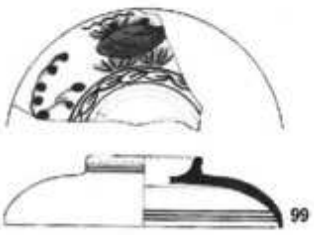
高台を持たない上げ底の猪口は典型的な「そば猪口」といえる器形で、江戸時代後期からさかんに製作されるようになり、「そば猪口」が一つの独立した器種となったことを示すものである。発色のよい呉須で外面に草文を描き、体部最下と見込みに2条の圏線・外底面に1条の圏線を配する。釉は薄く光沢があり、器肉も薄く端部は先細となり尖って終る。

筒形 **95～97**

向付としての機能を果たしたものと考えられている。**95**は外面に発色の悪い呉須で松等の文様を描くもので、釉は白濁して光沢が少ない。**96**は体部外面に七宝文・底部側面に螺旋状の文様を描き、呉須の発色が悪く釉はガラス化が不完全である。**97**は外面に蛸唐草文が施され、底部側面にも動物かと思われる絵付がみられる。また見込みの重圏内には松竹梅の文様が描かれているが、この文様は伝世品の猪口にも多く見られ、後述する中皿**104**と同パターンで、吉祥文様としてさかんに用いられたものであろう。3点とも口縁内面には斜格子文帯を持つ。



第30図　国産陶磁器実測図7　伊万里焼系猪口(1：3)



第31図　国産陶磁器実測図 8
伊万里焼系蓋・小皿（1 ： 3）

蓋　98・99

形態的には小皿と大差はなく、小破片では蓋と皿の差は見い出せない。強いて挙げるなら、つまみ（高台）が「ハ」の字形に開きぎみで、外面全体にも文様を施すことを特徴としている。また皿を蓋に転用することは無いと考えられるが逆の場合は充分に考えられ、「蓋」が機能を限定する器種とはいい難い。

98は天井部外面に二重角福銘を記し、天井部内面は重圏内に五弁花を描き、外面全体に草花文を展開させるものである。呉須の発色は良好で釉は厚く光沢を持つ。

99は器肉が薄く浅い形態で、同様のものが他にも1点出土している。

皿　100～110

皿はその口径から11cm前後のものを小皿、14～20cmを中皿、それ以上のものを大皿とした。

小皿　**100～102**

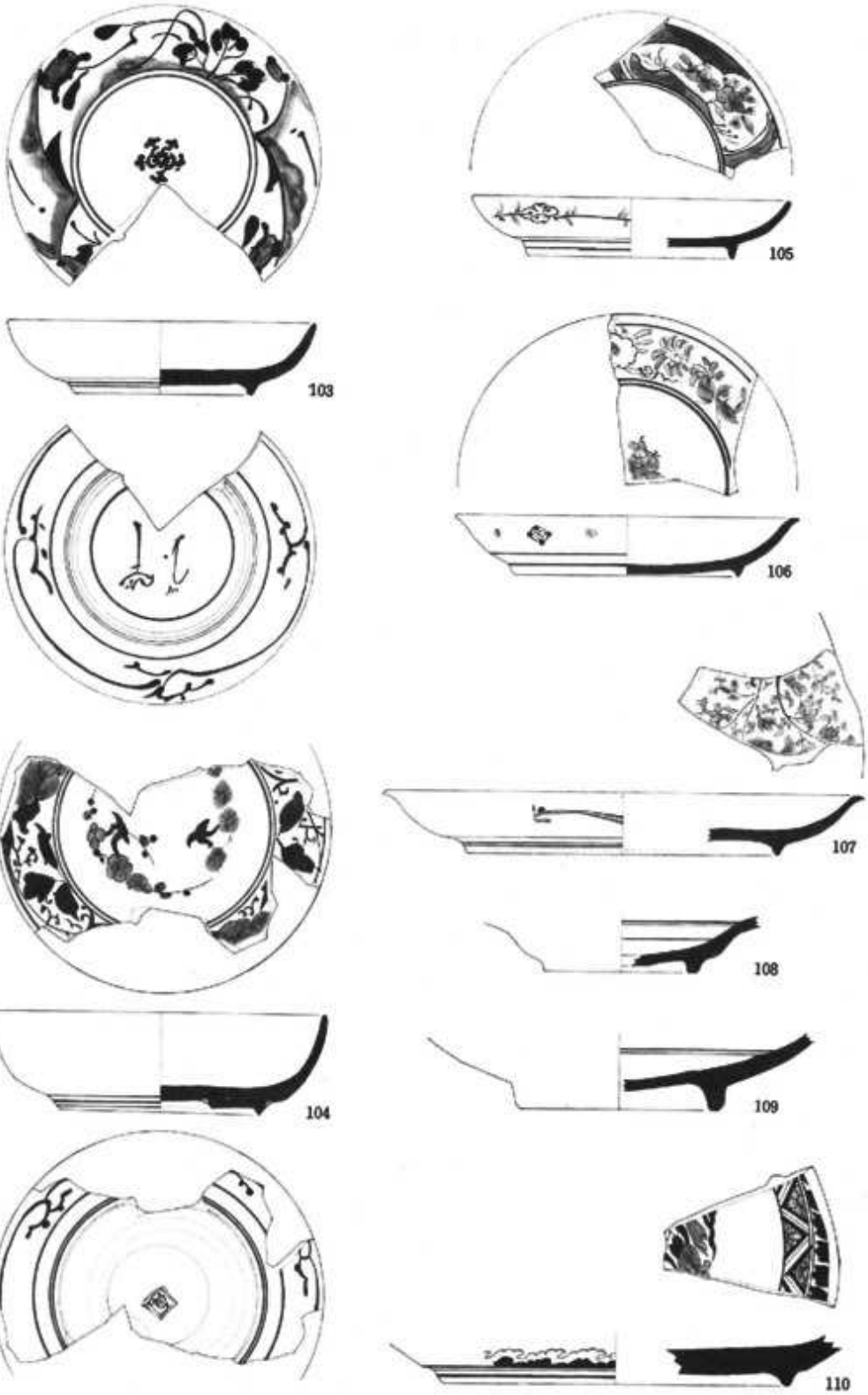
小皿は6点出土したが、**100・101**の他はすべて小破片であった。図示した3点はすべて碗に多くみられた蛇の目形の重ね焼痕があり、厚い器肉に厚い半透明の釉が施されている。

100は呉須の発色がきわめて悪く、暗緑色～淡青色を呈している。**101**の蛇の目部分には砂が厚く付着し、**102**とともに直線的な体部は唐津焼の皿に似る。

中皿　**103～108**

15点出土したが、**103・104**のようにやや深めで外面に簡略化した唐草文を配するものが他に5点認められた。

103は見込みに五弁花を配するもので、図示していない5点のうち4点にも五弁花があり、圏線も同様に施され、法量もほぼ同数値を示すことから、同タイプの皿と考えてよいものであろう。またこれらの中には**103**とまったく同じ高台裏銘を持つものが1点ある。一様に呉須の発色は悪い。**104**は呉須の発色・釉調ともに極めて良好で、見込みには猪口**97**と同パターンの松竹梅文様が配され、体部内面には牡丹唐草文が描かれており、堺環濠都市遺跡から同資料が出土している。口縁部は全周しないが[註12]



第32図　国産陶磁器実測図９　伊万里焼系中皿・大皿（１：３）

端部に凹みを持つ破片もあり、輪花状を呈するものかと考えられる。高台裏には輪トチの跡があり、銘を記す。

105も前述の103・104に類似する形態・文様であるがやや浅めで、体部外面の文様に若干の違いが見られ、高台裏に1条の圏線が廻る。

106・107はともに端反りの皿で、内面に花唐草文を配するものである。これらは103・105と比較して文様・形態が洗練されており、104とともに高級品と考えてよいものかもしれない。高台裏に106は1条の、107には2条の圏線が施されている。

108は腰に段をもつ皿で、唐津焼によく見られる形態である。

大皿　109・110

109は高台径8.7cmで見込みに蛇の目形の重ね焼痕がある。磁胎には黒色粒を多く含み、釉は灰色系で厚く全体に粗い貫入があり、特に高台裏の釉はちぢれており、「かいらぎ」を呈する部分がある。見込みの重圏の外側には絵付が認められる。

110は高台付近のみの資料であるが、高台径約15cmを測り、口径は30cmを越えるものと思われ、伝世品の伊万里焼の大皿によく見られる文様構成を持つ。呉須の発色は良好、釉も厚く光沢を持ち、高台裏に2条の圏線が施される。

他に2点が小破片で出土しているが、高台高や体部の厚さなどから、110と同じぐらいの法量になるものと考えられる。

壺　111～113

6点出土した。111は小型の油壺で、下ぶくれの体部からあまり締まらない頸部に続くもので、体部中位に松の文様を施している。112は玉ねぎ形の体部から強く締まった後、水平近くにねり返され、玉縁状の小さな口縁部に至るもので、同形態のものが1点出土している。外面体部にはのびのびとした筆さばきで草花文を描いている。113は現存部で倭形を呈する壺で、花生と考えられる。

これらの内面はすべて露胎で、カンナ削りの段が顕著に認められる。

鉢　114・115

高い高台、深みのある底部を持つもので、114の見込みには圏線内に「寿」、115の見込みには重圏内に五弁花文を施している。115は高台脇と高台に2条ずつ、高台裏にも1条の圏線が染付けられている。

菓子鉢　116

1点のみ出土した。筒形の体部を呈し、口縁部は内面に段を持ち露胎である。体部外面を松皮菱で区切り、内側には松・雲・岩等を染付け、その外側を中皿107と同じ花唐草文で埋める。

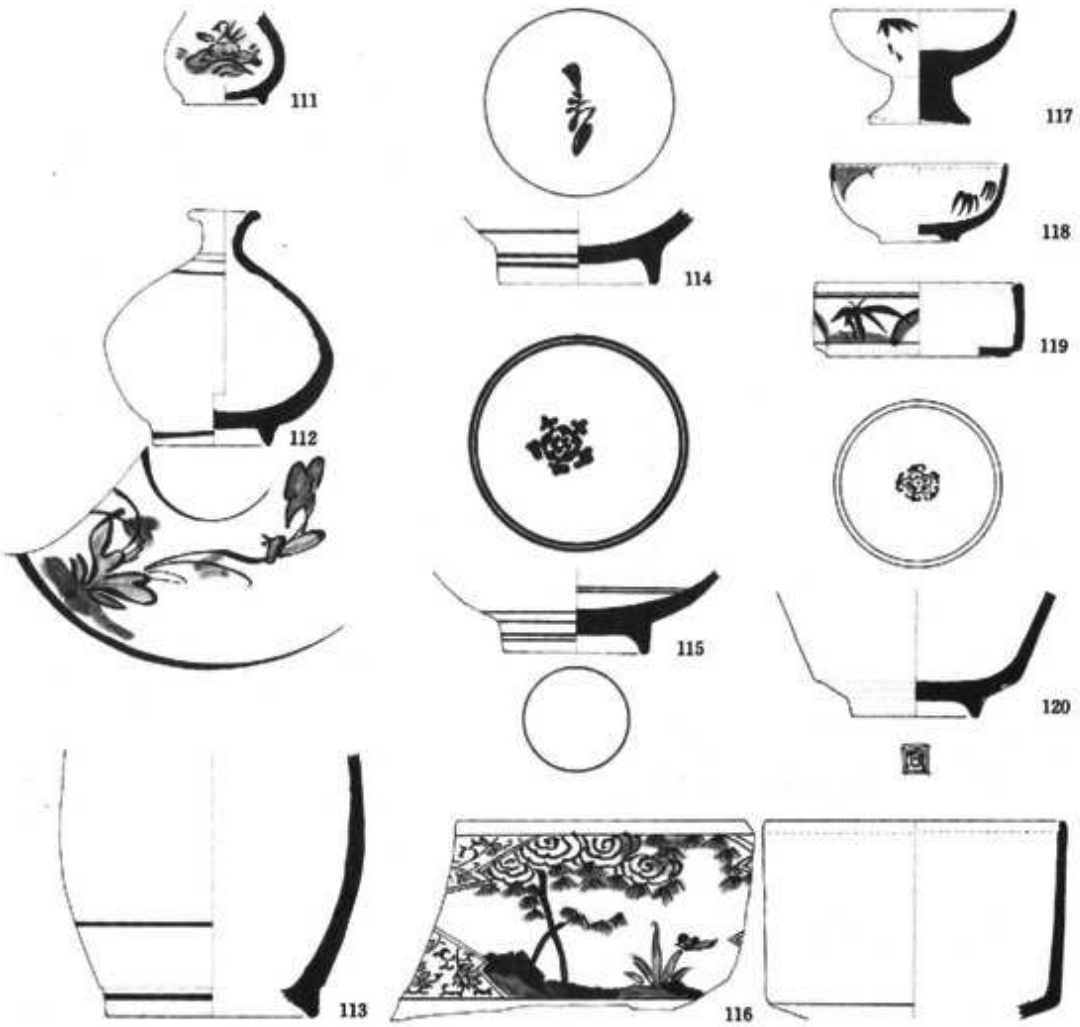
仏供碗　117

深めの体部に短かい脚が付くもので、脚裾部には焼成の際の歪みがある。発色の悪い呉須で笹文を配し、釉は緑色をおび、裾部畳付は露胎である。

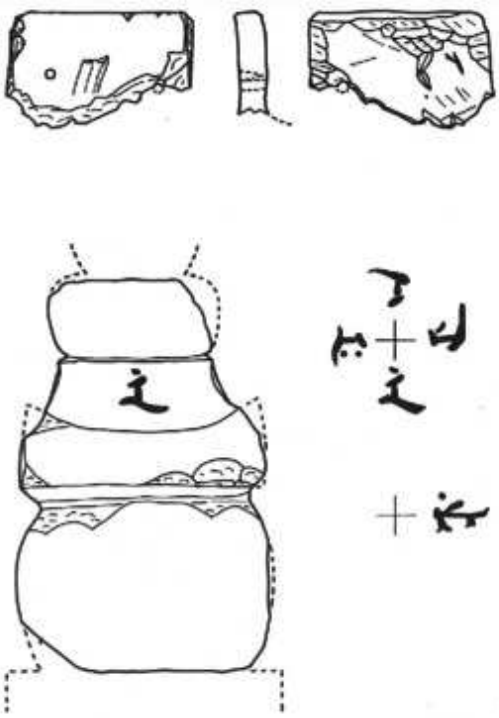
その他　118～120

118は浅い碗形を呈し、低く幅広の高台をもつ。119は平たい体部とわずかに突出する平坦な底部をもつものである。ともに口縁部が露胎であることから直接口をつけて使用するものとは考え難い。

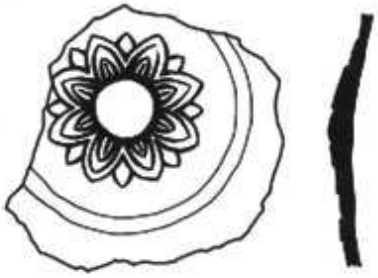
120は伊万里青磁で、腰に稜を持ち直線的に開くもので向付に多い器種である。見込みの重圏内には五弁花を、高台裏には二重角福印を記す。外面の釉は極めて厚く、光沢を持つ。



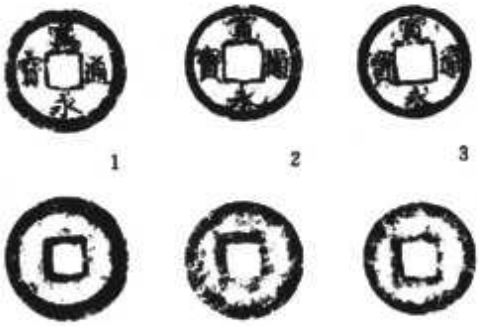
第33図　国産陶磁器実測図10　伊万里焼系磁器その他の器種（1：3）



第34図　石製品実測図(1：4)



第35図　鉄製品実測図(1：2)



第36図　銭貨拓影(2：3)

4．その他の出土遺物

1）石鍋

瓦集積内から出土したもので、図示した他に1点がある。鍔部上端から上部が遺存するもので、残存高5.5cm・厚さ1.4cmを測る。体部は弯曲気味で全体にノミ跡が顕著にみられ、口縁部は水平で丁寧なケズリが行われている。また、体部2ケ所に穿孔が認められることや破面が平滑にされていることから、石鍋としての機能を失なった後、他の目的に使用されたものと推定される。

2）一石五輪塔

第5層茶褐色砂質土層から出土した。花崗岩系の石材を用いた一石五輪塔で、空輪と地輪が欠損していて全容は不明であるが、残存高20.2cm・火輪最大幅24.4cmを測る。他に転用されたためが全体に破損が著しく、中でも火輪は四隅の屋根端がすべて欠損していて屋根の反りも判然としない。

なお、火輪の四面にラ・ラー・ラン・ラクの各梵字と、水輪にも梵字刻字が一部に遺存している。

3）装飾金具

瓦集積内から出土した鋳造の鉄製品で、残存部6.8cm・厚さ0.4cm（文様部分0.6cm）を測る。全体に酸化が著しく文様はやや不明瞭であるが、中央に八葉蓮華文を配し、その周囲に幅約 0.6cmを測る隆線状の圏線を廻らせる。

この鉄製品は寺院建築物の細部を飾る金具の一部であったものと推定されるが、器壁が比較的厚いことから、他の用途も考えられる。

4）銭貨

第5層茶褐色砂質土層から5点が出土した。そのうち判読し得たものはすべて寛永通寶であった。

註1　吉岡哲　「八尾市出土瓦」『古代研究16』（財）元興寺文化財研究所　1978年

註2　前掲書註1

註3　八尾市教育委員会　「宮町遺跡発掘調査概要Ⅰ」　－穴太神社境内廃千眼寺の調査－　『八尾市文化財調査報告8』　1982年

註4　上原真人　「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究13・14』（財）元興寺文化財研究所　1978年　なお、四天王寺からも同意匠の瓦が出土していることが報ぜられている。

註5　京都府教育委員会　「巷仁京跡昭和52年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』　1978年

註6　前掲書註3

註7　間壁忠彦・間壁葭子　「備前焼研究ノート(1)・(2)・(3)」『倉敷考古館研究集報1・2・5号』　倉敷考古館　1965年・1966年・1968年

註8　橋本久和　「高槻市出土の東播系須恵器について」『摂河泉第6巻第5分』　1976年

註9　李輝柄　「福建省同安窯調査紀略」『文物』　1974年

註10　鈴木重治　「同志社キャンパス内出土の遺構と遺物」『同志社校地内埋蔵文化財調査報告資料編Ⅰ』　同志社大学校地学術調査委員会　1977年

註11　佐々木達夫　「17世紀前半の伊万里と分布」『島根県立博物館調査報告第3冊』　1982年

註12　堺市教育委員会　「堺環濠都市遺跡調査報告」『堺市文化財調査報告第十集』　1982年

Ⅵ　出土遺物観察表

1．中世の出土遺物（第23図・図版13）

1）土師質土器・陶器

番号	器種	法量(cm)	形態	調整	色調・胎土・焼成	備考
1	擂鉢（備前焼）	口径 26.4	口縁部は上方へ拡張した後内傾してのびる。端部は内傾する面となる。	口縁部ヨコナデ、体部ユビナデ。	・外面暗灰色 内面暗赤灰色 ・胎土密 ・焼成良好堅緻	・擂目極めて粗 ・Ⅳ-Bタイプ
2	擂鉢（備前焼）	口径 33.6	1と同様で口縁端部は丸く終わる。	1と同様。	・淡赤褐色 ・胎土やや粗 ・焼成良好	・Ⅳ-Bタイプ
3	ねり鉢（須恵質）	口径 30.0	口縁部と体部の境に稜を持ち直線的にのびる。端部はつまみ上げぎみに終わる。	体部内面ナデの後全体をヨコナデ。	・淡灰褐色 ・胎土やや粗 ・焼成良好堅緻	・口縁部に重ね焼痕あり。 ・東播磨系？
4	ねり鉢（須恵質）	口径 31.6	直線的に開く体部で、口縁端部は上下に肥厚する。片口が付く。	体部外面ヘラケズリの後全体をヨコナデ。	・淡灰色 ・胎土やや粗 ・焼成良好	
5	ねり鉢（瓦質）	口径 35.9	4と同様の形態。	体部内面ハケの後全体をヨコナデ。	・黒灰色 中核灰色 ・胎土やや粗 ・焼成良	
6	火舎（須恵質）	口径 23.6	内傾ぎみにのびて口縁部に至る。端部は外傾する広い面となる。 口縁部外面の凸帯間に陰刻文を施す。	丁寧なナデ。	・淡灰色 ・胎土やや粗 ・焼成良好堅緻	
7	火舎（瓦質）	—	内弯する口縁部で、端部は水平な面となる。 口縁部外面の凸帯間にヘラ描きの斜格子文を施す。	ヨコナデか。	・外面淡灰色 内面淡黄褐色 ・胎土密 ・焼成不良	
8	土釜（土師質）	口径 29.1 鍔径 35.4	内弯する口頸部は3段形成、端部は内傾する面を持つ。鍔は上向きで体部との境に稜を持つ。	口縁部内面～鍔下面ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、内面ハケ。	・外面淡黄褐色 内面茶褐色 ・胎土密 ・焼成良好	・鍔以下に煤付着
9	甕（瓦質）	口径 43.0	内傾する体部から水平近くに巻き込むように丸く終わる口縁部に至る。	口縁部ヨコナデ、体部外面横方向の粗いタタキ。	・灰褐色 中核淡褐色 ・胎土粗 ・焼成良	
10	壺（常滑焼）	口径 42.7	体部から「く」の字形近くに屈曲する口縁部。端部は上下に拡張し、外傾ぎみの偏面を作る。	ヨコナデ。	・暗赤褐色 中核淡褐色 ・胎土粗雑 ・焼成良好堅緻	・外面に吹出し

番号	器種	法量(cm)	形態	調整	色調・胎土・焼成	備考
11	甕 (常滑焼)	口径 48.0	体部から水平近くに屈曲する口縁部。端部は上下に拡張し、直立する凹面となる。	体部内面指頭圧ナデの後、全体をヨコナデ。	・灰色 ・胎土やや粗 ・焼成良好	・肩部内面に煤付着

2）中国産磁器（第21図・図版14）

番号	器種	法量(cm)	形態	調整	胎土・釉調	備考
12	香炉	——	平坦な底部から内湾して丸く立ち上がる体部に至る。小型の脚が底部と体部の境に3ケ所につく。	脚は貼り付けられている。	・灰白色緻密 ・外面淡青緑色で厚く、内面青白色。内外に粗い貫入。	
13	碗	高台径 3.8 高台高 0.7	断面三角形で垂直に下る高台で、高台内は兜巾となる。	見込みに沈線が一周する。	・灰白色堅緻 ・淡黄緑色 高台脇に釉なだれ	
14	碗	高台径 4.9 高台高 0.9	高台は断面台形で垂直に下る。高台内には兜巾が認められる。	高台脇に猫かきが遺存している。	・灰黄色堅緻 ・淡黄緑色 細かい貫入	
15	碗	高台径 5.3 高台高 1.5	断面U字形で丸みのある大型の高台。	見込みの2ケ所で沈線状の窪みが認められる。	・灰白色～淡茶色やや粗 ・淡白緑色ガラス不完全	
16	碗	高台径 4.0	高台は断面方形で垂直に下る。高台には兜巾が認められる。	高台脇のカンナケズリの段が顕著である。	・灰白色堅緻 ・淡緑色堅緻 ・淡緑白色厚く内外に粗い貫入	・見込みに㊒の陽刻をもつ

2．近世末期の出土遺物

1）土師質土器（第24図・図版15）

番号	器種	法量(cm)	形態	調整	色調・胎土・焼成	備考
17	鍋	口径 29.2	底部との境に稜をもち、鍔状の突起を作った後外傾ぎみの口縁部に至る。	口縁部ヨコナデ。底部外面ヘラケズリの後ナデ。	・淡赤褐色 ・胎土やや粗 ・焼成不良軟質	・外面に煤付着
18	鍋	口径 28.0	17とほぼ同形、底部はやや浅めである。突起の上方は凹線状となる。	17と同じ。	17と同じ。	・外面に煤付着
19	鍋	口径 31.6	17に似るが突起は顕著ではなく、口縁部は内傾する。	17と同じ。	17と同じ。	・外面に煤付着

番号	器種	法量(cm)	形態	調整	色調・胎土・焼成	備考
20	鍋	口径 26.2	やや深めの体部から外面に稜を作り、内弯ぎみに立ち上がる口縁部に続く。	口縁部ヨコナデ。底部外面ヘラケズリの後ナデ。	・淡赤褐色 ・胎土密 ・焼成良好	・口縁部外面および底部内面に煤付着
21	火入	口径 25.6 底径 20.4 器高(8.7)	平坦な底部から外傾する体部に至る。口縁端部は内向すると考えられるが、上端を欠損する。	外面ヘラケズリの後ナデ。内面接合部指おさえの後ナデ。	・明橙色 ・胎土やや粗 ・焼成やや不良	
22	火入	口径 15.4 底径 14.0 器高(6.8)	平坦な底部から内弯ぎみに立つ体部。口縁端部は平坦面となる。	ヨコナデ。脚の周囲はユビナデ。	・黒褐色 中核淡茶色 ・胎土密 ・焼成良好	・内外に煤付着
23	小皿	口径 8.9 器高 1.7	わずかに平坦な底部を作り、立ち上がって口縁部に至る。端部はつまみ上げぎみに終わる。	口縁部指頭圧ナデ。	・淡黄茶色 中核黒灰色 ・胎土密 ・焼成良好	
24	小皿	口径 9.2 器高 2.6	扁平でいびつな器形。	体部内面ハケ。口縁部指頭圧ナデ。	・淡黄茶色 ・胎土密 ・焼成良好	
25	小皿	口径 9.6 器高 1.8	やや深めの体部で、口縁端部はつまみ上げぎみに終わる。	口縁部指頭圧ナデ。	・乳褐色 ・胎土密 ・焼成不良	・灯芯油痕あり
26	小皿	口径 9.8 器高 1.5	底部はわずかに凹み、丸いカーブで口縁部に続く。端部はつまみ上げぎみに終わる。	口縁部指頭圧ナデ。	・乳褐色 ・胎土やや粗 ・焼成良	
27	小皿	口径 9.8 器高 1.5	扁平な体部。口縁端部は先太となり丸く終わる。	口縁部指頭圧ナデ。	・淡黄橙色 ・胎土密 ・焼成良	・灯芯油痕あり
28	小皿	口径 10.0 器高 1.7	底部がわずかに凹む扁平な器形。口縁端部はつまみ上げぎみに終わる。	口縁部指頭圧ナデ。	・淡黄橙色 ・胎土やや粗 ・焼成	・灯芯油痕あり
29	小皿	口径 10.3 器高 1.5	扁平な体部。器肉は厚く、口縁端部は先太となる。	口縁部指頭圧ナデ。	・乳褐色 ・胎土やや粗 ・焼成良	・灯芯油痕あり
30	小皿	口径 9.0 底径 3.7 器高 3.2	平坦な底部から外反ぎみに開いた後、内弯して立ち小鉢形を呈する。口縁端部は内弯し丸く終わる。	口縁部ヨコナデ。	・淡黄茶色 ・胎土やや粗 ・焼成良	

2）備前焼（第24図・図版15）

番号	器種	法量(cm)	形態	調整	色調・胎土・焼成	備考
31	擂鉢	口径 33.0	口縁部は上方に拡張し、直立する。口縁側面に2条・上端面に1条の擬凹線、内面の口縁部と体部の境に段をもつ。	口縁部ヨコナデ、体部回転ヘラケズリの後ナデ。口縁部と体部の境に指頭圧ナデ。	・淡赤褐色 ・胎土やや粗 ・焼成良好	・1単位9条・3.1cmの櫛目
32	擂鉢	口径 32.6 底径 14.2 器高 11.9	口縁部上方に拡張し、外傾する。31と同様の擬凹線・段をもつ。	31と同様。	・赤褐色～灰褐色 ・胎土緻密 ・焼成良好堅緻 ・	・1単位10条・2.7cmの櫛目
33	擂鉢	底径 28.5	底面に段をもつ大型の擂鉢の底部。	回転ヘラケズリの後ナデ。	・赤褐色 ・中核暗灰褐色 ・胎土やや粗 ・焼成良好	・1単位10条・3.2cmの櫛目

3）唐津焼（第25図・図版16～18）

番号	器種	法量(cm)	形態	文様	胎土・釉調	備考
34	碗（刷手目 唐津）	口径 10.5 器高 5.9 高台径 3.8 高台高 0.8	腰の張りは少なく、口縁部まで除々に開く深めの碗。高台は断面三角形でシャープな作りである。	内外とも乳白色の刷毛目文。	・緑灰色やや粗 ・透明薄濁く光沢あり、細かい貫入。。	・畳付露胎、目砂付着。 ・見込みに釉のとぶ部分あり。
35	碗（刷毛目 唐津）	口径 11.8 器高 4.9 高台径 4.0 高台高 0.9	腰から大きく広がる浅い碗。高台内は深く削られ、底部の器肉は薄い。	内外とも乳白色～暗灰色の刷毛目文。	・暗茶灰色やや粗 ・透明光沢あり。	・重ね焼痕(0.8cm幅) 畳付露胎目砂付着。 ・同タイプのもの他に4点出土。
36	碗（刷毛目 唐津）	高台径 3.6 高台高 0.9	高台は薄く高めで、兜山高台となる。高台脇にはカンナ削りの段が顕著に認められる。	内外とも乳白色の刷毛目文。	・暗赤褐色やや粗 ・透明光沢あり。	・畳付露胎、目砂付着。
37	碗（絵唐津）	高台径 4.2 高台高 1.0	内弯ぎみの高台。器肉は厚く全体に粗雑な作り。	外面に庵？の図か、彩料の発色は悪い。	・暗赤褐色粗 ・乳灰色厚くムラあり。	・畳付露胎、目砂付着。
38	碗（無地 唐津）	高台径 4.2	高台の削り出しは粗雑で、竹の節状の部分がある。右まわりロクロ。	――	・淡赤褐色粗 ・淡緑色厚い粗い貫入、腰以下釉なだれ。。	・同タイプのもの他に3点出土。 ・見込みの4ケ所に目跡。
39	碗（無地 唐津）	高台径 4.9 高台高 1.0	腰の張りが強く、器肉は厚く、どっしりとした作り。高台は断面台形で重厚な片薄高台。	――	・淡褐色やや粗 ・乳灰色薄く、細かい貫入あり。	・畳付～高台内露胎。

番号	器種	法量(cm)	形態	文様	胎土・釉調	備考
40	皿 (刷毛目) (唐津)	高台径 4.2 高台高 0.6	平坦な底部。高台は断面方形で内外の削り出しは浅い。	内面乳白色の化粧土を波状にかきとる刷毛目文。	・暗赤褐色 やや粗 ・透明 ムラ・光沢あり	・高台露胎 ・見込みの4ヶ所に目跡
41	皿 (絵唐津)	口径 11.5 器高 3.3 高台径 4.1	腰に稜をもち、外反ぎみにのびる口縁部。高台内外の削りは浅く、兜山高台。右まわりロクロ、回転糸切り痕。	内面体部に2条1組の縦線（2組残存）、見込みに2羽の鳥文。	・淡褐色 やや粗(黒色粒含む) ・緑灰色 光沢・貫入あり、腰以下釉なだれ	・見込み・高台側面4ヶ所に目の痕跡
42	皿 (無地) (唐津)	高台径 4.0	41に似るが、腰の稜は丸みを持つ。	――	・淡褐色 やや粗 ・乳白色 薄く細かい貫入・腰以下釉なだれ	・見込みに目跡 ・同タイプのもの43の他3点出土
43	皿 (無地) (唐津)	高台径 4.4	42と同様の形態、三日月高台を呈する。	――	42と同様。	42と同様。

4）京焼（第26図・図版19）

番号	器種	法量(cm)	形態	文様	胎土・釉調	備考
44	小型碗	高台径 3.5 高台高 0.5	腰で強く張った後立ち上がる。高台は断面方形で小さい。	見込みに淡緑色の彩料で山水画風の絵付。	・淡黄茶色 粗 ・乳黄色 厚く光沢・細かい貫入あり	・高台脇～高台内露胎
45	小型碗	口径 9.1 器高 4.0 高台径 3.7 高台高 0.3	浅い半球形の小型碗。高台は断面台形で低い。	内面に暗緑色の直線文。	・黄白色 密 ・淡黄色 光沢・細かい貫入あり	・高台～高台内露胎
46	小型碗	口径 9.0	丸みのある腰から直線的にのびる深い体部	外面に暗青色の絵付、山水画か。	・灰黄色 密 ・黄緑色 厚く光沢・貫入あり	
47	小型碗	口径 9.4 器高 5.1 高台径 3.4 高台高 0.3	深い半球形を呈する。高台は低く、「ハ」の字形に開く。	外面に青・緑・赤で竹・松の上絵付。	・黄白色 やや粗 ・淡黄緑色 光沢・粗い貫入	・高台脇～高台内露胎
48	小型碗	高台径 5.1 高台高 0.4	底部内面中央が隆起する。高台内の削り出しは浅く、底部の器肉は厚い。	――	・淡黄色 やや粗 ・淡黄緑色 光沢・貫入あり	・高台～高台内露胎 ・高台裏「清水」の印刻

番号	器種	法量(cm)	形態	文様	胎土・釉調	備考
49	蓋	口径 10.8	扁平な蓋。口縁部は「ハ」の字形近くに開きぎみである。天井部にはつまみが付くと思われる。	———	・黄白色 密 ・淡黄色 外面厚く内面薄い光沢・貫入あり	・かえり下面～内面口縁部中位露胎 ・同タイプのもの他に1点
50	碗	口径 12.3 器高 4.7 高台径 4.4 高台高 0.6	浅い半球形の体部。底部中央は凹み、器肉が薄い。高台は断面方形で、シャープな作り。	見込みに淡緑茶色の絵付山水画か。	・淡灰黄色 密(黒色粒含む) ・淡黄緑色 光沢・粗い貫入あり	・高台脇以下露胎 ・高台裏に「清水」の印刻 ・同タイプ51の他に12点出土
51	碗	口径 11.8 器高 4.4 高台径 4.4 高台高 0.6	50とほぼ同形。	50と同様の絵付。	50と同様。	50と同様。

5）その他の陶器（第27図・図版20）

番号	器種	法量(cm)	形態	文様	胎土・釉調	備考
52	蓋 (瀬戸焼)	口径 8.0	扁平で小型の蓋。口縁部は垂直に下る。天井部にはつまみの痕跡が残る。	———	・灰白色 緻密 ・灰色 光沢・細かい貫入あり	・かえりの下面・内面露胎
53	小皿 (瀬戸焼)	口径 8.8 器高 1.8	わずかに平坦な底部を持つ。	内面に施釉前の櫛状工具痕。	・灰色 粗(黒色粒含む) ・緑灰色 厚く光沢・貫入あり	・外面露胎 ・外面口縁部に煤付着 ・同タイプ他に2点出土
54	小皿 (瀬戸焼)	口径 11.7 器高 2.0	53と同形でやや大型。底部はわずかに凹む。	53と同じ。	・灰色 やや粗 ・白黄色 薄く光沢・貫入あり	53と同じ。
55	碗 (瀬戸焼)	高台径 4.6 高台高 1.2	「ハ」の字形に開く高い高台から直線的にのびる。	———	・灰白色 密 ・緑色 厚く光沢・貫入あり	・畳付露胎 ・同タイプのもの他に2点
56	碗 (志野焼)	口径 10.5	内湾して開く口縁部のみ。	外面体部に草花文	・淡褐色 粗 ・乳白色 粗い貫入あり	
57	碗 (朝鮮産)	口径 13.5 器高 7.6 高台径 5.2 高台高 0.7	腰で強く張った後直線的に開き、内に稜を作り内湾して立つ口縁部に至る。切り高台をもつ。	外面陰刻による牡丹唐草文。	・乳白色 密 ・乳黄色 光沢あり	・畳付露胎

6）伊万里焼系（第28図～第34図・図版21～24）

番号	器種	法量(cm)	形態・文様	呉須・釉調・胎土	備考
58	碗A1	口径 11.5 器高 5.9 高台径 4.0 高台高 0.9	・底部から一旦張った後口縁部まで除々に拡かりながらのびる。高台外側は面取される。 ・梅・松の文様を相対する位置に配する。圏線は高台脇に1条・高台に2条。	・緑茶色～淡青色発色極めて悪い。 ・青みがかり、ムラ・ピンホール認められる。 ・磁胎に黒色粒含む。	・見込みに重ね焼痕(幅1.1cmの蛇の目形)。 ・畳付露胎、目砂付着。
59	碗A1	口径 11.5 器高 5.9 高台径 4.5 高台高 0.8	・58とほぼ同形、底部は厚めで高台は垂直に下る。 ・58と同様、高台裏にも圏線を施す。	・58と同様。	・見込みの重ね焼痕は幅1.5cm。 ・畳付露胎、目砂付着。
56	碗A1	口径 10.8 器高 5.1 高台径 4.3 高台高 0.8	・腰の張りが弱く、口縁部まで除々に広がる浅めの碗。高台は大型で、畳付には割れが目立つ。 ・梅枝文を施す。圏線は59と同様。	・58と同様。	・見込みの重ね焼痕は幅1.7cm。 ・畳付露胎、目砂付着。
61	碗A1	口径 10.5 器高 5.6 高台径 4.2 高台高 0.9	・58とほぼ同形でやや小振りの碗。 ・樹文。圏線は58と同様。	・58と同様 ・緑灰色で濁る高台に釉なだれ。 ・磁胎に黒色粒含む。	・見込みの重ね焼痕は幅1.6cm。 ・畳付露胎、目砂多量に付着。
62	碗A1	口径 11.6 器高 5.8 高台径 4.2 高台高 0.7	・腰の張りが弱く、口縁部まで丸いカーブで続く。高台は断面台形で垂んでおり、楕円形を呈すると思われる。 ・口縁部と高台脇の圏線間に芒文。	・淡青色発色不良 ・白灰色で濁る。ムラ・ピンホールめだつ。 ・磁胎に黒色粒含む。	・畳付露胎、目砂付着。
63	碗A2	口径 10.5 器高 5.6 高台径 4.2 高台高 0.9	・58とほぼ同形で小振りの碗。器肉は薄く、高台も華奢である。 ・雪持ち笹・梅・松等をのびのびと描く。圏線は高台脇に1条・高台に2条・高台裏に1条。	・淡青色発色良好 ・青みがかり薄く光沢あり。高台に釉なだれ。	・見込みの重ね焼痕は幅1.8cm。 ・畳付露胎、目砂は微量。
64	碗A2	口径 11.0 器高 6.0 高台径 4.2 高台高 0.7	・厚い底部から腰で強く張り、垂直近くに立ち上がる口縁部に至る。 ・草花・雌等を全面に描く。圏線は63と同じ。	・淡青色発色不良 ・白濁し、ムラ・ピンホールが認められる。	・畳付露胎、目砂付着。 ・高台裏の圏線内に銘をもつ。 ・同タイプのもの他に3点出土。
65	碗A2	口径 10.4 器高 5.5 高台径 3.8 高台高 0.8	・63に似る小振りの碗、口縁部は細く尖りぎみに終る。 ・文様構成・圏線は64と同じ。	・暗青色発色不良 ・乳白色厚くピンホール・粗い貫入が認められる。 ・磁胎は茶色がかる。	・畳付露胎、目砂付着。 ・同タイプのもの他に2点出土。
66	碗A2	口径 10.8 器高 6.3 高台径 4.2 高台高 0.8	・腰の張りが弱く、口縁部まで直線的にのびる深めの碗。底部内面中央は隆起する。 ・松等の文様を配する。圏線は高台脇に1条・高台に2条。	・暗青色発色不良 ・灰色で濁る。ムラ・ピンホール認められる。 ・磁胎に黒色粒含む。	・高台下位～畳付露胎。

番号	器種	法量(cm)	形態・文様	呉須・釉調・胎土	備考
67	碗A$_2$	口径 9.7 器高 5.1 高台径 4.0 高台高 0.7	・腰の張りは弱く、直立ぎみの口縁部へ続く。器肉は先細となる。高台は低く断面三角形を呈する。 ・芒・雁等の文様。圏線は高台脇に1条・高台に2条。	・暗青色発色良 ・やや濁るが、厚く光沢あり。	・見込みに粗い貫入が認められる ・高台裏に銘
68	碗A$_2$	口径 9.7 器高 5.7 高台径 3.7 高台高 0.8	・腰の張りは弱く、直線的にのびた後内向ぎみの口縁部に至る深めで小振りの碗。 ・簡略化した草花文、圏線は高台脇に1条・高台に2条・高台裏に1条。	・緑青色発色不良 ・乳白色薄くガラス化不完全。	・高台下位～畳付露胎、目砂付着。
69	碗A$_2$	口径 10.5 器高 5.7 高台径 4.2 高台高 0.8	・68に似る形態、器肉はやや厚めである。高台は高く、畳付は不揃いに終わる。 ・簡略化した草花文、圏線は高台脇に1条・高台に2条・高台裏に1条。	・暗青色発色不良 ・白濁しムラあり ・磁胎には黒色粒含む。	・高台下位～畳付露胎、目砂付着。
70	碗B	口径 11.8 器高 6.5 高台径 4.8 高台高 1.0	・腰の張りが少なく、直線的にのびて口縁部に至る。端部は水平近くの面を持ち、高台は内傾する。 ・団扇？紋文。圏線は高台脇1条・高台3条・口縁部内面2条・見込み2条。	・暗青色良 ・薄く光沢あり	・畳付露胎
71	碗B	口径 12.2 器高 6.5 高台径 4.8 高台高 1.0	・平坦で厚い底部から丸みを持って立ち上がり、直立する口縁部に至る。高台脇にはカンナ削りの段が顕著に残る。 ・丸文、口縁内面斜格子文。圏線は口縁外面1条・高台脇1条・高台2条・見込み2条。	・淡青色不良 ・厚く光沢あり	・畳付露胎 ・見込みに五弁花および高台裏圏線内に銘の痕跡
72	碗B	口径 11.3 器高 5.9 高台径 4.5 高台高 0.9	・72とほぼ同形であるが、高台は幅広である。 ・連子・蝶、圏線は高台脇1条・高台2条・内面口縁部2条・見込み2条、高台裏1条。見込みの重圏内に五弁花。	・暗青色不良 ・厚く光沢あり	・畳付露胎付着砂 ・高台裏の圏線内に角福銘 ・同タイプのもの他に2点出土
73	碗B	口径 10.5	・腰から口縁部まで連続してのびる。器肉は厚めである。 ・竹文、圏線は口縁部外面に1条・内面に2条・見込みに1条。	・暗青色やや不良 ・厚く濁る	・畳付露胎
74	碗C	高台径 4.6 高台高 0.6	・張りの強い下半のみ遺存。器肉は薄い。高台裏にはロクロ目残る。 ・菊唐草文、圏線は高台脇1条・高台2条。	・明青色発色良好 ・薄く光沢あり	・畳付露胎 ・高台裏圏線内に「大明成化年製」の銘
75	碗C	口径 11.2 器高 5.9 高台径 4.8 高台高 0.8	・広く平坦な底部から腰で強く張り、口縁部まで除々に開く。高台は内傾し、器肉は薄い。 ・菊唐草文(3分割)。圏線は高台脇に1条。	・明青色発色良好 ・白濁し薄い。ガラス化不完全	・畳付露胎 ・高台裏に角福銘
76	碗C	口径 11.3 器高 6.4 高台径 4.3 高台高 1.0	・腰の張りは少なく、口縁部まで除々にのびる深めの碗。高台は高く内傾する。 ・口縁端部に口紅。口縁内面に斜格子文、見込みの重圏内に牡丹唐草文。高台裏に圏線。	・明青色発色良好 ・外面体部翠緑色で厚く、内面・高台内透明で薄く光沢あり。	・畳付露胎 ・高台裏圏線内に「大明成化年製」の銘 ・伊万里青磁
77	碗D	口径 8.8	・腰で強く張った後直立ぎみに立つ深い小振りの碗。器肉厚く凹凸がある。 ・粗雑な網目文。圏線は外面口縁部に1条・高台脇に1条・高台にも1条認められる。	・淡青色発色不良 ・白濁し薄い。ガラス化不完全。ピンホールめだつ。	

番号	器種	法量(cm)	形態・文様	呉須・釉調・胎土	備考
78	碗D	口径 10.0	・直線的にのびる体部上位のみ遺存。器肉薄い。 ・繊細な網目文。口縁外面に1条の圏線。	・淡青色～緑青色発色良好 ・薄く光沢あり、ピンホール認められる。	
79	碗D	高台径 4.0 高台高 0.7	・平坦な底部から丸みを持って立ち上がる。高台内は回む。 ・細かい網目文。圏線は高台脇に1条、高台に2条、高台内に1条。	・暗青色発色不良 ・白濁し、薄い。 ・胎胎に黒色粒含む。	・受付露胎、目砂付着。
80	碗D	———	・薄めの底部から強く張る。体部の器肉は厚い。 ・網円の交点に「＋」を足す複合網円文。高台脇に1条の圏線。	・暗青色発色きわめて悪い。 ・灰白色ムラあり ・胎胎に多量の黒色粒含む。	
81	碗E	口径 9.5 器高 5.3 高台径 3.7 高台高 0.7	・きわめて薄い底部から口縁部まで丸いカーブで連続してのびる小振りの碗。 ・体部および高台裏に印判手の菊文を施す（18弁・22弁の2種がある）。	・暗青色発色良好 ・薄く光沢あり、細かい貫入認められる。	・畳付露胎 ・印判手他に3点出土
82	碗F	口径 10.5 器高 4.6 高台径 4.2 高台高 0.4	・腰から大きく開き半球形を呈する。器肉は薄く、高台も華奢な作りである。 ・高台内にはロクロ目が残る。 ・柳・帆かけ舟・雁等の文様。	・暗緑青色発色やや不良 ・薄く光沢あり。	・畳付露胎
83	碗F	高台径 4.1 高台高 0.8	・腰の張りの少ない体部下位のみ遺存。底部の器肉に比し体部の器肉は薄い。 ・丸文（3分割）、圏線は高台脇に1条・高台に2条。	・暗緑青色発色良 ・薄く濁る。 ・胎胎に黒色粒多く含む。	・畳付露胎
84	碗F	口径 10.4 器高 4.7 高台径 4.3 高台高 0.6	・体部の形態は82に似る。82に比して器肉は厚く、高台も高い。ロクロ目残る。 ・不明。	・暗青色発色不良 ・薄く光沢あり。	・見込みの重ね焼痕は幅1.7cm。 ・受付露胎、目砂付着。
85	碗F	口径 11.0 器高 5.3 高台径 4.4 高台高 0.7	・腰の張りは弱く、口縁部まで除々に開く大振りの碗。高台は「ハ」の字形に開きぎみである。 ・不明、圏線は83と同じ。	・淡青色発色不良 ・白濁し、ムラ・柚子ハダあり。	・見込みの重ね焼痕は幅1.3cm。 ・畳付露胎、目砂付着。
86	碗F	口径 11.0 器高 5.7 高台径 4.1 高台高 0.8	・84に似るが、底部・高台の器肉は厚く、口縁部は直線的である。 ・不明、圏線は83と同じ。	・淡青色～緑灰色発色不良 ・灰白色厚くムラ・ピンホール・釉なだれあり。	・見込みの重ね焼痕は幅1.2cm。 ・畳付露胎、目砂高台内側に多量に付着。
87	猪口（碗形）	口径 7.8 器高 4.4 高台径 3.0 高台高 0.5	・半球形に近い体部。底部の器肉は厚く、高台は直線的である。 ・雨降柳文、圏線は高台脇に1条・高台に2条。	・暗緑色発色不良 ・乳白色薄くガラス化不完全 ・胎胎は茶色味をおびる。	・畳付露胎 ・同タイプのもの他に2点出土
88	猪口（碗形）	口径 8.2 器高 4.7 高台径 2.8 高台高 0.6	・丸く張る腰から除々に広がり口縁部へ続く。高台は内傾して下る。 ・87と同じ。	・暗青色発色不良 ・青味をおびムラになる。ピンホール・高台付近釉なだれ。	・畳付露胎 ・同タイプのもの他に3点出土

番号	器形	法量(cm)	形態・文様	呉須・釉調・胎土	備考
89	猪口(碗形)	口径 7.6 器高 4.1 高台径 3.0 高台高 0.6	・腰で強く張った後、直線的にのびる口縁部に至る。高台は内傾して下り、畳付外側は面取りされる。 ・竹・鳥の文様。	・暗青色発色不良 ・乳白色厚くピンホール・高台に釉なだれ。	・畳付露胎、高台内側に目砂付着。
90	猪口(碗形)	口径 8.0 器高 4.4 高台径 3.4 高台高 0.4	・89に似るが口縁部は内向ぎみである。高台は垂直に下る。 ・蝶等の文様、圏線は高台脇に1条・高台に2条。	・淡青色発色良 ・薄く光沢あり。	・畳付露胎、目砂付着。
91	猪口(碗形)	口径 5.9 器高 3.1 高台径 2.2 高台高 0.4	・腰にカンナ削りの痕をもち、直線的にのびる。口縁端部は外反する「端反り」の小型碗。底面中央は隆起し、高台内には兜巾が認められる。 ・相対する位置に蘭を描く。	・淡青色発色不良 ・青味をおび、高台付近に釉なだれ。	
92	猪口(碗形)	口径 8.4 器高 4.1 高台径 3.2 高台高 0.5	・腰で強く張る浅い端反りの小型碗。 ・縦位の直線文間に渦文・文字（福・寿？3分割）。圏線は口縁外面1条・高台脇1条・高台2条・口縁内面3条・見込み2条。見込みの重圏内にも文様を施す。	・青色発色良好 ・薄く光沢あるがガラス化不完全な部分あり。	・畳付露胎
93	猪口(碗形)	高台径 3.4 高台高 0.4	・高台脇から直線的にのびる。高台は断面三角形で華奢である。 ・1体部最下に波文、圏線は高台に2条、見込みに1条。見込みの圏線内に「寿」。	・青色発色良 ・薄く光沢あり。	・畳付露胎
94	猪口(碗形)	口径 7.9 器高 5.4 底径 5.0	・高台をもたない上げ底の底部から直線的に広がってのびる。端部は尖がる。 ・草文。圏線は体部最下に2条、外底面に1条、見込みに2条。	・青色発色良好 ・薄く光沢あり。	・畳付露胎
95	猪口(碗形)	口径 7.8	・直立する口縁部のみ遺存。 ・松等の文様。口縁内面斜格子文。圏線は口縁外面に1条。	・暗青色やや不良 ・やや濁り、口縁のみ厚くたまる。ピンホール認められる。	
96	猪口(碗形)	口径 7.7	・斜めに開く底部から直立する口縁部へ至る。体部下位の器肉極めて厚い。 ・圏線間に七宝繋ぎ文。口縁内面に斜格子文。見込みに1条の圏線。外面底部に波文。	・青緑色発色悪い ・薄くガラス化不完全な部分あり。	
97	猪口(碗形)	口径 7.3 器高 7.1 高台径 4.0 高台高 0.6	・96より深く、器肉が薄い。口径に比し高台径は小さい。 ・蛸唐草文（4分割）。外面底部に動物文？内面口縁斜格子文。見込みの重圏内に松竹梅、圏線は体部最下1条・高台2条。	・濃青色発色良好 ・厚く光沢あり、外面にムラ。	・畳付露胎 ・見込みの文様は中皿104と同じ。
98	蓋	口径 9.5 器高 3.3 紐径 4.2 紐高 0.6	・厚い天井部から丸みをもって下り、口縁部に至る。つまみは外傾する環状紐。草花文を全面に施す。口縁内面斜格子文、天井部の重圏内に五弁花。圏線はつまみ外側に2条・つまみ脇に1条。	・濃青色発色良好 ・青味をおび、厚く光沢・貫入あり。	・つまみ内に二重角福銘
99	蓋	口径 10.6 器高 2.7 紐径 4.2 紐高 0.5	・薄い天井部から急に開く平たい蓋。口縁部は直立ぎみとなる。 ・不明。圏線は口縁外面1条・つまみ外側3条・口縁内面3条・見込み2条。天井部の重圏内に文様あり。	・淡青色～青緑色発色不良 ・青みをおび薄い。	

番号	器種	法量(cm)	形態・文様	呉須・釉調・胎土	備考
100	小皿	口径 10.8 器高 3.5 高台径 4.5 高台高 0.5	・厚く平坦な底部から、丸みをもって立ち上がる。外面体部にロクロ目、高台脇にカンナ削りの段が顕著に残る。 ・内面に草花・鳥文。圏線は高台脇に1条・高台に2条(螺旋状)。	・緑青色発色不良 ・青味をおび濁る。ムラあり。	・見込みの重ね焼痕は幅1.7cm。 ・畳付露胎、目砂多量に付着。
101	小皿	口径 11.2 器高 2.9 高台径 3.9 高台高 0.3	・高台脇から内弯ぎみにのびる。高台は断面三角形。高台脇にカンナ削りの段が残り、高台内には兜巾が認める。 ・不明。	・暗緑茶色発色きわめて不良 ・灰味をおび厚くムラあり。高台脇に釉なだれ。	・見込みの重ね焼痕(幅1.4cm)に砂厚く付着する。
102	小皿	高台径 4.7 高台高 0.5	・高台脇から直線的に開く。高台は断面台形で低く、兜巾が認められる。	・緑色をおび厚くムラあり、高台脇に釉なだれ。 ・磁胎に黒色粒含む。	・見込みの重ね焼痕は幅2cm。
103	中皿	口径 13.3 器高 3.2 高台径 7.8 高台高 0.4	・平坦な底部から緩で丸く張った後、上方へ広がりながら立ち上がる深めの皿。 ・外面花唐草文(4分割)。内面草花文、見込み重圏内に五弁花。圏線は高台脇に1条・高台に2条・高台裏に1条。	・青色～淡緑青色発色良 ・薄く光沢あり。ピンホール認められる。	・畳付目砂付着
104	中皿	口径 14.5 器高 4.4 高台径 8.8 高台高 0.5	・103に似るがやや深めの皿。高台は低く、内側に段をもつ。輪花皿か？ ・外面花唐草文(4分割)。内面牡丹唐草文、見込み重圏内に松竹梅文。圏線は高台脇に1条・高台に2条。	・青色発色良好 ・青味をおび、極めて厚く光沢あり。	・高台内に銘・輪トチのあと。 ・見込みの文様は第197と同じ。
105	中皿	口径 15.8 器高 2.6 高台径 8.9 高台高 0.7	・103・104より浅く、大きく開く皿。高台はやや高めである。 ・外面草花文。内面草花文。圏線は口縁内面1条・見込み2条・高台脇1条・高台2条・高台裏1条。	・外面淡青色・内面濃青色発色良 ・薄く光沢少ない	・畳付露胎
106	中皿	口径 14.8 器高 2.6 高台径 9.8 高台高 0.5	・底部中央ゆるやかに凹み、高台脇からゆるやかに開く。端部は外反する。 ・外面大小の七宝文。内面草花文、見込みの重圏内にも草花文。圏線は口縁内面1条・高台脇1条・高台1条・高台裏1条。	・淡青色発色良好 ・外面薄く内面厚い。光沢あり。	・高台裏に目痕？
107	中皿	口径 20.6 器高 2.7 高台径 13.5 高台高 0.5	・106と同様の端反りの皿。底部は平坦である。口縁部は輪花状か？ ・外面花唐草文か、内面全体に花唐草文。圏線は高台脇1条・高台2条・高台裏2条。	・淡青色発色良好 ・外面薄く内面厚い。光沢あり。	・畳付露胎
108	中皿	高台径 6.6 高台高 0.5	・腰に稜を作った後外反してのびる。高台は断面台形で内傾して下る。底部中央には凹みがある。 ・圏線は内面に2条・1条。口縁内面に染付が認められる。	・淡青色発色良 ・厚く光沢あり。 ・磁胎に黒色粒含む。	・畳付露胎
109	大皿	高台径 8.7 高台高 1.1	・底部中央が凹み、丸いカーブで広がりながらのびる。高台は断面U字形で垂直に下る。 ・圏線は見込みに2条、口縁内面に染付あり、草花文か？	・淡青色発色不良 ・灰白色厚く貫入ムラあり。高台内にはカイラギが認められる。	・畳付露胎 ・見込みの重ね焼痕(幅2.5cm)に砂付着。
110	大皿	高台径 15.0 高台高 0.7	・高台付近のみ遺存。平坦な底部、高台は低い。 ・外面波文。内面牡丹葉文？・半截花菱文、見込みに草花文。圏線は高台に2条・高台裏1条。	・外面淡青色・内面濃青色発色良好 ・やや厚く、光沢少ない。	・畳付露胎 ・高台裏に目痕

番号	器種	法量(cm)	形態・文様	釉調・胎土	備考
111	壺	最大径 4.6 高台径 3.0 高台高 0.4	・下ぶくれの体部のみ遺存する小型の壺。 ・松を主とする文様。	・淡緑色～淡青色発色不良 ・薄く光沢あり。	・内面露胎 ・畳付に目砂付着
112	壺	口径 2.4 最大径 8.8 器高 9.1 高台径 4.5 高台高 0.8	・玉ねぎ形の体部から頸部で強く締まった後、水平近くにねり返し、玉縁状の口縁部となる。高台際にはカンナ削りの段がみられる。 ・草花文。圏線は肩部に3条・高台に1条。	・暗青緑色発色やや不良 ・薄く光沢あり。	・内面体部露胎 ・同タイプのもの他に1点出土
113	壺	最大径 11.7 高台径 8.0 高台高 1.2	・断面三角形の直立する高台から、あまり張らずにのびる筒形の壺。花生か。高台際にはカンナ削りが顕著に残る。 ・圏線は体部下位に1条・高台に1条。	・淡青色発色不良 ・乳灰色薄く光沢なし。高台に釉なだれ。	・内面露胎 ・畳付に目砂付着
114	鉢	高台径 5.9 高台高 1.3	・凹みのある底部、高い高台を持つ。 ・見込みの圏線内に「寿」の文字。外面の圏線は高台脇1条・高台に2条。	・青色発色良好 ・厚く光沢あり。 ・胎土に黒色粒を含む。	
115	鉢	高台径 5.5 高台高 1.1	・114よりやや浅めの鉢。高台内の削り出しは弱く、底部の器肉は厚くなる。 ・見込みの重圏内に五弁花。外面の圏線は高台脇2条・高台2条・高台裏1条。	・暗青色発色やや不良 ・厚く光沢少ない。	・口縁端部露胎
116	菓子鉢	口径 11.5	・斜めに開く底部から、わずかに開きながら立ち上がる口縁部へ続く半筒形の菓子鉢。大きさに比し、器肉は薄い。 ・外面体部松皮菱に区割し、外側を花唐草文で埋め、内側には松等の草花文。	・暗青色発色良好 ・外面厚く内面薄い。光沢あり。	・櫛底部露胎
117	仏供碗	口径 6.9 器高 4.4 脚端径 3.8	・太く短かい脚を持つ。体部は浅く、先細となり端部に至る。脚端面は2段の平坦面となる。 ・体部に笹文。	・暗緑色発色不良 ・緑色をおび、光沢あり。内面にピンホール。	・口縁端部・畳付露胎
118	不明	口径 6.6 器高 3.1 高台径 3.0 高台高 0.3	・半球形を呈する小型の碗。高台は幅広で低く、端部は内傾する広い面を持つ。 ・笹等の文様。	・青色発色良好 ・薄く光沢あり。	・口縁端部・畳付露胎
119	不明	口径 8.8 器高 2.9 底径 7.0	・内傾ぎみの短かい体部。平坦な底部の周縁は段となり、外底面はわずかに突出する。重ね小鉢か。 ・体部に笹文。口縁部に重圏。	・青色発色良 ・外面厚く内面薄い。光沢少ない。	・口縁端部・底部周縁露胎目砂付着。
120	向付？	高台径 4.8 高台高 0.6	・高台から直線的に開いた後、稜を作って広がりながらのびる。向付か。高台脇にカンナ削りの段が顕著に残る。 ・見込みの重圏内に五弁花。	・青色発色良好 ・外面翠緑色で厚く、内面・高台内透明で厚く光沢あり。	・高台内に二重角福銘 ・伊万里青磁

Ⅶ 石材の鑑定

奥田　尚

1．石材について

礎石S1～S3は片麻状黒雲母石英閃緑岩である。他の石材S4～S16は変輝緑岩・アプライト・片麻状黒雲母石英閃緑岩・粗粒弱片麻状黒雲母花崗岩・変斑糲岩・輝石安山岩・粗粒黒雲母花崗岩である。礎石は周囲が加工されており、他の石材はいずれも鋭い角をもつ割り石である。各岩石の特徴について述べる。

片麻状黒雲母石英閃緑岩　S1～S3・S6・S11～S13

灰黒色を呈する。片麻状構造が顕著である。細粒の黒雲母が厚さ5～6cmの帯状部に集中して、黒雲母の長軸方向も帯状部の方向も片麻状方向とほぼ一致する。造岩鉱物は石英・長石・黒雲母である。石英は無色透明で多く、モザイク状をなす。モザイク状であるため大きさを決めるに至らないが、塊としてとらえるならば粒径は5mmにおよぶ。長石は白色を呈し、多い。粒径は2mmにおよぶ。黒雲母は黒色板状で細粒である。石英中に片麻状方向とほぼ調和して帯状に集中する。

変輝緑岩　S4・S16

暗緑色を呈する。造岩鉱物は角閃石と長石である。角閃石は角閃石の黒色金属光沢を呈し多く、自形を示すものがほとんどである。粒径は3mmにおよぶ。長石は白色を呈し多い。角閃石の間隙を充填している。

アプライト　S5・S14

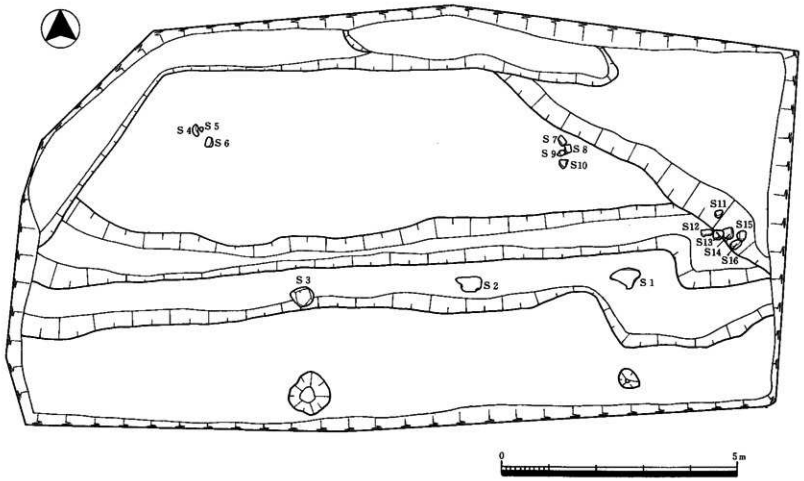
白色を呈する。造岩鉱物は石英と長石である。石英は無色透明で多い。粒径は2mmにおよぶ。長石は白色を呈し多い。粒径は3mmにおよぶ。

粗粒弱片麻状黒雲母花崗岩　S7

淡赤褐色を呈する。わずかに片麻状構造が認められる。造岩鉱物は石英・長石・黒雲母である。石英は無色あるいは淡赤褐色透明で多い。粒径は3～5mmである。長石は白色あるいは赤褐色を呈し多い。粒径は3～5mmである。黒雲母は黒色の金属光沢を呈し、板状でわずかである。長軸方向は片麻状方向とほぼ一致する。粒径は2～3mmである。

変斑糲岩または変輝緑岩　S9・S10

淡緑黒色を呈する。表面は黒色の鉱物が浮き出して、ザラザラしている。これは風化の差により生じたものである。造岩鉱物は角閃石と長石であるが輝石も含まれるものと推定される。角閃石は黒色の金属光沢を呈し多い。半自形のものも見られる。粒径は3mmにおよぶ。長石は白色を呈し多い。粒径は2mmにおよぶ。



第37図　礎石・石材位置図

輝石安山岩　S８

赤褐色を呈する。発泡孔はわずかに認められる。造岩鉱物は輝石と長石である。輝石は黒色柱状の自形をなす。粒径は５㎜におよぶ。長石は白色を呈し、自形をなし多い。粒径は３㎜におよぶ。石基は赤褐色を呈し、ガラス質で堅い。

粗粒黒雲母花崗岩　S15

淡赤褐色を呈する。造岩鉱物は石英・長石・黒雲母である。石英は淡赤褐色と無色透明のものとがあり多い。粒径は５㎜におよぶ。淡赤褐色のものは少なく、表面に赤褐色酸化粒が沈着したと考えられる。長石は赤褐色を呈し多い。粒径は10㎜におよぶ。黒雲母は黒色板状を呈しわずかである。粒径は２㎜におよぶ。

２．岩石の産地について

礎石の３基Ｓ１～Ｓ３は同質であるが、他の石材Ｓ４～Ｓ16は多種におよぶ。いずれも加工石で同質の岩石の分布地域がその産地とは限らないため、産地を限定するには困難を要する。穴太神社を中心として近距離に同質の岩石が分布するのは次のようである。

片麻状黒雲母石英閃緑岩は高安山山頂付近から服部川・大窪・水呑地蔵に至る山腹部に分布する片麻状黒雲母石英閃緑岩の岩質に酷似する。

変斑糲岩または変輝緑岩は平尾山付近一帯に部分的に分布する変輝緑岩質岩の岩質に酷似する。

輝石安山岩に二上山雄岳北麓に分布する輝石安山岩の岩質の一部、ドンズルボー付近の地層中に含まれる輝石安山岩礫の岩質に酷似する。

アプライト・粗粒弱片麻状黒雲母花崗岩・粗粒黒雲母花崗岩と同岩質の岩石の分布を求めるのは今後の課題である。

以上述べたような地域に酷似する岩石が分布するが、その分布地域から割り出して運搬したのか、その岩石の分布流域に転がる石を採石したのか、転用石であるのか不明である。しかし、片麻状黒雲母石英閃緑岩は他に比べて非常に多く使用されており、転用石の可能性は非常に少ないと考えられる。

Ⅷ　ま　と　め

今回の調査目的は、既往調査の際に検出した礎石Ｓ１および多量に出土した屋瓦との関係を追求することと、これらに関連した寺院遺構がどの程度遺存しているかを確かめるためであった。調査の結果、新たに礎石Ｓ２・Ｓ３を検出したほか、土壇等の遺構の存在が確認され、千眼寺の文献での空白部分を、考古学の立場から実証するうえで重要な資料を提供してくれた。

ここでは今回の調査成果、特に出土遺物を中心に若干の検討を加え、千眼寺の創建・廃絶の時期およびそれ以降の諸問題を考えてみたい。

１．出土遺物からみた寺院の盛衰

１）屋瓦について

屋瓦類は先述したように瓦集積からの出土であるため、層位的に編年できなかったが、概ねその大勢を察することができた。

創建時のものとして捉えることのできるものには、１～５・18と、既往調査の際に出土した蓮華文軒丸瓦（第８図）がある。特に軒瓦２の五輪塔文軒丸瓦は、水輪に陽刻されている梵字がやや不鮮明である点を除いては、京都市法勝寺出土の瓦と同意匠のものである。このように、当時巨刹を誇った法勝寺と同意匠の軒瓦を使用している点は、創建当時の社会的背景を有機的に物語る資料として注目される。さらにこの五輪塔文に加え、梵字文軒丸瓦３が同時に出現することは、他の寺院跡から出土する多くの例が示すように平安時代中期以降の指標の一つとなるものである。また、既往調査の際出土した蓮華文軒丸瓦は、讃岐のまずえ畑瓦窯産の瓦と近似意匠のもので、四天王寺や平安京にも搬入されており、本寺院創建時の屋瓦の供給関係を推定するうえで重要な資料となろう。一方、軒平瓦では直線顎を持つ軒瓦18がこの時期に比定でき、八尾市域においては生駒西麓に位置する大光寺跡出土瓦にも類例を認める。以上のことから推察すれば、本寺院創建の時期は、平安時代後期から平安時代末期に比定されよう。

次に鎌倉時代に比定される軒瓦には６～10・19・20・22等があり、瓦当面の文様には軒丸瓦が巴文、軒平瓦は連珠文を持つものと中央に花菱を配する唐草文とに限定される。軒瓦６は突出する内区に三巴文を配する瓦で、兵庫県芦屋廃寺・大阪府四天王寺の出土瓦と近似意匠のもので、この時期における各寺院間の関係や造瓦集団とその供給経路を知るうえでも重要であろう。軒瓦22は、軒平瓦中最も多く出土したもので、先述した大光寺跡でも出土例が認められる。今回の調査成果と同様、大光寺跡でも軒瓦18と22が出土することが報告されていることから、軒瓦22は平安時代後期に比定される軒瓦18の文様を踏襲した瓦と推定される。このように時期を異にする軒瓦18と22の双方が出土する寺院跡は、中河内地区に比較的多く認められることか

ら、平安時代後期以降にはすでに不特定多数の寺院への需要に対応する造瓦組織が、本地域あるいは近接した地域に確立していたものと推定されよう。

なお、今回出土した瓦はこの時期のものが大半を占め、寺院の隆盛時期を示す資料と考えられるが、既往調査では後出と考えられる屋瓦の出土も多く、現時点では確定し難い。

最後に廃絶時期であるが、先述したように瓦集積内に含まれる日常雑器から推定すれば、室町時代中期頃には寺院の機能を失なっていたものと考えられる。ただし、瓦集積内からは平安時代後期から室町時代に至る屋瓦類が混在していて、性格としては整地に関連したものとも理解されることから、単にこの事実が廃絶時期を証左する資料とは言い難い。しかし、既往調査でもこの時期以降の屋瓦が少ないことや、現存する文献から推察すればこの時期に廃絶したと考えるのが妥当であろう。

一方、本文に掲載した近世瓦13～16は、文献に伝わる千福寺・千福禅寺に関連した瓦と推定される。

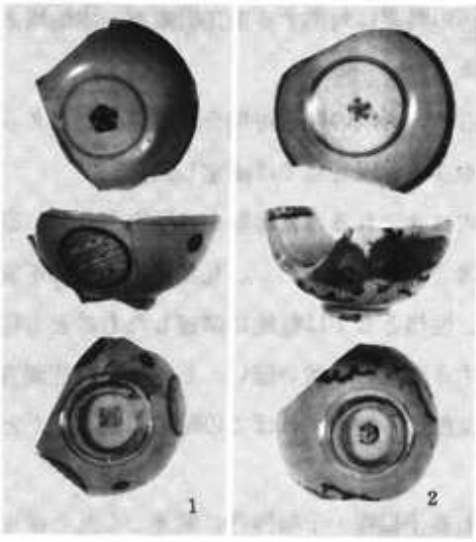
2）近世末期の国産磁器について

近世末期の磁器は第5層茶褐色砂質土層から多量に出土した。これらの磁器類の出土が示すように、近世末期にはこの地が付近住人の生活廃棄物の捨て場として利用されていたことが窺われ、この時期の千福禅寺および穴太神社の実態を知るうえで注目される。また、この地域がこのような目的で使用されていた事実は、単に調査区が境内の北端を占めるという位置的要因の他に、付近住人の当時の神仏に対する意識の変化等も考えあわせねばならない。

今回出土した磁器群の中では伊万里焼系が圧倒的多数を占めた他、唐津焼・京焼・瀬戸焼・志野焼が認められ、当時の消費地での国産磁器の流通を普遍的に物語る資料として重視されよう。ここでは特に多量に出土した伊万里焼系磁器を中心に、この時期の国産磁器に対する諸問題を考えてみたい。

今日までの伊万里焼の研究は、ほとんどが美術的な観点を重視したもので、その内容も伝世品や銘款を有する器を中心として限定されてきた。なかでも初期伊万里・古伊万里の研究が進んでいるのに対して、当遺跡出土の磁器群に代表される18世紀後半以降は、国産磁器が日常雑器として完成し、全国的に普及する時期にありながら、いまだ詳細な事柄が明記されたものは見い出せない。

ただ、18世紀後半以降は磁器の製作技術の向上と需要が増大する時期であり、新たに西日本の各地に伊万里焼の系譜を引く焼物が生産される時期とも一致し、増加する生産地と多様化する磁器類に対しては認識がおのずと低下していることも否めない事実であろう。また、この時期の伊万里焼系雑器を総称して「くらわんか手」と言われることも、これらの要素が起因となったものと考えられる。逆説的に捉えれば、これらの日常雑器が「くらわんか手」として平易に総



第38図　久宝寺遺跡出土伊万里焼系碗

称されたことにより、この時期の磁器研究が遅れたと言っても過言ではなかろう。

また、「くらわんか手」という名称は、当時淀川を往来していたいわゆる「くらわんか舟」で使用された[註8]粗雑な器を総称したものであり、あくまでも使用目的・使用場所を限定したものであると考えられる。これらのことから、多様化するこの時期の日常雑器を総称して「くらわんか」の名を冠することは妥当とは言い難く、本文では伊万里焼の系譜を引く焼物全般を「伊万里焼系」として捉えた。

一方、近年考古学的には生産地である佐賀県を始めとして、西日本の各地で活発に窯跡の発掘調査が実施され、一応の成果を上げている。しかし、京阪神を中心とする消費地の遺跡では普遍的に出土することを認めながらも、考古学的な対象物としての認識が低く、一部の報告書を除いては掲載すらされていないのが現状である。八尾市域においても、久宝寺寺内町遺跡他の旧市街地を中心として散発的に出土しているが[註9]（第38図参照）、大半が細片で良好な資料とは言い難い。

今回の調査では幸にも、多量でしかも良好な資料が認められたことから、資料紹介を兼ねて敢えて掲載することにした。

ただ、本文中に記載した磁器群の年代観は、あくまでも推定の域を超えないものであり、今後の出土例の増加によって、この時期の伊万里焼系磁器についての詳細が明らかにされることを期待する。

2．寺域の推定

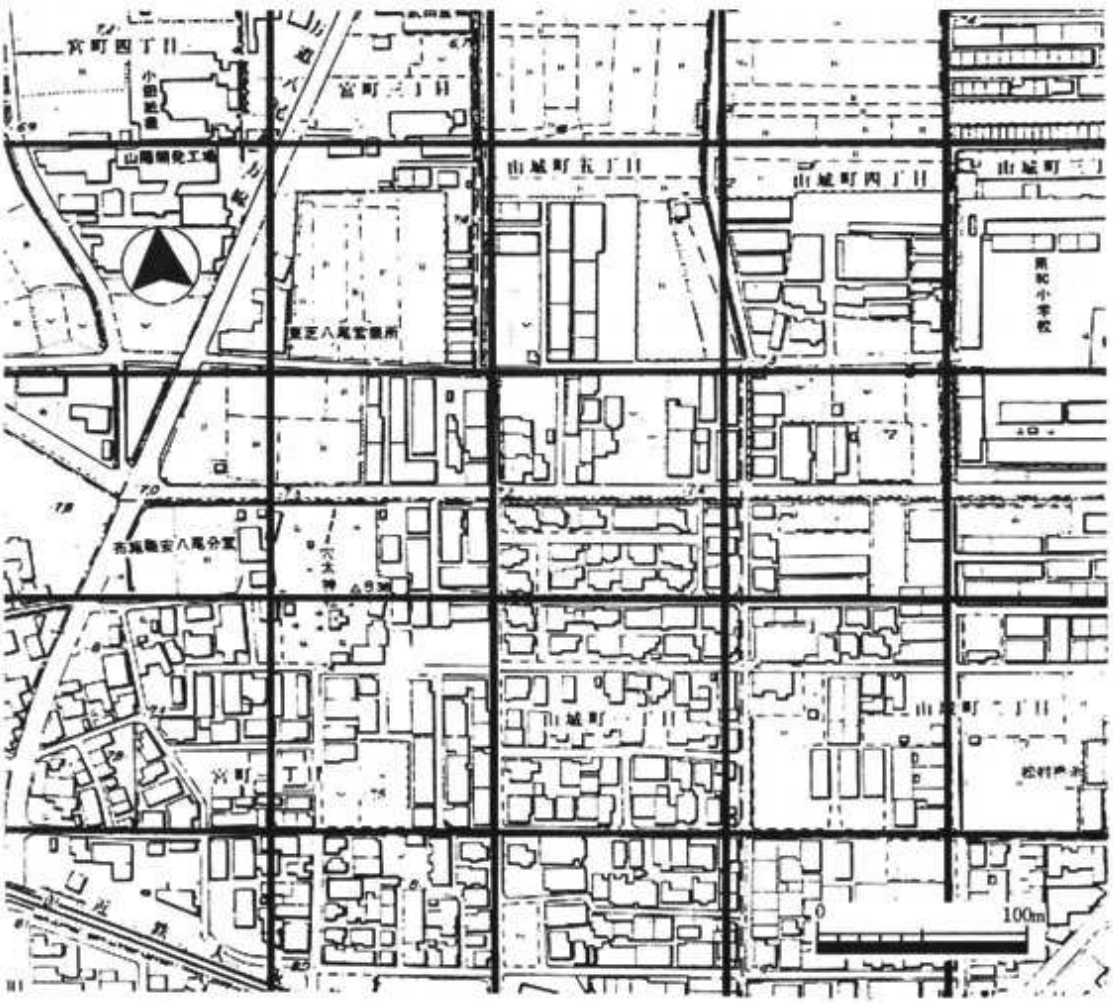
穴太神社周辺は旧若江郡の区割を顕著に残しており、現在でも地図上で条里を復元することが、部分的に可能である。この復元図から推定すれば、穴太神社周辺は若江郡条里の６条・里の四ノ坪・五ノ坪に当る[註10]。穴太神社境内に着目すれば、東西方向の条里が境内で寸断されており、参道として現在使用されている道が、本来は坪界を区割する道路であったことが窺われる。なお、穴太神社境内の南側を区割する道が条里方向に平行して東西に走っているが、これは寸断された道を補足する目的で開道されたとも理解されよう。

このように条里区割に捉われずに寺域を設定したものかとも考えられるが、当調査地においては境内を東西に走る条里ライン以南では創建時期（平安時代後期～末期）に比定できる屋瓦の

出土は該して少なく、鎌倉時代から室町時代に比定されるものが大半を占めていた。このことから、現時点では境内全域を創建時からの寺域として捉えることには、やや疑問を感じる。

また、参道東端の北側一帯に「寺の内」の小字名があり、この位置が条里坪の南西隅を占めることも、寺域を推定するうえで看過できない事柄であろう。

以上、条里区割と調査成果を中心に寺域の推定を試みたが、主要伽藍配置および若江郡条里の施行時期等が明確にされていない現在においてはおのずと限定され、これ以上証左し得るものは見い出せない。ただ、近年実施した穴太神社西部の調査[註11]や、当調査地の東側地域でも屋瓦が出土したこと[註12]等から、寺院範囲はさらに東西方向へ広がる可能性を充分に秘めている。今後、穴太神社を中心として、巨視的な立場から寺域・伽藍配置等を推定することが重要であろう。



第39図　穴太神社周辺条里復元図

3．文献にみる千眼寺について

次に千眼寺・穴太神社関係の文献資料を記載して、調査結果とともに若干の考察を試みる。

「千眼寺」記載の初現は延宝7年（1679年）発刊の『河内鑑名所記』[註13]である。この文献の記された時期は調査で確認したように寺院廃絶期とは約2世紀の時期差があり、記載内容も「穴太村　大日山千眼寺旧跡　天照大神・春日・住吉社あり」と記すのみで、この時期にはその址を傍証する礎石と伝称がわずかに残るのみであったものと推定される。ただ、穴太神社に現存する棟札には『河内鑑名所記』の出版前の年号である万治元年（1658年）の記載があり、この時期にはすでに穴太神社が存在していたことが窺える。

一方、寺院廃絶期から『河内鑑名所記』が書かれる17世紀後半までは時間的な隔たりもさることながら、間には畠山家の内紛を始めとする応仁の乱等の戦乱が長期間におよび、河内全域が戦禍の渦中にあったことは否めない事実である。さらに近接する久宝寺では、顕証寺を中心として防備を重視した寺内町が形成される時期であり、近隣の集落もこの時勢に対してある程度の移動や変化を余儀なくされたと考えても不思議ではない。また、この時期に書かれた文献には戦記の記事とともに近隣の地名、あるいは寺院名が比較的多く書き記されているのに対して、千眼寺に対する記載の無いことも前述の廃絶時期を暗に肯定するものと言えよう。

以上のことから『河内鑑名所記』の筆者は、烏有に帰した寺院址を穴太神社の神宮寺の千眼寺として捉らえ、記載したものと考えられる。

次に元禄3年（1690年）、『諸事覚書記』[註14]の中に「渡辺勘兵衛穴太村氏神千福寺ノ森に陣取」とある。この文献は先の『河内鑑名所記』より後出のものであるが、記載されている内容は元和元年（1615年）の大阪夏の陣の戦記に関するもので、ここでは寺号を千福寺と記している。ただ、この記事についてはこの時点で千福寺が存在していたと解するよりは、千福寺の〝森〟に

第10表　千眼寺関係年表

西　暦	年　号	記載資料	記載内容
1658	万治元年	棟札	穴太神社
1679	延宝7年	河内鑑名所記	大日山千眼寺
1690	元禄3年	諸事覚書記	千福寺
1713	正徳3年	小鐘銘	千福古寺・千福禅寺
1715	正徳5年	和漢三才図絵	千眼寺
1718	享保18年	棟札	大日山千福禅寺
1733	享保18年	棟札	大日山千福禅寺
1835	天保6年	棟札	大日山千福禅寺
1853	嘉永6年	棟札	大日山千福禅寺

着目すれば千福寺の旧跡である森に陣取っていたと理解され、地元では千福寺の寺号が伝承されていたものと考えられる。

次に正徳3年（1713年）の銘を持つ小鐘がある。銘文中には千福古寺と千福禅寺の2つの寺号が記されている。[註15] この内容に関しては既往調査の報文にも考察が加えられているが、千福古寺は千福禅寺の再興に際して、古来より伝承されてきた千福寺の寺号に〝古〟を付随させることによって旧寺号とし、千福禅寺の前身の寺院名としたものと考えられる。一方、千福禅寺は銘文中にあるように、禅宗の僧侶が再興の任を務めたため、その名が用いられたものと推定される。事実、これ以後の棟札（享保3年・同18年・天保6年・嘉永6年）には大日山千福禅寺の寺号が認められ、再興に際して宗旨も禅宗に改宗されたものと考えられる。

さらに小鐘が鋳造された2年後に発刊された『和漢三才図絵』[註16]には「大日山千眼寺　在穴太村今唯無寺有礎耳　有三社　天照大神　春日　住吉」の記載があるが、内容は『河内鑑名所記』を踏襲するものである。ただし、この文献は 105巻におよぶ大巻であり、発刊は小鐘銘の正徳3年には遅れるが、準備執筆期間を加味すれば単に先後の問題ではない。すなわち、この文献に見る「今唯無寺有礎耳」の記載事実を筆者自身が現地を踏査したのであれば、千福寺あるいは千福禅寺と記されるのが普通であろう。以上から推察が許されるならば この記載内容は『河内鑑名所記』の一部を改編したものと推定されよう。

これらのことを考え合わせれば、『河内鑑名所記』・『和漢三才図絵』に記されている「千眼寺」は単に筆者の誤記とも理解されようが、出土遺物には「キリーク」を配する梵字瓦があることから、仮に千眼寺の寺号を千手千眼観音から制定したものとすれば、本来は真言宗系を宗旨に持つ寺院であった可能性も考えられよう。

最後に、今回の調査では千眼廃寺に関連する遺構が検出され、寺院の存在を確認したことで一応の成果が得られた。しかし、検出した遺構・遺物が提起する寺院の創建・廃絶時期や寺域等の実証は充分になされたとは言い難い。千眼寺跡の調査は緒についたばかりであり、今後これらの諸問題を解明するために、長期的な展望を持った調査が実施されることを切望して止まない。

註1 稲垣晋也 「古代の瓦」『日本の美術11 通巻第66号』 至文堂 1971年

註2 上原真人 「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究13・14』 (財) 元興寺文化財研究所 1978年

註3 大谷女子大学資料館 「四天王寺」『大谷女子大学資料館報告書第8冊』1982年

註4 前掲書註2

註5 原田修・久貝健・島田和子 「清原得巌所蔵考古資料図録—高安の遺跡と遺物」『大阪文化誌 季刊第2巻第2号通巻第6号』(財) 大阪文化財センター 1976年

註6 村川行弘 「芦屋廃寺」『新修芦屋市史』 芦屋市役所 1976年

註7 天沼俊一 『四天王寺図録古瓦編』 四天王寺 1936年

註8 葉間家に残る資料に「くらわんか舟」に関する記載が認められる。まず天正10年 (1582年) 8月2日に「柱本村茶舟之者共、舟渡シ之御役二立申候事」とあり、この「茶舟」が「くらわんか舟」の前身と考えられる。次に慶長12年 (1607年) 3月12日から翌年の秋にかけては、この「茶舟」が幕府より特権を認められ、他の地域の「商ひ舟」を差留めさせている。その後寛永11年 (1634年) 8月25日には「源三郎」という者が御役所から御用を承り、これが枚方の「くらわんか舟」の元祖となる。

註9 第38図の碗は昭和57年7月1日、久宝寺4丁目私道で下水道工事の際地表下0.5m地点で出土した資料の一部である。なおこれら2点の碗は本文中で分類したB類に含まれるもので、1の碗は本文掲載71の碗と同意匠のものである。

註10 楊橋利光 「八尾の条里制」『八尾市紀要第6号』八尾市教育委員会市史編さん室 1976年

註11 八尾市教育委員会 「宮町遺跡—昭和55・56年度埋蔵文化財調査年報」『八尾市文化財調査報告』1982年

註12 住宅建設の際、屋瓦片が多数出土したことが伝えられている。

註13 三田浄久著 1679年

註14 「山本文書—西郷村諸事覚書記—元禄三午歳」『八尾市史 (史料編)』1960年

註15 穴太神社氏子谷元正一氏所蔵

大日山千福古寺　客秋九月中旬本村　転金銀銅作浴円通　正徳三年龍集癸己
小鐘銘有引　庄屋年奇宮座 一老　通身是口声徹虚空　仲春穀旦妙徳鉄拐
河州若江郡穴太村　等以其寺付我副寺　三神徳盛万民家豊　道吉山僧書十五葉軒
鎮守境内有一寺其　慈航神足欲復旧観　人々住吉春日出東　請主千福禅寺住持
開創不知幾百歳矣　山僧聴之而為希奇　天照妙用其福増隆　慈航光梯当村庄屋
老農皆伝之謂古来　終順請者之願今春　大開法窟重振禅風　同年寄同宮座同氏子中
七堂伽藍地而荘厳　鋳一小鐘用作朝課
頽映日月之光百事　募願号令因記此事
既廃一百年千此也　明之徳兆云爾

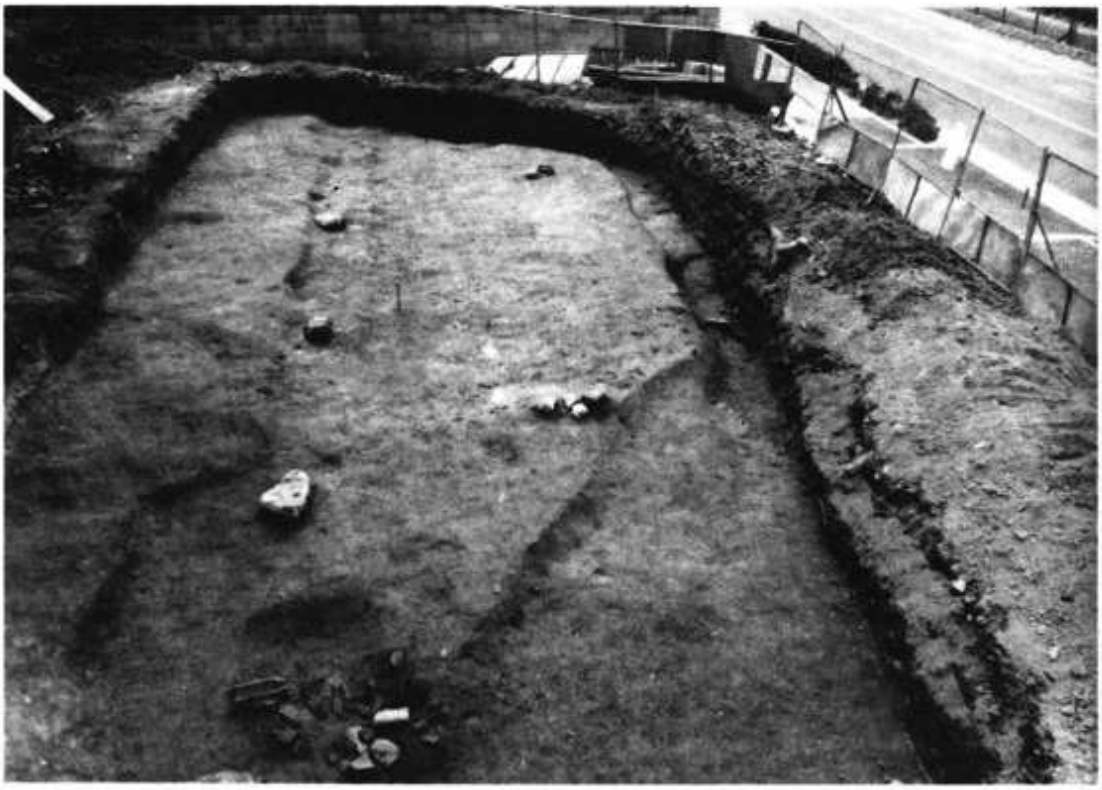
14. 寺島良安著 1715年

調査前全景（東から）

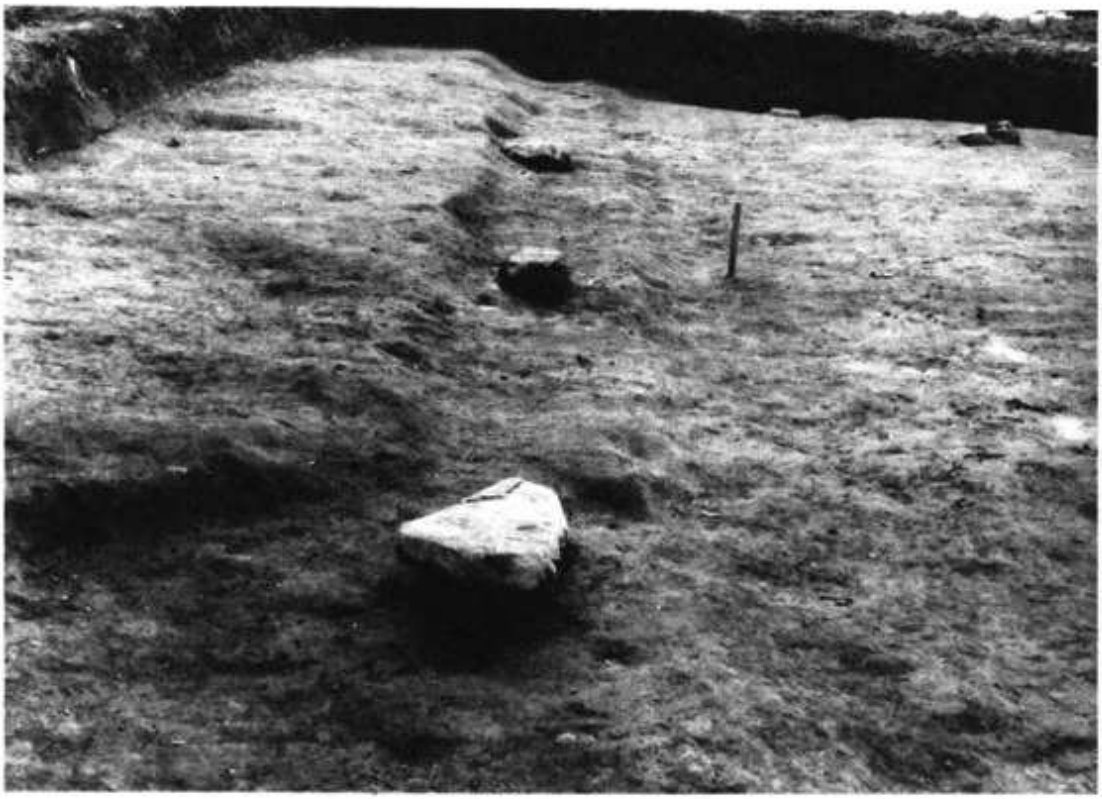
上部土壇検出状況（西から）

瓦集積検出状況（東から）

瓦集積内遺物出土状況



調査区完掘状況（東から）



土壙および礎石検出状況（東から）

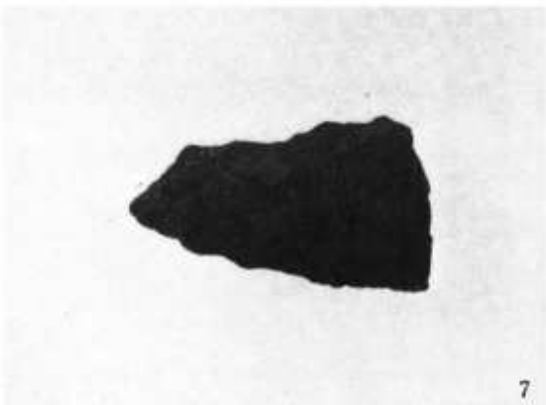
1

2

4

5

6


7

8

9

軒丸瓦Ⅰ

10

11

12

13

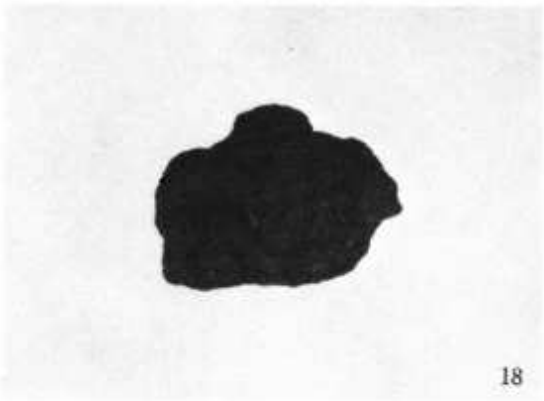
14

15

16

17

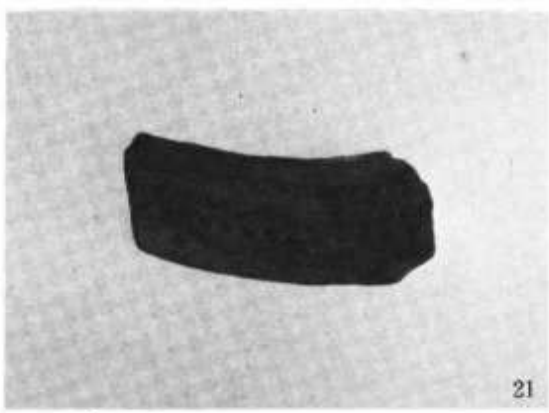
軒丸瓦Ⅱ



18

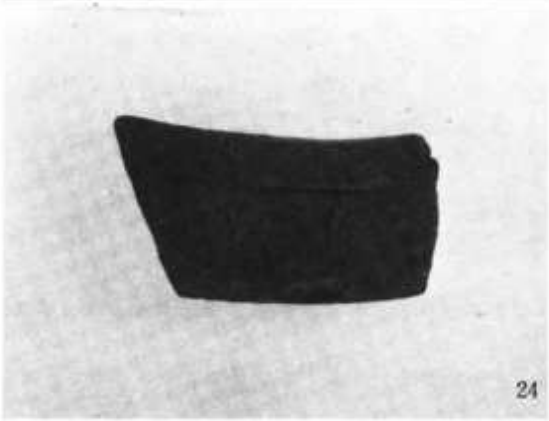
19

20



21

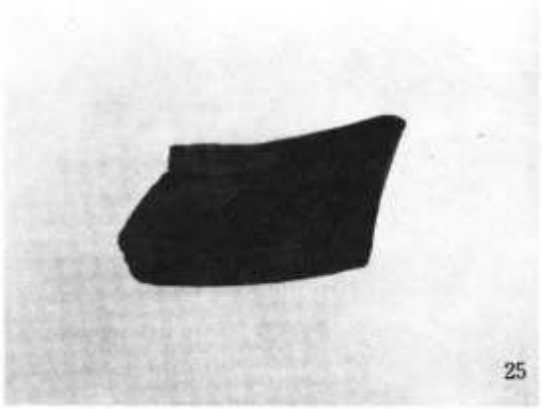
23



24

22

軒平瓦Ⅰ

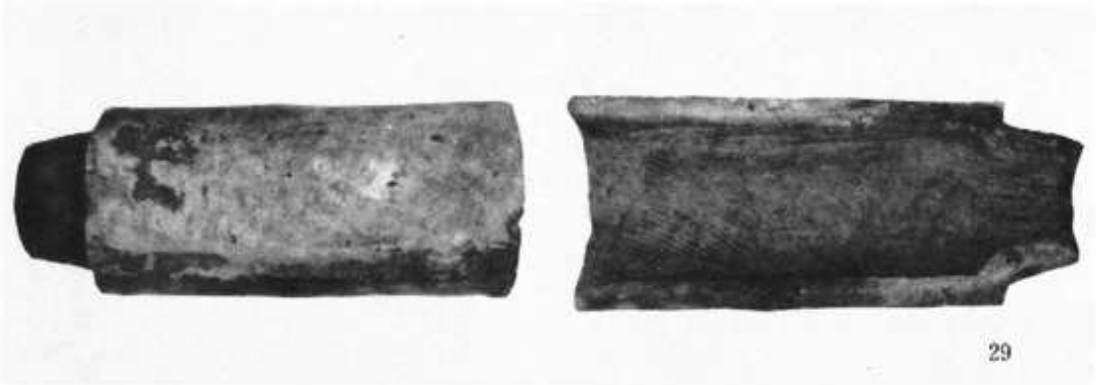


25

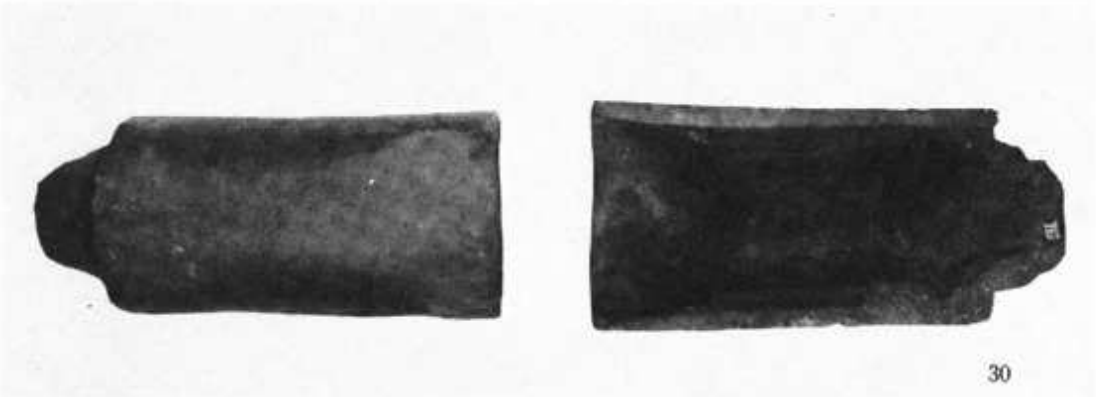
26

27

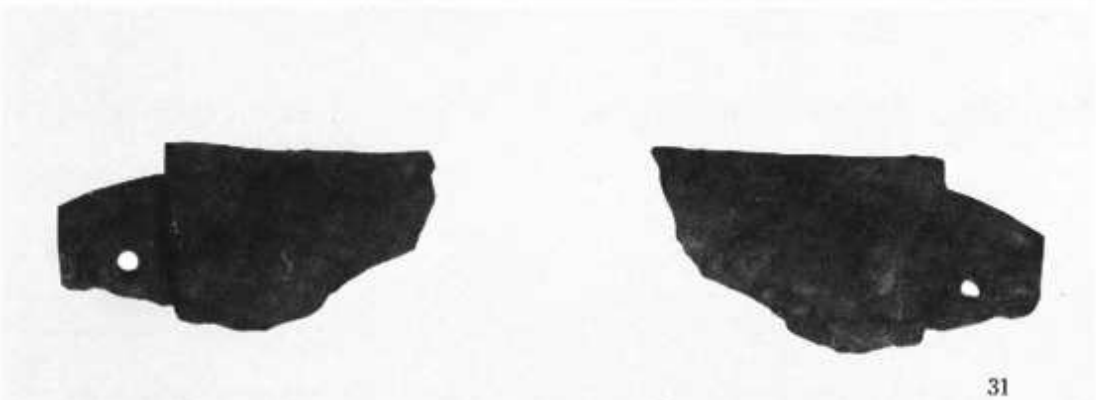
28



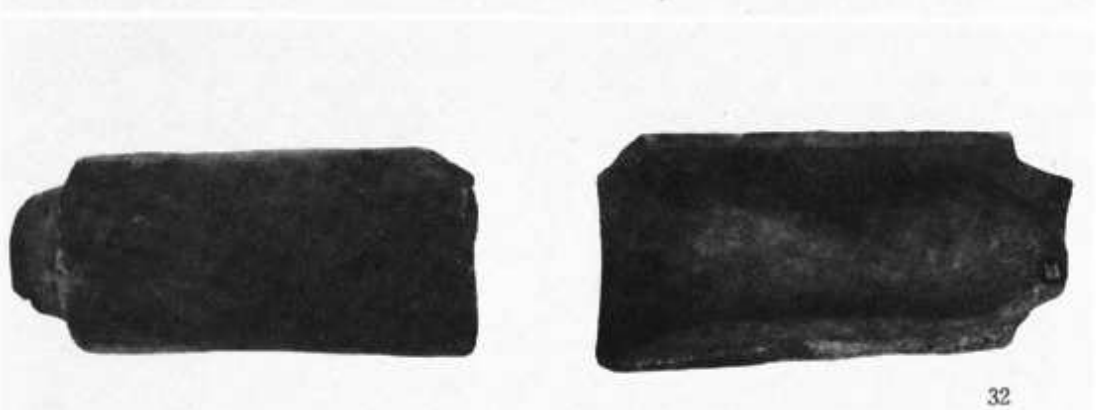
29



30

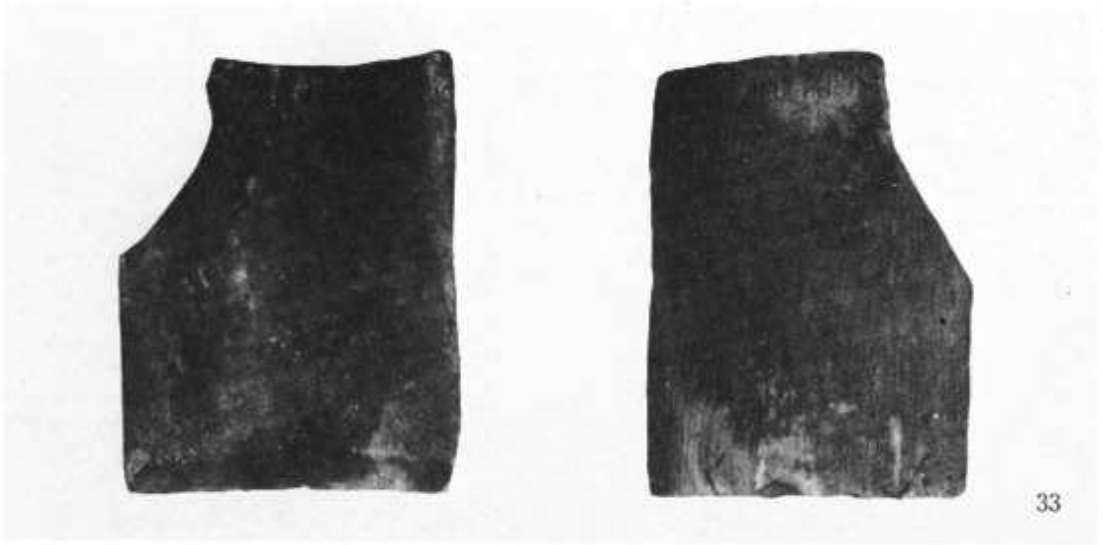


31

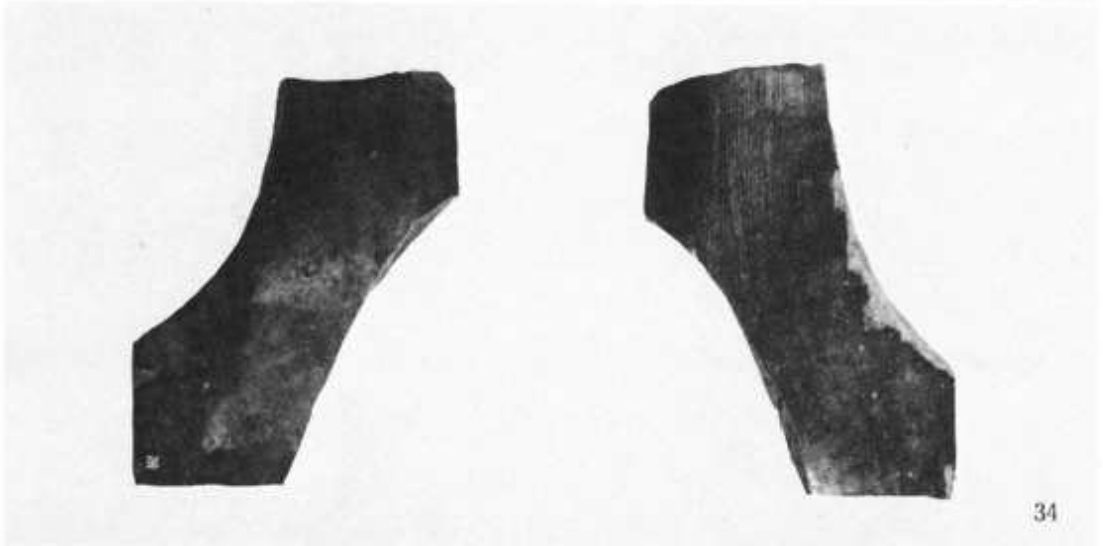


32

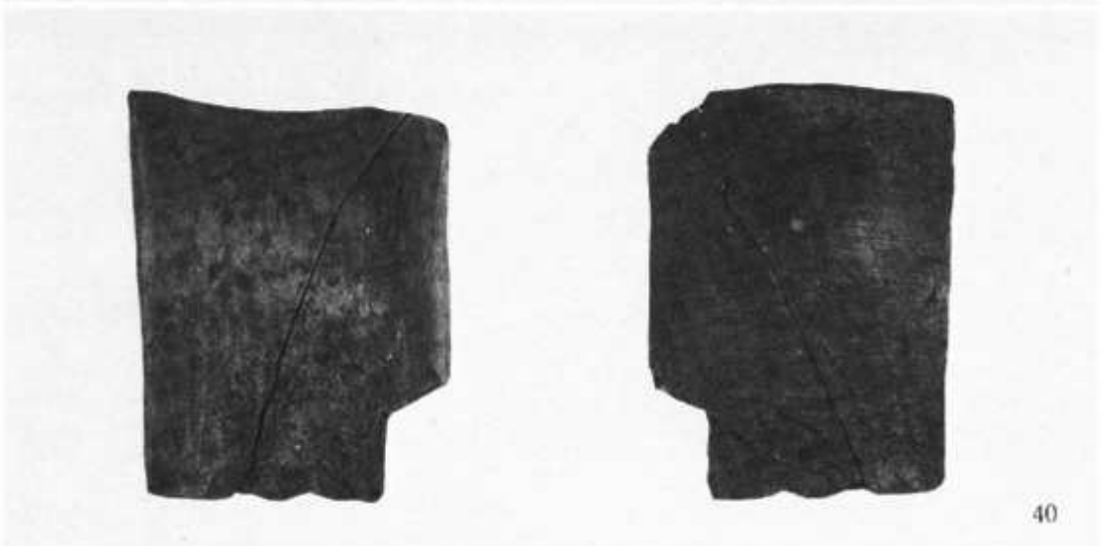
丸瓦（A～D類）



33

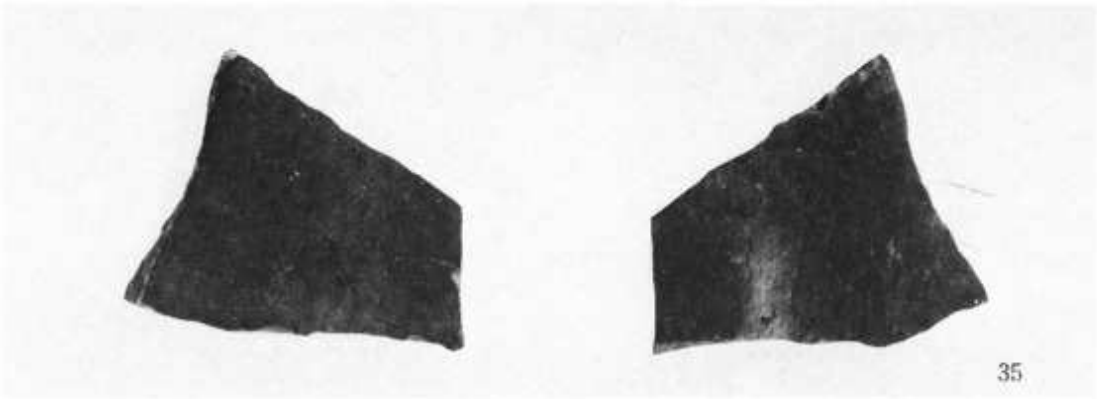


34

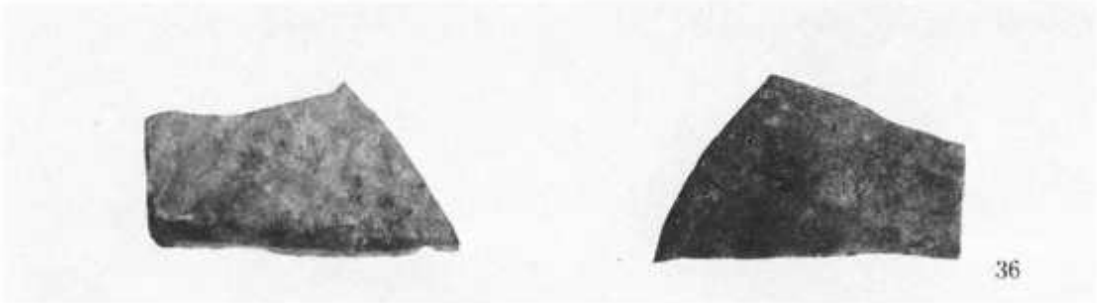


40

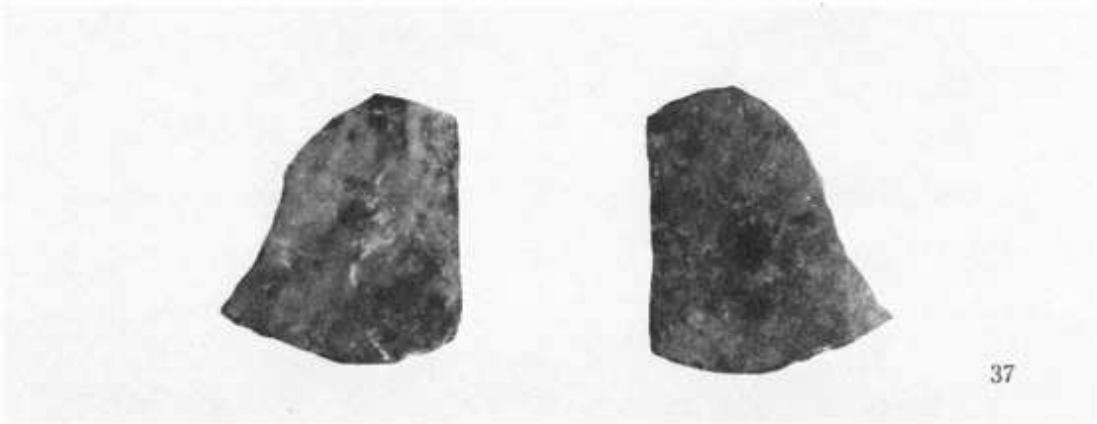
平瓦（A・B・E類）



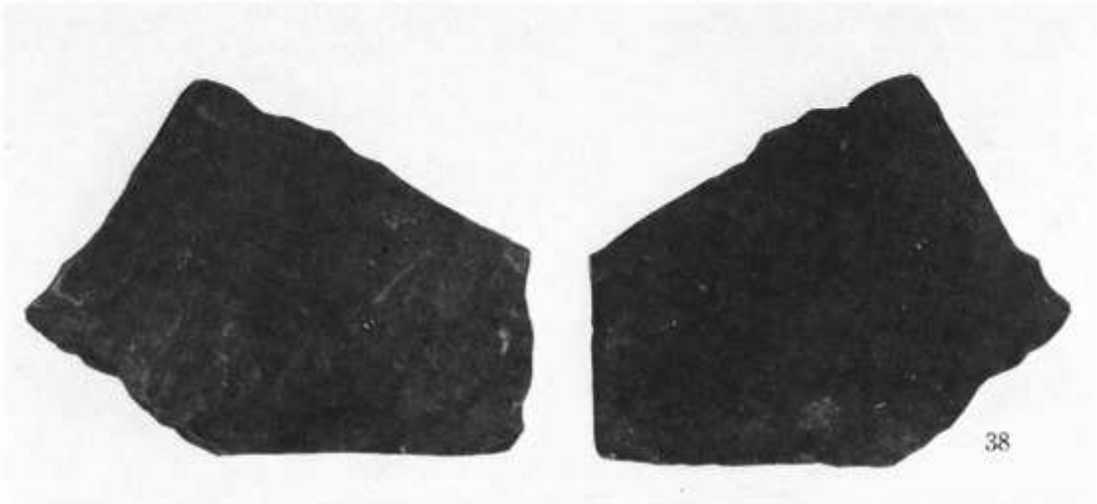
35



36

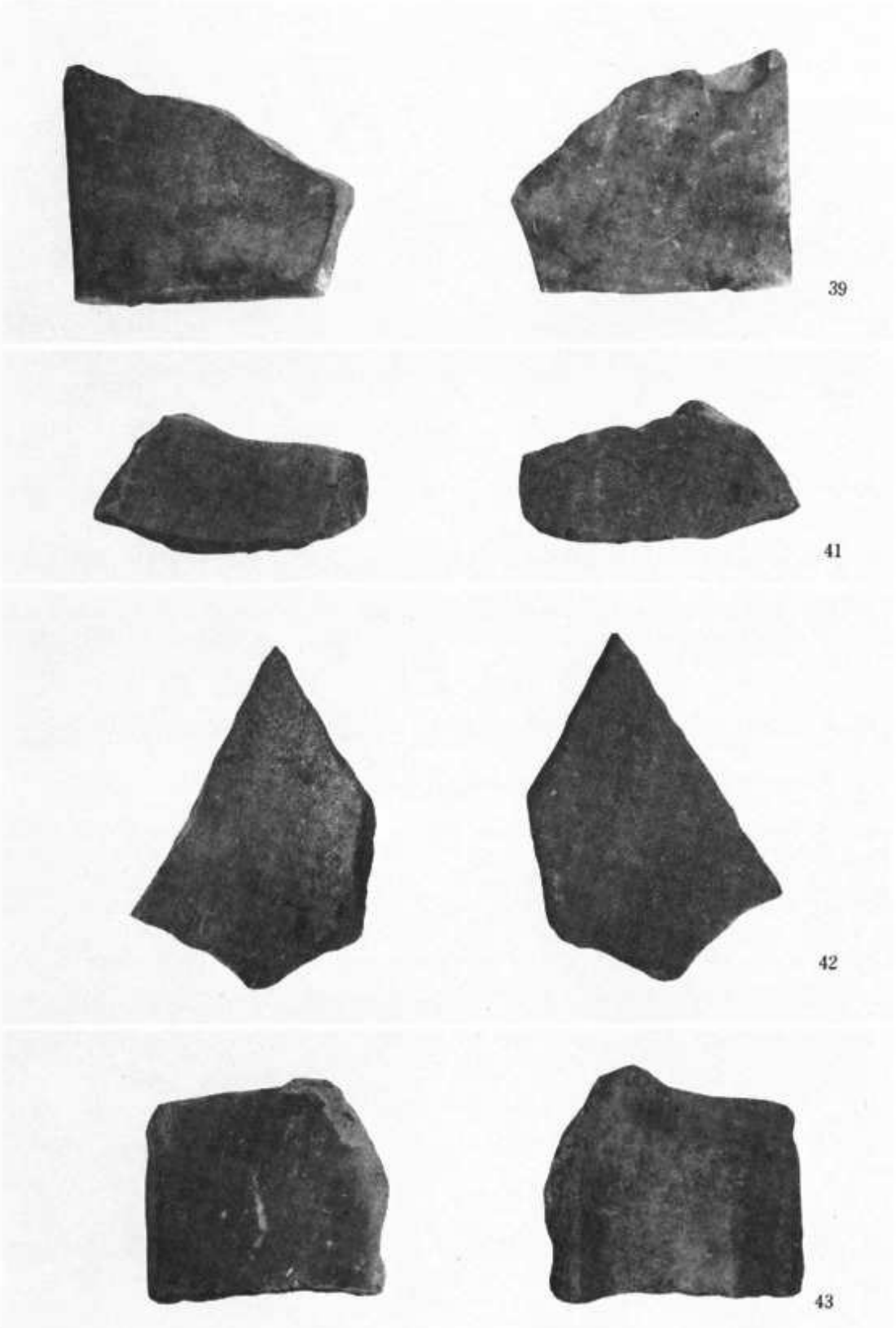


37

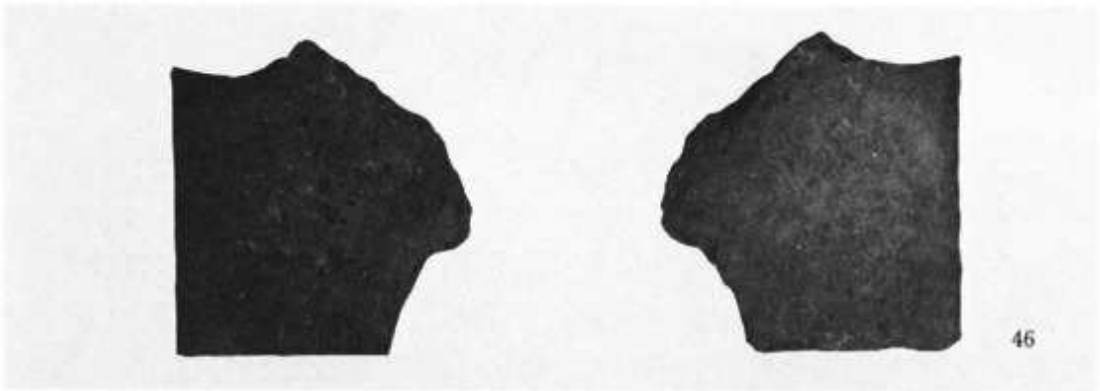


38

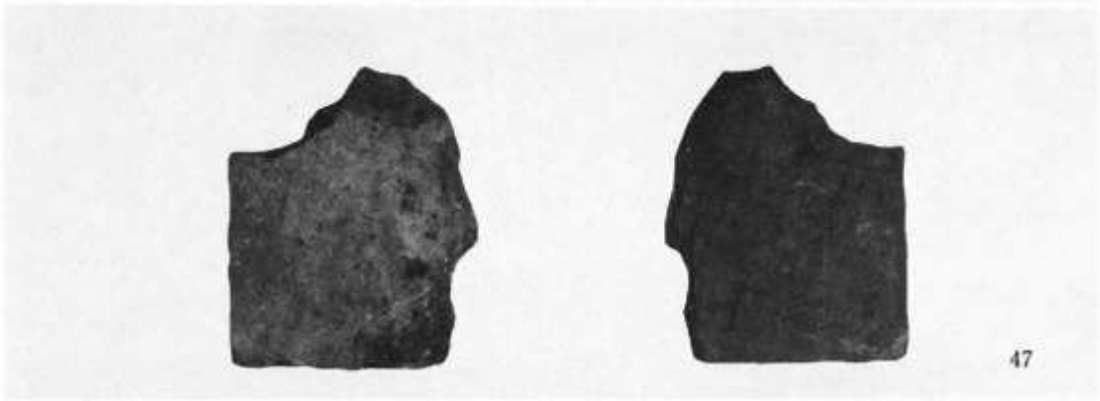
平瓦（A・C類）



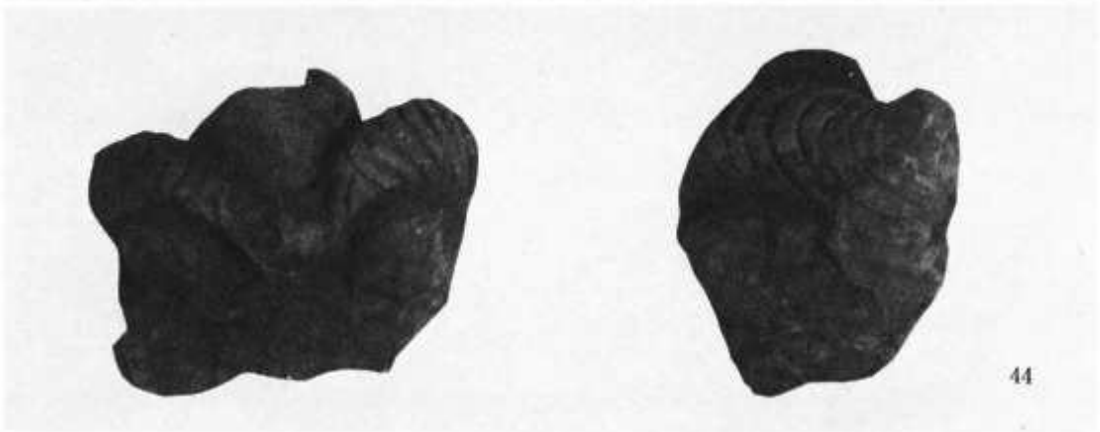
平瓦（D類）・その他の瓦・伏間瓦



46

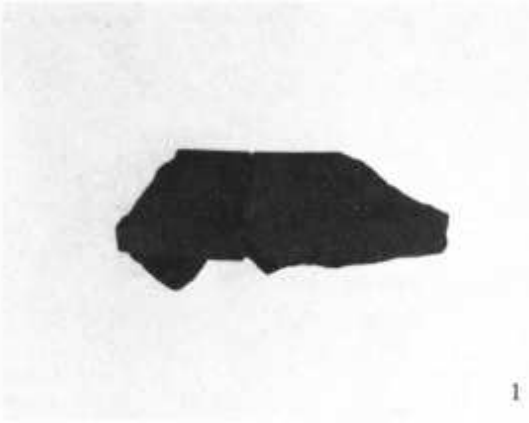


47



44

45


1

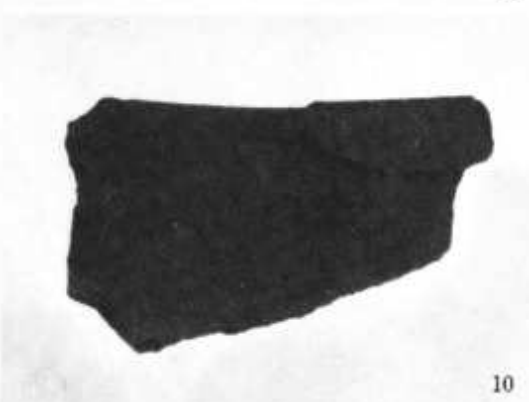
3

5

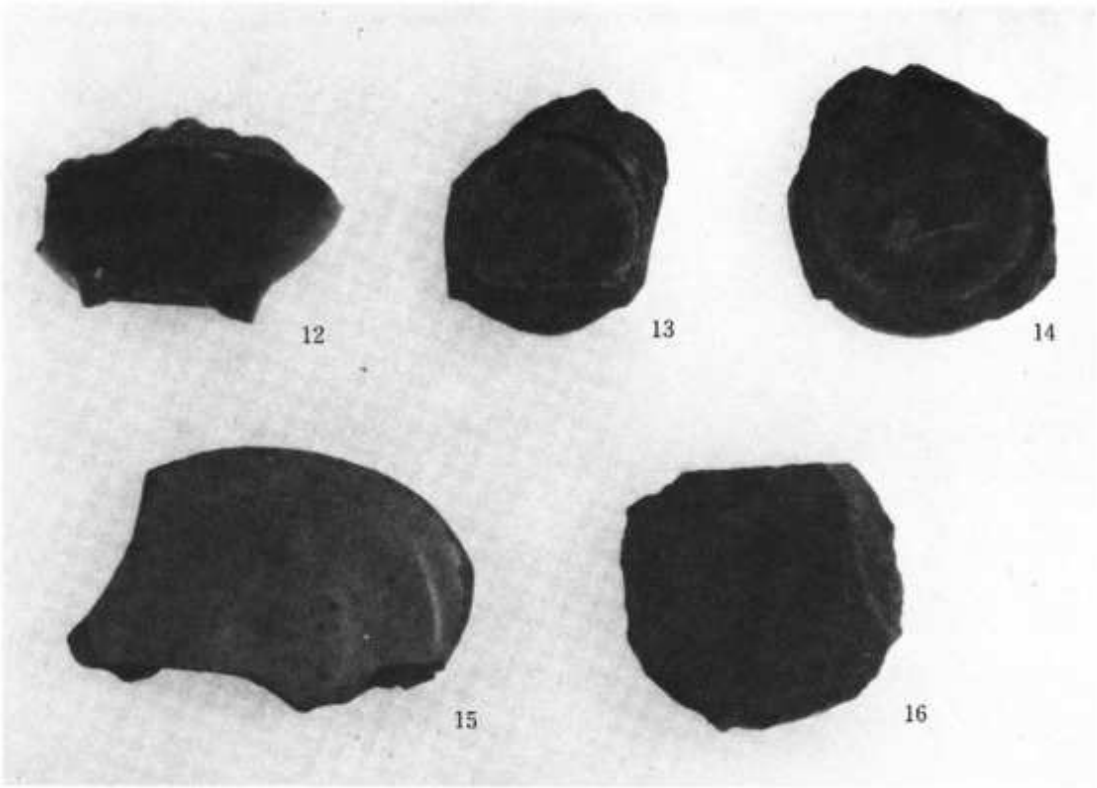
6

8

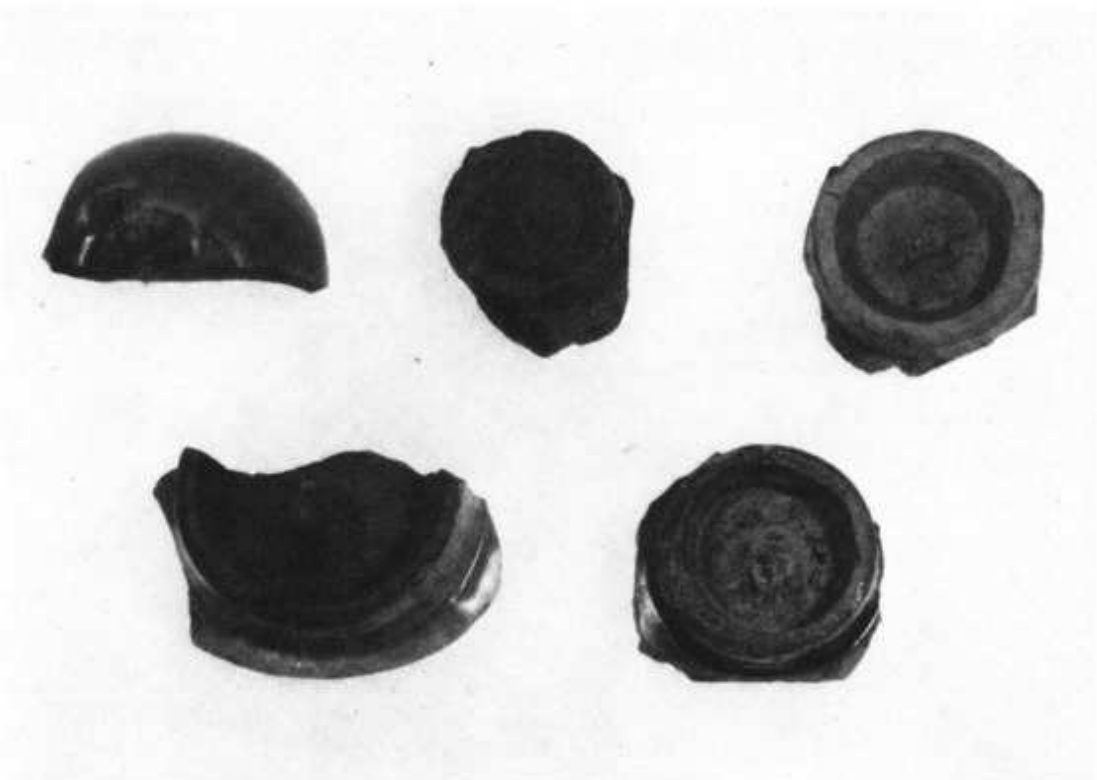
9


10

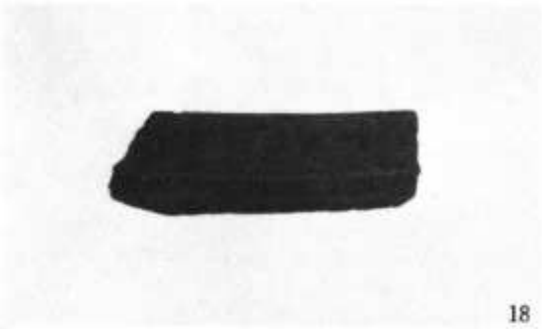
11

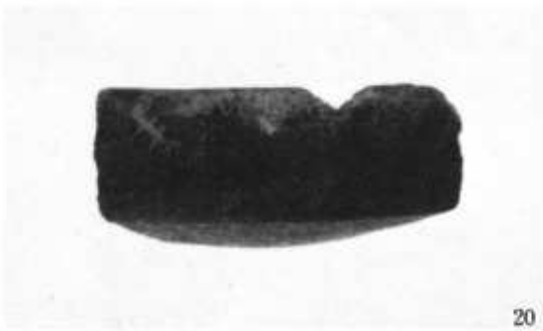


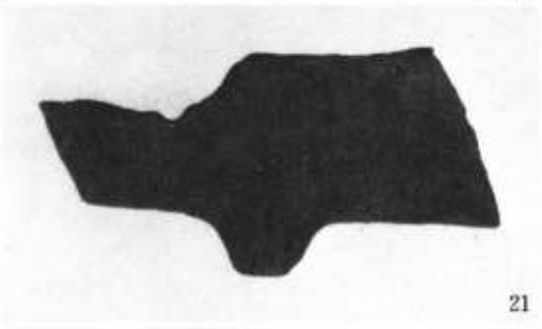
中国産磁器

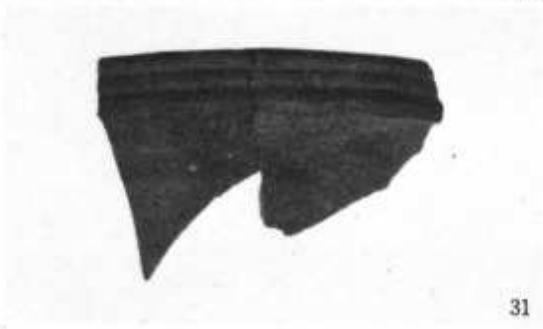


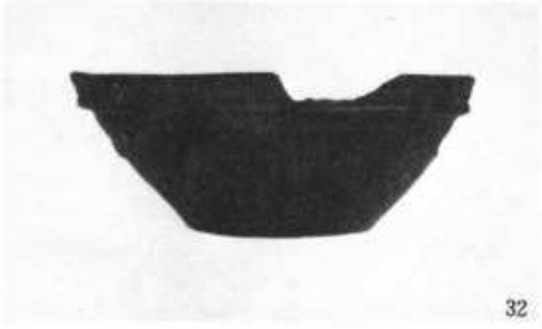
同　裏面


18


20


21


31

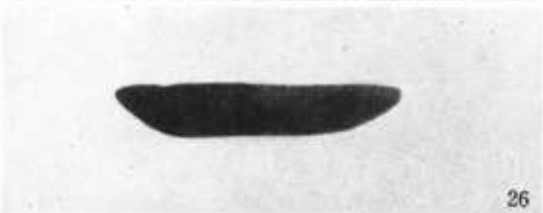

32

33

23

24

25


26

29

30

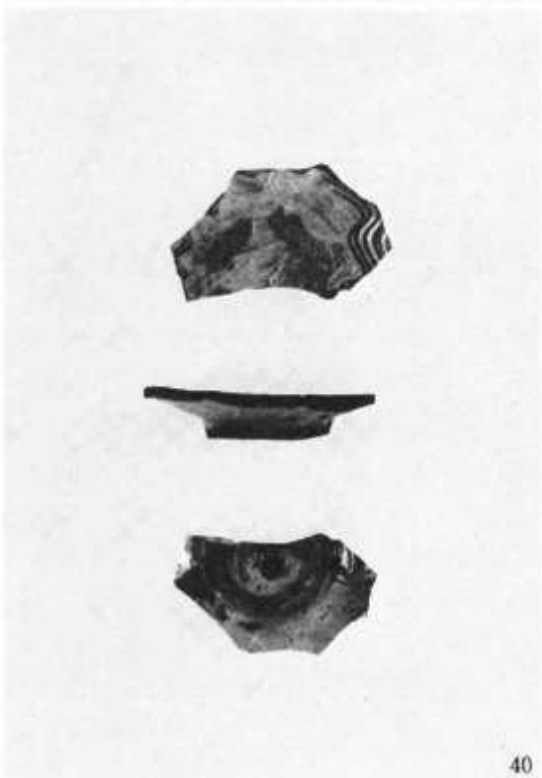
近世末期の出土遺物

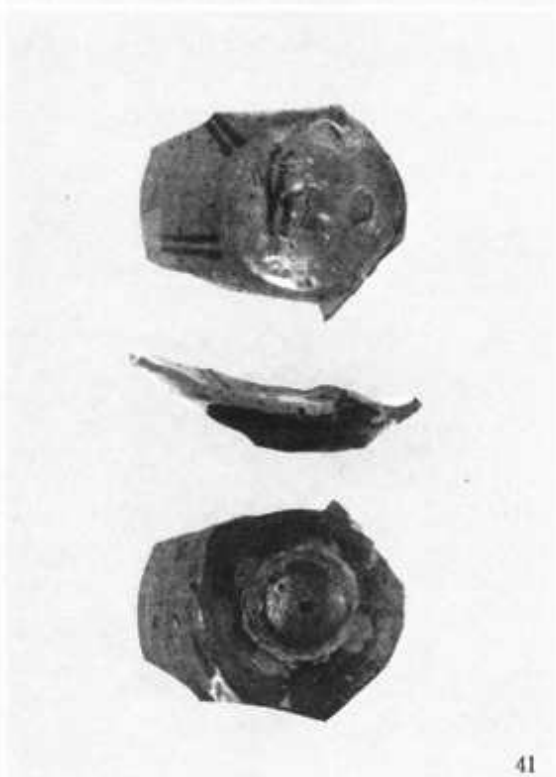
34

35

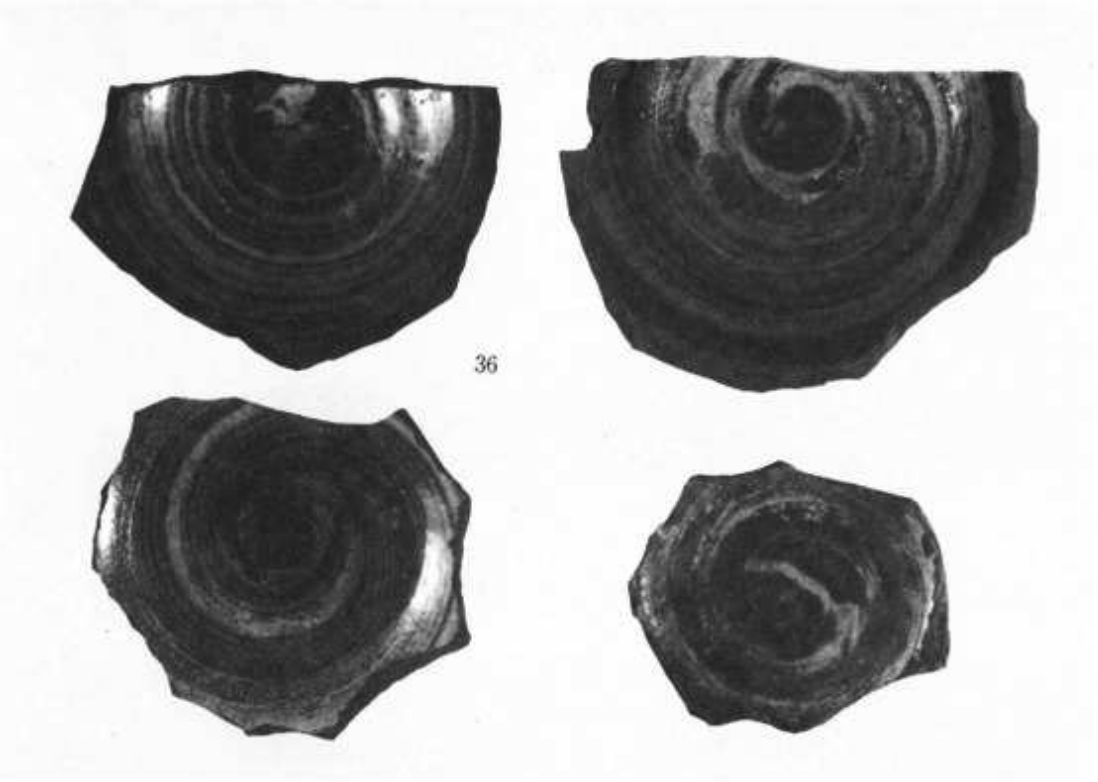
38

39

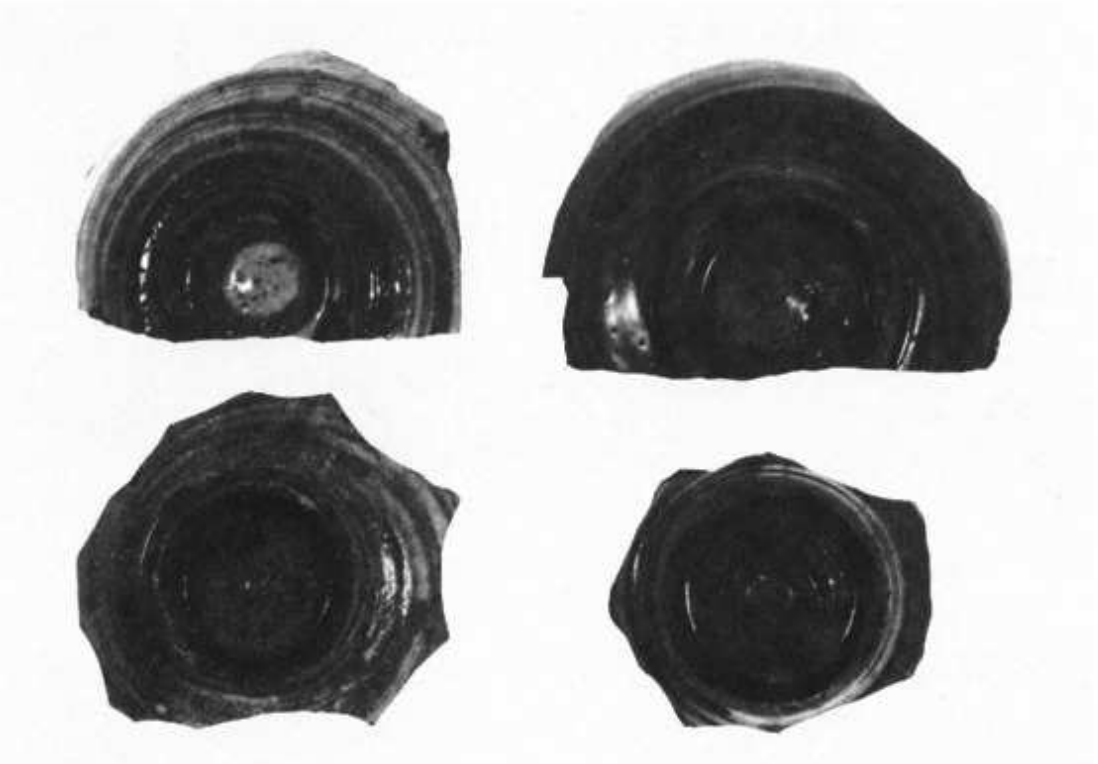

40


41

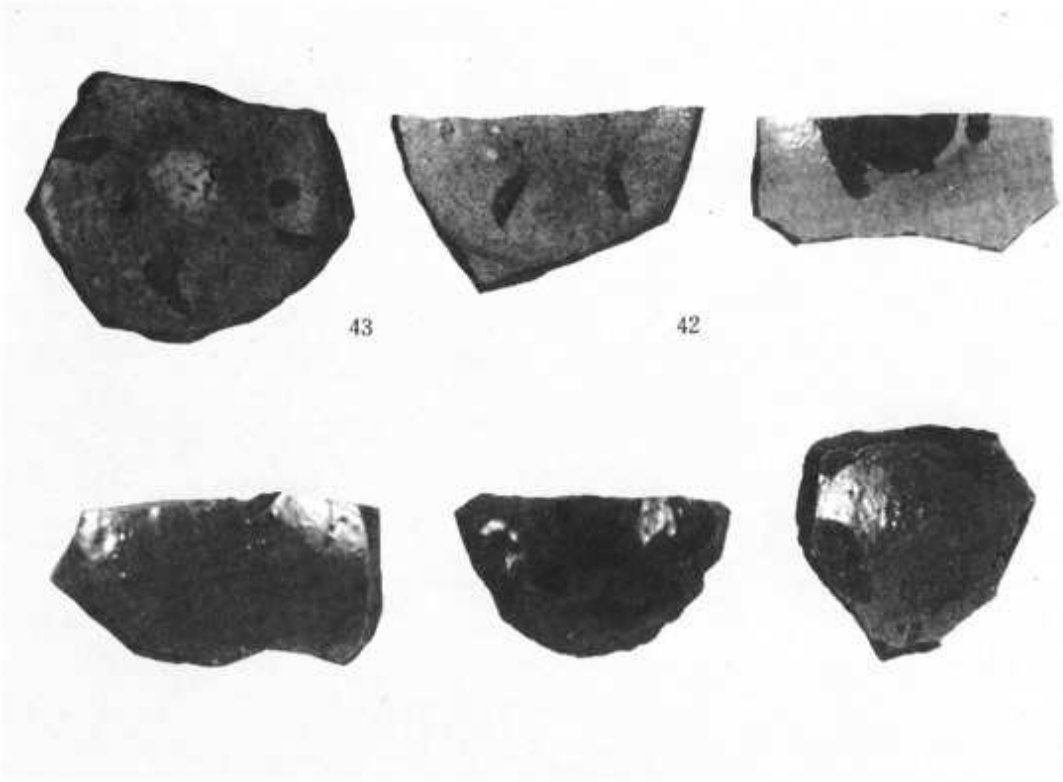
国産陶磁器（唐津焼碗・皿）



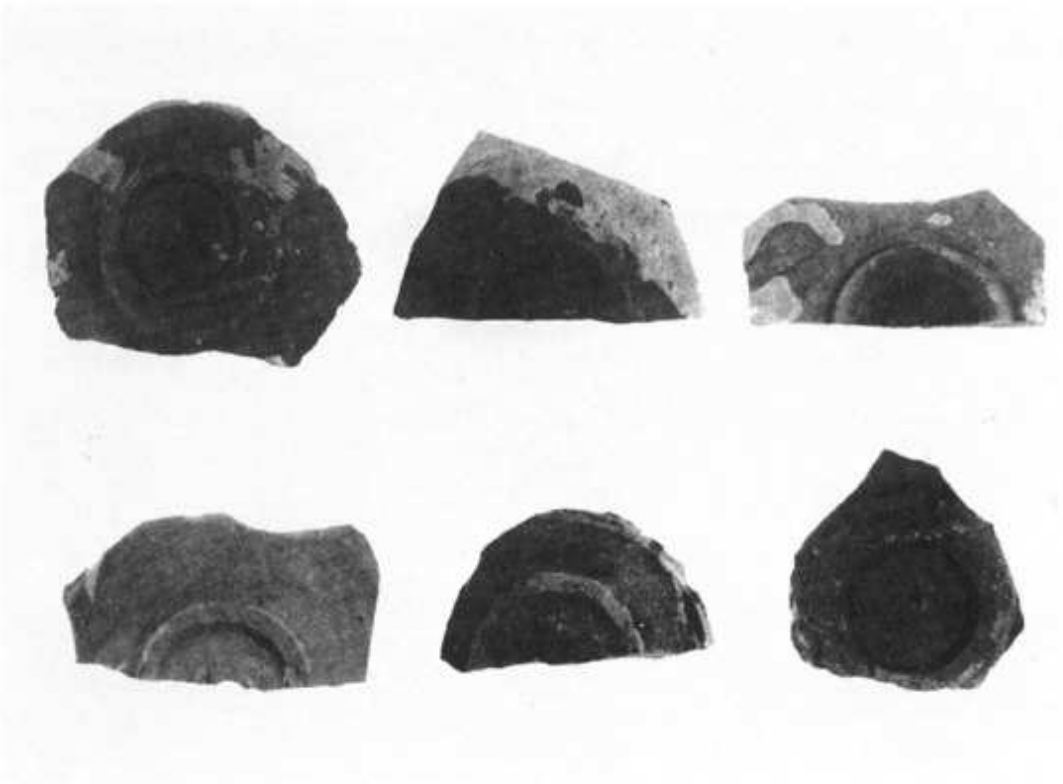
国産陶磁器（唐津焼碗）



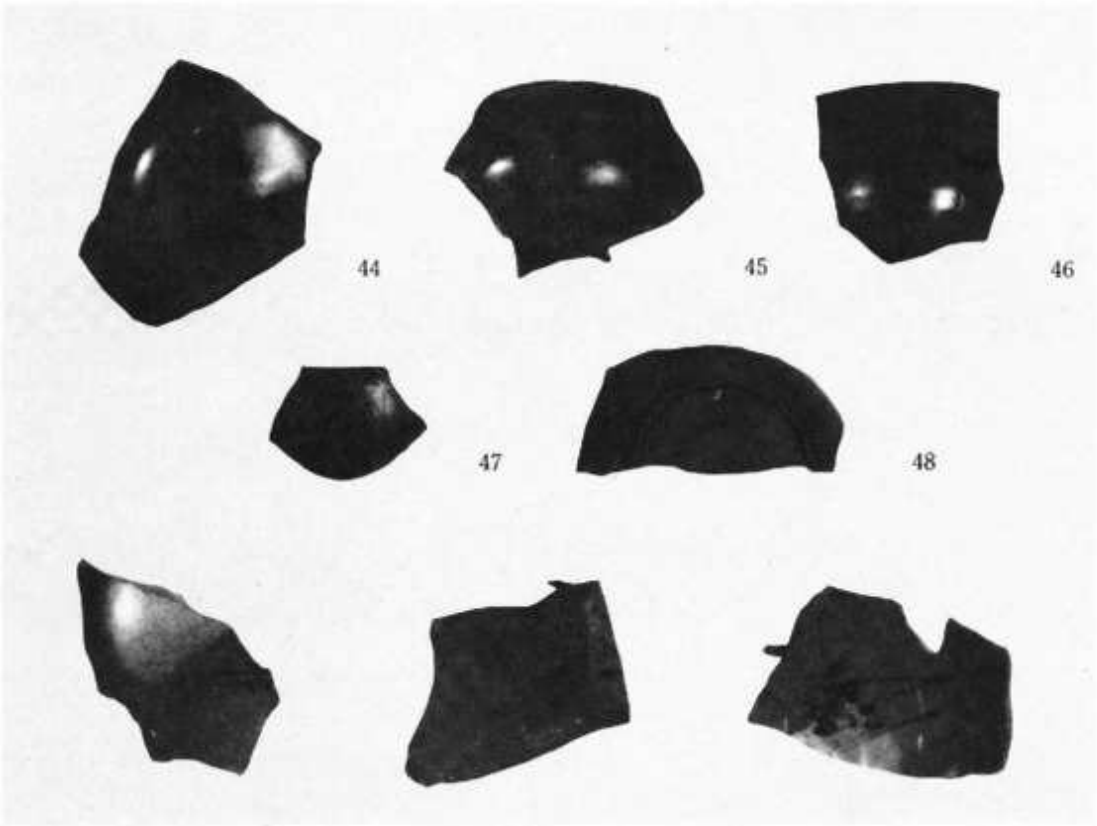
同　裏面

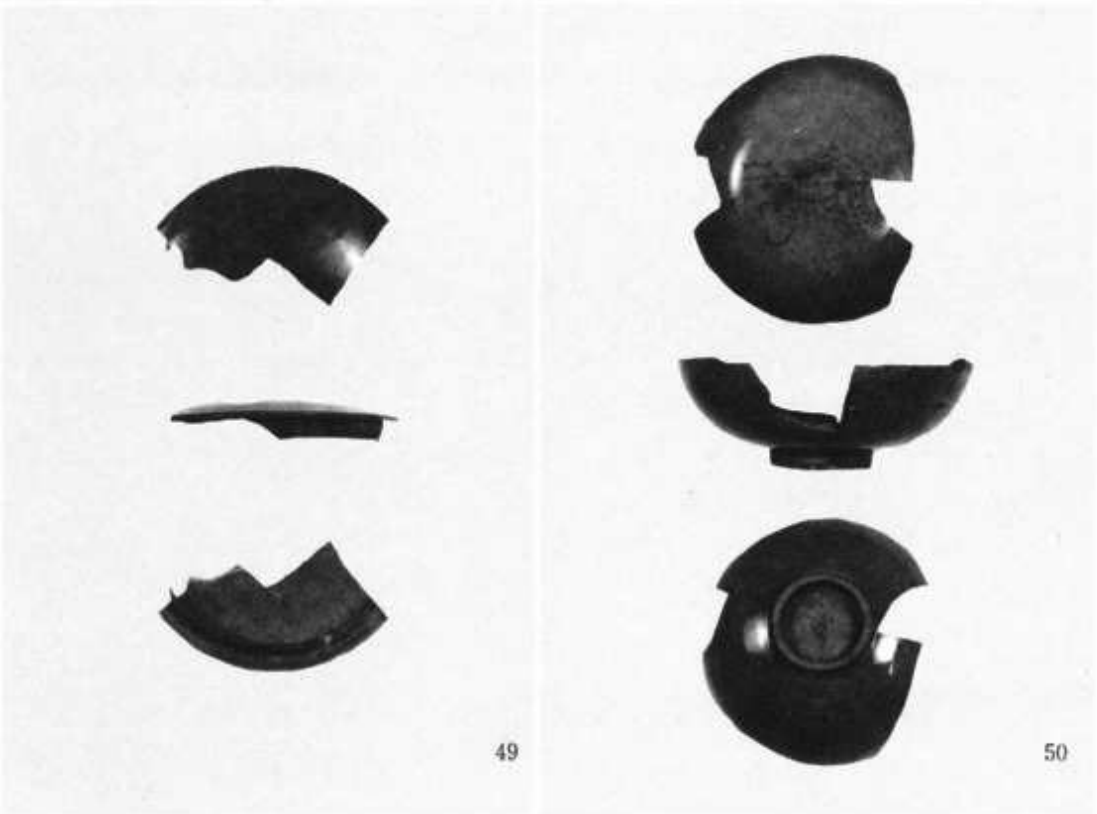


国産陶磁器（唐津焼皿）

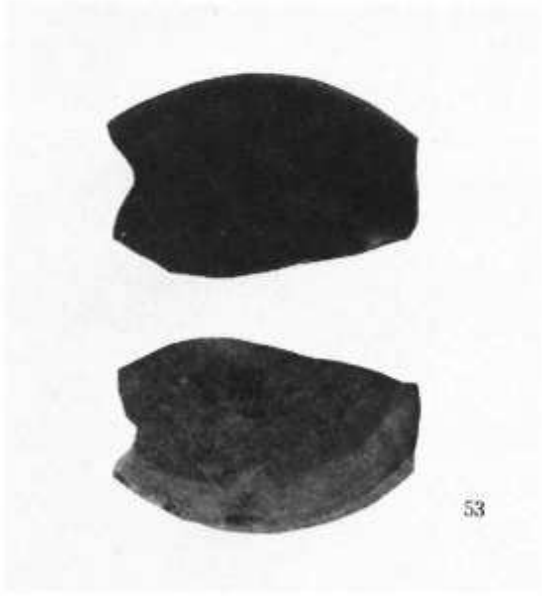


同　裏面





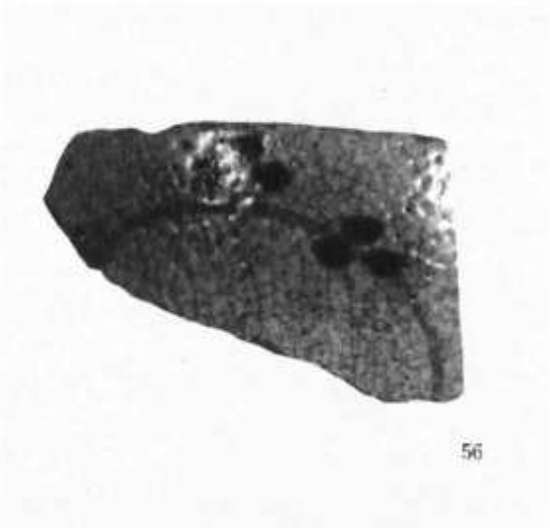
国産陶磁器（京焼碗・蓋）



53

54

55



56

57

国産陶磁器（瀬戸焼小皿・碗、志野焼碗、朝鮮産碗）

国産陶磁器（伊万里焼系碗A類）

74

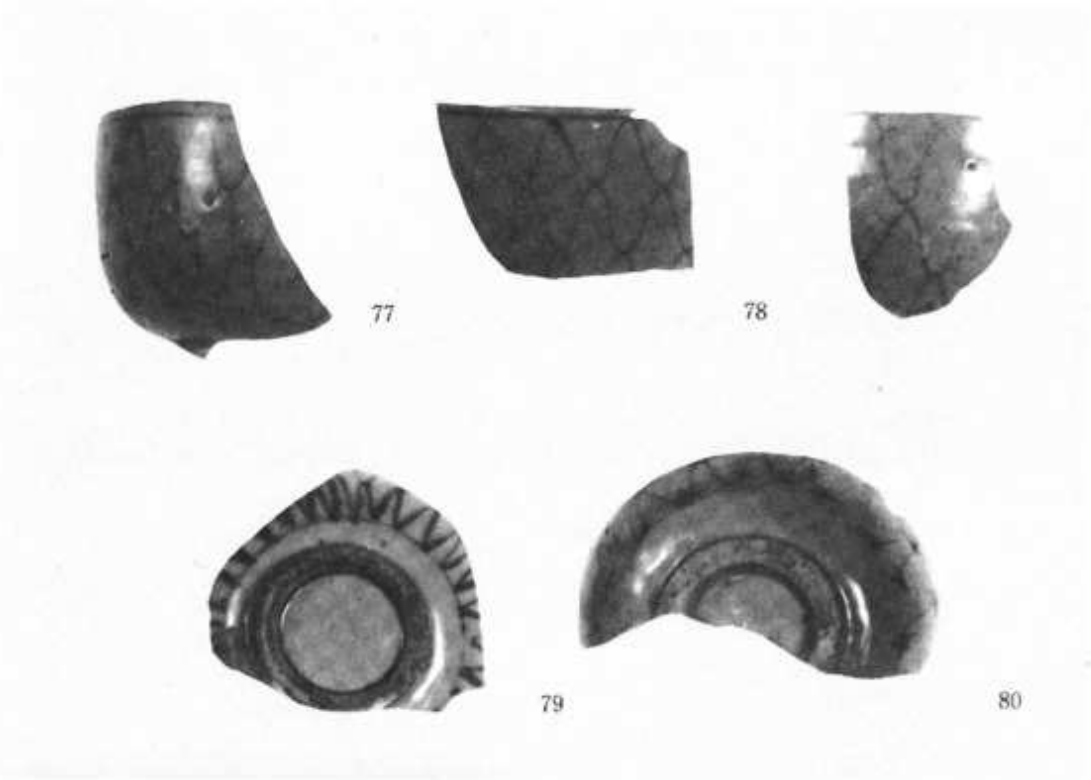
70

75

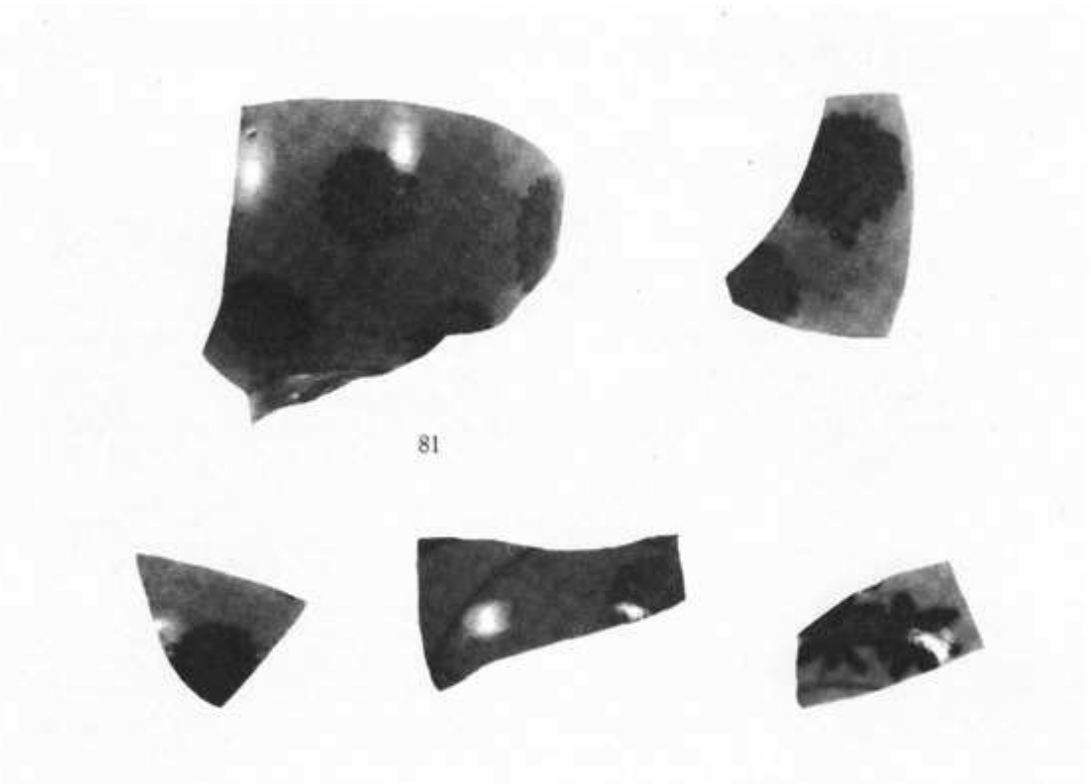
72

76

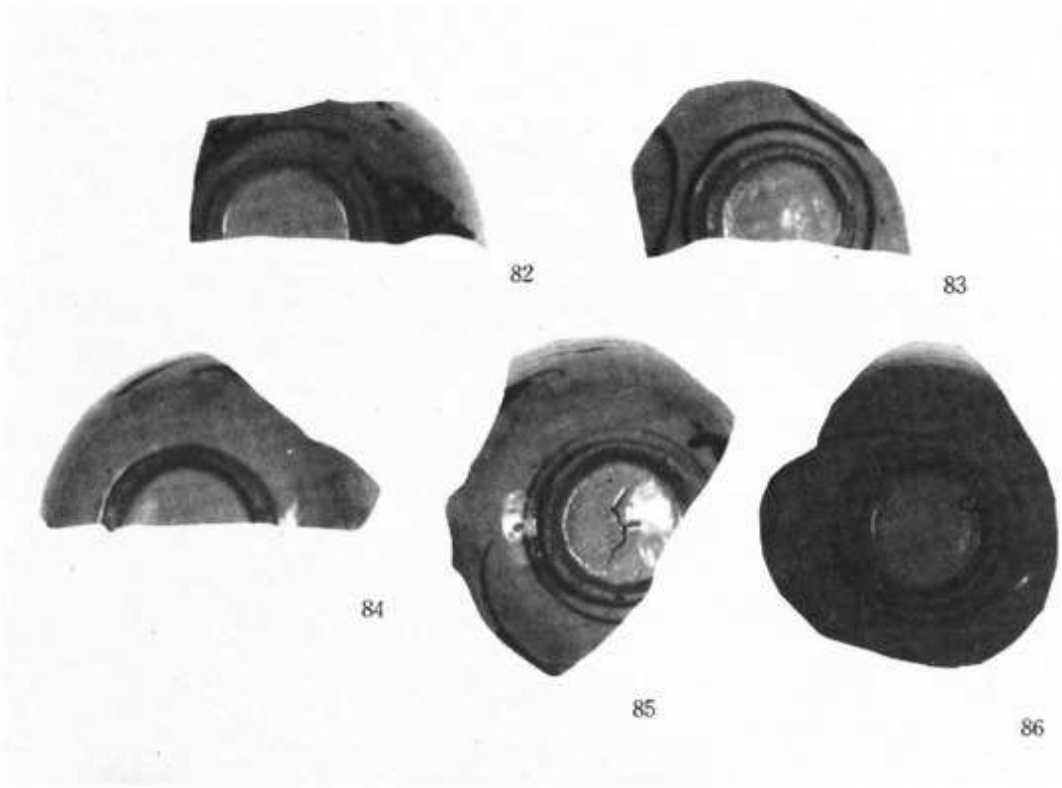
国産陶磁器（伊万里焼系碗B・C類）



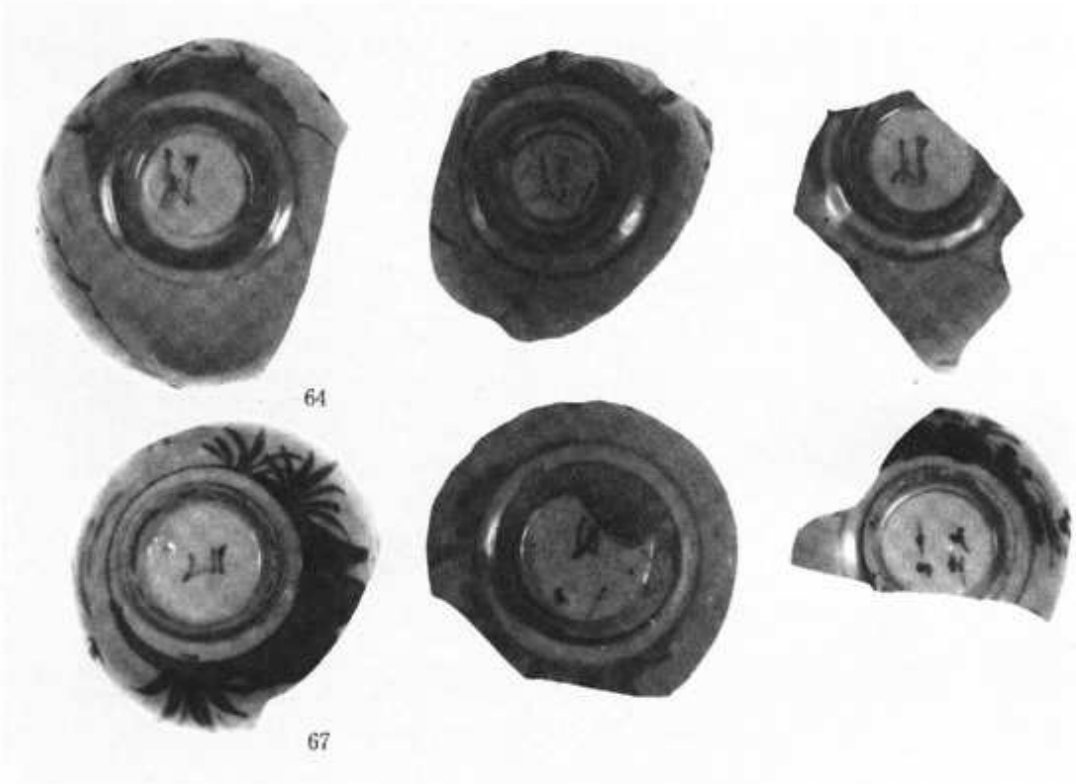
国産陶磁器（伊万里焼系碗D類）



国産陶磁器（伊万里焼系碗E類）



国産陶磁器（伊万里焼系碗F類）



国産陶磁器（伊万里焼系碗高台裏銘）

87

88

89

90

91

92

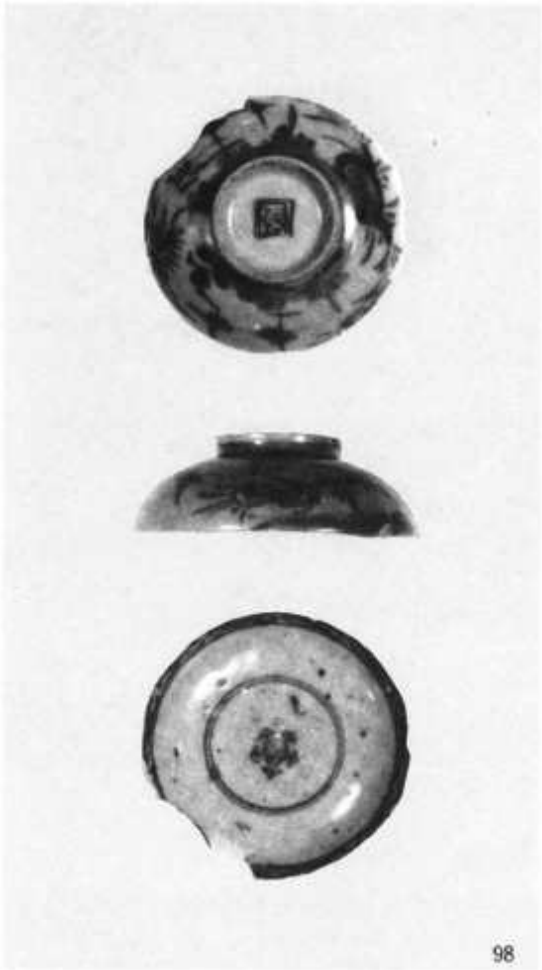
94

95

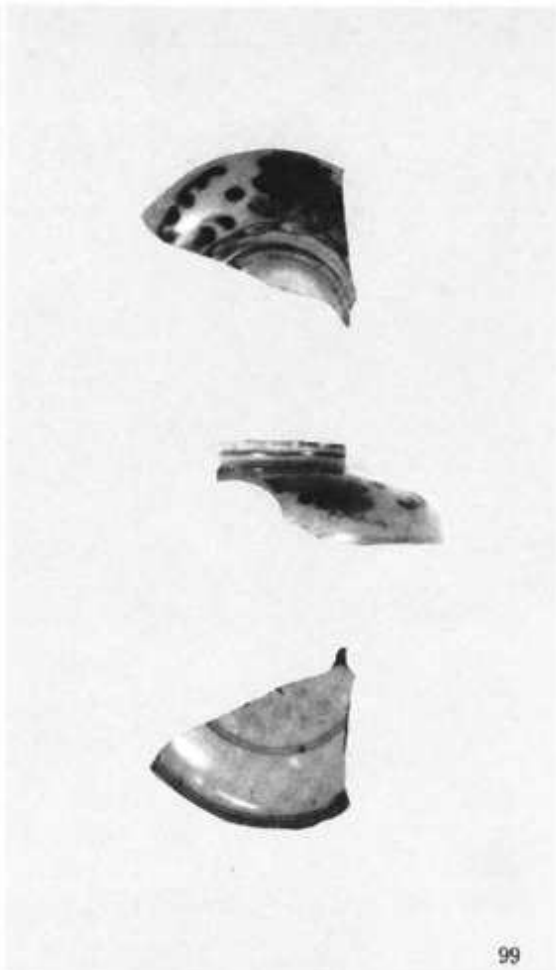
96

97

国産陶磁器（伊万里焼系猪口）

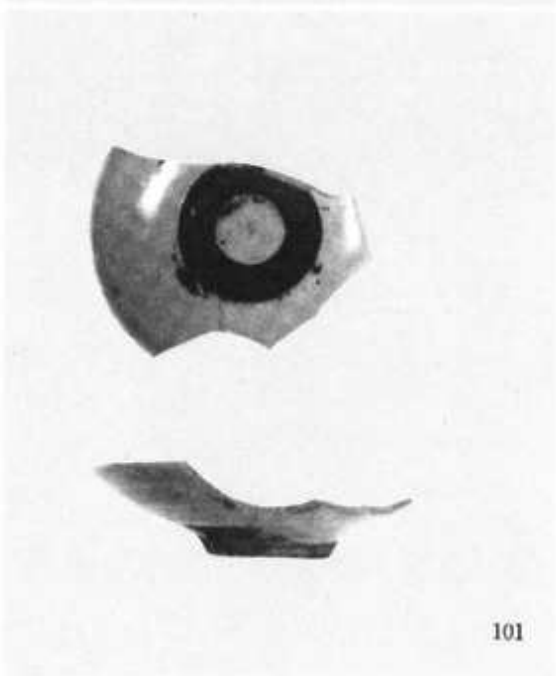


98



99

100



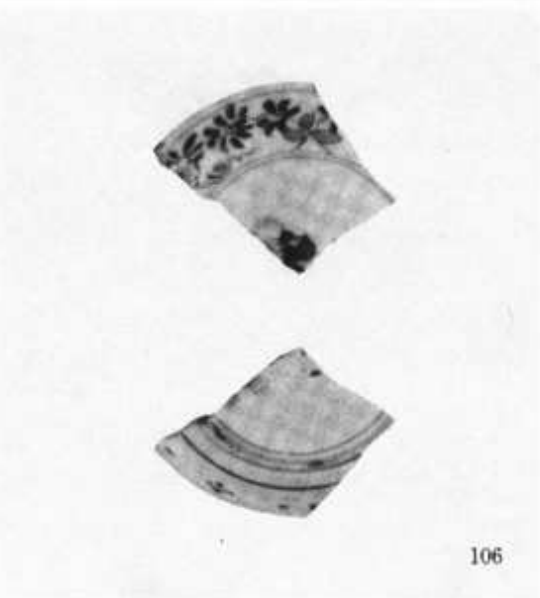
101

国産陶磁器（伊万里焼系蓋・小皿）

103

104

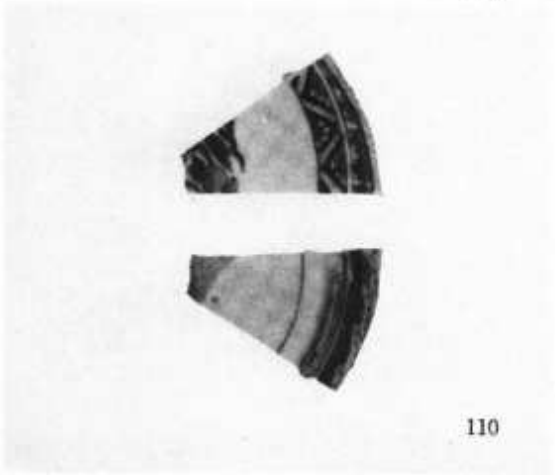
105



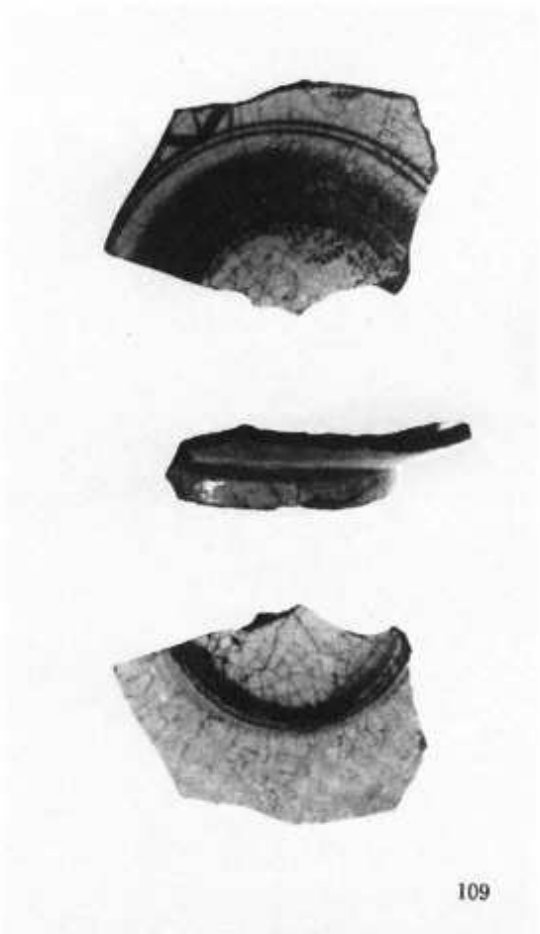
106

国産陶磁器（伊万里焼系中皿）

107

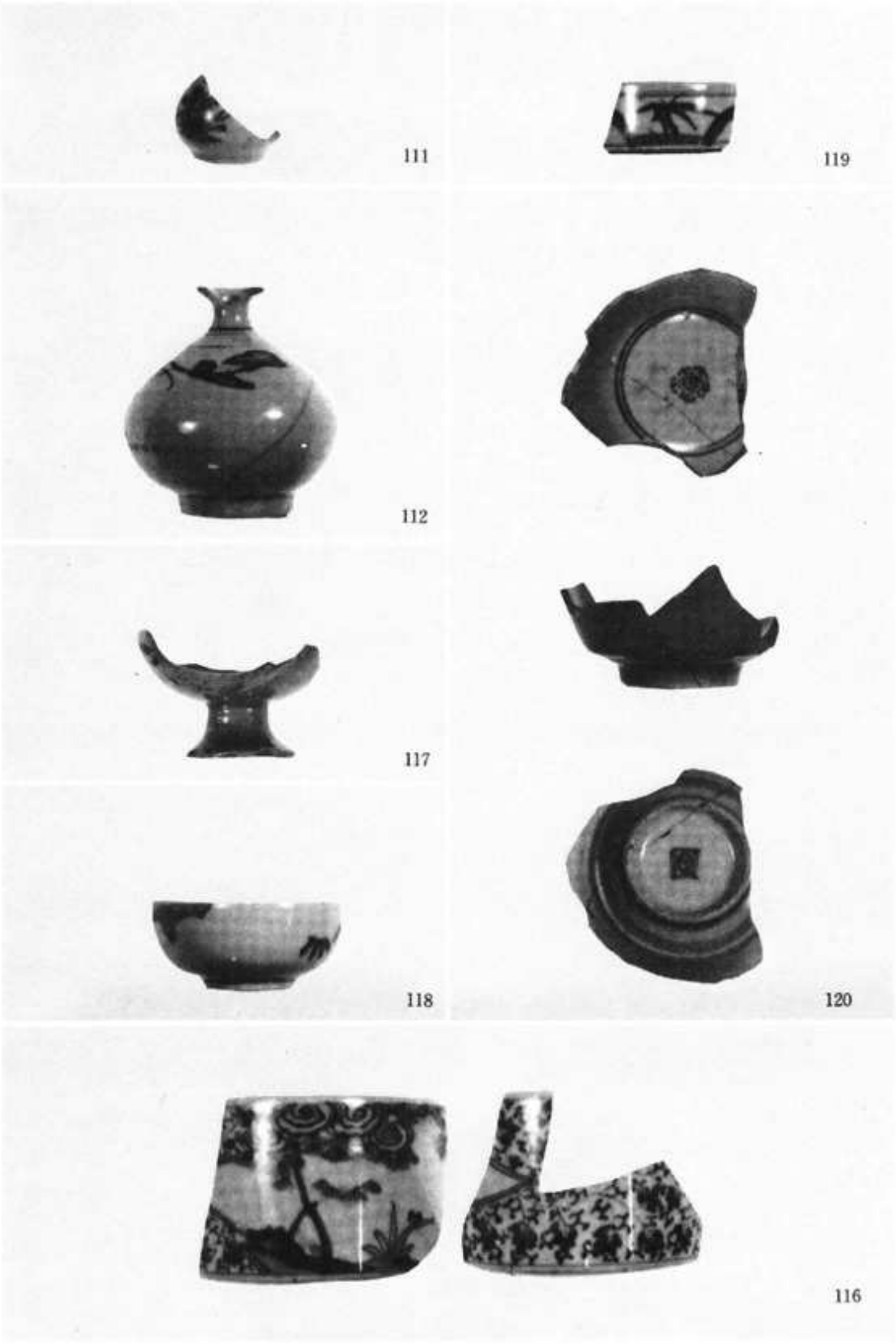


110

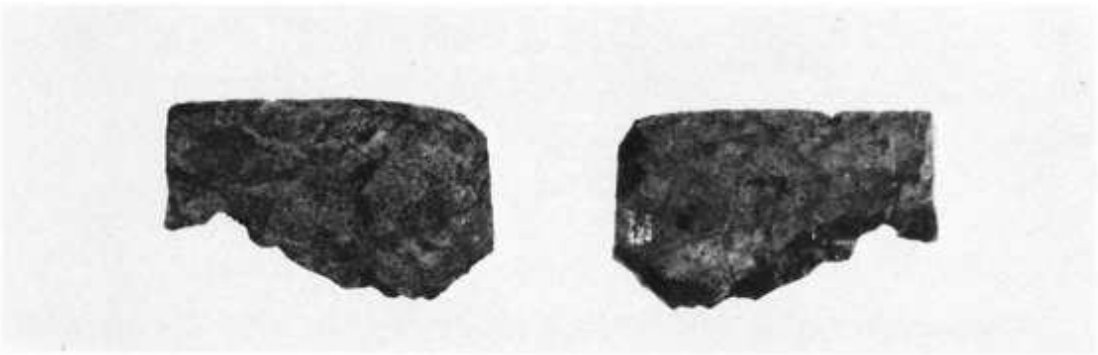


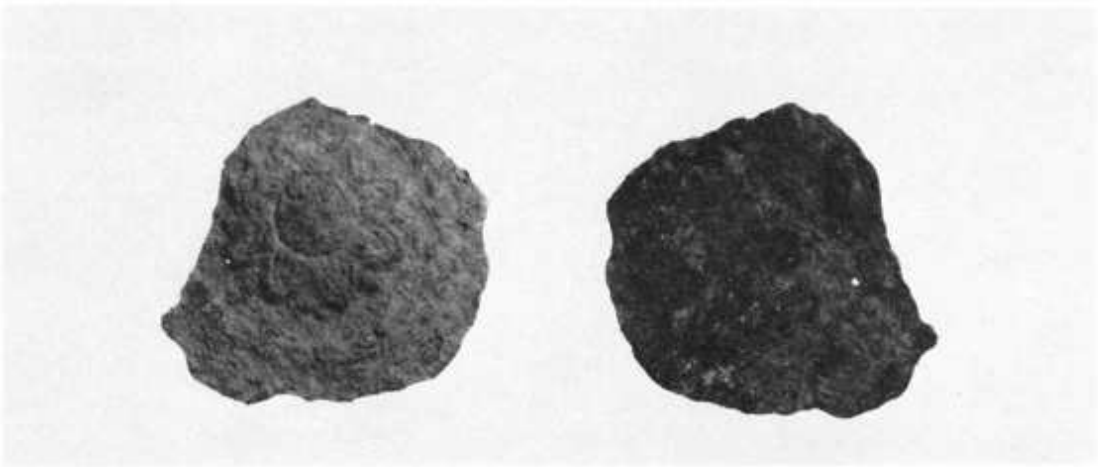
109

国産陶磁器（伊万里焼系大皿）



国産陶磁器（伊万里焼系磁器その他の器種）





石鍋・鉄製品・一石五輪塔

第 2 章

水越遺跡発掘調査概要報告

例　　言

1．本章は八尾市千塚349番地他において実施した、八尾市消防署北東部出張所新築工事に伴う発掘調査の概要報告である。

1．現地調査は昭和57年３月23日から４月13日にかけて、八尾市教育委員会文化財室が西村公助を担当者として実施した。なお調査においては、北尾耕三・駒澤敦・中野慶太・中野健太郎・山西嘉彦が参加した。

1．内業整理は昭和57年７月１日から、(財) 八尾市文化財調査研究会が引き続き実施した。

1．報文は主に西村公助が執筆し、Ⅶ出土遺物観察表は成海佳子が分担した。また、本書作成に係るレイアウト・トレース等の作業は西村公助・成海佳子・原田昌則が協力して行った。

本　文　目　次

Ⅰ　調査に至る経過……73
Ⅱ　調査の方法……74
Ⅲ　層序……74
Ⅳ　検出遺構……75
　1）上層遺構……75
　2）下層遺構……76
Ⅴ　出土遺物……76
　1）土器……76
　2）石器……78
Ⅵ　まとめ……79
Ⅶ　出土遺物観察表……84

挿 図 目 次

第1図　調査地周辺図……73
第2図　調査区設定図……74
第3図　西壁断面図……74
第4図　平面図……75
第5図　出土遺物実測図1(壺)……80
第6図　出土遺物実測図2(鉢・高杯)……81
第7図　出土遺物実測図3(甕)……82
第8図　出土遺物実測図4(石器)……83

挿 表 目 次

第1表　石器法量表……78

図 版 目 次

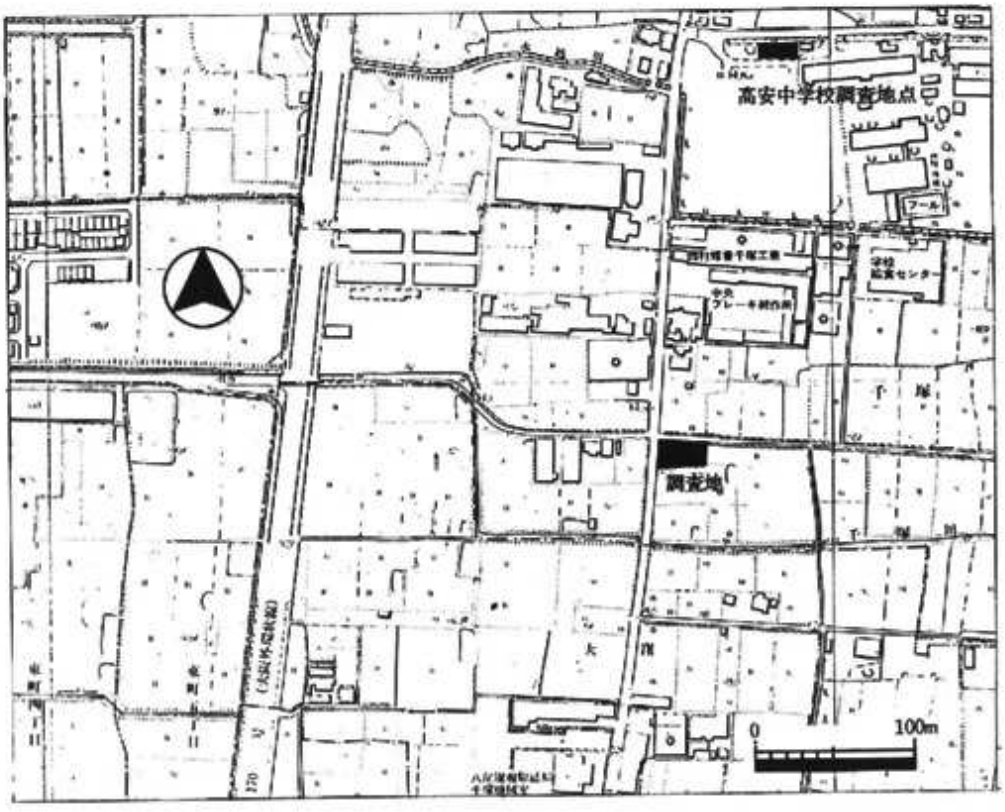
図版一　上層遺構
　　下層遺構
図版二　自然河道1検出状況
　　同上　遺物出土状況
図版三　出土遺物(壺・鉢)
図版四　出土遺物(鉢・高杯)
図版五　出土遺物(甕)
図版六　出土遺物(甕・底部有孔土器)
図版七　出土遺物(石器)
図版八　出土遺物(石器)

Ⅰ　調査に至る経過

八尾市北東部に位置する水越遺跡は、水越地区と千塚地区一帯に広がる遺跡である。付近一帯では従来より、縄文時代から弥生時代に至る石器および土器類の他、玉の原石とみられる石材・勾玉・管玉等の未製品が出土している。特に玉造りに関係した遺物は、当遺跡東方の山腹に玉作部一族の祖神を祀る玉祖神社が鎮座しており、古代の玉造集団の存在を示唆する資料として注目されてきた。しかし、発掘調査による資料に乏しく、遺跡の詳細は不明であった。[註1]

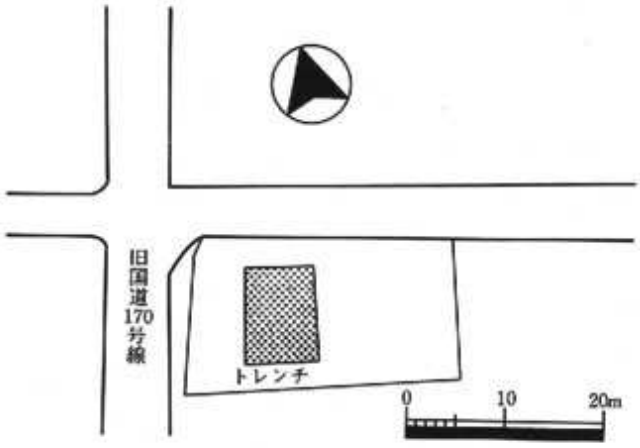
ところが、昭和53年度に実施された大阪府立清友高等学校新設工事に伴う事前発掘調査で、[註2]弥生時代中期から鎌倉時代に至る遺構・遺物が確認され、付近一帯に複合遺跡が広がることが認識された。その後、新たな調査も実施されず現在に至っている。

このような状勢下、八尾市消防署より八尾市千塚349—1他に仮称「八尾市消防署北東部出張所」新築工事計画の届出書が、八尾市教育委員会を経由して、文化庁へ提出された。当教育委員会では、工事予定地が周知の水越遺跡の範囲内にあることや、上記調査地の西方500m に位置する関係から、遺構・遺物等の存在の確認が必要であると判断し、発掘調査を実施するに至った。



第1図　調査地周辺図

Ⅱ 調査の方法



第2図　調査区設定図

建築工事予定地内に7×10mのトレンチを設定した。調査方法は盛土を機械で掘削し、以下の各層については、すべて作業員による手掘りで実施した。

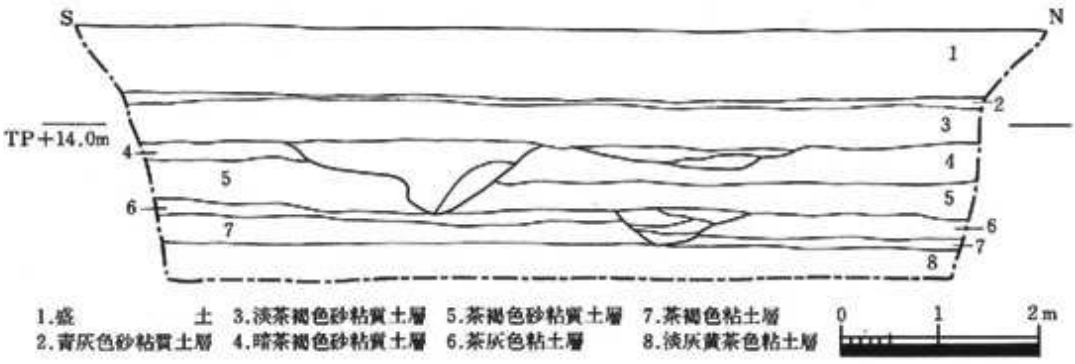
調査では、第2層(青灰色砂粘質土層)以下の各層について順次観察を行い、遺構を検出した第4層(暗茶褐色砂粘質土層)・第6層(茶灰色粘土層)上面で実測・写真撮影等の必要な記録作業を行った。

調査期間は昭和57年3月23日から4月13日で、調査面積は70㎡を測る。

Ⅲ 層　　序

当調査区における基本的な層序は、第1層盛土・第2層青灰色砂粘質土層・第3層淡茶褐色砂粘質土層・第4層暗茶褐色砂粘質土層・第5層茶褐色砂粘質土層・第6層茶灰色粘土層・第7層茶褐色粘土層・第8層淡灰黄茶色粘土層である。

そのうち第3層は遺物包含層で、弥生式土器・土師器等の細片が少量出土している。第4層上面は弥生時代中期の遺構**自然河道1・SD－1**が存在する遺構面である。第5層からは弥生式土器の破片が少量出土している。第6層上面は、弥生時代中期以前と推定される遺構**自然河道2**が存在する遺構面である。第7層・第8層は無遺物層であった。



第3図　西壁断面図

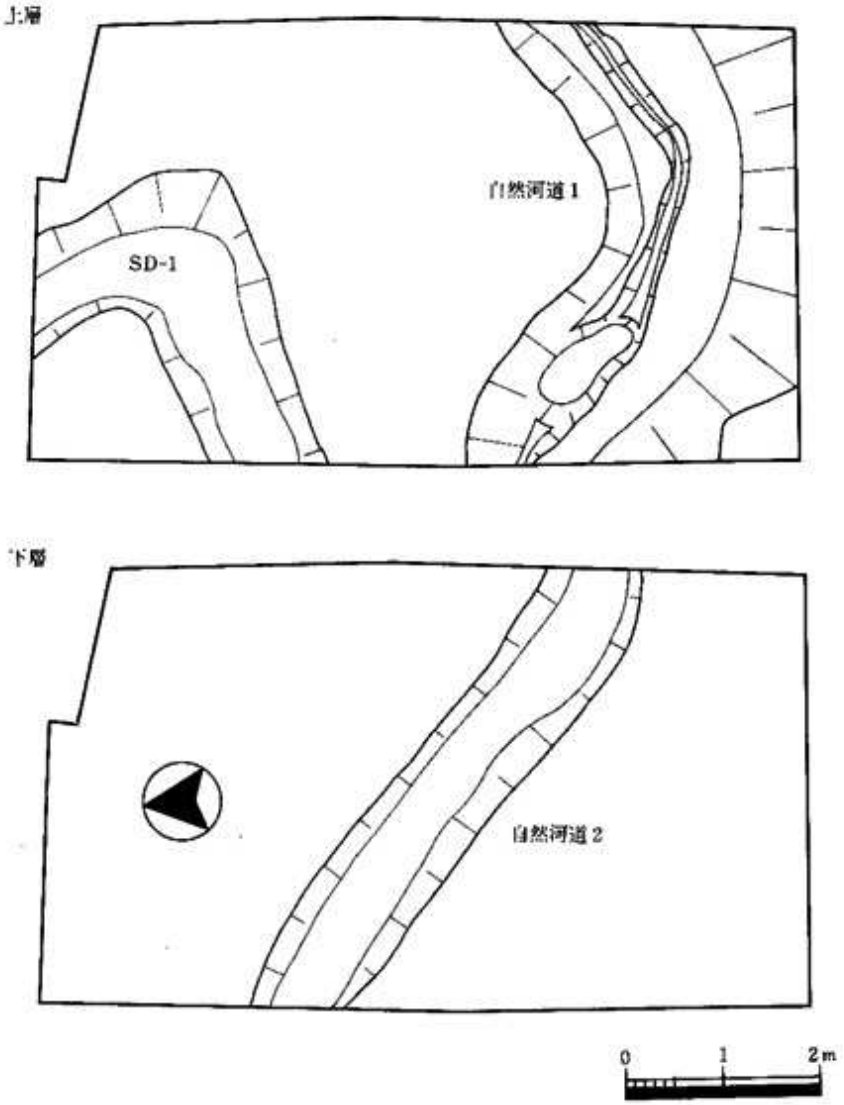
Ⅳ 検 出 遺 構

遺構には、第4層上面をベースとするもの**自然河道1・SD－1**と、第6層上面をベースとするもの**自然河道2**がある。以下、前者を上層遺構、後者を下層遺構と付称し記述する。

1） 上層遺構

自然河道1

調査区の南で検出した。トレンチ東側より南西約2m地点でくの字形に屈曲し、北西方向に流路を変える。西側の河道幅は約2.6mを測るが、東側は河道南肩が調査区外に広がるために不



第4図 平面図

明である。南の肩部は途中まで緩やかに下った後、傾斜を急にして底部に達するが、北側は緩やかな傾斜を呈して底部に至る。深さはほぼ0.7m を測るが、屈曲部の北東側には1m に達する部分も認められる。河道の堆積土層は、上層の暗茶灰色礫砂と下層の淡灰青色細砂の2層で構成されており、生駒西麓の扇状地上における小河川の一般的な状況を示している。遺物は上層から弥生式土器や石器が、コンテナ4箱程度出土している。そのほとんどが、屈曲部に溜った状態で出土しており、細片で磨耗を受けていた。

SD－1

調査地北西隅で検出した溝で、L字形を呈する。溝幅は約2m ・深さ約0.4m を測る。肩部は緩やかな傾斜をもち底部に達している。溝内の堆積土層は、上層の暗灰色細砂混粘土と下層の暗茶褐色細砂の2層が堆積する。遺物は暗灰色細砂混粘土層の上面より、弥生土器の細片が少量出土している。

2）下層遺構

自然河道2

調査区南東から北西の流路をもつ自然河道である。河道は幅約1.2m ・深さ約0.4m を測り、断面はU字形を呈する。内部の堆積土層は、上から灰色細砂・灰色砂混粘土・灰茶色細砂・暗灰色砂粘質土である。遺物は灰茶色細砂から少量出土したが、すべて細片で磨耗を受けており、時期は不明である。

V 出 土 遺 物

今回の調査で出土した遺物は、包含層で若干の土師器片が認められたが大半は弥生式土器および石器で、総量はコンテナ5箱におよぶ。このうち、弥生式土器は**自然河道1・SD－1**から出土している。しかし、**自然河道1**以外から出土した遺物はコンテナ1箱程度で、いずれも磨耗を受けており図上での復元が不可能であった。以上からここでは、比較的良好な資料が得られた**自然河道1**の出土遺物に限定して掲載する。なお、土器の分類に関しては、『弥生式土器集成 本編2』[註3]にもとづいた。

1）土器

壺用蓋　3

口縁部を残すもの3が出土した。口縁部は上方へ肥厚して面を持ち、細孔は2個1組のみ残存する。

壺　1・2・4～16

口縁部を残すもの9点と底部が遺存するもの4点の他、1様式の壺の頸部のみの破片1・2を図示している。

4は口縁端面に簾状文を施し、下端に刻み目文を持つ。5は口縁端部がわずかにつまみ上げぎみとなる。調整は指頭ナデおよびヨコナデである。6は外面へラミガキによる調整で、口縁端面と頸部に直線文を施す。7は口縁端部が下方へ肥厚する。8・9は受口状口縁を呈し、口縁端面に簾状文を施す。ともに外反した後内傾するが、8は上方にのみ、9は上下に拡張する。7～9はⅢ様式の壺Aである。10は口縁端部に大きな刻み目を入れ、鋸歯状をなす。11は口縁端部が上下方に肥厚し、端面に凹線文を施す。Ⅲ様式でも新しい要素を持つものと思われる。12は頸部に波状文と直線文を施す。11・12はハケナデによる調整で、色調とともに他の壺とは異なっている。

13～16は壺底部であろう。13は長く突出する底部で、14はわずかに突出する。15は底部外面にヘラミガキ、内面にハケによる調整を施す。16は上げ底状の底部で、底径8.0cmを測り大型である。

鉢　17～20・22・23

口縁部4点と台付鉢の脚台2点を図示している。17・19はⅢ様式の鉢A、22・23は台付鉢の脚部、26～28は大型の鉢Bに相当する。

17は直線的に開いた後内弯して立ち、外面に列点文を施す。18は外面に縦位の半環状把手が付く。外面には列点文を施し、把手の外側にも列点文・刺突文を持ち、口縁部内外面に刻み目を施す。19は口縁端部が内方に肥厚し、外面に列点文を施す。20は口縁部がやや内傾し、側面に4条の凹線文を持つ。Ⅳ様式に相当する。

22・23は台付鉢の脚台部で、22の外面には円形の刺突文が遺存している。23は外反する裾部外面に竹管押圧文を施す。Ⅲ様式のものである。

大型の鉢のうち、26・27は外面に簾状文を施し、28は体部に波状文・斜格子文・列点文を施す。

高杯　21・24・25

柱状部および裾部を図示した。21は柱状部が中実で、Ⅲ様式古段階に属する。24はあまり広がらない裾部で、端部が上方に少し肥厚する。25は緩やかに広がる裾部で、端部は上方に肥厚する。24・25は内面にヘラケズリを施すもので、Ⅲ様式新段階～Ⅳ様式に比定される。

甕　29～45

29～33は体部の張りが少なく、口縁部が外反し丸く終るものである。29は内外面にヘラミガキを施す。30は内面にヘラミガキ、外面にはヨコナデを施す。31は内外面とも横ナデ、32は体部外面ハケ、内面ヘラナデを施す。33は内面ハケによる調整を施している。底部34は外面にハケ目が残るもので、33と同一個体と思われる。

35～39は体部が張り出す器形を呈する。35～37は口縁端部がつまみ上げぎみとなる。38は口

縁端部に丸みのある面を持つ。39は口縁端面に刺突文を配するⅢ様式の甕である。

40～43は甕底部である。40は突出する平底を呈する。41は外底面に籾殻の圧痕が遺存している。42・43は外面にヘラミガキによる調整を施す。

44・45はⅢ様式の大型甕に相当する。44は口縁部が下方に拡張され、広い面となる。45は口縁端部が下方に肥厚し、上方へは尖りぎみで終る。

底部有孔土器　46・47

46・47はともに底面中央に焼成後の孔を持つ。47は突出しない平底を呈し、底面の器肉は極めて厚い。

2）石　器

敲打器　1

角丸の正方形に近いもので、背面に自然面を残す。2ケ所に使用痕と思われる細かい剝離が見られる。

楔形石器　2・3

2は三方に剝離痕が見られる。3は四側縁に打撃痕が見られる。

石槍未製品　4

縦長で、片面に大剝離面を残す。両側縁に調整剝離を施し、菱形の断面を形成する。素材面の打撃側と背面側に自然面が残り、石槍の製作途中のものと思われる。

磨製石剣　5

断面は扁平な菱形で両面に鎬を有するが、その位置は若干のずれを生じている。残存部の表面に斜方向の研磨痕が観察できる。

第1表　石器法量表

番号	器種	現存長	最大幅	厚さ	重さ
1	敲打器	8.0(cm)	8.3(cm)	3.6(cm)	270(g)
2	楔形石器	3.1	4.4	0.6	10
3	楔形石器	4.3	5.6	1.0	29
4	石槍未製品	7.2	4.7	2.0	60
5	磨製石剣	8.9	3.1	1.0	30
6	石庖丁	3.7	6.0	0.7	24
7	大型石庖丁	9.9	4.4	0.7	54

石庖丁　6

ほぼ直線的な刃部を持ち、半月形直線刃の形態で、刃は片刃である。両端は欠損している。背部寄りに2ケ所の紐孔が見られるが、それとは別に裏面から孔をあけようとした痕跡が2ケ所認められる。製作途中になんらかの要因が生じ、孔の位置を修正したものかと思われる。

大型石庖丁　7

両端を欠損し、全容は不明である。背部寄りに1ケ所の紐孔が見られる。

Ⅵ　ま　と　め

今回の調査は、調査範囲に制限があり、しかも面積が狭小であったため、検出した遺構の広がりをつかむまでには至らなかった。遺物に関しても、大半が自然河道の流出礫砂層内から、細片で磨耗を受けた状態で出土しており、一等資料とは言い難い。

ただ、当調査地の北東約500m地点で昭和53年度に大阪府教育委員会が実施した調査では、弥生時代中期～鎌倉時代に至る遺構・遺物を検出している。また、当調査地付近の水越181番地で昭和57年に実施した調査では、弥生時代前期～古墳時代前期に至る遺構・遺物を検出している[註4]。さらに、千塚169他で昭和58年に実施した立会調査では、弥生時代中期の甕がほぼ完形で出土している[註5]。以上の調査結果に今回の調査地をあわせて考えると、水越遺跡の性格や遺跡範囲を推定するうえで重要な地点での調査であったと言えよう[註6]。

一方、生駒西麓の遺跡は、各時期毎に立地を異にして連綿と営まれてきたことが、東大阪市域の調査成果等から提唱されている。当調査地の所在する水越遺跡を含めた八尾市域に関しても同様の推移があったものと考えられるが、全体に調査例が乏しく、現段階では断言し難い。今後これらの問題を踏まえて、総合的な意味で、八尾市域の生駒西麓に位置する遺跡を考えて行く必要があろう。

註1　原田修・久見健・島山和子「清原得巖所蔵考古資料図録」－高安の遺跡と遺物－『大阪文化誌第2巻・第2分・通巻第6号』（財）大阪文化財センター　1976年

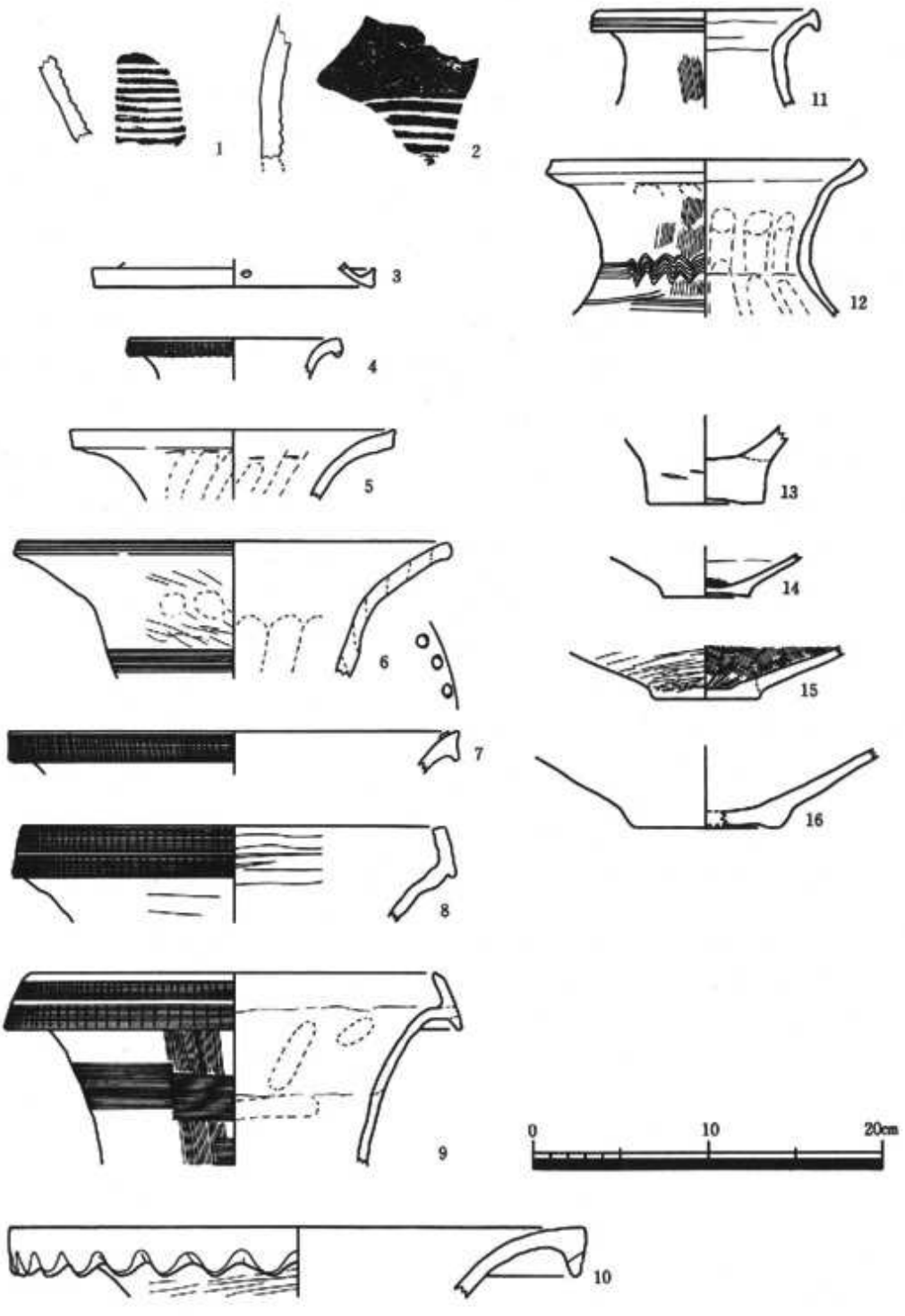
註2　大阪府教育委員会が発掘調査を実施した。

註3　佐原真「畿内地方」『弥生式土器集成本編』1968年

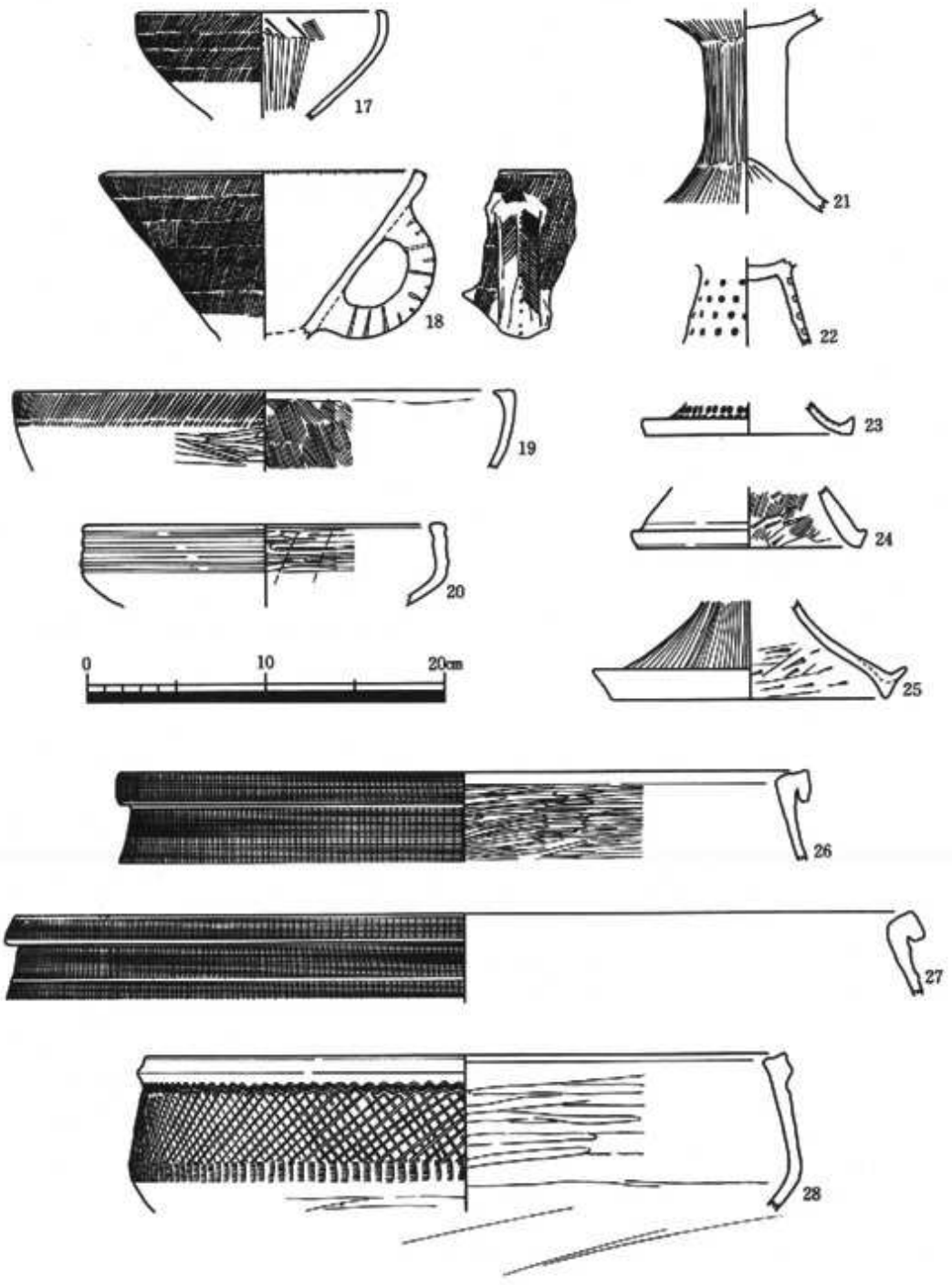
註4　当該地では、水越遺跡の性格を知る上で重要な遺構・遺物が出土しており、当調査の報告書の刊行が待たれる。

註5　八尾市教育委員会『昭和57年度における埋蔵文化財発掘調査』　その成果と概要－　1983年

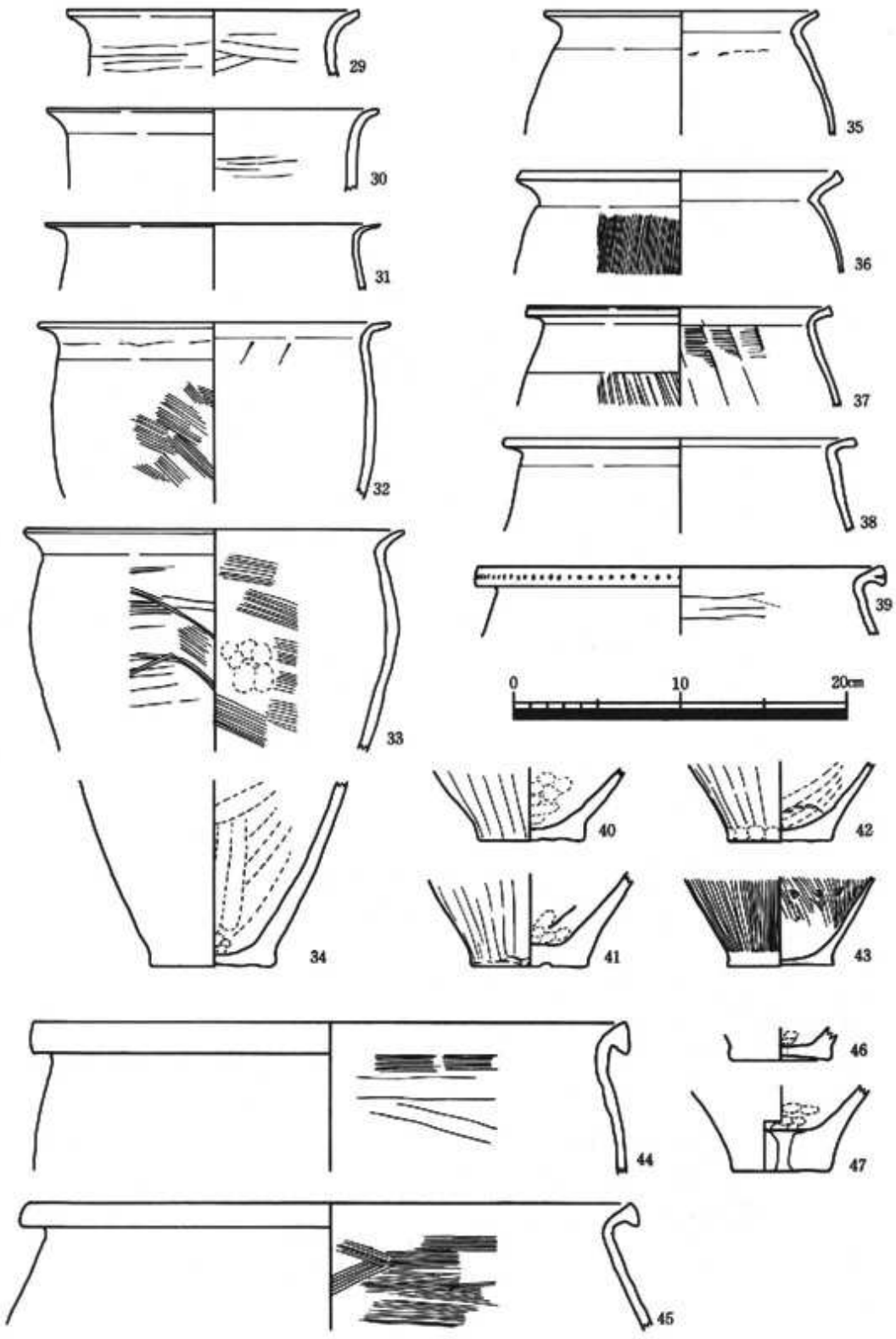
註6　八尾市教育委員会「八尾市内遺跡昭和57年度発掘調査報告書」－教興寺の調査－『八尾市文化財調査報告9』1983年



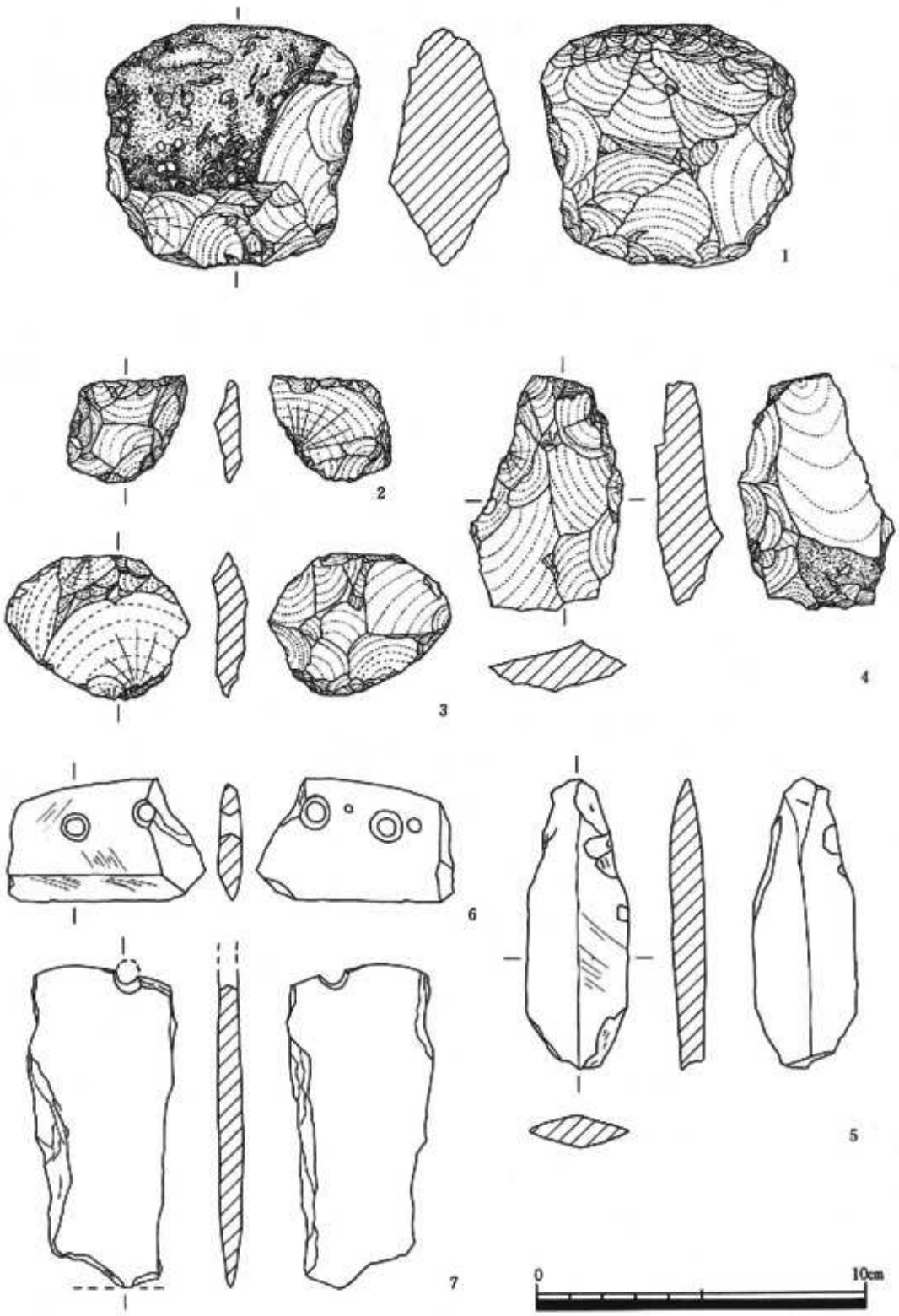
第５図　出土遺物実測図１（壺）



第6図　出土遺物実測図2（鉢・高杯）



第7図　出土遺物実測図3（甕）



第8図　出土遺物実測図4（石器）

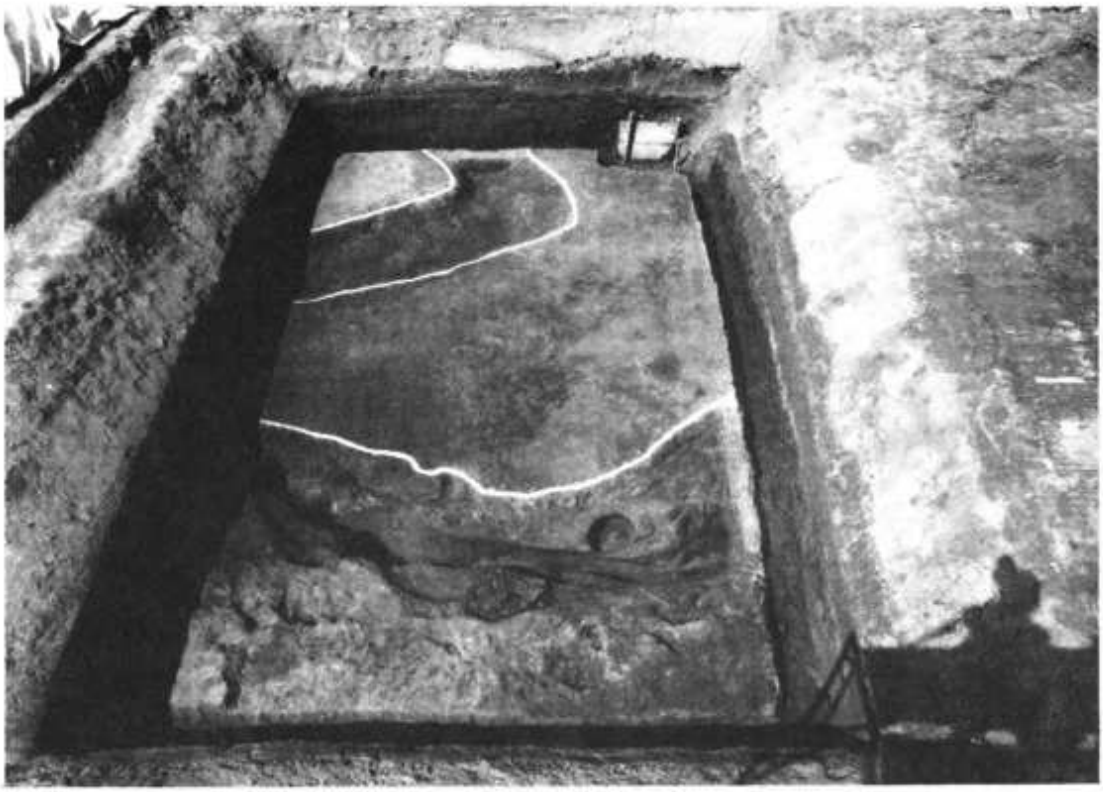
Ⅶ　出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	形　態	調　整	色調・胎土・焼成	備　考
3	蓋用蓋	口径16.0	口縁部は上方に拡張し、端部は垂直な面をもつ。 紐孔は2孔1組残存。	ヨコナデ。	・茶褐色 ・胎土密 ・焼成良好	
4	壺	口径12.0	丸く外反する口縁部。 端部は下方へ丸く肥厚し、外傾する面を作る。 口縁端面に簾状文、下端に刻み目文を施す。	ヨコナデ。	・茶褐色 ・胎土密 ・焼成良好	
5	壺	口径18.4	外反する口縁部。 端部はつまみ上げぎみとなり、垂直な面を作る。	指頭圧ナデの後ヨコナデ。	・茶褐色 ・胎土密 ・焼成良好	
6	壺	口径24.5	外傾する頸部から屈曲し、なだらかに開く口縁部。 端部は面となる。 端部・頸部に櫛描き直線文を施す。	指頭圧ナデの後外面ヘラミガキ。	・赤褐色 ・胎土粗 ・焼成甘く軟質	
7	壺	口径25.6	下方に肥厚し、外傾する凹面となる口縁端部。 端部に簾状文を施し、口縁上端に円形浮文を貼付する（3個残存）。	ヨコナデか。	・茶褐色 ・胎土やや粗 ・焼成良好	
8	壺	口径24.5	直線的に開いた後、内傾して立ち上がる受口状口縁部に至る。 上端は内傾する面となり、下端はわずかに肥厚する。 口縁側面に2帯の簾状文を施す。	指頭圧痕・ヘラの圧痕が認められる。	・茶褐色 ・胎土粗 ・焼成良好	
9	壺	口径23.2	なだらかに開く頸部から水平近くに外反し、内傾して上下に拡張する受口状口縁部に至る。 端部は上下とも尖りぎみに終る。 口縁側面に2帯の簾状文、頸部に直線文を施す。	口縁部ヨコナデ。 外面ハケナデ。 内面指頭圧ナデ。	・茶褐色 ・胎土密 ・焼成良好堅緻	
10	壺	口径32.8	水平近くに外反する大型の壺の口縁部。 端部は下方に垂下し、垂直な広い面を作る。 口縁下端にはヘラによる大きな刻み目文を施す。	ヨコナデ。 外面にはヘラミガキの痕跡。	・茶褐色 ・胎土粗 ・焼成良好	
11	壺	口径12.3	内傾ぎみの頸部から屈折し、直線的に開く口縁部に至る。 端部は上下に肥厚する。 端部側面に3条の凹線文。	ヨコナデ。 外面頸部にハケナデ。	・黄茶色 ・胎土密 ・焼成良	外面に煤付着
12	壺	口径17.6	わずかに縮まる太い頸部から外傾して立ち、屈曲して内弯ぎみに開く口縁部に至る。 端部は上方へわずかにつまみ上げぎみとなり、外傾する凹面を作る。 頸部下方に直線文、波状文を施す。	口縁部ヨコナデ。 外面ハケナデ。 内面指頭圧ナデ。	・乳黄色 ・胎土粗 ・焼成やや甘く軟質	

番号	器種	法量(cm)	形態	調整	色調・胎土・焼成	備考
13	壺	底径6.4	長く突出する底部。 底面中央はわずかに凹む。 底面の器肉はきわめて厚い。	底部側面にヘラの圧痕が認められる。 内面表皮剥離。	・茶褐色 ・胎土粗 ・焼成良好	
14	壺	底径4.8	平たく開く体部から、わずかに突出する上げ底状の底部。 器肉はきわめて薄い。	内底面にくもの巣状のハケナデ。	・茶褐色 ・胎土密 ・焼成良好	
15	壺	底径5.8	14と同様の形態で、底面は平坦、内底面は窪む。	外面底側面に指頭圧ナデ、ヘラミガキ。 内面ハケナデ。	・暗茶褐色 ・胎土やや粗 ・焼成良好	
16	壺	底径8.0	14と同様の形態で大型のもの。	表皮磨耗のため不明	・茶褐色 ・胎土粗 ・焼成良好	
17	鉢	口径13.3	直線的に開き、内弯ぎみに立ち上がる直口の鉢。 端部は外傾する面となり、内に丸くつまむ。 外面に列点文を4帯施す。	ヨコナデ、ヘラミガキ。 内面にはハケ目がみられる。	・茶褐色 ・胎土密 ・焼成良好	
18	把手付鉢	口径17.0	口縁部まで直線的に開く直口の鉢。 端部は外傾する面となり、内外につまみぎみに終る。 外面に縦位の把手を持つ。 内外端に刻み目文、外面に6帯の列点文を施す。 把手の外面にも縦位の列点文2帯、中央に刺突文を施す。	不明	・暗茶褐色 ・胎土密 ・焼成良好堅緻	
19	鉢	口径27.8	内弯して立つ直口の鉢。 端部は水平な面となり、内につまんで終る。 外面上位に列点文を施す。	口縁部付近ヨコナデ。 外面ヘラミガキ。 内面ハケナデ。	・茶褐色 ・胎土密 ・焼成良好堅緻	
20	鉢	口径20.0	体部から丸く屈曲し、内傾ぎみに立ち上がり口縁部に至る。 端部は水平面となる。 口縁部には4条の凹線文。	外面ヨコナデ。 内面ヘラミガキ。	・茶褐色 ・胎土密 ・焼成良好堅緻	
21	高杯	——	直立する中実の柱状部から上下なだらかに開く。 平坦な杯部内底面を残す。	ヘラミガキ。	・淡褐色 胎土やや粗 ・焼成良好	
22	台付鉢	——	台形に開く鉢の脚台。 外面に円形の刺突文を施す。	不明	・茶褐色 ・胎土粗 ・焼成良好	
23	台付鉢	裾径11.6	外反する裾部のみ遺存。 端部は上方へ肥厚し、丸みのある広い面を作る。 外面に竹管押圧文。	ヨコナデ。	・茶褐色 ・胎土密 ・焼成良好	
24	高杯？	裾径12.7	内弯ぎみに開く裾部。 端部はわずかにつまみ上げ、面を作る。 器肉は厚めである。	外面ヨコナデ。 内面ヘラケズリ、ハケナデ。	・暗茶褐色 ・胎土やや粗 ・焼成良好堅緻	
25	高杯	裾径15.2	内弯ぎみに開くやや丈高の裾部。 端部は著しくつまみ、広い凹面となる。	外面ヘラミガキ、端部ヨコナデ。 内面ヘラケズリ。	・赤灰褐色 ・胎土やや粗 ・焼成やや不良	

番号	器種	法量(cm)	形態	製作	色調・胎土・焼成	備考
26	大型鉢	口径38.6	内傾する体部から内の稜を作り、水平近くに屈曲する口縁部に至る。 端部は下方に垂下ぎみとなり、広い側面を作る。 口縁側面に1帯、体部に2帯以上の簾状文を施す。	内面ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。	・淡茶褐色 ・胎土やや粗 ・焼成良好	
27	大型鉢	口径49.8	内傾する体部から丸く屈曲し、短く屈曲する口縁部に至る。 口縁部は段状口縁に近く、外傾する広い面となる。 口縁側面に1帯、体部に、2帯以上の簾状文を施す。	不明	・茶褐色 ・胎土密 ・焼成良好	
28	大型鉢	口径35.8	丸みのある腰から内傾し、段状口縁部に至る。 上端・側面ともに凹面となる。 体部に波状文、斜格子文、列点文を施すが、文様原体は半截竹管か。	口縁部ヨコナデ、体部にヘラミガキの圧痕あり。	・乳褐色 ・中核は灰色 ・胎土粗 焼成不良軟質	
29	甕	口径17.4	直線的な体部から丸く外反して口縁部に至る。 端部は丸みのある平坦面を持つ。	口縁部ヨコナデ。内面体部にヘラミガキの痕跡。	・茶褐色 ・胎土やや粗 ・焼成良好	
30	甕	口径19.8	29に似るが、口縁部はきわめて短い。 端部は丸く終る。		・赤褐色 ・胎土やや粗 ・焼成良好	
31	甕	口径20.2	29に似るが、口縁部は水平近くに開く。 端部は薄くなり、尖りぎみに終る。 器肉はきわめて薄い。	ヨコナデ。	・茶褐色 ・胎土やや粗 ・焼成良好	
32	甕	口径20.6	ほとんど張らない体部から丸く屈曲し、水平近くに開く口縁部に至る。 端部は丸く終る。	口縁部ヨコナデ。外面体部ハケナデ。 内面にはヘラの圧痕がみられる。	・茶褐色 ・胎土粗 ・焼成良好	外面上半に煤付着。
33	甕 甕	口径22.5	張りの少ない体部から丸く外反する口縁部に至る。 端部は先細で終る。	口縁部ヨコナデ。外面体部ハケナデ、ヘラナデ。 内面体部指頭圧ナデ、ハケナデ。	・茶褐色 ・胎土粗 ・焼成良好	
34	甕	底径7.0	わずかに突出する底部から、急角度で立つ体部に至る。 底面の器肉きわめて薄い。	外面にハケ目がわずかに残る。 内面表皮剥離	・茶褐色 ・胎土粗 ・焼成良好	33と同一個体か？
35	甕	口径16.2	張りの強い体部から「く」の字形に屈曲し、口縁部に至る。 端部はつまみ上げぎみに終る。	口縁部ヨコナデの他は不明。	・茶褐色 ・胎土やや粗 ・焼成やや不良	
36	甕	口径19.0	内に稜を持ち「く」の字形に鋭く屈曲し、内弯ぎみに開く口縁部に至る。 端部はつまみ上げ、外傾する凹面となる。	口縁部ヨコナデ 外面体部ハケナデ。 内面体不明	・灰茶褐色 ・中核は黒褐色 ・胎土やや粗 ・焼成良好	
37	甕	口径18.0	直線的に張る体部から丸く外反する口縁部に至る。端部は上下に丸く肥厚し、外傾する凹面となる。	口縁部ヨコナデ。外面体部ヘラミガキ。内面体部ハケナデ。	・暗茶褐色 ・胎土やや粗 ・焼成良好	

番号	器種	法量(cm)	形態	調整	色調・胎土・焼成	備考
38	甕	口径20.9	直線的に張る体部から丸く屈曲し、直線的に開く短い口縁部に至る。端部は丸みのある面となる。	口縁部ヨコナデ。	・赤褐色 ・胎土やや粗 ・焼成やや不良	
39	甕	口径24.2	張りの強い体部から丸く屈曲し、短く開く口縁部。端部は下方に肥厚し、丸みのある面となる。口縁端面に刺突文を施す。	口縁部ヨコナデ。内面体部にヘラミガキの痕跡。	・茶褐色 ・胎土密 ・焼成良好。	
40	甕	底径6.1	体部から突出する平底。	外面ハケナデか。内面には指頭圧痕がみられる。	・淡褐色 ・胎土粗 ・焼成良	内外面に煤付着。
41	甕	底径6.6	体部からあまり突出しない平底。内底面は平坦で、体部との境は明瞭に屈出する。	40と同様	・茶褐色 ・胎土やや粗 ・焼成良好	内外面に煤付着。外底面に籾殻の圧痕
42	甕	底径6.6	体部からわずかに突出する平底。	外面底部周縁に指頭圧痕、体部にヘラナデ。内面指頭圧ナデ。	・茶褐色 ・胎土やや粗 ・焼成良好	
43	甕	底径6.2	42に似る形態で、器肉はきわめて薄い。	外面底部周縁にユビナデ、体部にヘラミガキ。内面ハケナデの後ヘラミガキ。	・暗茶褐色 ・胎土密 ・焼成良好堅緻	
44	大型甕	口径35.6	張りのない体部からわずかに直立し、上方へ丸く屈曲する。口縁部に至る。端部は下方へ肥厚し、広い側面を作る。	口縁部ヨコナデ。内面体部にハケナデ、ヘラナデがみられる。	・灰茶褐色 ・胎土粗 ・焼成良好	
45	大型甕	口径36.2	直線的に開く体部から「く」の字形近くに屈曲し、口縁部に至る。端部は上方へ尖りぎみとなり、下方へは肥厚する。	口縁部ヨコナデ。内面体部にハケナデ。	・暗茶褐色 ・胎土密 ・焼成良好堅緻	器表に付着物（鉄分か？）
46	底部有孔土器	底径5.8	突出する底部で、上げ底状を呈する。焼成後の穿孔。	内面に指頭圧痕がみられる。	・赤褐色 ・胎土やや粗 ・焼成良	
47	底部有孔土器	底径5.8	体部からあまり突出しない平底。底面の器肉きわめて厚い。焼成後の穿孔。	46と同様	・茶褐色 ・胎土粗 ・焼成良好	



上層遺構

下層遺構

自然河道1　検出状況

同上　遺物出土状況

9

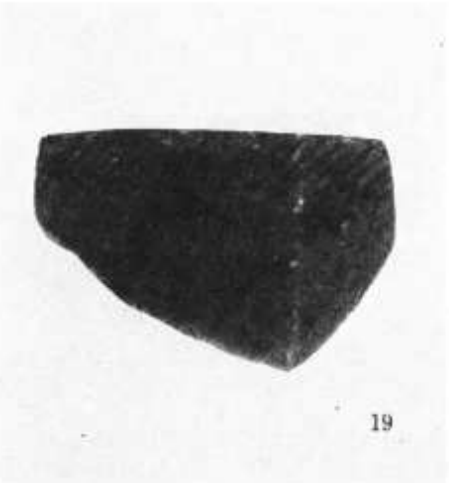
11

17

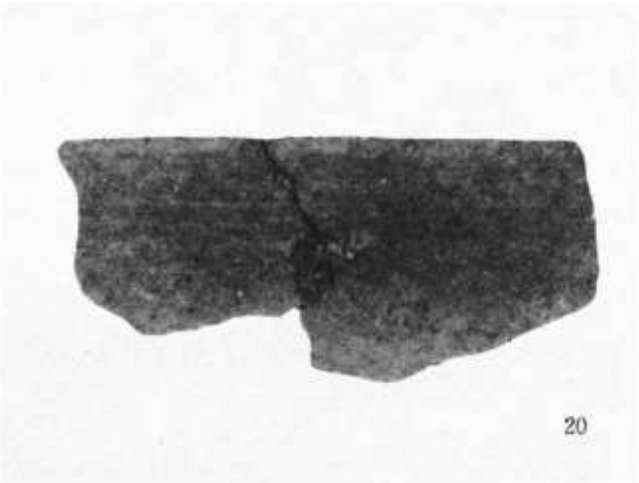
12

18

出土遺物（壺・鉢）

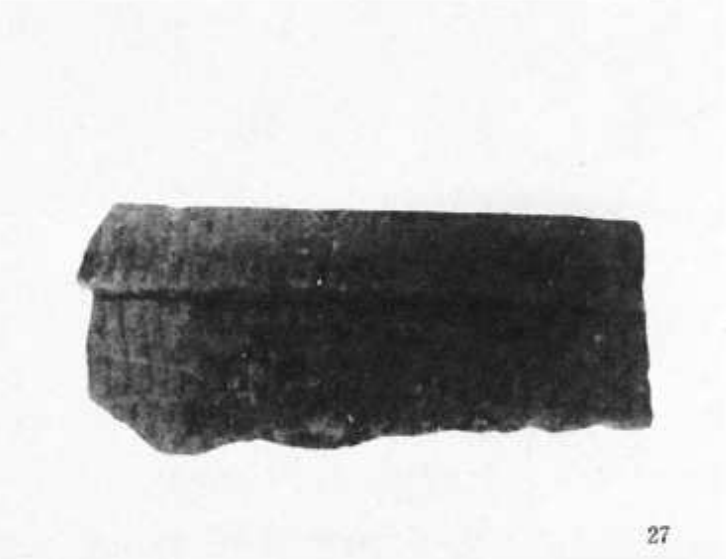


19



20

22

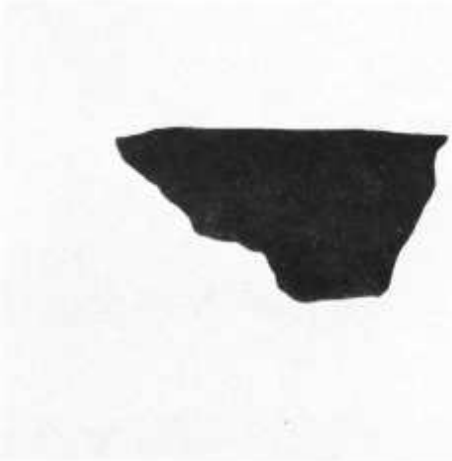


27

21

28

出土遺物（鉢・高杯）



31

35

33

36

37

34

38

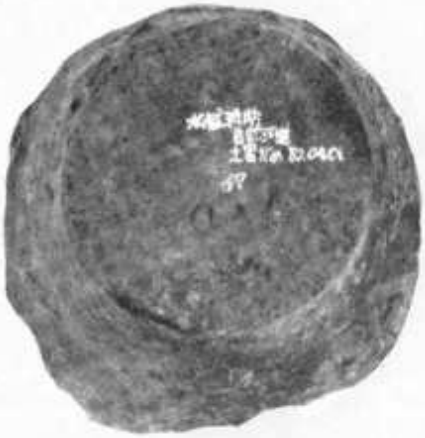
出土遺物（甕）

39

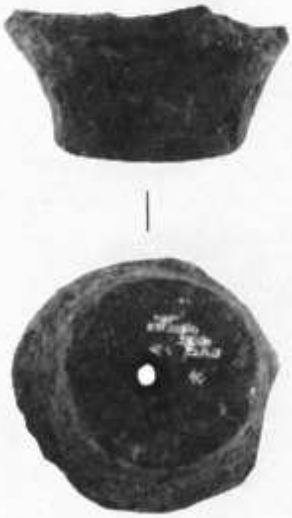
42

44

43



41

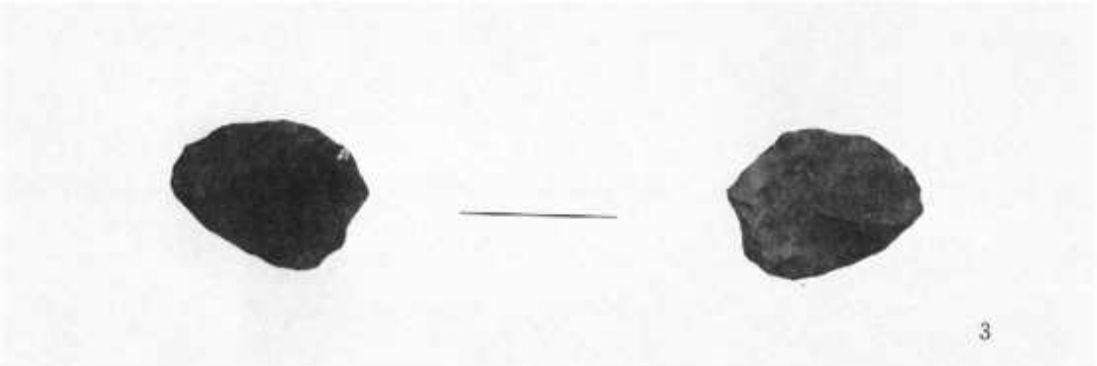


47

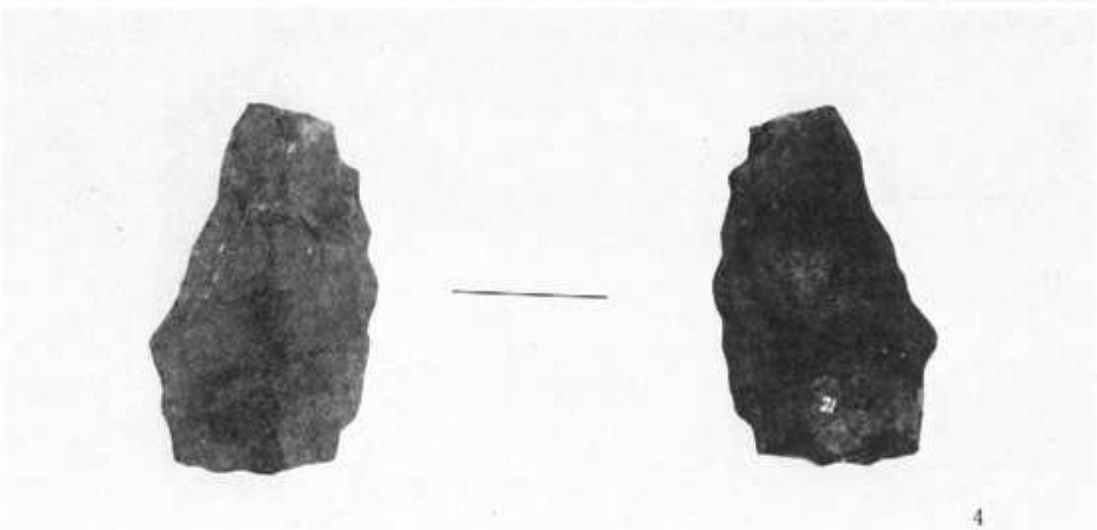
出土遺物（甕・底部有孔土器）

1

2

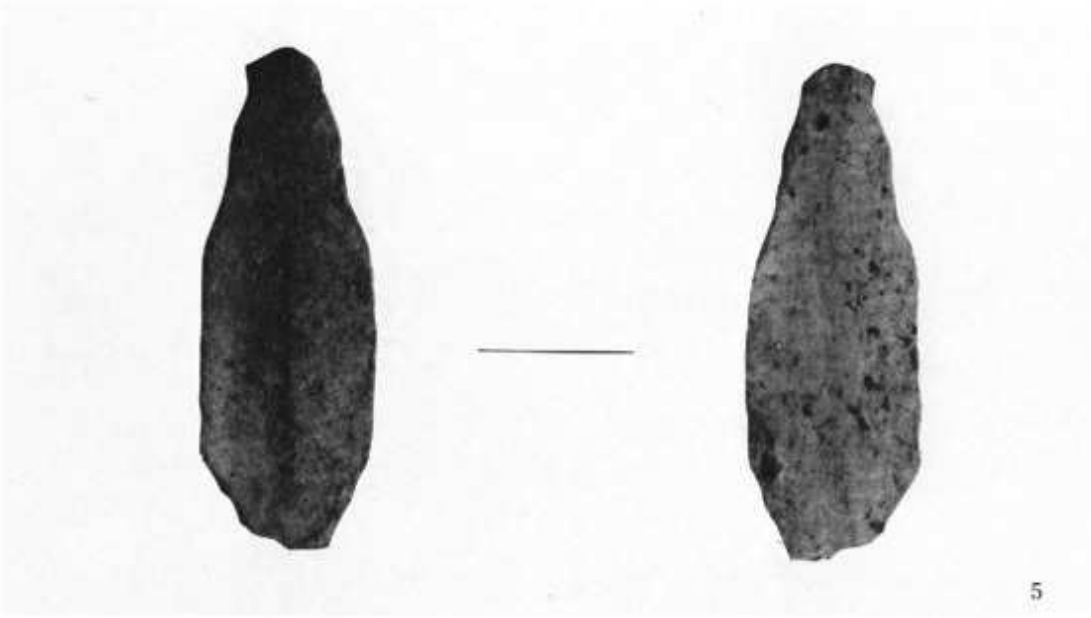


3

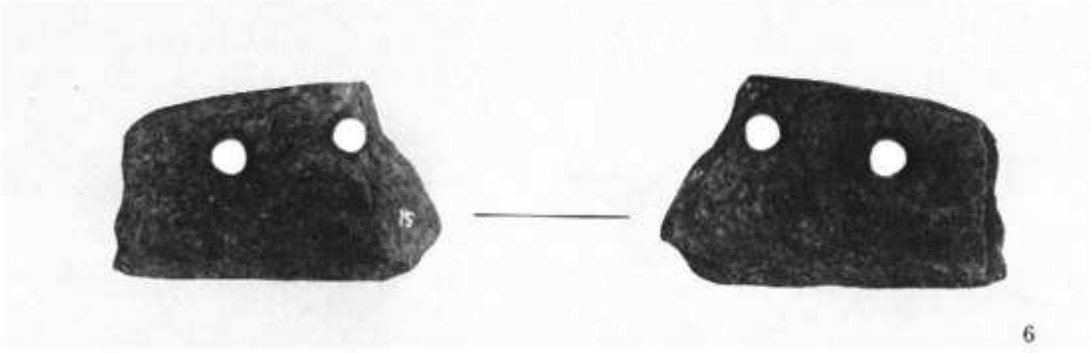


4

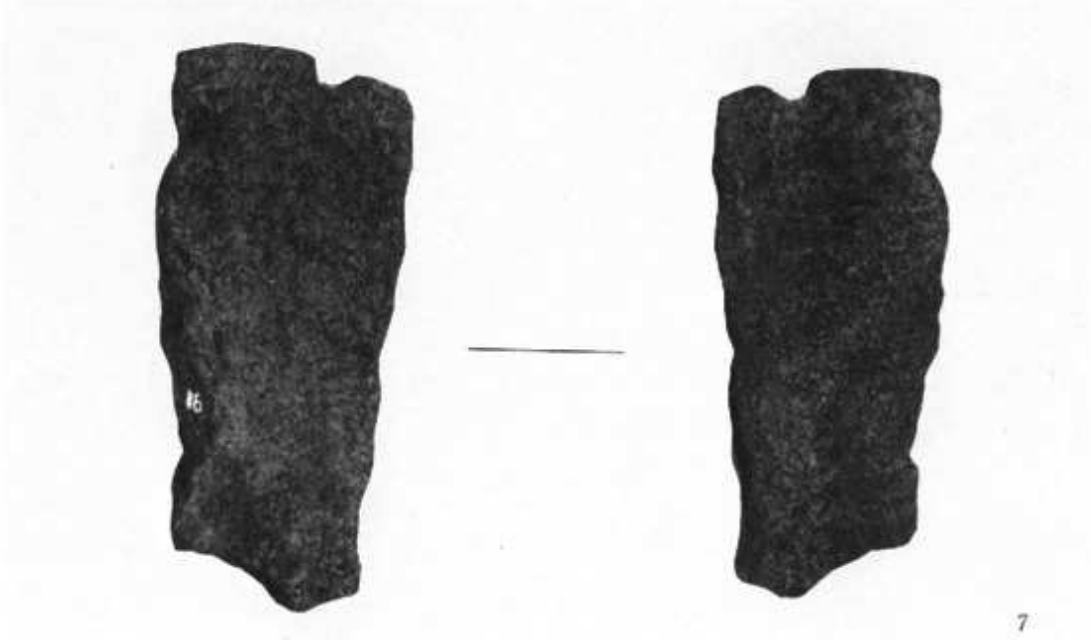
出土遺物（石器）



5



6



7

出土遺物（石器）

第 3 章

太田川遺跡発掘調査概要報告

例　　言

1．本章は八尾市水越266番地において実施した、関西電力株式会社配電管路埋設工事に伴う発掘調査の概要報告である。

1．現地調査は南東トレンチ・南西トレンチの2ケ所に分け、八尾市教育委員会が実施した。各トレンチごとの調査期間および調査担当者は以下に記す。なお調査においては、中野健太郎が参加した。

- 南東トレンチ　昭和57年6月11日～6月12日　米田敏幸・原田昌則
- 南西トレンチ　昭和57年6月24日　米田敏幸・高萩千秋

1．内業整理は昭和57年7月1日以降、(財)八尾市文化財調査研究会が引き続き実施し、本章作成にあたっては、原田昌則・成海佳子が担当した。

1．報文はⅠ～Ⅲを原田昌則が、Ⅳ・Ⅵを成海佳子が執筆し、Ⅴまとめは原田昌則・成海佳子が共同で行った。

本　文　目　次

Ⅰ　調査に至る経過……89
Ⅱ　調査の方法……90
Ⅲ　検出遺構……91
　1）南東トレンチ……91
　2）南西トレンチ……92
Ⅳ　出土遺物……93
　1）南東トレンチ……93
　2）南西トレンチ……100
Ⅴ　まとめ……102
Ⅵ　出土遺物観察表……104
　1）南東トレンチ……104
　2）南西トレンチ……109

挿図目次

第1図　調査地周辺図……89
第2図　調査区設定図……90
第3図　南東トレンチ平断面図……91
第4図　出土遺物実測図1……95
第5図　出土遺物実測図2……97
第6図　出土遺物実測図3……99
第7図　出土遺物実測図4……101

挿表目次

第1表　南東トレンチ出土遺物分類表……92

図版目次

図版一　調査地近景(北から)
南東トレンチ遺構検出状況(東から)
図版二　南東トレンチ出土遺物(壺)
図版三　南東トレンチ出土遺物(高杯・器台)
図版四　南東トレンチ出土遺物(鉢)
図版五　南東トレンチ出土遺物(甕)
図版六　南西トレンチ出土遺物

Ⅰ　調査に至る経過

八尾市の北東部に位置する太田川遺跡は、大竹地区と水越地区を区割して西流する太田川と、東高野街道が交差する地点付近を中心として広がっている。

この遺跡は昭和15年３月の東高野街道改修工事の際、滑石製勾玉・弓筈状木製品等を含む包含層が確認されて以来、遺跡として認識されるようになったが、この工事以降は目立った調査も実施されず、遺跡の時期や範囲等の全容は不明であった。[註1] しかし、昭和56年６月に関西電力㈱が実施した電力ケーブル埋設に伴う工事の際、古墳時代の遺物を含む包含層が検出され、太田川遺跡が西方一帯に広がることが確認された。さらに、昭和57年に至って、大阪外環状線(国道170号線)の水越交差点の南東側と南西側に、[註2] 既工事同様配電管路を埋設する旨の届出書が、関西電力㈱から、文化庁長官宛に提出された。八尾市教育委員会では、当該工事区が昨年度の調査地から西方50m に位置していることから、遺構・遺物の存在を確認するため調査が必要であるとの理解に達した。以上から、文化財室は工事掘削時に立会調査を行うように指導するとともに、原因者にその旨の了解を求め調査に入った。

第１図　調査地周辺図

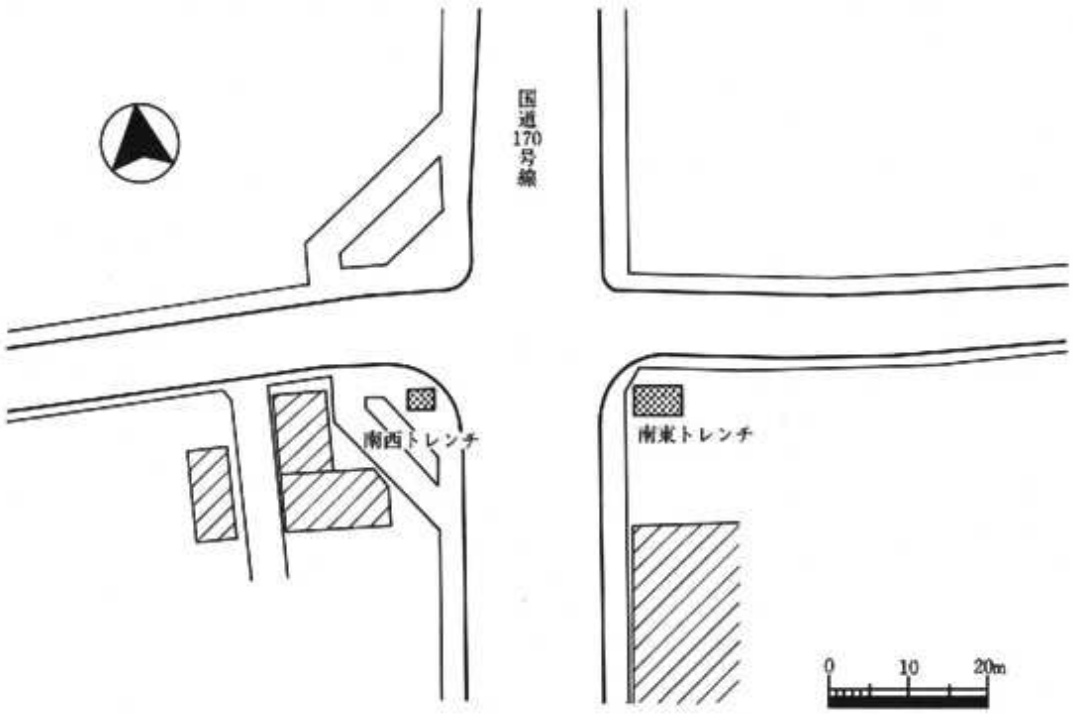
南東側工事区から立会調査を実施したところ、地表下約3.2m 地点で弥生時代後期を中心とする遺物包含層が工事区全体に広がることが確認されたことから、急遽立会調査から発掘調査に切り替えて調査を継続した。

調査期間は南東調査区が昭和57年６月11日から６月12日まで、南西調査区57年６月24日で、総調査面積は18.96㎡を測った。

Ⅱ 調査の方法

当調査の起因である工事概略は、大阪外環状線水越交差点の南東側および南西側の工事区を深さ6.5m まで掘削した後、道路下を東西に横断する配電管路をＨＰ圧入工法により埋設するものである。ここで、調査対象となる南東側（4.7×3.8m）・南西側（3.7×３m）の工事区は、この工法の竪坑に当る部分で、調査対象区は鋼板で囲繞された部分に限定されている。

なお、各調査地の面積が狭小で、しかも掘削深度が6.5m に達することから、壁面を保持しながら進める調査方法は無理であると判断された。このため、発掘調査では最下部に達するまで、人力で各土層毎に掘削することにより、遺構・遺物の存在を確認することに務めた。

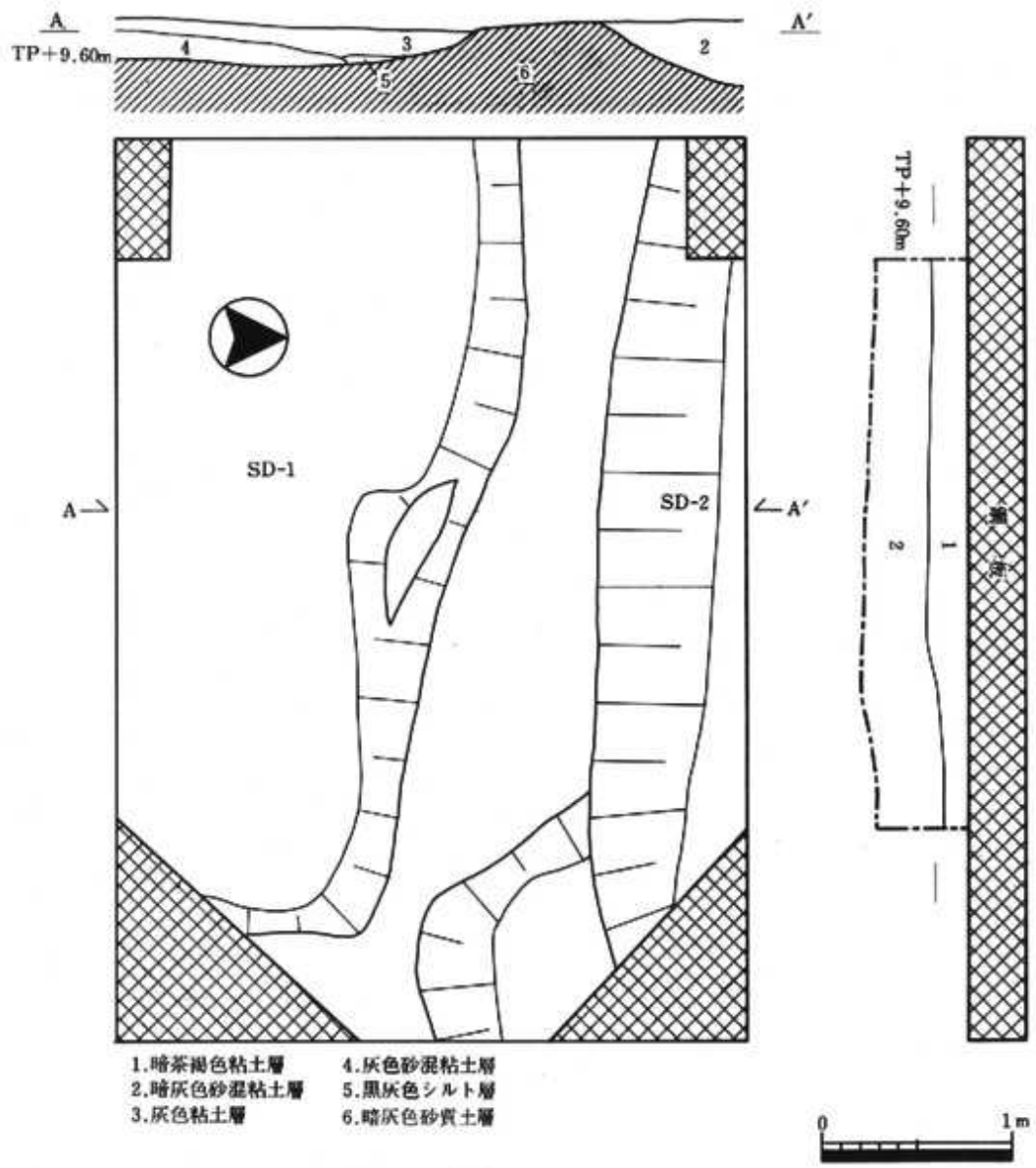


第２図　調査区設定図

Ⅲ 検 出 遺 構

1）南東トレンチ

水越交差点の南東側に位置するトレンチで、東西4.7m・南北3.8mを測る。このトレンチでは立会調査の際、地表下3.2m地点に、包含層である暗茶褐色粘土層が全面に広がることが確認されている。この包含層は厚さ20cm前後を測り、層中からは弥生時代後期に比定される土器片が多量に出土した。



第3図　南東トレンチ平断面図

遺構としては、暗灰色砂質土層を構築面として、東西に走る２条の溝状遺構ＳＤ－１・ＳＤ－２を検出した。

ＳＤ－１

調査地の南側で検出した溝状遺構で、検出幅1.9m・深さ0.2mを測る。トレンチ北壁に沿って東西方向に伸びるもので、東端は南側へ屈曲している。溝内の堆積土層は上層から灰色粘土・灰色砂混粘土・黒灰色シルトの３層から構成されているが、遺物の出土した土層は上層のみで、弥生時代後期の土器類が多量に認められた。

ＳＤ－２

調査区の北側で検出した。ＳＤ－１同様東西方向に伸びるもので、東側では土杭状を呈する窪みを切り込んでいる。溝状遺構の北側は調査区外のため全容は不明であるが、検出部では幅0.7m・深さ0.3m前後を測る。溝内は暗灰色砂混粘土のみで充填されていて、層中より弥生時代後期の土器類の破片が少量出土した。

２）南西トレンチ

水越交差点の南西部に位置するトレンチで、東西3.7m・南北3.0mを測る。南東トレンチとほぼ同レベルで弥生時代後期の土器類が出土する包含層を認めたが、トレンチの３分の２が攪乱を受けていて全容を知るまでには至らなかった。

第１表　南東トレンチ出土遺物分類表

器種		特徴	実測番号	出土総数
壺	広口壺	口縁端面に施文	1	3
		口縁端丸く終る	2・3	4
	短頸壺	直線的な口頸部	4・5	5
		内湾して開く	6	2
		拡張口縁部を持つ	7・8	3
		ラッパ状に開く	9-(10)	5
	底部	突出する上げ底	11	5
		突出する平底	12	5
		つまみ状(小型)	13	1
		輪台状	—	2
			計	35
高杯	杯部	外反する口縁部	14~17	7
		椀形	18・20	4
	脚部	なだらかに開く	19・23	5
		屈曲して開く	21・22	2
杯	椀部	丸く終る	24	1
		丸く肥厚する	25	1
		外傾する平坦面	26・27	11
	柱状部のみ		—	3
			計	34
器台	口縁部	丸く終る	28	1
		口縁部拡張する	29	2
		口縁端面に施文	30	1
	体部・裾部のみ		31	3
			計	7
鉢	小型鉢	突出する平底	32	1
		つまみ状	33~38	7
		口縁部のみ	39・40	4
			小計	12
	中型鉢	甕の下半に共通	41	2
		浅い椀形	42	1
			小計	3
	大型鉢	浅い椀形(把手付)	43	1
		受口状口縁部	—	1
			小計	2
			計	17
蓋	甕用蓋		44	1
			計	1
甕	丸く外反する口縁部	外傾する平坦面	46	3
		丸く終る	47・48	8
	「く」の字状に屈曲する口縁部	端部に回線	45	2
		尖りぎみに終る	49	11
		つまみ上げぎみ	50	3
		内湾し平坦面を作る	51	5
	底部	輪台状	52	3
		突出する平底	53	11
			計	46
			合計	199

Ⅳ 出 土 遺 物

南東トレンチ・南西トレンチともに表土下3.2m 付近で、弥生時代後期に比定できる遺物が出土した。しかし、両トレンチの設定位置は25m 程度離れており、遺物の出土状況にも大きな差があることから、層位的・平面的な関係は明確にできなかった。ここでは各トレンチごとに記述する。

1）南東トレンチ

SD－1を中心に、弥生時代後期の土器がコンテナ7箱程度出土したが、そのうち器種の判別できたものは137個体を数える。器種には壺・高杯・鉢・甕・甕用蓋があり、それぞれの点数および特徴は第1表にまとめた。器種構成をみると、高杯・器台の占める割合が高いこと、完形に近い小型鉢が多く出土したことなどが特徴的であるといえる。

壺　1～13

35点が出土したが全容を知り得るものはなく、口縁部が遺存するもの22点、底部を残すもの13点、体部のみのもの1点を確認した。口縁部が遺存するものには広口壺と短頸壺があり、底部には3形態が認められる。

広口壺　**1～3**：**1**は拡張した口縁端部に3条の擬凹線が廻る、いわゆる壺Aである。同形態を呈するものは他に2点出土しており、うち1点は大型のものであった。[注3] 3点とも器表の磨耗が著しく、調整は不明である。

2・**3**は口縁端部が丸く終るもので、同様のものは他に2点認められる。**3**のみ口縁端部に凹線状の窪みが一周する。調整は、**2**の内面にハケ目がわずかにみられ、**3**の外面にはタタキの後粗いハケナデが施される程度である。

短頸壺　**4**～**10**：13点が出土し、うち7点を図示した。ここでは「短頸壺」としてまとめたが、形態には4種が認められる。

4・**5**は長頸壺の口頸部を途中で切ったような形態を呈しており、類似する形態を呈するものは5点を数える。すべて口頸部のみの資料であり、体部の形態や口頸部と体部とのバランス等によっては「長頸壺」とも呼べる器形である。5点とも内面の調整には横方向のハケナデが行われているが、外面は**4**のようにヘラミガキを主とするもの3点、**5**のようにハケナデを施すもの2点に区別できる。また、**5**の外面には先の広口壺**3**と同様に、タタキ目が遺存している。

6は内弯ぎみに開く口頸部を持つもので、他に1点同形態のものが出土している。ともに器壁が薄く、乳褐色の色調を呈している。**6**は内外とも丁寧なヨコナデによって平滑に仕上げられ、特に口縁側面には強いヨコナデによって凹線状の窪みを持ち、さらに外面には暗文状のヘラミガキが縦方向に施されている。

7・8は外傾する頸部からわずかに屈曲した後、口縁部を上方へ拡張するもので、他に形態や調整がきわめて近似するものが1点出土している。一様に頸部外面には縦方向のハケナデを行い、拡張部には強いヨコナデが施されることによって、側面は7では凹面となり、8には2条の凹線が廻っている。3点とも6と同様の乳褐色の色調を呈し、8の外面には煤の付着が認められる。

9は体部から「く」の字形近くに屈曲し、外反する短い口縁部を持つもので、他に口縁部のみの小破片が2点出土している。比較的良好な資料で、球形に近い大きな体部を3分割で成形した後、外面体部・内面口縁部および下半には丹念なヘラミガキを施し、内面体部はナデによって平滑にされている。また、外面肩部には半截竹管による直線文と竹管押圧円形文が交互に施されている。

10は体部のみの資料であるが、形態・法量とも9に酷似しており、3分割の成形方法や施文原体等にも9と同様の特徴がみられることから、同タイプのものと考えられる。10の文様は、直線文・列点文・直線文・円形文から構成されている。

底部　11～13：小型壺の底部13を含めて13点が出土したが、11・12のように接合部付近を境として遺存しているものが多く認められる。

11・12は体部から突出する底部で、この時期の壺には普遍的に認められる形態である。今回も図示したものを含めて10点が出土している。これらの底面には、11のように中央部が凹み、上げ底状を呈するものと、12のように平坦なものの2種が認められる。調整は11・12にみられるように、内外面をヘラミガキ調整で仕上げるものが多い。

13は上げ底状を呈するもので、小型壺のために特異な形態を呈するものかとも考えられるが、小型鉢の底部や甕用蓋のつまみと同様の形態である。外面にタタキ目、内面底部にはヘラの圧痕が遺存する他、底部周縁には指頭圧痕がみられ、指頭により底部を作り出していることが窺える。

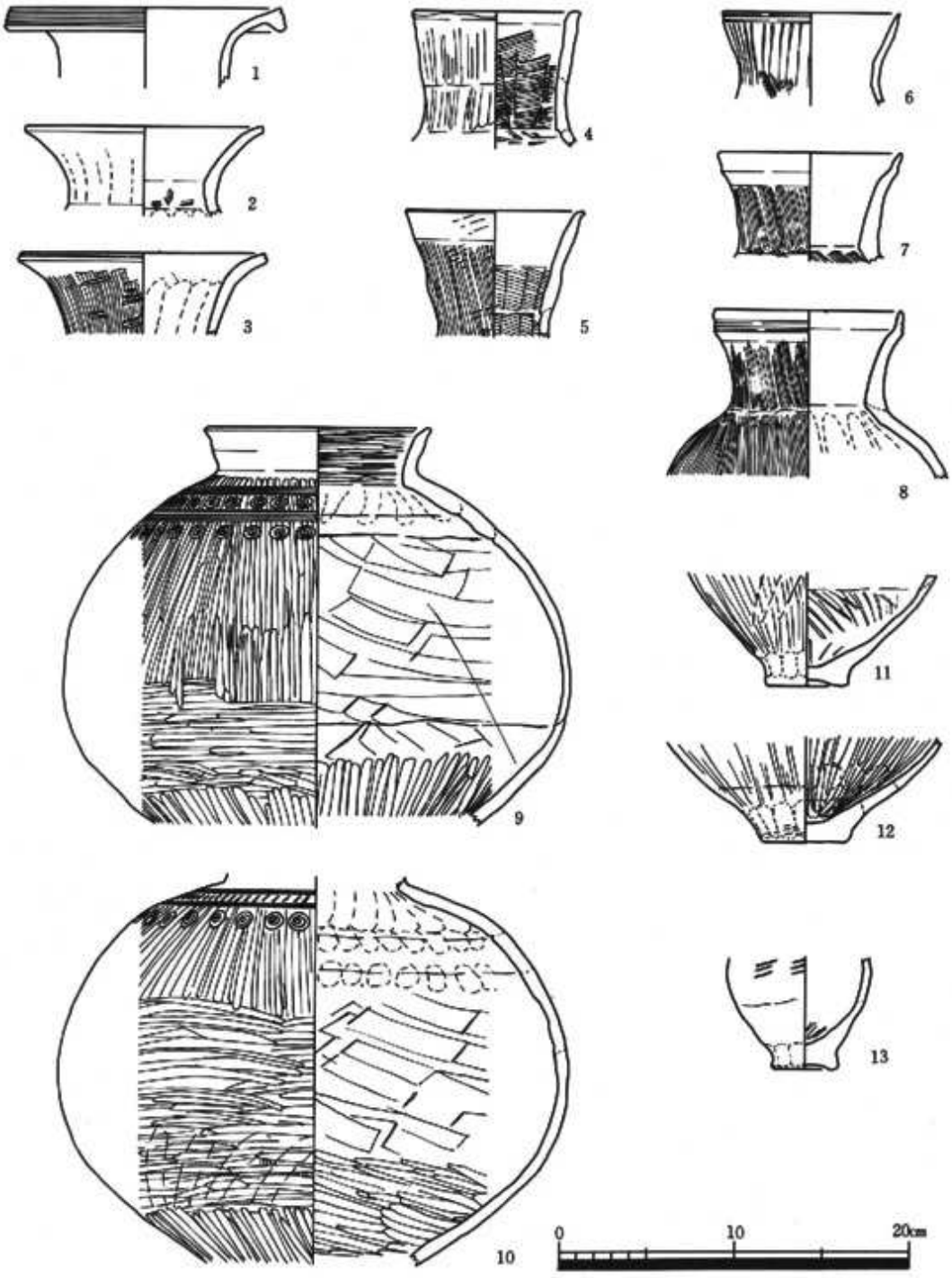
その他、体部からあまり突出せずに輪台状を呈するものが2個体分認められたが、小破片のために図示していない。

高杯　14～27

総個体数は34点を数えるが、完形に近いものは15 1点のみで、他は杯部のみのもの11点、脚部のみ遺存するもの23点である。杯部の形態には、椀形を呈するA_1と外反する口縁部を持つA_2の2種があり、脚部にも2形態がある。[註4]

高杯A_2　14～17：杯底部から屈曲し、外反する口縁部に至るもので、図示したものの他に3点が出土している。

14・15は小型の高杯で、14は浅く15は深めで直線的な杯部を持っている。ともに杯部と口縁



第4図　出土遺物実測図1（南東トレンチ　壺）

部の接合後、内側に粘土を補足して緩やかな曲線を作り出し、ハケナデ調整の後に放射状ヘラミガキを施している。15は直線的に開く小型の脚部を伴うもので、挿入法で杯部とを接合した後、外側に補足粘土を貼付して接合をより強固なものにしている。調整は杯部とは異なり、ヘラケズリの後に左傾のハケナデを施している。また、脚部中位には3ケ所に円孔を有する。

16・17はやや大型で、口縁部は強く外反しており、図示していない3点も同形態を呈している。16は外面にわずかにハケ目が残る程度で器表の磨耗が進んでいるが、17は内外面ともに放射状ヘラミガキが認められる。これら大型の高杯は、小型の14・15に比し、器肉は薄い。

高杯A[1] 18・20：椀形を呈する杯部を持つもので、18・20の他に2点が出土している。4点とも口縁部付近には強いヨコナデを行うことによって、凹面を有している。すべてヘラミガキ調整がなされているが、その方向は18の外面のみ不整方向で、18の内面および他の3点の内外面は放射状に施されている。また、調整を一部異にする18のみ乳白色の色調を呈しているが、他はいずれも茶褐色である。

脚部　19・21～27：脚部は23点が出土したが、柱状部から裾部までが遺存するものは7点にすぎず、他は柱状部のみのもの3点、裾部のみのもの13点である。

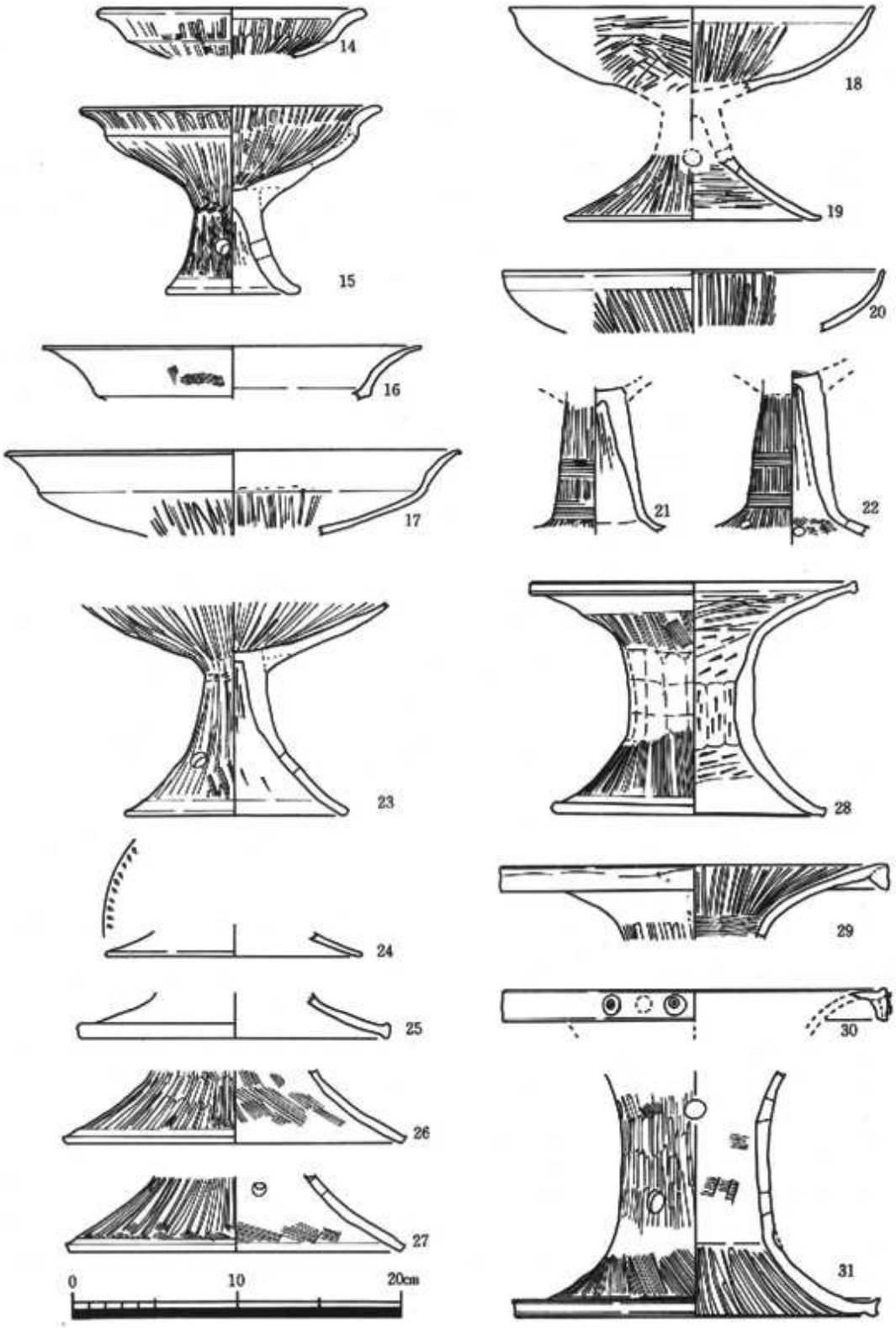
19・23は15の脚部のように裾部までなだらかに広がるもので、同形態のものは他に2点出土している。19は乳白色の色調を呈し、内外面をヘラミガキ調整するもので、4ケ所に円孔を持つ。その色調やヘラミガキ原体の幅などから、18の脚部の可能性が考えられる。23は杯底部を残す資料で、3孔を有している。脚部の接合には15と同じ技法がとられ、形態も15のように柱状部から裾部へなだらかに移行するが、比較的丈高の脚部である。外面および杯部内面には放射状のヘラミガキが施され、柱状部内面にはしぼり目が認められる。

21・22も15・23と同技法により製作されたもので、柱状部のみが遺存しており、脚頂部が杯部内底面となるものである。ともに内面に稜を持ち、屈折して裾部へ至るという近似の形態を呈する。これらは形態だけではなく、暗茶褐色の色調・細く密な縦方向のヘラミガキ・5条1組2帯の沈線文等も酷似しており、同一人によって製作されたものかと考えられる。22は5ケ所に円孔を持ち、21にも孔の痕跡が認められる。

裾部のみが遺存するものには、端部が丸く終る24、丸みを持って肥厚する25、外傾する面を持つ26・27があり、図示していない9点もすべて26・27と同様のものであった。24は小型の裾部で上端面にはヘラによる刻み目を施し、27は大型のもので5孔を有する。調整は不明瞭なものが多いが、26・27にみられるように、外面に放射状ヘラミガキ、内面にハケナデを行うものがほとんどである。

器台　28～31

筒形の体部から上下に外反するものを7個体分検出したが、28のみが完形に復元できただけ



第5図　出土遺物実測図2（南東トレンチ　高杯・器台・壺）

である。口縁端部の特徴をみると、拡張して文様を施す30・拡張するが無文の29・丸く肥厚ぎみに終る28の3形態があり、東大阪市鬼塚遺跡[註5]でも指摘されているように、口縁端部の簡略化と器形の小型化が併行していることがここでも認められる。

調整はほとんどが外面体部に縦位のヘラミガキ、内面は口縁部・裾部に放射状ヘラミガキ、体部に横位のハケナデが施され、規則的である。しかし、28のみ外面体部にはヘラミガキが認められず、内面口縁部のヘラミガキは横方向に施され、内面体部には3方向のヘラケズリが行なわれ、特異な個体といえよう。

鉢　32～43

口径の法量から、15cm以内のものを小型鉢、20cm前後のものを中型鉢、30cmを超えるものを大型鉢とした。

小型鉢32～40：比較的遺存状態の良好なものが12点出土しており、いずれも直口の小型鉢である。

ほとんどが擬口縁のままで終るもので、37のみ端部をユビナデによって平滑にしている程度である。胎土についても、37は精良なものを用いているが、他はすべて粗雑なものを用いている。調整も32・33には比較的丁寧なハケナデが認められるが、ほとんどは粘土紐接合痕が顕著に認められ、指頭圧ナデ・粗雑なハケナデ等で簡略に作られている。また、40のようにタタキ目を残すものは他にも1点出土している。

また、32のみ小型で突出する平底を持っているが、他はすべて底部周縁を指頭圧成形によって「ハ」の字形近くにつまみ出している。

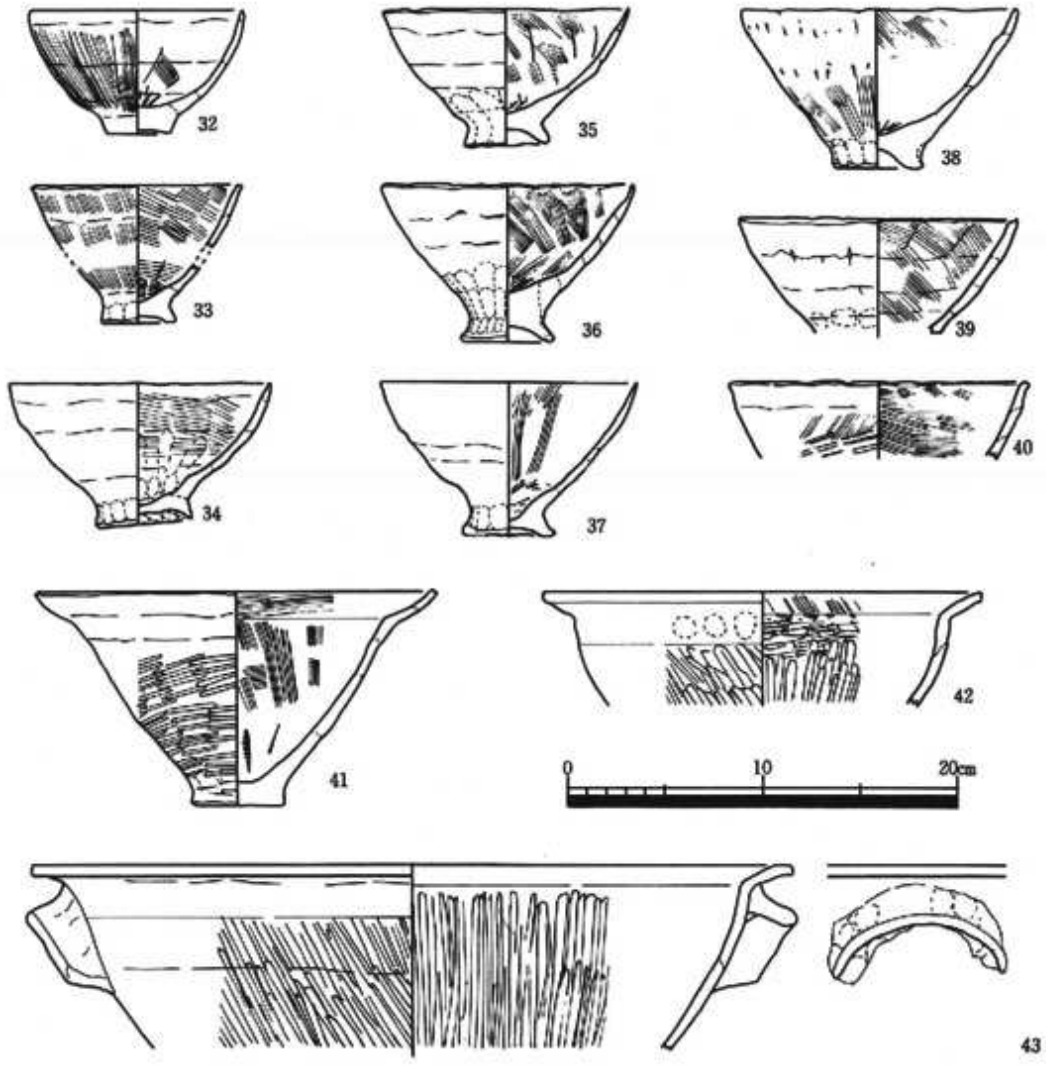
中型鉢　41・42：3個体が出土したが、図示していないものは41とほぼ同形態を呈するものである。

41は体部下半だけでは甕との形態差が認められないことから、甕と共通の下半部の逆円錐台部を用いたものと考えられる。口縁部は「く」の字形近くに屈曲した後、内湾ぎみに開くもので、突出平底を持つ。調整も甕と同様、外面にタタキ目、内面下位にはヘラの圧痕が認められ、上位にはハケナデが施されている。

42は丸みのある浅い椀形の体部から屈曲して口縁部に至るもので、ヘラミガキを主とした調整が行われており、41とは形態・調整ともに大きく異なっている。

大型鉢　43：2個体を確認したが、図示していないものは受口状を呈する口縁部のみの小破片であった。

43は逆U字形の把手を貼付するもので、把手の周囲には指頭圧痕が顕著である。形態は42同様浅い椀形を呈するもので、調整もヘラミガキを主としている。



第6図　出土遺物実測図3（南東トレンチ　鉢）

蓋　44

なだらかに開く笠形の甕用蓋で、1点のみが出土した。内面全体には炭化物の付着が認められ、特に口縁部内面には厚く付着している。つまみの形態は小型鉢の底部に多くみられたものと同様である。外面には粘土紐接合痕が顕著にみられ、わずかにタタキ目・ヘラナデが認められる程度である。内面にはハケナデが密に施されており、外面に比して下寧な調整である。

甕　45～53

他の器種同様良好な資料は認められず、口縁部を残すもの32点、底部のみ遺存するもの14点があり、量的にはやはり多くを占めている。これらは形態や調整ともバラエティに富むため、詳細な観察や分類はできなかったが、大まかにみて体部から丸く屈曲して口縁部に至る**46～48**(a)と、「く」の字形に屈曲して口縁部に至る**45・49～51**(b)の2種がみられる。

(a) **46～48**：類似の形態を呈するものは合計11点を数える。口縁端部は**46**のように外傾する平坦面を作るもの3点、**47・48**のように丸く終るものが8点みられる。これらのうち**48**は体部上位に最大径があり、扁平な体部を持つもので、外面の体部下位に縦位のヘラケズリが行われており、形態・調整ともに特異な甕である。

(b) **45・49～51**：**45**は「く」の字形に屈曲し、強く外反する口縁部に至るもので、端部には凹線状の窪みが一周している。同様の端部を持つものは他に1点出土しており、東大阪市鬼塚遺跡出土の甕の口縁部に類似する資料である。[註6]

49は「く」の字形に丸みを持って屈曲し、口縁部に至るもので、端部は薄く尖りぎみに終る。類似する形態のものは他に10点認められ、普遍的なものかと考えられる。**49**は体部を3段に分割して成形するもので、特に体部上・中位と下位との間にはタタキ目主軸に明らかな変化があり、製作段階における時間の経過が認められるもので、内面はナデによって平滑にされている。タタキ目主軸の方向変化や内面の調整および形態等は、鬼塚遺跡出土の大型甕[註7]に一致するが、肩部外面にハケナデが施されている点は異なっている。

50・51は内に稜を持ち、「く」の字形に鋭く屈曲して口縁部に至るものである。2点とも外面には細めで深いタタキ目を屈曲部近くにまで施していることから、口縁部はタタキ出し技法によって作り出されているものと考えられる。内面の調整はハケナデによる。

50は口縁部中位で角度を変え、内弯ぎみに開くもので端部はつまみ上げぎみとなり、外傾する面を作る。また、**49**のように明確な3段分割成形のあとは認められず、中・上位にあたる部分には3～4cm程度の粘土紐が積み上げられている。外面中位には縦位のハケナデが施されており、鬼塚遺跡出土の小型甕[註8]に類似している。

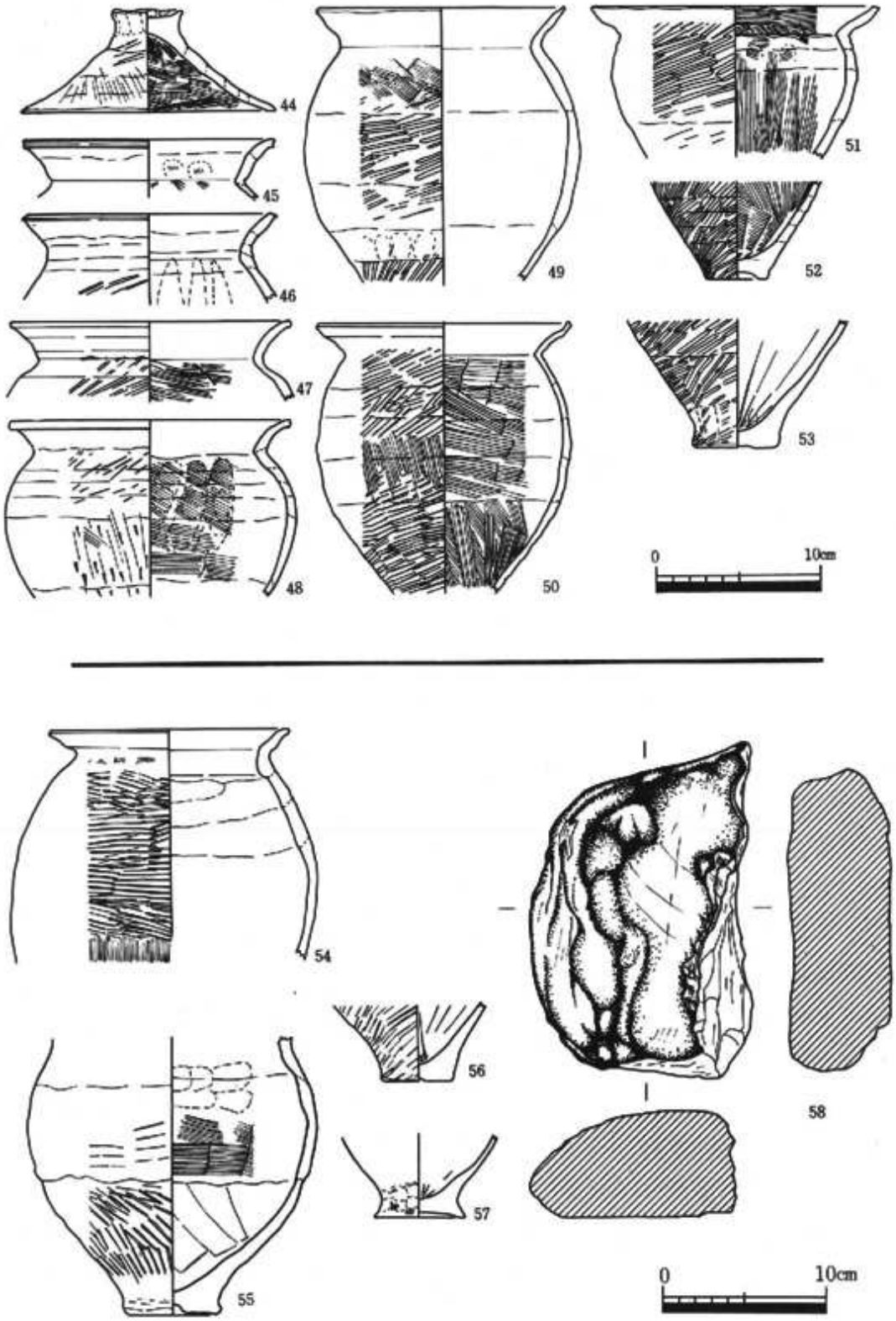
51は内弯して開く口縁部を持ち、端部は外傾する平坦面を作るもので、器形は浅く、口縁部の形態は中型鉢**41**に似る。

底部　**52・53**：壺と同様、体部から突出するものと、突出しないものの2種が認められる。**52**は突出しない底部で、同形態のものは2点出土した。すべて輪台状を呈し、底面の凹みは顕著である。一方、**53**のように突出する平底を持つものは11点を数える。

52は細く深いタタキ目と内面ハケナデ、**53**は太めで浅いタタキ目と内面ナデによって調整されており、形態・調整ともに差異が認められる。

2）南西トレンチ

南東トレンチに比し遺物の出土量はわずかで、しかも小破片が多く、器種の判別できたものは13個体に過ぎない。器種別の内訳は、壺のものと思われる突出平底1点・高杯A[2]1点・高杯脚柱状部3点・小型鉢2点・甕3点である。これらのうち、比較的遺存状態の良好な4点を図示した。また、土器類の他に砥石が1点出土している。



第7図　出土遺物実測図4（上、南東トレンチ　甕・下、南西トレンチ出土遺物実測図）

54は、体部上位に粘土紐巻き上げの接合痕が顕著にみられるもので、外面体部中位には縦位のハケナデが施されている。タタキは太筋で浅く、遺存している部分だけでも左上がり・水平・左上がりの3方向に転換されており、内面はナデによって平滑にされている。体部の最大径はかなり下方に位置するものと思われ、他の甕に比して大型である。

55は3段分割成形の接合痕を明瞭に残すもので、特に体部最下の逆円錐台部は小型鉢としても通用する形態を呈している。調整は各分割の単位ごとに異なり、逆円錐台部では外面に左傾のタタキと内面にナデ、中位は外面右上がりタタキと内面横方向ハケナデ、上位内面には指頭圧痕が認められる。底部は体部から突出するもので、底面中央には小さな凹みがある。

56は突出ぎみの甕の底部で、底面中央の凹みはごくわずかである。外面のタタキ目は細筋で深く、内面にはヘラナデの圧痕が認められる。

57は小型鉢の底部で、底部周縁のつまみ出しは著しく、南東トレンチ出土の小型鉢に比して丁寧に作られている。

58は平坦な石材を用いた砥石で、2ケ所に人為的な破砕痕を持つ。長年にわたる使用のためか、使用面は広範囲にわたって窪んでいる。

V　ま　と　め

当調査地の位置する生駒山地西麓末端部から西側一帯は、生駒山地から流下する花崗岩質の土砂と、旧大和川水系(恩智川)の堆積作用によって造られた沖積平野が融合する部分にあたる。この地域は、遺跡の埋没深度が深いことや、大規模な開発も比較的緩慢な地域であったことも相俟って、遺跡として新資料を与えるような発見も少なかった。

このような要素が起因してか、今日までに知られている周辺の遺跡も、東大阪市の北鳥池遺跡や池島遺跡、八尾市の恩智遺跡等が存在するのみで、他の旧大和川水系に比して、恩智川右岸から生駒山地西麓末端部にかけては比較的遺跡の希薄な地域として認識されてきている。[註9][註10][註11]

今回の調査ではこの地域に新資料を加えたばかりでなく、同時期に併存していたと考えられる北鳥池遺跡等の調査結果が示すように、弥生時代後期末から古墳時代初頭における生駒西麓末端部の遺跡立地を考えるうえで重要なものであると言えよう。

また、出土遺物の器種別では、壺・甕・高杯・器台がほぼ同比率を占め、平均的な集落遺跡の比率とは異なり、祭祀に関連する器種が多く含まれることに注目される。これらを考慮すれば、南東トレンチで検出したSD－1が東側で屈曲している事実も、今後注意しなければならない事柄であろう。

以上、遺跡の立地および遺構の持つ性格を中心に概略を記した。今回の調査は、小面積で行

ったにもかかわらず、数多くの問題を提起してくれた。今後、調査例の増加により、この時期における遺跡立地等の諸問題が明白にされることを期待する。

註1　原田修・久兒健・島田和子 「清原得巖所蔵考古資料図録」 －高安の遺跡と遺物－ 『大阪文化誌第2巻・第2分・通巻第6号』 1976年 (財)大阪文化財センター

註2　(財)八尾市文化財調査研究会 『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報』 －(財)八尾市文化財調査研究会報告2－ 1983年

註3　佐原真 「畿内地方」『弥生式土器集成本編』 1968年

註4　前掲書註3

註5　東大阪市遺跡保護調査会 「鬼塚遺跡Ⅱ」『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報19』 1979年　口縁端部の特徴から、A_1－113・A_2－114・A_3－115と細分され、「しだいに小型化している」と述べられている。

註6　前掲書註5　甕A－54

註7　前掲書註5　甕Bのうち、大型のものに類似する。

註8　前掲書註5　甕B－26

註9　大阪府立花園高等学校地歴部 「北鳥野遺跡」『河内古代遺構の研究』 1971年

註10　大阪府教育委員会 『池島遺跡試掘調査概要・Ⅰ』 －八尾市福万寺町所在－ 1982年

註11　瓜生堂遺跡調査会 『恩智遺跡』 1980年

Ⅳ　出土遺物観察表

1）南東トレンチ

番号	器種	法量(cm)	形態	調整	色調・胎土・焼成	備考
1	広口壺	口径 15.4	直立する頸部から丸く外反し、口縁部に至る。 端部は下方に拡張し、側面に3条の擬凹線が巡る。	磨耗のため不明。	・赤褐色 ・中核は灰色 ・胎土やや粗 ・焼成良	
2	広口壺	口径 13.4	頸部から口縁部まで、連続して丸く外反する。 端部は丸く終る。	内面にハケ目が残るが全体に磨耗が進む。	・赤褐色 ・胎土やや粗 ・焼成良	
3	広口壺	口径 13.8	外傾する頸部から外反ぎみに開き、口縁部に至る。 端部は丸みを持ち、凹線状の凹みが一周する。	端部ヨコナデ、外面タタキの後粗いハケナデ。	・暗褐色 ・胎土粗 ・焼成良好	
4	短頸壺	口径 9.4	ほぼ直立する口頸部。 端部は水平な面を成し、外方へつまみ出される。	端部ヨコナデ。 外面ヘラミガキ。 内面ハケナデ。	・褐色 ・胎土粗 ・焼成良好	
5	短頸壺	口径 10.0	細く締まる口頸基部から外傾して伸びる。 端部はやや先細となるが、4のように水平面を作り、外方へつまみ出される。	端部のヨコナデの範囲は広い。 外面タタキの後ハケナデ。 内面ハケナデ。	・ ・ ・ } 4と同様	
6	短頸壺	口径 10.0	わずかに直立する頸部を持ち、内弯して立つ短い口縁部に至る。 器肉は薄く、端部外面には2条の凹線が巡る。	ヨコナデ。 外面に暗文状のヘラミガキ。	・乳褐色 中核は灰色 ・胎土精良 ・焼成良好	SD－1出土
7	短頸壺	口径 10.4	外反ぎみに立つ頸部から屈曲して凹線状の段を作り、口縁部を拡張する。 器肉は口頸基部ではきわめて厚く、先細となる。	外面口縁部から内面口頸部までヨコナデ。 外面頸部・内面肩部ハケナデ。	・乳褐色 中核は黒灰色 ・胎土やや粗 ・焼成良好	
8	短頸壺	口径 10.8	丸みのある体部上半が遺存し、口頸部は7とほぼ同形態であるが、拡張部側面に2条の凹線が廻る。	7と同様。 内面肩部には指頭圧ナデ。	・乳褐色 中核は黒灰色 ・胎土密 ・焼成良好	外面に煤付着
9	短頸壺	口径 12.5 最大径 29.0	下位で張り、球形に近いやや扁平な体部から屈曲し、外反する短い口縁部に至る。 端部は先細となり、外傾する狭い凹面を作る。 肩部には半截竹管による直線文・竹管押圧円形文を交互に2回づつ施す。	外面口縁部ヨコナデ、体部3方向のヘラミガキ。 内面口縁部・体部下位ヘラミガキ、肩部指頭圧ナデ、体部中位はヘラナデ。	・外面褐色 内面灰色～灰褐色 ・胎土密 ・焼成良好堅緻	SD－1出土

番号	器種	法量(cm)	形態	調整	色調・胎土・焼成	備考
10	短頸壺	最大径 29.3	ほぼ中位で張る球形に近い体部のみ遺存。 肩部に直線文・列点文・直線文・円形押圧文を施す。	9とほぼ同様	9と同様	SD－1出土 9と同じ文様原体を使用か
11	壺底部	底径 4.3	体部から突出する底部で、底面中央には不正円形の凹みを有する。 体部の張りは弱い。	内外面ヘラミガキ。底部側面から底面は指頭圧ナデ。	・淡褐色 中核は灰色 ・胎土密 ・焼成良好	
12	壺底部	4.6	体部から突出する平底。 体部の張りは強い。	11とほぼ同様 粘土継接合部には指頭圧ナデ。	・淡褐色 ・胎土密 ・焼成良好緻緻	
13	小型壺	最大径 8.2 底径 3.4	内弯して立ち上がる体部。 底部は周縁がつまみ出され、上げ底状を呈する。	外面上位にタタキ目、底部周縁には指頭圧ナデ。 内面底部にヘラの圧痕。	・淡褐色 中核は灰色 ・胎土やや粗 ・焼成良好	
14	高杯	口径 15.5	杯部との境にゆるい稜を作り、外反する口縁部に至る。 端部は先太で終る。	内外面ともハケナデの後ヘラミガキ、端部付近はヨコナデ。	・褐色 ・胎土密 ・焼成良好	
15	高杯	口径 17.5 脚径 7.9 器高 11.5	深い直線的な杯部から屈曲し、一旦直立した後外反する口縁部に至る。 端部は丸く終る。 脚部は短く直線的に開き、端部近くで外反してわずかに広がる。 脚部中位に3孔を有する。 器肉は厚い。	杯部は14とほぼ同様。 脚部外面ヘラケズリの後ハケナデ、内面にはしぼり目、端部はヨコナデ。	・黄褐色 ・胎土密 ・焼成良好	SD－1出土
16	高杯	口径 23.0	杯部から鋭い稜を作った後、外反する長めの口縁部に至る。 端部はきわめて薄くなり、尖りぎみに終る。	外面にハケ目が残るが、磨耗が進む。	・赤褐色～黄茶色 ・胎土密 ・焼成良	
17	高杯	口径 27.1	浅めの杯部から丸く屈曲し、外反する口縁部に至る。 端部は先細となり、下方へわずかに肥厚する。	内外面とも杯部ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。	・茶褐色 ・胎土粗 ・焼成良好	二次焼成をうける
18	高杯	口径 22.0	浅い椀形を呈する直口の杯部。口縁端部は外傾ぎみに開き、側面は凹面状となる。	内外面ともヘラミガキ、端部ヨコナデ。	・乳褐色～明橙色 ・胎土密 ・焼成良好	
19	高杯	裾径 15.2	なだらかに開く裾部のみ遺存。 4孔を有する(3個残存)。	18と同様。	18と同様	18の脚裾部か

番号	器種	法量(cm)	形態	調整	色調・胎土・焼成	備考
20	高杯	口径 23.0	18と同様浅い椀形の杯部。口縁端部はわずかに直立ぎみとなり、薄く尖りぎみに終る。	18と同様。裾部内面にハケナデ。	・暗茶褐色 ・胎土密 ・焼成良好堅緻	
21	高杯	———	柱状部から屈曲し、平たく広がる裾部に至る。6条1組のヘラ描き沈線文を2組施す。円孔は1個のみ残存。	外面細く密なヘラミガキ。内面しぼり目	・外面暗赤褐色～褐色 ・内面黒褐色 ・胎土密 ・焼成良好	
22	高杯	———	21と同形態・同文様。5孔を有する(3個残存)。	21と同様	・暗赤褐色 ・胎土密 ・焼成良好堅緻	内面裾部に煤付着
23	高杯	裾径 13.1	柱状部から裾部までなだらかに続く、丈高の脚部。端部は丸く終る。3孔を有する。	端部ヨコナデ。外面・内面杯部ヘラミガキ。内面柱状部にしぼり目。	・茶褐色 ・胎土粗 ・焼成良好	
24	高杯	裾径 15.5	直線的に開き、丸く終る。端部に至る。上端面にはヘラによる刻み目文を施す。	磨耗のため不明	・赤褐色～灰褐色 ・胎土粗 ・焼成良	
25	高杯	裾径 18.6	外反ぎみに開く裾部端部は上下に丸く肥厚し、平面を作る。	ヨコナデ。	・茶褐色 ・胎土粗 ・焼成良好	
26	高杯	裾径 20.4	外反ぎみに開く裾部で、丈高の脚部と思われる。端部は外傾する平坦面を作る。	端部ヨコナデ。外面ハケナデの後ヘラミガキ。内面ハケナデ。	・茶褐色 ・胎土やや粗 ・焼成良好堅緻	SD－1出土
27	高杯	裾径 20.0	26に似るが、端部近くでは内弯ぎみとなる。5孔を有する(4個残存)。	26と同様	26と同様	
28	器台	口径 19.5 裾径 15.8 器高 14.3	直立する体部から上下に外反する。口縁端部、裾端部とも上下に丸く肥厚する。下半の器肉は厚い。	端部ヨコナデ。外面ハケナデ。内面口縁部ヘラミガキ、体部3方向のヘラケズリ。	・茶褐色 ・胎土やや粗 ・焼成良好	
29	器台	口径 23.0	細めの体部から丸く屈曲した後、直線的に開いて口縁部に至る。端部は肥厚し、垂直な広い平面を作る。	外面ヨコナデ。体部ヘラミガキ。内面口縁部ヘラミガキ、体部ハケナデ。	28と同様。	
30	器台	口径 23.3	水平近くに開く口縁部。端部は上方へ丸く肥厚し、下方へは垂下する。口縁側面には竹管押圧円形浮文を貼付(3個残存)。	ヨコナデ。	28と同様。	

番号	器種	法量(cm)	形態	調整	色調・胎土・焼成	備考
31	器台	裾径 21.6	体部からなだらかに外反する裾部に至る。 端部は上下に肥厚し、凹面状となる。 4ヶ所2段の円孔を有する。	端部ヨコナデ。 外面体部、内面裾部ヘラミガキ。 外面裾部、内面体部ハケナデ。	・茶褐色～赤褐色 ・胎土やや粗 ・焼成良	赤褐色を呈する部分は二次焼成のためか磨耗が進む。
32	小型鉢	口径 10.8 底径 3.2 器高 6.4	内弯ぎみに開く直口の鉢。 口縁端部は尖って終わる擬口縁。 底部は突出する平底。	内外面ハケナデ。 口縁部・外底面ユビナデ。	・赤褐色 ・胎土やや粗 ・焼成良好	
33	小型鉢	口径 10.4 底径 3.6 器高 (6.8)	直線的に開く体部。 口縁端部は外へつままれ平坦面を作る擬口縁。 底部はわずかに開く上げ底状。	口縁部ユビナデ。 内外面ハケナデ。 底部周縁に指頭圧ナデ。	・淡褐色 ・胎土やや粗 ・焼成良好	
34	小型鉢	口径 13.3 底径 4.6 器高 7.4	内弯して大きく開く体部。 口縁部は直立ぎみとなり、尖って終る擬口縁。 底部はあまり開かない上げ底状。	口縁部ユビナデ。 底部付近指頭圧ナデ。 内面ハケナデ。	・茶褐色 ・胎土粗 ・焼成良好	
35	小型鉢	口径(長) 13.5 (短) 12.5 底径 4.0 器高 7.1	34とほぼ同形態。 底部のつまみ出しは、より顕著になる。	34と同様。	・淡褐色 ・中核は黒灰色 ・胎土精良 ・焼成良好	
36	小型鉢	口径 12.8 底径 4.5 器高 8.1	やや丈高の器形で、口縁部は34・35に似る。 底部周縁は外反ぎみにつまみ出される。 底部の器肉きわめて厚い。	34と同様	・茶褐色 ・胎土やや粗 ・焼成良好	
37	小型鉢	口径 13.2 底径 4.2 器高 7.8	口縁部まで内弯して開く。 端部は尖って終る擬口縁。 底部は内面が深く窪み、周縁のつまみ出しは顕著で、端部が肥厚する。	34とほぼ同様。 口縁部は他の鉢より丁寧な調整。	35と同じ	SD－1出土
38	小型鉢	口径 13.8 底径 4.2 器高 8.2	直線的に開く体部。 口縁部は内弯ぎみとなり、丸く終る擬口縁。 底部は中央部が深く窪む輪台状。	内外面ハケナデ。 底部周縁指頭圧ナデ。 内面底部にヘラの圧痕。	・茶褐色 ・胎土粗 ・焼成良好	外面に煤付着
39	小型鉢	口径 14.0	口縁端部は内傾する平坦面となる擬口縁。 器肉は厚手。	34と同様。	38と同様	
40	小型鉢	口径 14.7	口縁端部は外反ぎみにつまみ出される擬口縁。	口縁部ユビナデ。 外面タタキの後ハケナデ。 内面ハケナデ。	・36と同様	
41	中型鉢	口径 20.2 底径 4.2 器高 11.0	直線的な体部から屈曲し、内弯ぎみに開く口縁部。 端部は外傾する面となる。 底部は突出平底。	外面口縁部ヨコナデ、体部タタキ、底部側面に指頭圧痕。 内面はハケナデ。	・淡赤褐色 ・胎土粗 ・焼成良	SD－1出土

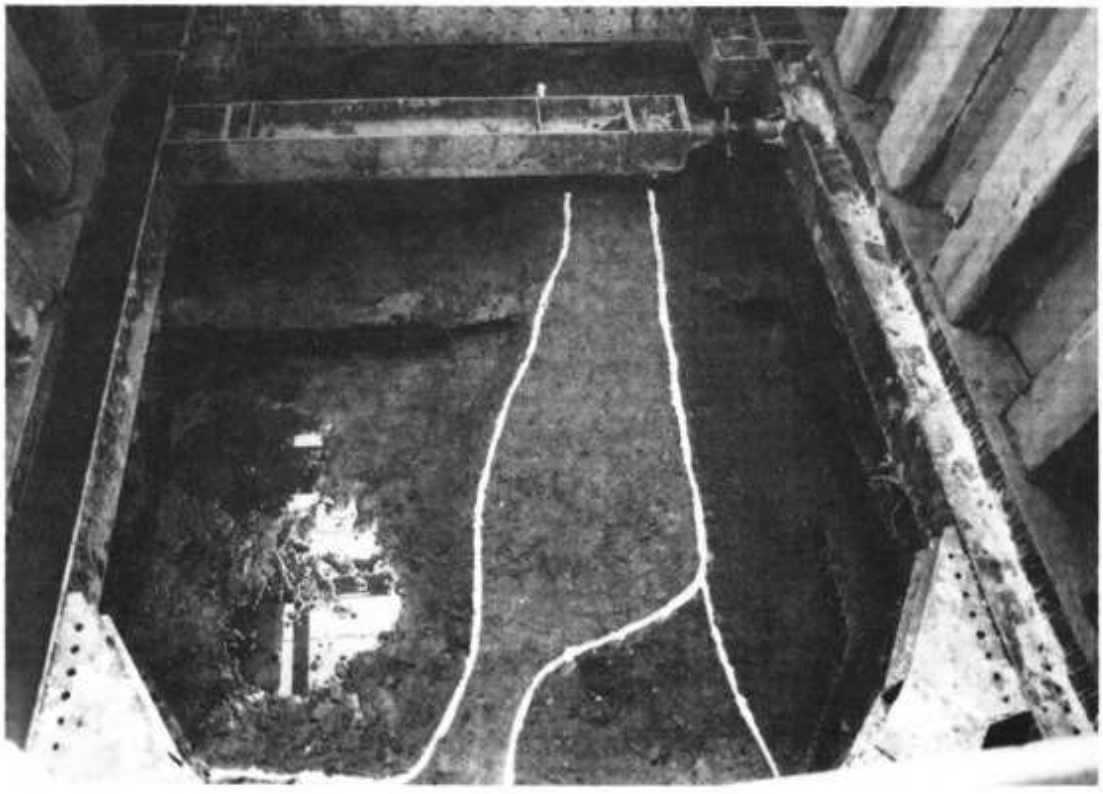
番号	器種	法量(cm)	形態	調整	色調・胎土・焼成	備考
42	中型鉢	口径 22.4	扁平な楕形の体部から屈曲し、外反ぎみに開く口縁部に至る。 端部は下方に肥厚ぎみで、丸みのある面を作る。	内外面とも屈曲部指頭圧ナデ、口縁部ハケナデの後ヨコナデ、体部ヘラミガキ。	・淡褐色 ・胎土密 ・焼成良好	
43	大型鉢	口径 38.8	42に似るが、口縁部は水平近くに外反する。 外面体部上位には逆U字形の把手を貼付する。	内外面とも口縁部ヨコナデ、体部ヘラミガキ。把手には指頭圧痕が顕著である。	・淡褐色～赤褐色 ・胎土やや粗 ・焼成良	SD－1出土
44	甕用蓋	口径 15.5 つまみ径 4.2 器高 6.3	外反ぎみに開き、口縁部までなだらかに移行する。 つまみはわずかに外に張り出す上げ底状。	外面タタキの後ヘラナデ。つまみの周囲は指頭圧ナデ。 内面ハケナデ。	・褐色 ・胎土やや粗 ・焼成良	SD－1出土 内面に煤付着
45	甕	口径 15.2	内に稜を作り、「く」の字形に鋭く屈曲し、強く外反する口縁部に至る。 端部に1条の凹線が廻る。 肩部の器肉は薄めである。	内外面ともヨコナデ。 内面肩部にはハケ目が残る。	・褐色 ・胎土密 ・焼成良好堅緻	
46	甕	口径 14.8	直線的な肩部から丸みを持って屈曲し、直線的に開く口縁部に至る。 端部はわずかにつまみ出され、外傾する面となる。	口縁部ヨコナデ。 外面タタキ 内面指頭圧ナデ。	・赤褐色 ・胎土粗 ・焼成良	SD－1出土
47	甕	口径 17.0	肩部から丸く屈曲し、外反する口縁部に至る。 端部は丸く終る。	口縁部ヨコナデ。 外面ハケナデの後体部にタタキ。 内面ハケナデ。	・褐色 ・胎土粗 ・焼成良好	外面に煤付着
48	甕	口径 17.2 最大径 17.8	上位で張る体部から「く」の字形に屈曲し、外反する口縁部に至る。 端部は丸みのある面となる。	口縁部ヨコナデ。 外面ヘラケズリの後肩部にタタキ。 内面ハケナデ。	・赤褐色 ・胎土粗 ・焼成良好	外面に煤付着
49	甕	口径 15.0 最大径 17.0	中位で張る体部から「く」の字形に丸く屈曲し、直線的に開く口縁部に至る。 端部は先細で終る。	口縁部ヨコナデ。 体部タタキの後肩部にハケナデ。 内面ナデ。	・緑灰褐色 ・胎土粗 ・焼成良好	外面下半に煤付着
50	甕	口径 15.2 最大径 15.2	中位で張る体部から「く」の字形に鋭く屈曲し、外反して開いた後内弯ぎみに伸びる口縁部に至る。 端部はつまみ上げられる。	口縁部ヨコナデ。 外面タタキの後中位にハケナデ。 内面ハケナデ。 タタキ出し口縁	・赤褐色 ・胎土やや粗 ・焼成良好	外面全体および内面下半に煤付着
51	甕	口径 16.8 最大径 15.0	上位で張る体部からわずかにくびれ、内弯して開く口縁部に至る。 端部は外傾する半迫面となる。	外面口縁部ヨコナデ、体部タタキ。 内面ハケナデ、タタキ出し口縁。	・褐色 ・胎土やや粗 ・焼成良好	外面に煤付着
52	甕底部	底径 3.6	体部から突出しない輪台状の底部。	外面体部タタキ、底面指頭圧ナデ。 内面ハケナデ。	・暗赤褐色 ・胎土密 ・焼成良好	・外面に煤付着

番号	器種	法量(cm)	形態	調整	色調・胎土・焼成	備考
53	甕	底径 4.7	体部から突出する平底	外面体部タタキ、底部側面に指頭圧ナデ。 内面ナデ。	・褐色～赤褐色 ・胎土粗 ・焼成良好	外面に煤付着

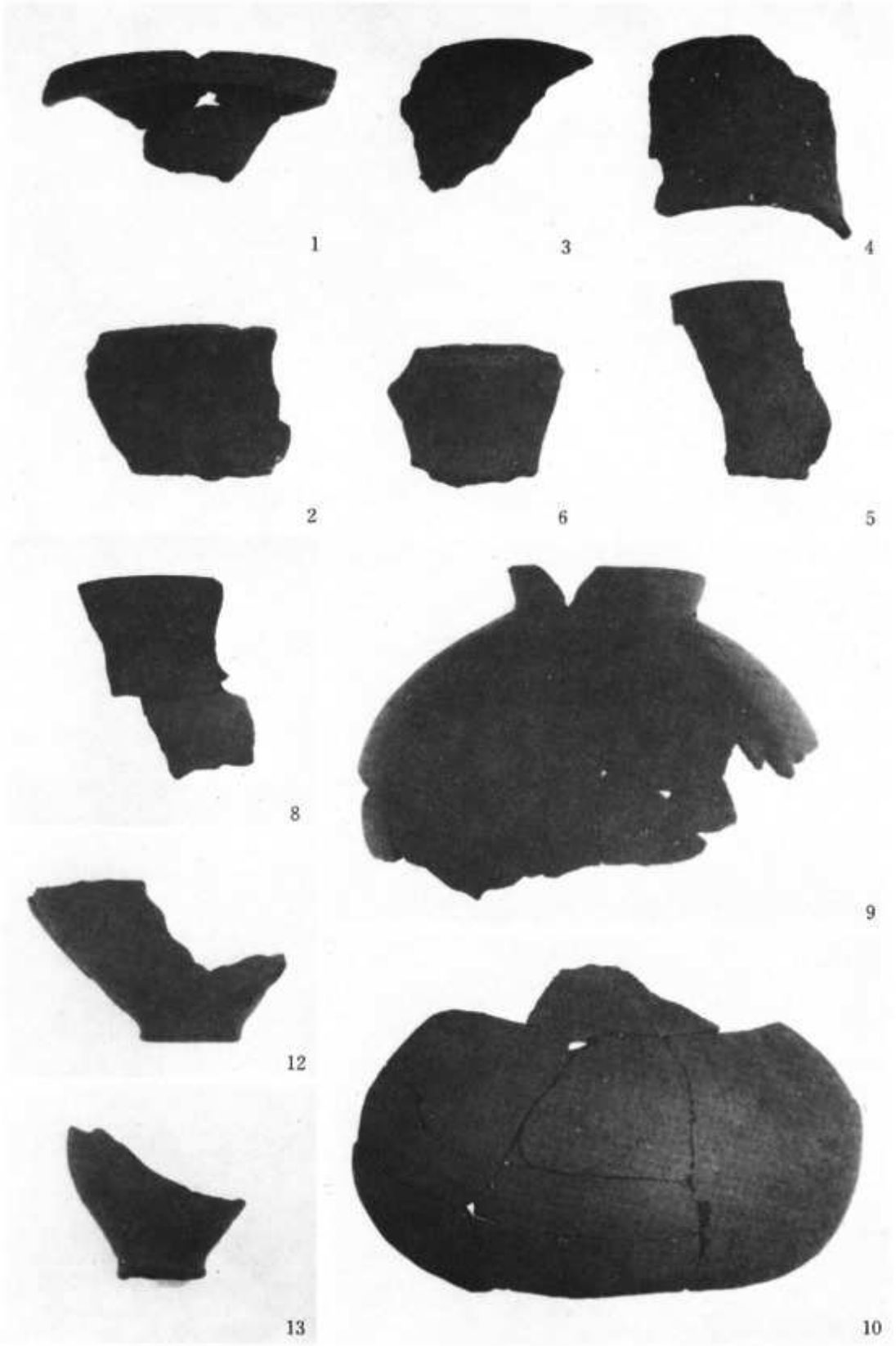
2）南西トレンチ

番号	器種	法量(cm)	形態	調整	色調・胎土・焼成	備考
54	甕	口径 14.5 最大径 18.8	張りの強い体部から内面は直立ぎみに、外面では「く」の字形近くに屈曲し、外反する口縁部に至る。 端部は丸く終る。	口縁部ヨコナデ。 外面タタキの後下位にハケナデ。 内面ナデ。	・褐色 ・胎土粗 ・焼成良好	外面に煤付着
55	甕	最大径 17.8 底径 7.3	やや上位で張る体部。 底部は突出平底で、底面中央部には小さな窪みを有する。 いびつで粗雑なつくり。	外面タタキ、底部側面ナデ。 内面指頭圧ナデ、ハケナデ、ナデ。	・赤褐色 ・胎土粗 ・焼成良好	
56	甕	底径 4.0	体部からあまり突出しない平底で、底面中央部の窪みは小さい。	外面タタキ。 内面ヘラナデ。	・暗赤褐色 ・胎土密 ・焼成良好	
57	小型鉢	底径 5.3	内弯ぎみの体部から「ハ」の字形近くにつまみ出される上げ底状の底部。	外面底部付近に持頭圧痕・ハケ目残る。 内面ヘラナデ。	・褐色 ・胎土密 ・焼成良	

調査地近景（北から）



南東トレンチ遺構検出状況（東から）



南東トレンチ出土遺物（壺）

15

28

23

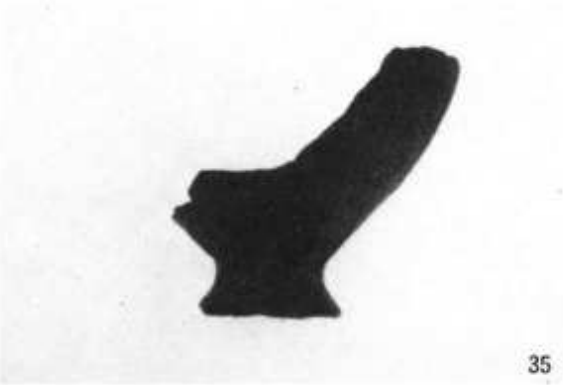
31

22

27

南東トレンチ出土遺物（高杯・器台）

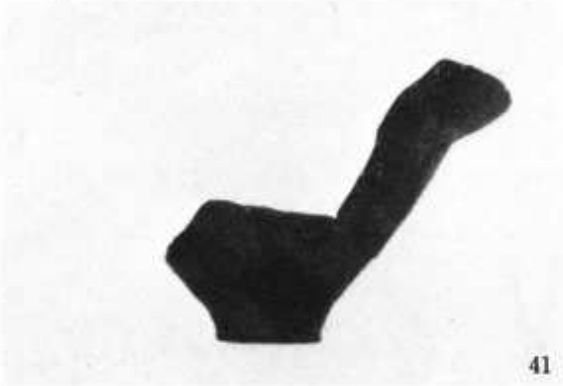
32

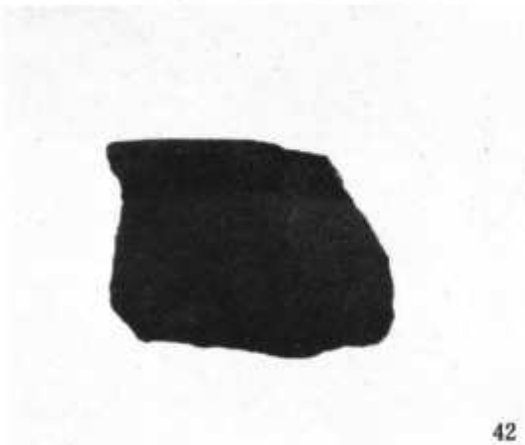

35

34

38

37

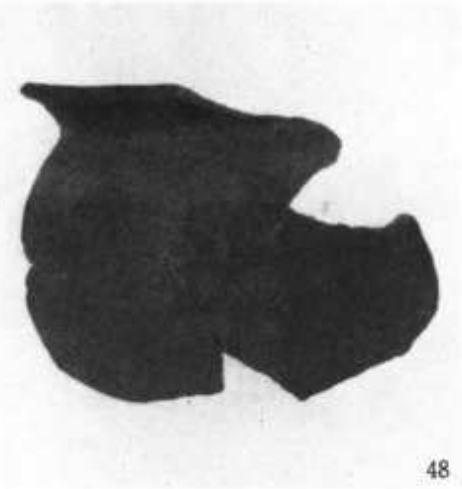

41


42

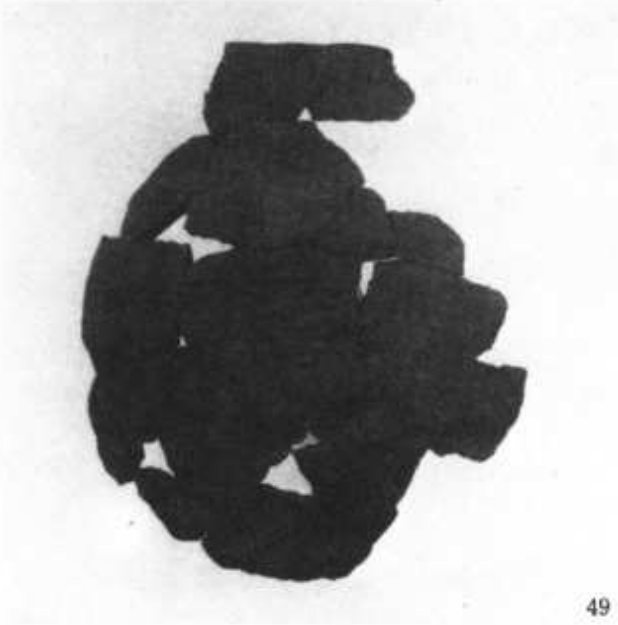
43

南東トレンチ出土遺物（鉢）

44



48



49

51

50

52

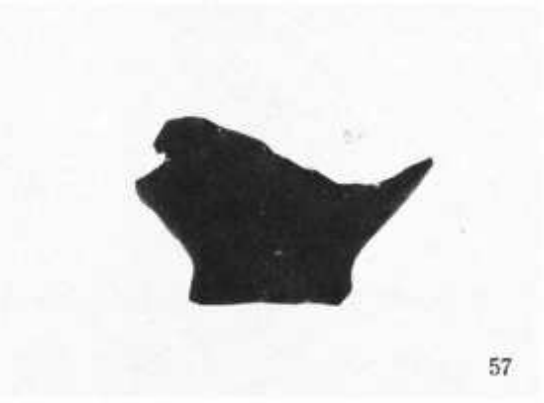
53

南東トレンチ出土遺物（甕）

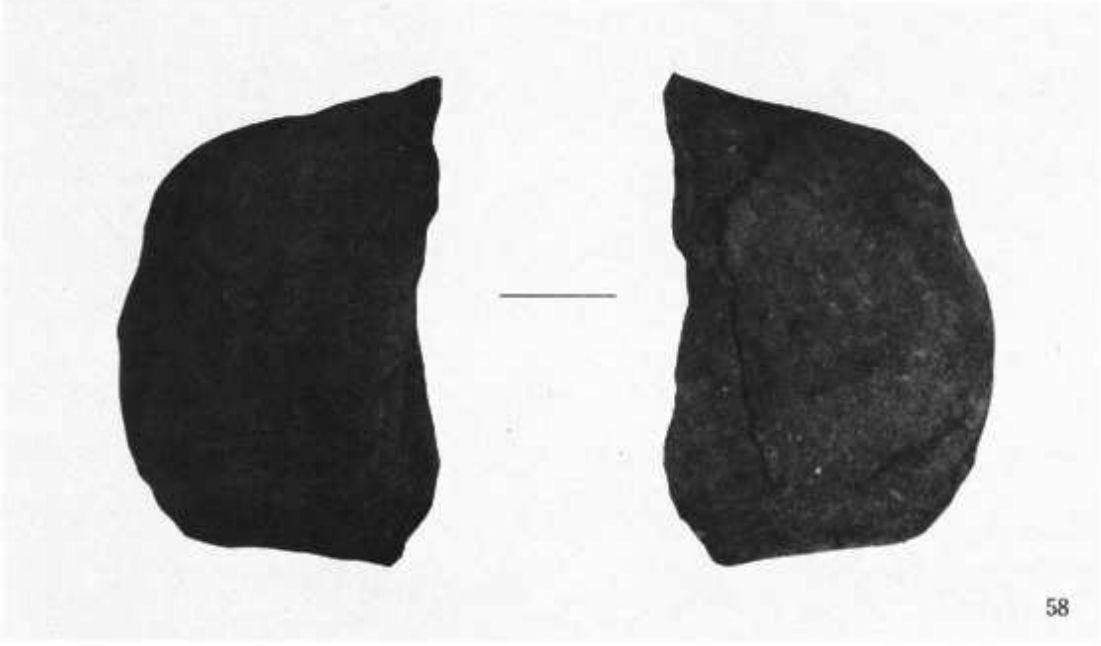
54

55

56



57



58

南西トレンチ出土遺物

第 4 章

土 器 の 胎 土 観 察

例　　言

1．本章は生駒西麓における遺跡の立地条件と、そこから出土した土器の胎土に含まれる砂礫との関係を知るうえで行った観察結果をまとめたものである。

1．胎土の観察は八尾市立刑部小学校教諭奥田尚氏・八尾市教育委員文化財室米田敏幸が行い、原稿の執筆は奥田尚氏に依頼した。

1．試料1は本書第2章水越遺跡出土の、試料2は本書第3章太田川遺跡出土の土器群である。試料3は昭和57年7月16日から8月24日かけて、(財)八尾市文化財調査研究会が、高萩千秋を担当者として実施した高安中学校校舎増築工事に伴う発掘調査の際、SW－1より一括出土した土器群である。現在内業整理中のため詳細は不明であるが、参考試料として土器の実測図とともに掲載した。調査地は八尾市水越181番地に所在し、第2章調査地から北東約200mの地点である。

本　文　目　次

Ⅰ　はじめに…… 111
Ⅱ　胎土による区分…… 111
Ⅲ　胎土中の砂礫の採取地…… 115
Ⅳ　胎土分析表…… 117

挿　図　目　次

第1図　土器の胎土採取地推定模式図…… 116
第2図　高安中学校SW－1出土遺物実測図…… 123

Ⅰ はじめに

土器の胎土分析には、肉眼観察・偏光顕微鏡による観察、螢光X線による元素分析等の方法がある。ここでは、肉眼観察による分析方法をとった。完形品、または個体確認のできる試料の表面に見られる砂礫粒を肉眼で観察した。表面に油煙や酸化鉄が付着して観察が困難な場合もある。最初裸眼によって観察を行い、次に実体鏡（倍率30倍）で観察した。

砂礫の岩石種は花崗岩・閃緑岩・斑糲岩・流紋岩・チャート・泥岩・砂岩・変輝緑岩・結晶片岩・ホルンフェルス・火山ガラスで、鉱物種は石英・長石・雲母・角閃石である。粒径は裸眼の場合2㎜以上を粗粒・2㎜未満1㎜以上を中粒・1㎜未満0.5㎜以上を細粒・0.5㎜未満を微粒に、実体鏡下では1㎜以下を粗粒・1㎜未満0.5㎜以上を中粒・0.5㎜未満0.1㎜以上を細粒・0.1㎜未満を微粒に区分した。含まれる量は、非常に多い・多い・中・わずか・ごくわずかの5段階に区分した。粒形は、角礫・亜角礫・亜円礫・円礫の4段階に区分した。

以上の区分以外に、鉱物については結晶面の有無・自形・他形に注意した。自形を示す石英・長石・角閃石・雲母・輝石等は、火山岩起源と推定される。逆に、他形であれば深成岩起源の可能性が強い。また、雲母の場合は粒状や板状を示す場合があり、粒状を示す雲母の含まれる岩石分布は、河内近辺ではかなり限定される。

岩石分布には、大きく見れば地域差があり、原岩を推定することは、土器を製作した時に採取した砂礫の採取地を推定する糸口となると言える。

今回肉眼によって、3地点出土の土器試料112個を観察した。内訳は、第1試料40個（水越遺跡消防署－本書第2章）・第2試料65個（太田川遺跡水越交差点－本書第3章）・第3試料7個（水越遺跡高安中学校－参考試料として巻末に掲載）である。

Ⅱ 胎土による区分

3地点から出土した土器は、胎土によって、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵの6類型に区分される。各類型の特徴として、以下があげられる。

Ⅰ類型：結晶片岩・白雲母が含まれ、輝石が認められない。

Ⅱ類型：花崗岩・閃緑岩がわずかに含まれ、角閃石は粗粒で多く、石英は細粒で少ない。

Ⅲ類型：花崗岩・石英・角閃石は粗粒で多い。

Ⅵ類型：チャートを含むことが多い。角閃石は粗粒で多い。石英は細粒で少ない場合が多い。

Ⅴ類型：花崗岩・チャートが含まれる場合が多い。角閃石は細粒である。石英は多い。

Ⅵ類型：Ⅰ類型からⅤ類型のいずれにも属さない。

各類型の詳細について述べる。

Ⅰ類型

岩石片はチャート・結晶片岩で、鉱物片は石英・雲母・角閃石である。

チャート：白色で、亜角礫である。量はごくわずかであり、最大礫径は5㎜である。

結晶片岩：絹雲母片岩・石英片岩である。量はわずかであり、最大礫径は6㎜である。

石英：無色透明で、角礫状である量はごくわずかで、粒径は細粒である。

雲母：白雲母で、無色透明で板状である。量はごくわずかで、粒径は細粒である。

角閃石：黒色で、角礫である。量は中程度で、粒径は中粒である。結晶面が見られる場合がある。

Ⅱ類型

岩石片は花崗岩・閃緑岩・斑糲岩・変輝緑岩・火山ガラスで、鉱物片は石英・長石・雲母・角閃石である。

花崗岩：灰白色である。造岩鉱物は石英・長石からなる場合が多いが、便宜上花崗岩とした。まれに石英・長石・黒雲母からなる場合がある。礫形は角礫が多く、亜角礫はわずかである。量はわずかかごくわずかであり、認められない試料もある。最大礫径は8㎜である。

閃緑岩：暗灰色である。造岩鉱物は角閃石・長石である。礫形は角礫・亜角礫で、量はごくわずかである。最大礫径は6㎜である。

斑糲岩：わずか1試料にのみ認められる。礫形は亜円礫で、量はごくわずかである。最大礫径は7㎜である。造岩鉱物は角閃石・長石である。

変輝緑岩：暗灰色で、円礫である。1試料にのみ認められる。最大礫径は8㎜である。

火山ガラス：無色透明で、貝殻状である。1試料にのみ認められ、量はごくわずかである。粒径は中粒である。

石英：無色透明で、角礫状である。実体鏡下にて認められる。量はわずかである。

長石：白色で、角礫状である。最大礫径は3㎜である。量は試料によって異なり、中程度からごくわずかまである。

雲母：黒色板状、または金色板状である。最大礫径は3㎜である。量は試料によって異なり、認められない場合もある。

角閃石：黒色で、角礫か亜角礫である。角礫が非常に多い。最大礫径は5㎜である。量は多く、裸眼で認められる。

Ⅲ類型

岩石片は花崗岩・閃緑岩・チャート・火山ガラスで、鉱物片は石英・長石・雲母・角閃石である。

花崗岩：灰白色である。角礫・亜角礫であるが、亜角礫はわずかである。最大礫径は5㎜である。量は試料によって異なり、わずかの場合から認められない場合まである。造岩鉱物は石英・長石、または石英・長石・黒雲母からなり、石英・長石からなる場合が多い。

閃緑岩：暗灰色で、角礫・亜角礫があり、亜角礫が多い。実体鏡下で認められ、量はわずかである。試料によって、認められない場合が多い。

チャート：赤褐色・黒褐色・灰色で、亜角礫・亜円礫状である。最大粒径は3㎜で、量はごくわずかである。わずか3試料にのみ認められる。

火山ガラス：黒色透明・無色透明で、貝殻状を示す。実体鏡下にて認められる。2試料にのみ見られる。量はごくわずかである。

石英：無色透明で、角がわずかにまるくなった角礫・亜角礫である。最大礫径は3㎜で、すべての試料中に裸眼で確認できる。量は試料によって異なり、多い場合からごくわずかの場合まである。

長石：白色で、角礫・亜角礫である。最大礫径は2㎜で、量は多い場合が多い。試料によっては認められない場合がある。

雲母：黒色板状・黒色粒状・金色板状の場合がある。金色板状の場合が多い。最大礫径は3㎜である。量は試料によって異なり、多い場合、認められない場合がある。

角閃石：黒色で、わずかに角がまるくなった角礫・亜角礫である。最大礫径は3㎜で、すべての試料中に裸眼で認められる。量は多い。

Ⅳ類型

岩石片は花崗岩・閃緑岩・流紋岩・チャート・変輝緑岩で、鉱物片は石英・長石・雲母・角閃石である。

花崗岩：灰白色で、角礫・亜角礫である。角礫が多い。最大礫径は6㎜である。量はわずか、ごくわずかである。試料によって量は異なる。造岩鉱物は石英・長石からなる場合が多く、まれに石英・長石・黒雲母からなる。

閃緑岩：暗灰色で、角礫状である。実体鏡下でわずか1試料にのみ認められ、粒径は粗粒である。造岩鉱物は石英・角閃石である。

流紋岩：灰色で、亜角礫である。最大礫径は8㎜である。わずか2試料にのみわずかに認められる。黒雲母が含まれる場合が多い。

チャート：茶褐色・灰色・白色で、亜角礫・亜円礫である。最大礫径は8㎜である。多くの試料に認められ、量はごくわずかである。

変輝緑岩：暗灰色で、亜円礫である。礫径は8㎜で、量はごくわずかである。1試料にのみ見られる。

石英：無色透明で角礫である。最大礫径は2.5mmである。裸眼で認められる試料は少なく、実体鏡下ではすべての試料に認められる。量は試料によって異なり、中程度の場合からごくわずかの場合までである。

長石：白色で角礫状・亜角礫状である。角礫状の場合が多い。最大粒径は1.5mmである。試料よって含まれる量は異なり、中程度の場合からごくわずかの場合までである。

雲母：黒色板状・金色板状である。金色を示す場合が多い。最大礫径は2mmである。裸眼でも認められ、量は多い場合からわずかの場合までである。

角閃石：黒色で、角礫・亜角礫である。角礫が多い。最大礫径は2mmである。裸眼で認められる試料が多い。量は多い。

V類型

岩石片は花崗岩・閃緑岩・チャート・砂岩・火山ガラスで、鉱物片は石英・長石・雲母・角閃石である。

花崗岩：灰白色で、角がわずかにとれた角礫か亜角礫である。角礫が多い。最大礫径は10mmである。量は試料によって異なり、多い場合から認められない場合までである。造岩鉱物は石英・長石・黒雲母からなる場合と、石英・長石からなる場合がある。前者の場合はまれである。

閃緑岩：灰白色で、角礫である。実体鏡下にて認められ、粗粒か中粒である。わずか4試料にのみ認められ、量はごくわずかである。造岩鉱物は石英・長石・角閃石からなる場合、長石・角閃石からなる場合がある。

チャート：灰白色・黒色で、角礫・亜円礫である。最大礫径は3mmである。試料によって認められる場合、認められない場合がある。量はごくわずかである。

砂岩：灰白色で、亜角礫である。礫径は2mmである。1試料にのみ認められ、量はごくわずかである。

火山ガラス：無色透明で、貝殻状である。実体鏡下で認められ、中粒である。1試料にのみ認められ、量はごくわずかである。

石英：無色透明で、角礫・亜角礫である。角礫が多い。最大礫径は4mmである。ほとんどの試料には、裸眼で認められる。量は多い。

長石：白色で角礫・亜角礫である。角礫が多い。最大礫径は4mmである。認められない試料もあるが、ほとんどの試料に認められ、量は試料によって異なる。

雲母：黒色板状・金色板状である。後者の場合が多い。最大礫径は2mmである。量は試料によって異なり、多い場合から認められない場合までである。

角閃石：黒色で角礫である。最大礫径は1mmである。裸眼で認められる場合は少なく、実体鏡下で見られる場合が多い。粒径は比較的細粒で、量は試料によって異なる。

Ⅵ類型

岩石片は花崗岩・閃緑岩・チャート・結晶片岩・ホルンフェルス・火山ガラスで、鉱物片は石英・長石・雲母・角閃石である。

岩石片・鉱物片の含まれる量が少ない場合や、酸化鉄等の付着によって観察が行いにくい場合等があり、その量・種類・形等が把握しにくいため、各類型のいずれかに属させることは困難である。そのため、分類しにくい試料をⅥ類型とした。

Ⅲ　胎土中の砂礫の採取地

土器の胎土中に含まれる砂礫種の構造から、出土地を中心にして、同じ構成の砂礫が採取できる近地点を推定する。

Ⅰ類型

結晶片岩・白雲母が含まれる。結晶片岩類は礫として大阪層群中にごくわずかに含まれるが、三波川帯の紀ノ川流域・鳥取県と岡山県の県境付近の三郡変成帯付近の河川礫には多量に含まれる。また、紀ノ川流域の細砂中には、白雲母が含まれる場合が多い。鳥取県から島根県にかけては、新期の安山岩類が広く分布する。以上のことから、Ⅰ類型の土器中の砂礫は、紀ノ川の砂礫を採取したものと推定される。

Ⅱ類型

花崗岩・閃緑岩が含まれ、石英が細粒で少なく、逆に角閃石が粗粒で多い。また、チャート・砂岩等が含まれず、角礫が多い。水越遺跡・太田川遺跡を中心に岩石の分布を見れば、生駒山系には粗粒の角閃石が多く含まれる石英閃緑岩・斑糲岩がある。岩石分布と土器中の構成砂礫を比較して土器中の砂礫の採取地を推定すれば、石英閃緑岩・斑糲岩の岩片が流出し、河内平野の河川砂礫との混入の影響がない場所が考えられる。つまり、山腹で傾斜が緩やかになった部分で、洪積層・沖積層等の砂礫の影響がない場所である。Ⅱ類型のものに含まれる岩石片・鉱物片には角礫が多い。この角礫を詳細にみれば、弥生時代中期(第1試料)・後期(第2試料)の場合は角にわずかにまるみがあり、流水等で円磨された様相がある一方、庄内甕(第3試料)の場合には鋭い角が認められ、人為的に破砕された可能性が充分に予測される。

Ⅲ類型

花崗岩・石英・角閃石は粗粒で多い。Ⅱ類型との違いは、石英が粗粒で多く含まれることである。このことから、Ⅱ類型より石英が多く含まれる条件の場で砂礫が採取されたと推定される。つまり、河川または沖積層・洪積層中の砂礫の影響を受ける場であり、山地からの流入砂礫が圧到的に多い地域が推定される。

Ⅳ類型

Ⅱ類型の砂礫組成に近いが、チャート等の礫が含まれ、石英がわずかに多いことで区分される。チャート等は沖積層・洪積層、河川の砂礫中に見られることから、Ⅳ類型の土器類の砂礫の採取地としては、山地から流出した砂礫成分が主で、わずかに他の成分が混入するような場所が推定される。つまり、Ⅲ類型とほぼ同じであるが、より旧大和川に近い位置が推定される。

Ⅴ類型

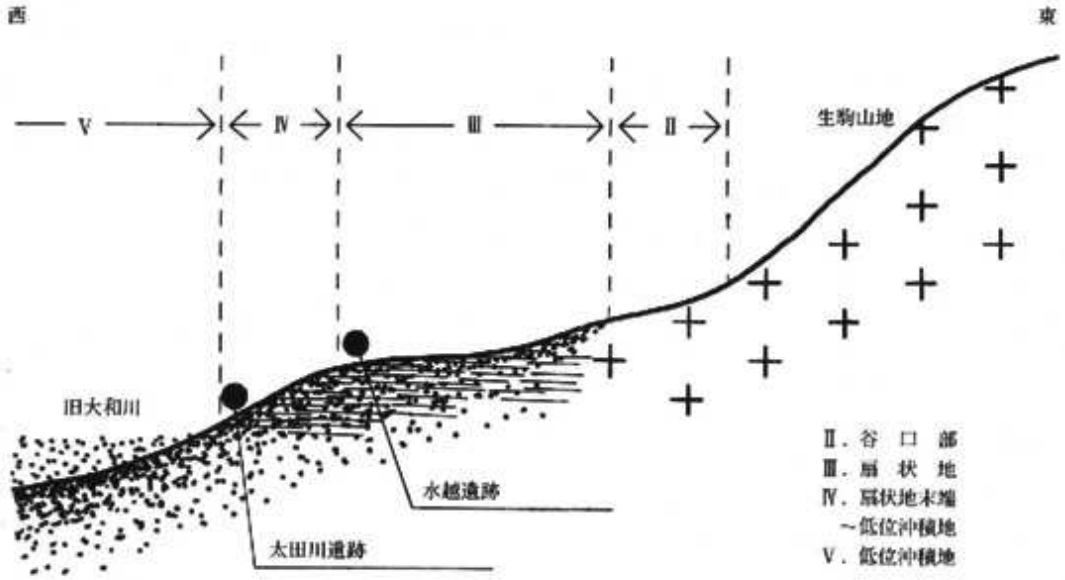
花崗岩・石英が粗粒で多く、角閃石が細粒である。流紋岩・チャート・砂岩等がわずかに含まれる。このような砂礫組成は、旧大和川の流れによって河内平野に運ばれた沖積層中の砂礫組成と同じである。よって、Ⅴ類型の土器中の砂礫の採取地は、旧大和川の流れによって運ばれた沖積層中の砂礫であると推定される。

Ⅵ類型

構成砂礫に特徴が認められないため、土器中の砂礫の採取地は推定しがたい。

Ⅰ類型の土器中の砂礫は紀ノ川の砂礫と推定されることから、土器も紀ノ川流域で製作されたと推定される。しかし、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ類型の土器中の砂礫の採取地は、水越遺跡・太田川遺跡を中心として上記で述べた条件をもとに推定すれば、第1図のような模式図となる。

水越遺跡および太田川遺跡付近一帯では、第3試料—6を除いて、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ類型の胎土を持つ土器を製作していたと言える。



第1図　土器の胎土採取地推定模式図

Ⅳ 胎土観察表

第1試料(水越遺跡消防署—本書第2章—弥生時代中期)

類型	試料番号	岩石種	岩石破片																				鉱物破片								実測図番号	器種	備考
			花崗岩		閃緑岩		斑糲岩		流紋岩		チャート		泥岩		砂岩		変輝緑岩		結晶片岩		ホルンフェルス		ガラス		石英		長石		雲母		角閃石				
		観察条件	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍			
Ⅱ	3		・L×																						・M×	・L□	・L×			・S×	・L○	・L◎	15	壺	
	5		・L×			S×																			M△		S×	SS×	・S△	・L○	・L◎		3	壺蓋	
	6				I.×																				S□	L△	M×		S×	・I.○	・L◎		4	壺	
	8			L△																					S△		S×	SS×	・S○	・L◎		45	大型甕	
	15		L×			L×																			M×	M△	・M×			・L◎	・I.○		2	壺	前期
	17																								・M△	・S△	S×	S×	M△	・S○	・L◎		1	壺	前期
	22		・L×			S×																			S△	SS△	S△	S△	S△	・M○	・I.◎		36	甕	
	24																								M×	・S×	S×			・L□	・L◎		—	壺	
	29		S×																						・S×	・L×	・S×			・M△	・L◎		22	台付鉢	
	37						L×																		・L×		S×		I.×	・I.○	・L◎		41	甕	
	55																								・L×	・M△	・M×		・S×	・M○	・L◎		27	大型鉢	
	68			I.△																					L□	S×	L×	M△	S□	SS□	・M◎		17	鉢	
	70		・L×																						・L×	・L×	・M×	・M△	・M△	・L◎	・L◎		21	高杯	
	71		I.△			・L△																			・M△	・I.△	・M△	・L×	・M×	・L□	・L◎E		16	壺	
	72																										・M×	・M×	・M×	・L○	・L◎		39	甕	

※ L……粗粒 M……中粒 S……細粒 SS……微粒
◎非常に多い ○多い □中 △わずか ×ごくわずか
※※ ・は～以下を表わす。
※※※ Eは結晶面を持つ角閃石を表わす。

類型	試料番号	観察条件	岩石種	岩石破片																						鉱物破片								実測図番号	岩種	備考
				花崗岩		閃緑岩		斑糲岩		流紋岩		チャート		泥岩		砂岩		変質緑岩		結晶片岩		ホルンフェルス		ガラス	火山	石英		長石		雲母		角閃石						
				裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍					
Ⅲ		1					L×																			S×	L△	S×		•M△	S□	SS△	•M○	43	甕	SD71
		2		•L×	•L×																					•L×	•S△	•M×	•M△	•M△	•L△	•M△	•L◎	13	壺	
		4																								•M×	•M○	SS△	S	SS△	M○	•M○	•L○	37	甕	
		18		•L×																						•M△	•L×	•M×	•M×		S×	•M◎	•L◎F	—	台付鉢	
		21		M△			M×																			•M△	•M△	•M△	•M△	SS×	S△	•S○	M○	9	壺	
		30																								•M△	S×			S×	S△	•S○	SS○	S◎	19	鉢	
		42																								•L△	•L□	•L△	•S△	•M×	SS×	•M×	•M◎	26	大型甕	
		54																								•M×	M△	•I.△	M△	S□	S△	•I.□	•I.◎	44	大型甕	
		82																								I.△	L□	S□	S△	SS□	S△	S□	•I.○	29	甕	
		63		•I.△	•L×																				•M×	•I.×	L×	•I.×	M△		•S×	•I.○	•I.◎F	—	壺	
Ⅳ		26											I.×													S△	M△	M△	•L△	•M○	M□	SS□	•L○	10	壺	
		48		•L×								L×															•S□		•S×		•S×	•L×	•L◎	18	把手付鉢	
		51		L×								•L×														•M□	L□		•L△	S△	S△	•M○	42	甕	
		57										L×															M×	M×	S×		M×		L○	—	高杯	
Ⅴ		20		S×																						S△	M△	•M□	•M○				SS△F	12	壺	
		39																								•L×	•L△	•L△	•M△	•M×	•S△		•M○	33	甕	
		53																								SS○	I.○	S△	•L△	S△	S×		S×	11	壺	
		23										M△														M○	M△	M○	M□	S△	S△	S△	•S△	—	甕	

類型	試料番号	岩石種 / 観察条件	岩石破片 花崗岩 裸眼	花崗岩 30倍	閃緑岩 裸眼	閃緑岩 30倍	斑糲岩 裸眼	斑糲岩 30倍	流紋岩 裸眼	流紋岩 30倍	チャート 裸眼	チャート 30倍	泥岩 裸眼	泥岩 30倍	砂岩 裸眼	砂岩 30倍	変輝緑岩 裸眼	変輝緑岩 30倍	結晶片岩 裸眼	結晶片岩 30倍	ホルンフェルス 裸眼	ホルンフェルス 30倍	火山ガラス 裸眼	火山ガラス 30倍	鉱物破片 石英 裸眼	石英 30倍	長石 裸眼	長石 30倍	雲母 裸眼	雲母 30倍	角閃石 裸眼	角閃石 30倍	実測図番号	器種	備考
V	36		•L○	•L△		•M×					L×														•L○	•L○				•S×		•S△	34	甕	
	45		•L○	•L△											L×										•L□	•L△	•M△	L△	M×	•SS×		S×	40	甕	
	52										•L×														•L□	•L□	•M×	S△		S×		•S×	28	大型鉢	
	74		•L×								L×	L×													•M△	•L○	•M□	•S×	•S△	•M△		•S×	31	甕	
VI	11		•L△	•L×																						•M△	•I.□	•M□	•I.△	•S×	M□	•L□	46	底部有孔土器	底部
	40		•L×	•L×																						L△	•L△	S×	M×	S×		•S○	47	台付土器	底部

第2試料(太田川遺跡水越交差点—本書第3章—弥生時代後期)

類型	試料番号	岩石種 / 観察条件	岩石破片 花崗岩 裸眼	花崗岩 30倍	閃緑岩 裸眼	閃緑岩 30倍	斑糲岩 裸眼	斑糲岩 30倍	流紋岩 裸眼	流紋岩 30倍	チャート 裸眼	チャート 30倍	泥岩 裸眼	泥岩 30倍	砂岩 裸眼	砂岩 30倍	変輝緑岩 裸眼	変輝緑岩 30倍	結晶片岩 裸眼	結晶片岩 30倍	ホルンフェルス 裸眼	ホルンフェルス 30倍	火山ガラス 裸眼	火山ガラス 30倍	鉱物破片 石英 裸眼	石英 30倍	長石 裸眼	長石 30倍	雲母 裸眼	雲母 30倍	角閃石 裸眼	角閃石 30倍	実測図番号	器種	備考
II	3		•L×																						•S×	L×	•S△	M△	L○	L△	•L◎	29	器台	
	4		•L×			L×																			•S×	•M×	•S×		L×	•L□	•L◎	30	器台	
	17			I.△		L△																			S△	•S△	S△	S△	L△	SS△	•I.◎	26	高杯	SDI
	22		•L△														•I.×								•S□	•M△	•S△	M×	M×	•L○	•L□	34	小型鉢	
	25																								•L×	•I.□	•L△	M×	•I.×	•I.◎	•L◎	38	小型鉢	

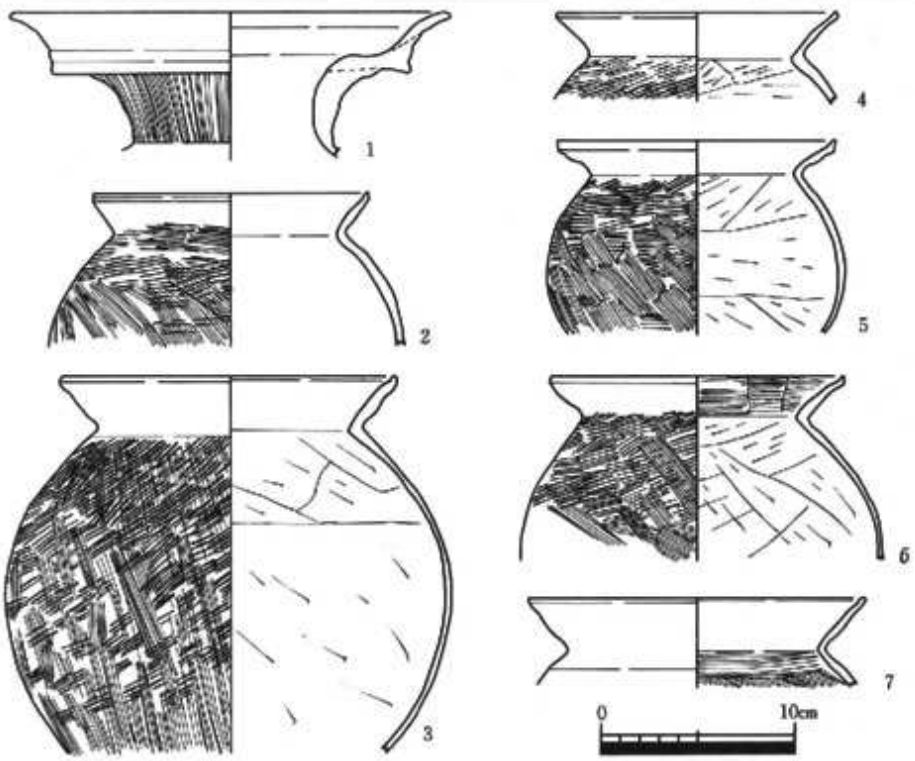
類型	試料番号	岩石種 / 観察条件	岩石 花崗岩 裸眼	岩石 花崗岩 30倍	岩石 閃緑岩 裸眼	岩石 閃緑岩 30倍	岩石 斑岩 裸眼	岩石 斑岩 30倍	岩石 流紋岩 裸眼	岩石 流紋岩 30倍	岩石 チャート 裸眼	岩石 チャート 30倍	岩石 泥岩 裸眼	岩石 泥岩 30倍	岩石 砂岩 裸眼	岩石 砂岩 30倍	岩石 変輝緑岩 裸眼	岩石 変輝緑岩 30倍	岩石 結晶片岩 裸眼	岩石 結晶片岩 30倍	岩石 ホルンフェルス 裸眼	岩石 ホルンフェルス 30倍	岩石 火山ガラス 裸眼	岩石 火山ガラス 30倍	鉱物破片 石英 裸眼	鉱物破片 石英 30倍	鉱物破片 長石 裸眼	鉱物破片 長石 30倍	鉱物破片 雲母 裸眼	鉱物破片 雲母 30倍	鉱物破片 角閃石 裸眼	鉱物破片 角閃石 30倍	実測図番号	器種	備考
II	27																									•S×	•M×	•L△	•L△	•M×	•I.○	•I.◎	42	中型鉢	
	29		L×																							•S△	•M△	•S×	•M×	•L△	•L○	•L◎	43	大型鉢	
	36		•L×																							•S△	•L×	•S△	•L△	•L□	•L△	•S○	52	甕	
	37		•L×																							•M△	•I.□	•M×	•I.×	•L×	•M○	•I.◎	53	甕	
	55		•L×																							•S△	•L×	•S×	L△	•M×	•L△	•L◎	9	壺	SD-1
	56		•L×																							•S△	•I.△	•L△	•I.△	•M△	•L○	•L◎	10	壺	SD-1
	59		I.△																							I.△	L△	M×	•M◎	•L◎	•L△	S○	54	甕	南内トレンチ
III	9		•L△	M×			L×																			•M×	•M×	•L×	•M△	•L×	M×	•L○	•L◎	17	高杯	
	14																									•M△	•I.□	•M□	M□	SS△	S◎	L△	S□	21	高杯	
	16																									•I.×	•M×	•M×	M×	•L△	•L×	•L◎	•L◎	27	高杯	
	18		L△																							•L△	•L□	•M△	•S×	•S×	•M△	•I.×	•I.△	—	高杯	
	19		•L△	•L△			L×																			•I.×	•M△	•M△	•S×		•M×	•L○		24	高杯	
	21		•L△																							•M△	•M○	•L□	•L△	•M△	•S×	•M□	•M○	39	小型鉢	
	24		•L△																							SS□	•S○	•I.○	•S□	•M△	•S□	•S△	•L○	32	小型鉢	
	26		S△	L△																						M△	•L○	•M△	M△	SS△	S△	SS△	•M◎E	33	小型鉢	
	28		•L△	M×																					M×	•M×	•L×	•S×	M×	•S×	SS△	•M△	•L○	41	中型鉢	SD-1
	30		•L△				•L△																			•S□	•L○	•S○	•S○	•S□	•L	•M○	•L◎	—	大型鉢	
	32																									L×	•M○	•L□	S□	SS△	•M◎	SS△	S◎	50	甕	

岩石種 / 観察条件 / 試料番号 / 類型	岩石 花崗岩 裸眼	岩石 花崗岩 30倍	岩石 閃緑岩 裸眼	岩石 閃緑岩 30倍	岩石 斑糲岩 裸眼	岩石 斑糲岩 30倍	岩石 流紋岩 裸眼	岩石 流紋岩 30倍	岩石 チャート 裸眼	岩石 チャート 30倍	岩石 泥岩 裸眼	岩石 泥岩 30倍	岩石 砂岩 裸眼	岩石 砂岩 30倍	岩石 変輝緑岩 裸眼	岩石 変輝緑岩 30倍	岩石 結晶片岩 裸眼	岩石 結晶片岩 30倍	岩石 ホルンフェルス 裸眼	岩石 ホルンフェルス 30倍	岩石 火山ガラス 裸眼	岩石 火山ガラス 30倍	鉱物破片 石英 裸眼	鉱物破片 石英 30倍	鉱物破片 長石 裸眼	鉱物破片 長石 30倍	鉱物破片 雲母 裸眼	鉱物破片 雲母 30倍	鉱物破片 角閃石 裸眼	鉱物破片 角閃石 30倍	実測図番号	岩種	備考
Ⅲ	39	I.×	•L△																				S△	M△	•M□	L△	S△	•L△	SS△	•M○	47	凝灰岩	
	40	I.△																					•L×	•M○	•M□	L□	•M△	L□	•M△	•M□	45	凝灰岩	
	46	•L×																					•M×	S□	•I.□	L△	S×	•L□	•L○	2	凝灰岩	
	49		L×	•I.△																			•M△	L△	•L○	L□		•L○	•L○	—	凝灰岩	
	50	•I.△	I.△	M△																			•M△	M○	•I.○	M△	S△	SS△	S○	—	凝灰岩	
	52		L△	S△																			L△	•L□	L△	S△	SS○	S○	•M○	S○	12	凝灰岩	
	60	•L×		L×																			•M×	•M□	•L△	•M△			•M△	•M□	56	凝灰岩	南西トレンチ
Ⅳ	1		•L△																				•M△	S×	L△	S×	S○	L○	SS□	•M◎	28	器台	
	2	•L△	•L□																				S△	•L△	•M○	S△	S○	S○	SS□	•S□	31	器台	
	6	•L△	L×																				S△	L△	•S□	S△	•M○	S□	SS△	•M○	15	高杯	
	10	•L△	•L△	M×																			•M×	•M△	•M×	M×	•L×	•M△		•M△	16	高杯	
	11	L×	L×						M×														•M△	L△	•M△	M×	•L○	•M○		L×	20	高杯	
	12		M△							M△													M△	L○	•M△	S△				S△	18	高杯	
	15	M×																					•M×	•M△	•S△	M×	L△	•L◎		•S△	—	高杯	
	20																						•L×	•S×		•S×	•S△	•M△		•S○	35	小型鉢	
	23																						•M△	•M□	•M□	S□	•M○	•M○	•M△	S○	36	小型鉢	
	35	•L△																				•M×	•L△	•L×	•L△	•M△	•M△	•SS×	•M△	•S△	48	凝灰岩	
	48	•L×	•S×																				M×	M×	L△	M△	L×	SS×		•S×	1	器台	

類型	試料番号	観察条件	岩石種	岩石																								鉱物												実測図番号	岩種	備考
				花崗岩		閃緑岩		斑糲岩		流紋岩		チャート		泥岩		砂岩		変輝緑岩		結晶片岩		ホルンフェルス		火山ガラス		石英		長石		雲母		角閃石												
				裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍											
Ⅳ	57			●L△																						●L×	●M×	L△	S×	L○		M□								57	小型鉢	南西トレンチ
	58			●L△		●L△																				S△	L○	S□	S○	SS△	S△	SS△	S△							55	甕	南西グリッド
	65			●L△		●L×																				●L×	●L×	●M△	●M△	●S△	●M	S△								40	小型鉢	
Ⅴ	5				L△						L×																●M	S△	S△	S◎	M○	SS△	M◎							25	高杯	
	8			●L△						L×																●L△	●M△	●M△	M○	M□	M×	M○							14	高杯	
	13				●M□																						S□	SS△	S□	SS◎	●L◎		S△						22	高杯	
	33			●L△								L×														M△	●M□	●L□	S△	SS○	●M○	SS△	S○						51	甕	
	34			●L×								L×															●M△	●L△	●M△	●S△	●S×	●M△	●L△						49	甕	
	38				M×							M×														●L△	●M□	●M○	S△	M△	SS×	SS△	●L○						46	甕	SD-1
	41											M×														●L×	●M△	●M△	S×	●L△	●M□	M△	●M○						8	壺	
	42			●L×	●L×							L×															●M△	●M×	S×	●L□	●L○	●L△	●M△						7	壺	
	43											M×															●M×	●L×	S×	●L○	●L×	●M△	●L○						6	壺	SD-1
	47			L×								L×														●L×	●M□	●L×	S△	●S○	●L○	M○	●M□						3	壺	
	54			L△	S×																						S△	●M△	S△	SS○	●M◎	S△	S○						13	小型鉢	
	61			L△	M△																						S△		S△	SS○	●M		S○						37	小型鉢	
	62			●L△																							S△	●M□	S△	●SS○	●S□		S□						44	甕蓋	SD-1
Ⅵ	44			L×			S△				L×																●M	S△	S△	●M○	●M		SOE						4	壺	
	7				L△		L△																			S○	●L○	●L○	●L□	S△	●L△	S○	●S○						23	高杯	

第３試料(水越遺跡高安中学校—参考試料—古墳時代前期)

類型	試料番号	岩石種 観察条件	岩石破片 花崗岩 裸眼	花崗岩 30倍	閃緑岩 裸眼	閃緑岩 30倍	斑糲岩 裸眼	斑糲岩 30倍	流紋岩 裸眼	流紋岩 30倍	チャート 裸眼	チャート 30倍	泥岩 裸眼	泥岩 30倍	砂岩 裸眼	砂岩 30倍	変輝緑岩 裸眼	変輝緑岩 30倍	結晶片岩 裸眼	結晶片岩 30倍	ホルンフェルス 裸眼	ホルンフェルス 30倍	火山ガラス 裸眼	火山ガラス 30倍	鉱物破片 石英 裸眼	石英 30倍	長石 裸眼	長石 30倍	雲母 裸眼	雲母 30倍	角閃石 裸眼	角閃石 30倍	実測図番号・器種	備考
Ⅰ	6										•L×								•L△	L×						•S△			SS×		M□E		1 壺	
Ⅱ	2																									S×	•L×	S□			•L○	L○	3 庄内甕	
	3																									•L○	•L○	•L□		S△	•L○	•L○	6 庄内甕	
	5																									•S△	•M○	•L△		S△	•L○	•L○	4 庄内甕	
Ⅲ	1																								•M△	S□	M△	S△	SS□	S△	•M○	•M○	5 庄内甕	
	4																								•L×	•S×	•L×	•S□	•L×	M×	•M○	•S○	2 V様式采	
Ⅳ	7																									•L○	•M×	L×	•M△	M×		M×	7 甕	口縁部のみ



第２図　高安中学校ＳＷ—１出土遺物実測図